RECONSTRUCTION

改造

教育改造號

思想と評論

山川均
森戸辰男
長谷川如是閑
賀川豐彦
末廣重雄
堀江歸一
赤司鷹一郎
佐々木惣一

レニンとトロッキー

社會主義同盟批判

批判と文藝

大山郁夫
貝塚澁六
大杉榮
荒畑寒村
上司小劍
水守龜之助
近松秋江
芥川龍之介

九月號

最新版

增田重喜先生新著

勞働政策

（菊判洋裝全一册 定價金四圓八拾錢 送料十八錢）

慶應義塾大學教授 法學博士 堀江歸一先生校閱

◇◇◇◇

學界の權威堀江博士は本書を推奬して曰く、世上好學の諸士、本書を以て一時の好尙に投ずる爲めに著はされたるものと同一視する勿れ、余は本書の稿本を通讀して敢て江湖に推薦せんと欲する者なりと。よつて本書の眞價を知る可し。

第一編 資本と勞働との鬪爭の主體 第一章分配享有者としての資本家 第一節資本の意義―第二節資本の分類―第三節ベーム、バヴエルクの學說―第四節資本の所有は正當なりや―第五節利子は何故に資本家の所得となるか―第六節資本家所得は正當なり 第二章分配享有者としての企業家 第一節企業家とは何ぞや―第二節賃銀勞働者に對する企業家の態度―第三節企業家所得は正當なりや―第四節企業家所得は正當なり 第三章分配享有者としての賃銀勞働者 第一節賃銀勞働者の性質―第二節賃銀に關する學說 **第二編 資本と勞働との鬪爭** 第一章鬪爭機關としての勞働組合 第一節勞働組合の意義―第二節勞働組合の組織及び運動―第三節勞働組合と分配問題―第四節勞働組合の政策 第二章鬪爭方法としての同盟罷業 第一節同盟罷業の意義―第二節同盟罷業の種類―第三節同盟罷業と勞働組合―第四節最近英國の同盟罷業運動 **第三編 資本と勞働との調和** 第一章最低賃銀制度 第二章割增賃銀制度 第一節 割增賃銀制度の意義―第二節割增賃銀制度の種類―第三節割增賃銀制度の分化―第四節割增賃銀制度に對する批評 第三章利潤分配制度 第一節利潤分配制度の意義―第二節利潤分配制度の由來―第三節利潤分配の方法―第四節利潤分配制度に對する批評 第四章產業組合制度 第一節產業組合制度の概念―第二節產業組合制度の經濟的效果―第三節產業組合制度の發達條件―第四節產業組合制度に對する批評 **第四編 資本と勞働との協調** 第一章 勞働協約制度 第二章和解及び仲裁制度……等

東京神田表神保町

株式會社 同文館

振替東京一三五



改造九月號目次

新時代の新教育

（創作と社會講談）

樋口麗陽先生著

日米戰爭未來記

四六判全一冊頗美本
定價金壹圓五拾錢
送費八錢

果然果然!!

朝野の問題を惹起したる本書は最近日米問題の悪化と共に米國民を沸騰せしめ、今や〇〇の干渉本書の上に來らんとしつゝあり。今、現に日本人排斥一般投票案決定し、米國の我が日本に對する敵對行動は、假面を脱して愈々露骨となり。婉曲を破つて、挑戰的、高壓的、强制的に、日本國民の眼前に暴露され來れり。

必然か？　暗合か？　而も是等現在の事實は符節を合したるが如く、本書内容の如き事實と、順序とを以て驀進しつゝあり。

◇看よ、著者の白熱的愛國の至誠より成れる一大結晶を！

◇見よ、事實に根據せし日米間の必然的未來の大暗示を！

◇空想か事實か！小說か非小說か!!

義憤的本書を即刻憂國の諸士に薦む

◎註文殺到第十一版發賣　最寄書店に賣切の節は直接弊堂へ御註文次第急送仕候

發行所　東京小石川區白山前町八八番　振替東京四七八　大明堂書店　賣捌各地全國書店

株式會社 浪速銀行

第四拾五期 營業報告（大正九年六月卅日）

貸借對照表

●負債之部

一諸預リ金	一八五、二三二、七七五・二一三
內譯 公金預金	四、六一五、一五八・九〇三
定期預金	八二、一四二、八三八・七〇〇
當座預金	三七、六七二、一〇五・〇一〇
特別當座預金	三七、三九七、五八五・〇五〇
通知預金	一三、六四九、六〇五・五七〇
別段預金	九、七五五、四八一・九八〇
一賣渡外國爲替	一八、四八七、八一〇
一他店ヨリ借	四、三六一、一二二・五九〇
一本支店間未達勘定	一四七、一〇二・五一〇
一仕拂承諾	二四、五五九、六〇四・一三〇
一借入金コールマネー及再割引手形	一五、五〇五、〇五四・五九〇
一資本金	五〇、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一法定準備金及諸積立金	四、三二〇、〇〇〇・〇〇〇
一未拂配當金	五、六五八・一三〇
未經過割引料	二、一〇四、八六八・七七〇
一前期繰越及當期利益金	五、一二八、三六二・三八〇
合計	二九一、三八三、〇三六・一二三

●資產之部

一諸貸出金	一七七、七二三、四九〇・六三〇
內譯 證書貸付及手形貸付	八九、一〇一、一一七・五五〇
當座預金貸越	二二、五〇四、五八〇・九四〇
割引手形及荷付爲替手形	六六、一一七、七八三・一四〇
一コールローン	六〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一買入外國爲替及利付爲替手形	四四九、〇二〇・〇九〇
一他店ヘ貸	二、六五二、三〇九・一二〇
一仕拂承諾見返	二四、五五九、六〇四・一三〇
一拂込未濟資本金	二六、二五〇、〇〇〇・〇〇〇
一所有有價證券	三二、〇七四、五五四・五〇〇
內譯 諸公債證書	一七、四九六、六八〇・五〇〇
外國債證券	五、一〇一、九二〇・〇〇〇
社債券	八、四八六、五七四・〇〇〇
株券	七二二、一一九・〇〇〇
貸付有價證券	二六七、二六一・〇〇〇
一地金銀	九六、六〇八・七三〇
一營業用土地建物什器	三、二五八、七〇〇・〇〇〇
一所有動產不動產	八五五、四〇〇・〇〇〇
一新築費	三二八、三二七・七〇〇
一預ケ金	一、八六七、六五八・〇六〇
一現金在高	二〇、六二〇、三六三・一六三
合計	二九一、三八三、〇三六・一二三

●損益計算

一總益金	一四、一九四、二八九・六一〇
一公募株式額面超過金	二、四四五、〇七二・〇〇〇
一配當平均準備金	二五〇、〇〇〇・〇〇〇
一前期繰越金	二八三、一二九・三五〇
計	一七、一七二、四九〇・九六〇
內 仕拂利息並諸經費	一二、〇四四、一二八・五八〇
差引純益金	五、一二八、三六二・三八〇

此配當計算左ノ如シ

法定準備金	二、六〇〇、〇〇〇・〇〇〇
家屋建築積立金	八〇〇、〇〇〇・〇〇〇
配當平均準備金	三〇〇、〇〇〇・〇〇〇
使用人恩給基金積立金	二〇、〇〇〇・〇〇〇
解散始末金	五〇、〇〇〇・〇〇〇
賞與及交際費	二一九、〇〇〇・〇〇〇
配當金（年一割）	一、〇六五、七〇五・一二〇
後期繰越金	三四七、六五七・二六〇

右之通候也

大正九年七月

大阪市東區淡路町貳丁目

株式會社 浪速銀行

取締役頭取 松方正雄
常務取締役 愛甲兼達
取締役 平田正之
取締役 高崎親章
取締役 山本辰六郎
取締役 前田時三

當銀行ノ帳簿證憑書及財產ヲ精査シ前記ノ通リ相違無之ト確認候也

監査役 宅德平
監査役 德永安兵衛
監査役 [illegible]

本社 東京銀座

電話
一一七五番（社長專用）
一三五〇番（支配人專用）
一三五一番（保險部）
一三五二番（工業部 鑛山部）
一三□三番（經理部 總務部）
一三五四番（宿直兼用 機械電氣部）
特長二〇一〇番

特長二〇一一番（金物部）
二〇一二番（鐵肥藥品部）
二〇一三番（石炭部）
二〇一四番（砂糖 銃砲火藥部）
二〇一五番（外國部）
二〇一六番（輸出部）

銀座
振替口座東京二九八一番

資本金五百萬圓

株式會社 常盤商會

社長 松方五郎

特賣品製造所
東京市外幡ケ谷 帝國合金精錬株式會社
岩手縣宮守村 鐵合金電製製錬所
岩手縣長内村 小久慈鑛業所

支店出張所
大阪市東區今橋四丁目
京城太平通二丁目
福岡市博多蓮池町
呉市本通五丁目
上海江西路八號
横濱市山下町
佐世保市松浦町
八幡市枝光新地宮田町

主要取引國
支那・南洋・印度・北米・南米・英國・佛國・伊國・露國・獨逸・瑞典等

營業概要

●直輸出入品種目
□銅材類
□金屬地金類
□特殊高速度鋼類
□鑛産物類
□石炭コークス類
□機械器具及材料類
□調帶革類
□藥品塗料類
□穀物肥料類

□織物毛類
□自動車及附屬品類
□銃砲及火藥類
□醫療機械類
□砂糖茶罐詰類
□ゴム・コプラ類
□雜貨類
□水産物類
□農産物類

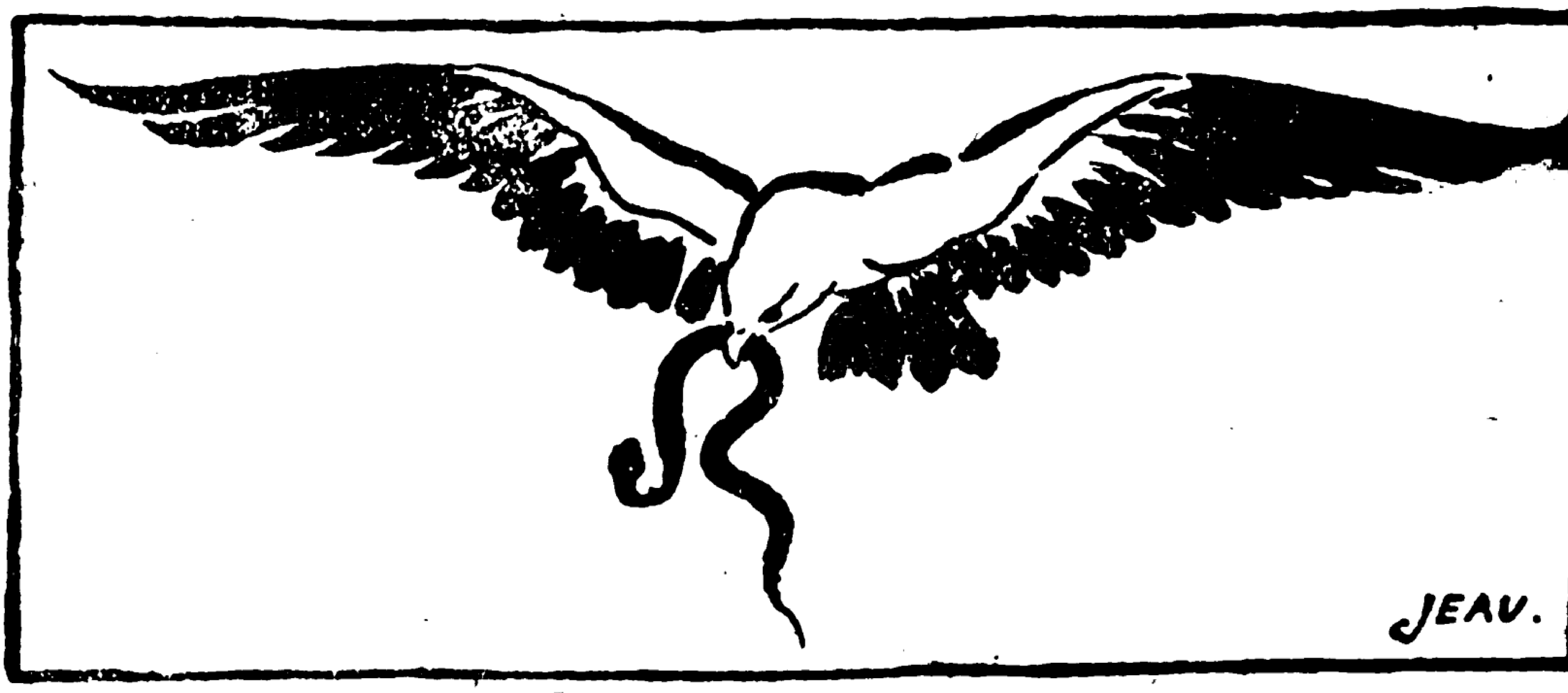
●工業部特賣品目
△特種合金類
△鐵合金類
△鐵鑄物其他各種

△電氣製銑鐵
△低燐銑鐵類
△砂鐵

○鑛山部
●金銀銅鐵石炭其他各種鑛物の採掘及精錬

○保險部
◎外國火災保險
英國リバープール、ロンドン、グローブ保險株式會社外英佛十大火災保險株式會社代理店

◎外國海上保險
英國ニユージランド保險株式會社外ニ大海上保險會社代理店



——((改造九月號))——

國際社交團體を組織せよ

政權の轉換も刻下必要である。これに增して特に必要を痛切に感じて居るのは、都下の社交團體の總改造である。政權は二年か三年にして必ず轉換するが、何々公爵、何々男爵を根幹とする社交團體は殆んど一生一代的のもので、その中心思想や、その働き振りは何れも現代と何等交渉なきもので、その守舊的なるに於て、その國民的ならざるに於てその生氣を帶びざるに於て全く有害無益の長物である。

假令ば、米國の議員が來訪しても、大學教授が訪問しても、いつもそれに應酬する役者はきまつている。曰く8男爵、曰くヨボ市長、曰く世界の思潮に取殘された商業會議所會頭、曰く古手の外交官、これ等の人々が御世辭のイイ競べ、ハラキリの觀劇、不味いホテルの晩餐等で退拂つてゐる。向ふでも困れば、こちらでも大困りである。

コンナ事では世のためにも、人のためにもならぬから、今後はかゝる老朽交際團體は斷乎として引退せしめ、少壯の社交團體が之に代つて應酬すべきだ。そして今回渡日の米賓に對しても當面紛擾の排日問題、土地所有權問題を眞正面より昇ぎ出し、赤誠を披瀝して眞劍に議論を交はすの要がある。

ドウセ、政府ばかりでは氣の利いた外交は出來ぬ。寧ろ政府として遣り辛いやうなことは、この少壯社交團體でテキパキ遣つて除ければよいのである。勿論少壯團體といつても、現在する富豪等特權階級に限るのは甚だ宜しくない事である。

何れにしても、社交團體全部を一新することに努力するのが刻下の急務である。若々しき、生々とした氣分で以つて萬事を遣つ突けねばならぬ時代が到來しておるのに、いつまでも〳〵天保長者や、安政老者が洒々とホテルの眞中に迂路ついておる恰好はよくないものだ。元老の引退と共に、社交界の長老にも引退をすゝめておく。

革命家としてのレニンとトロツキー

山川 均

一

露西亞革命と獨逸革命との徑路を見比らべると、そこには面白い對照がある。獨逸の革命は、普通選擧の上に立つ共和國に落つき、露國の革命は謂ゆるレニンの獨裁政治（ヂクタートルシツプ）を出現した。レニンとトロツキーとは露國革命の象徴となつて居るが、獨逸革命には代表的の人物がない。此點から見ると、獨逸革命は民衆的であつて、露國の革命は少數の人物を中心とする英雄的の事業のように見える。今日も尙ほ、露國の民衆はレニンの獨裁專制の下に泣いて居るかの如く考へて居る人のあるのも、矢張り此觀察に基づいたものである。

ところが仔細に觀察して見ると、事實は必ずしもそうでない。獨逸革命が早くも固定しようとして居るのに對して、露國の革命は多分に流動性を持つて居る。露國の革命は今尙ほ進行をやめないで、將來どこ迄で進むか知れないといふ感がある。獨逸革命の指導者は、革命の一擊が成功すると、最早や革命は終了したものと思つた。そして其瞬間から、唯だ安定を求める事にのみ急であつた。露國革命の指導者のうちにも、之と同じ立場を取つたものが少くない。そしてプレヘノフは實に、此立場を理論化した代表的學者であつた。彼は三月革命の歷史的意義は、封建的特權に對する、新興資本階級（ブルジョアジー）の政權確立の革命であると見た。社會主義は、資本主義進化の必然の結果である。資本主義的進化の完成せられて居らぬ所に社會主義の實現を企てるのは、歷史の必然に遡らうことである。歷史の必然に遡らうとは、常に無益の犧牲を意味して居る。露國革命は止まる所を知らなければならぬ！　そこで彼は獨逸の同僚と同じように、革命の

二日目から、早くも民衆に、止どまる所を教へようとした。

獨逸革命の指導者は、歴史の必然に従はうとした。けれども彼等は歴史の必然によつて動いてゐる民衆に従はうとはしなかつた。彼等は歴史の必然を極度に尊重しようとして、却つて此必然を理解し得たと自信する自己の聡明な判断の方を、一層尊重した。彼等は歴史を信ずるが如くにして、實は自己を信じてゐた。自己の設計と自己の力とを信じてゐた。従つて彼等の創造力には、勢ひ界限があつた。舊きものが潰滅した廢墟に立つた時、彼等は恰かも際限のなき大洋に臨むの感がした。

彼等は何も彼も、其聡明な、然しながら小いさな頭の中で計畫しなければならなかつた。如何に局面を収拾し、如何に締め括りを付けるかど、彼等の革命の二日目からの問題であつた。そこで彼等は、勢ひ其設計を限定しなければならなかつたのである。

露國革命の指導者は、同じく歴史の必然を信じた。従つて歴史の必然が生みだした民衆の革命的精神と、創造の力とを、殆んど無限に信用した。彼等は此歴史的必然の力の前に立つて、自己の無力なことを知つてゐた。故に彼等は其無力な頭を以て、歴史的必然に動いてゐる民衆の、創造的事業に、豫定の計畫を立て、其無力な手を以て、民衆の革命的行動に、獨斷の限界線を造こうとしなかつた。獨逸革命の指導者が、踏み止どまることを考へた時、彼等は更に踏み出すことを考へてゐた。獨逸革命の指導者が、『秩序』『秩序』と叫んでリープクネヒトを殺した時に、彼等は却つて民衆を武装しようとした。獨逸の指導者は、民衆を指導しようとした。故に民衆の革命的行動が彼等の『指導』の埒外に狂奔しようとした時、民衆は彼等の恐る可きものとなつた。彼等は民衆の創造力を信頼した。彼等は民衆の行動のうちから新しき行動が生まれることを信じてゐた。そして其うちに無限の創造力のあることを觀取した。彼等は何等の掛念もしないで、民衆の創造力に乗つて際涯なき大海に乗り出した。そして歴史の必然が彼等を其欲するところの彼岸に到着せしめることを確信した。そこで民衆が『パン』を欲した時、彼等は『パン』と叫んだ。民衆が『平和』を欲した時、彼等は『平

和』と叫んだ。彼等は競馬場のトラックの正しいことゝ、奔馬の脚力とを絶對に信用した。彼等は手放しで乘つてゐた。彼等は手綱を引きしめるの要を見なかつたのである。

『マンチエスター・ガーデイアン』の通信員、アーサー・ランソムはレニンとの會見のあとで斯う書いて居る——

『クレムリン宮から宿への途すがら、私は彼ほどの大人物で、而かもあれほど純粹るの人が他にあるだらうかと、色色考へ出そうしたが、一人も思ひ出さなかつた……と云ふのは偉大なる指導者にして而かも自分の人物を非常に小いさく見て居ることに於て、彼は實に未曾有の人だからであらうと思ふ。彼には全然、自分の野心といふものが無い。そればかりで無い。マルクス主義者たる彼は、民衆の運動は彼れの在ると在らざるとに拘らず、動く可きところに動くものだと信じてゐる。そして彼は此民衆の運動に信賴する。彼れの信仰は、人民を動かすところの基本的の力に在る。そして自分自身に對する彼れの信仰は、たゞ自分は、此力の指さす方向を、正確に觀取して居るといふ確信に外ならぬのである。彼は如何なる人の力も、彼が必然と信ずるところの革命を止めることも起すことも出來ぬと信じてゐる。彼れに從へば、若しも露西亞の革命が失敗するとしても、それは唯だ一時的の失敗であり、そして如何なる人も左右することの出來ぬ力の爲である。そこで彼は、他の如何なる大人物も曾て有しなかつたほどに自由である。彼に對する民衆の信任は、必ずしも彼の所論によるものではなくて、寧ろこの如何にも自由な、如何にも超脱したところにある。彼は其哲學の上から、或一人の過誤の爲に一切が失敗に歸するなどゝは信ずることが出來ぬ。兎にも角にも彼れ自身に取つては、彼は永久に彼れの名と共に傳へらるべき出來事の、原因ではなくて代表者である。』

二

同じく唯物史觀と歴史の必然との上に立つてゐても、トロツキーは全く反對の性格をもつてゐる。獨逸とのブレストリトウスク講和談判に對する二人の態度は、二人の性格の相異を最も面白く現はして居る。サンテリ・ヌウルテヴアの

云つて居るように、レーニンは徹頭徹尾冷靜な人である。歴史の必然の道ゆきを見極はめて、少しの感情をも交えないで穏らに進まうとする。レーニンに取つては、平和は善悪の問題ではなくて、焦眉の必要であつた。從つて講和條件などは初めから問題でない。露國の革命の間にも、獨逸の革命の間にも、平和は第一の必要條件であつた。そして露國の革命さへ成功すれば、講和條件の如きは問題でない。レーニンは初めから斯う高を括つて、獨逸の條件をそのまゝ承諾しようとした。ところがトロツキーは、大體に於て同じ形勢を觀取しながらも、獨逸の軍國主義的條件に進んで調印することは、萬國社會主義運動の名譽にかけても忍ばれなかつた。トロツキーは調印を拒絶すると同時に戰爭狀態の終了を宣言した。そしてホフマンが、それならばとレヴアルの即時占領を仄めかすと、トロツキーは昂然として、獨逸の勞働者は諸君をして決してそうはさせまいと大見得を切つた。若しレーニンがブレストに往つたのなら、あの演劇的の一と幕は決して見られなかつたに違ひない。

トロツキーは三つの目論見を胸にたゝんでブレスト・リトウスクの講和談判に往つた——第一には、聯合國を講和談判に引入れること、第二には、獨逸に革命を起すこと、第三にはソヱツトの精神を全世界に知らしめること——一九一八年一月六日、天も地も凍つた靜かな夜、トロツキーはヨツフエ將軍、カメネフ、プロコウスキー、カラカーネの講和委員、ラデツク、アルフアトフ、リプスキー等の顧問を從へてブレストへ出發した。途すがら塹壕線を過ぎると、到るところ兵卒は雪の降り積つた道傍に彼を引留めては、吾等は如何なる代價を拂つても平和に贊成すると發言した。

ホフマン將軍、キユールマン、チエルニン伯、タラート・パシヤと對坐したトロツキーは、講和談判の基礎として、有名な『非賠償、非併合、人民自決』の原則を提出した。ホフマン將軍は小つぽけなトロツキーに『露國委員の態度は、戰勝者の態度である。然しながら事實は此態度と反對である……』と威丈高に怒鳴りつけた。トロツキーはブレスト講和談判の光景を叙して

『……將軍は何度も何度も、彼れの兵隊靴を卓子の上においた……吾々はこのホフマン將軍の長靴こそ、彼が此談判

を通じて有してゐた唯一の厳粛なる現實であつたことを少しも疑はない……』

この談判中に、屢々トロツキーと會見した米國赤十字のレイモンド・ロビンス大佐は斯う書いてゐる——

『或る眞夜中のこと、全露ソエット大會執行委員會の會合で、疲れきつた彼は眞青な顔に絶望の色を浮べて入口に現はれた。「休戰期間も終つた。ホフマン將軍は東部戰線の軍隊を西部戰線に移さぬことを承諾せぬ。吾々は聯合國政府に遠慮はせぬ。吾々は固より聯合國政府に對して、何等の義務もない、けれども吾々が若し此移送を承認するならば、それは最早や民主的の平和ではないだらう。吾々はホフマン將軍に談判中止を宣言した。」斯う云つて彼は何處かへ姿を消した。四時になつて彼は如何にも元氣潑剌として再び歸つて來た。彼は斯う叫んだ——「ホフマン將軍は讓歩した。彼は軍隊移送反對の條件を承諾した！」

トロツキーは得意の語調で斯う續けた。

『若し承諾しないなら、吾々は獨逸の勞働者に訴へるに次の言葉を以てしよう——諸君は何故に露國との平和が成立しないかを知るか。それは東部戰線に於て勞働者の大衆を屠つた爲に勳章を以て胸部を埋めてゐる獨逸の將軍が、東部戰線の近づきつゝある安全のうちから兵卒を取出して、西部塹壕の死と地獄のうちに彼等を投ずることを許されない限りは、露國と平和を結ぶことを拒みつゝあるからである——斯う云つたので、ホフマン將軍は遂に聽從した。そこで吾々の條件を基礎として、休戰條約が成立した。』

トロツキーは一杯喰はされた。ロビンスは之を評して、『言葉の上の氣分本位は、やがて行動の上の氣分本位である。トロツキーは往々にして、自己の議論に對する熱情の爲に、實際の形勢上の事實を見逃した……』と云つて居る。

三

トロツキーは三つの目論見のうちの、既に二つに失敗した。トロツキーの努力は終に徒勞に終つたであらうか。ロビ

ソスは語を續けていふ――

『ペトログラードでは、平和條約に對する彼の主張は、ソエットの間に遂に勢力を失墜した。ペトログラードでは、トロツキーよりも一段の現實主義が必要であつた。けれどもブレスト・リトウスクでは、トロツキーの性格が――善いも悪いも全ての性格が、社會主義的革命の役に立つ可き千載一偶の時が來た。

『ブレスト・リトウスクでは、獨逸の無産階級に印象を與へる爲には、大膽にして且つ何處までも非現實的なる宣傳的の芝居が必要であつた。而かも其れは、衷心から迸り出た誠實のものでなければならなかつた。トロツキーは何の苦もなく之を供給した。彼が『吾々は獨逸の帝國主義が、生きた國民の生身のうへに、其劍を以て書きつゝある條件の承認を拒絶する』と云つた時に、彼が『若し獨逸政府は軍事的占領によつて、國土と國民との上に支配を揮はんと欲する彼をして白日の下に其爲さんとする所を續けしめよ。吾々は兇行を批准し神聖化することを拒絶する。吾々は戰爭を放棄する。然しながら吾々は此平和條約に調印しないだらう』と云つた時に、彼は眞實に之が實際的の政策となるものと信じてゐた。彼は眞實に、露西亞は調印するに及ばぬと信じてゐた。ペトログラードには秘密裡に、ブレスト・リトウスクでは公然と、彼はそう主張したのである。

『彼は政治家としては、全然駄目なことが分つた。けれども彼が政治家として全然駄目だと知れた瞬間こそ、彼が宣傳者としての絶頂に昇つた時であつた。ブレスト・リトウスクに於いて彼の目指したところのものは、獨逸の無産階級であつた……そして是等の言葉は、無數の通路を經て彼等に手渡しされたのである……』

四

一月十一日、露國から十五萬ウェルストの土地を奪ふ爲に、ホフマン將軍が手づから線を引いた一枚の地圖を携へて、トロツキーはペトログラードに歸つた。十八日、憲法會議にタウリード宮に召集され、十九日には、全露ソエット中央

執行委員は憲法會議を解散した。二十七日、トロツキーは再びブレストに向つて出發した。一月二十九日から二月九日まで、獨逸側の四委員の立ち代り入れ代りの突撃に對して、トロツキーは終始一人で太刀打ちをした。それはランソムをして『苟も公平な人は、トロツキーが其唯一の武器たる、思想といふ燧石の閃きを敵の眉間に投げつけることによつて、結局その敵手をたじろがしめることに成功しなかつたとは斷言し得ないだらう』と三嘆せしめる働きであつた。けれども二月九日にはウクライナが單獨講和條件に調印したので、トロツキーの大事な戰線に大穴が明いた。伯林及び維納の大罷業は終熄した。獨逸委員の鼻息は急に凄じくなつた。彼等の背後には、汎獨主義の新聞が『致養なきポリネシア人の如き行動をする』トロツキーと最早や商議を重ぬ可とらず叫んでゐた。

『ホフマンは握り拳で卓子を叩いた。勝負は定まつた。中歐側の條約草案はちやんと出來てゐた……露國委員は最早や議論の餘地がなかつた。彼等は唯だ調印する外なかつた、トロツキーが最早や非革命的戰爭を續ける意志のないことを演説してゐるうちにも、キユールマンはホフマンとツエルニンを顧みて「こ奴等とう〳〵、何も彼も承諾して調印するわい」と云ひたげに微笑を交換した。

トロツキーは泰然として演説をつゞけた。

『故を以て予は同盟國委員に次の如き宣言を交附する。露西亞聯邦共和國の政府は人民委員會の名に於て、本委員によつて交戰國並に聯合國及び中立國の政府と人民とに聲明す――露西亞は侵略主義的平和條件の調印を拒むと同時に獨逸、墺匈國及び土耳古、ブルガリアとの戰爭狀態の終了を宣言す。然して之と同時に、全戰線に於ける露國軍隊に對して、一般的復員命令を發するものである。』

『講和に非ず、戰爭に非ず！流石のキユールマンもあつけにとられて茫然とした。屬僚等はトロツキーの驚く可き新發明を論破するに足る根據は無いかと、國際法の書物を引張り合つて相談した……』（ローゼル・レヴイー『トロツキー』）

この宣言を讀み上げたまゝ、トロツキーは獨逸側の回答を待たないで、さつさとブレストに引揚げた。

五

『ペトログラードでは、スモルニー會館は沸鼎の光景を呈した。或者は嬉し紛れに有頂天になり、或者はあつけに取られ、そして賢い者は泣いてゐた。トロツキーの遣口は潔白すぎて、汎獨主義者の理解を超えてゐる、明日にも獨逸軍は攻勢を取るだらう、彼等は斯う考へた。』（サドウル『ラ・レヴオルーシオン・ボルシユヰキ』）

或者はレニンを捉えて斯う問いた――

『是から一體どうなるんでしよう。』

『是から獨逸の革命さ。』レニンは落着き拂つて答へた。

この革命は、十五ケ月後に果して獨逸に起つた。『トロツキーの彈藥、口先きの彈藥、口先きばかりの彈藥』は、ホフマン將軍の兵隊靴を征服した。後日將軍は『シカゴ・デイリー・ニユース』のペン・レヒトに斯う語つたと傳へられてゐる。

『あのボリセヰキの奴等を征服すると間もなく、吾々は彼等に征服せられてゐた。東部戰線に於ける吾が戰勝軍はボルセヰズムの爲に腐つて了つた。そして或旅團は、西部戰線に移送のできないほどとなつた。吾が軍事機關は、ホルセヰキ宣傳の印刷機械となり了した。獨逸を東部から腐らせ、其精神を壞廢して、吾々を敗戰せしめたのも、今君の眼前に吾々を滅ぼしてゐる此革命も、皆なボルセヰキの宣傳である……』（ロビンス）

トロツキーは實に一九一七年の春に、既に之を先見して居つた。當時彼は紐育の一社會主義新聞に斯う書いてゐる。

『露國に革命的勞働政府の樹立せられることは、ホーヘンツオルレルン家の爲に致命的の打擊であらう。何故ならばそれは獨逸の無產階級の革命運動に、最後に刺戟を與へるからである』

けれども『トロツキーは濁眼にして而かも盲目であつた。彼は目の前に進行してゐる最大の必然事に盲目であつた……資本主義に對する彼の憎惡は、彼を盲目にした。』（ロビンス）トロツキーのプレストの宣傳は、十五ケ月後に獨逸革

命となつて反撥したるにもせよ、當面の問題は、差當り獨逸の兵卒が進軍するか何うかといふことであつた。トロツキーは『否』と答へた。

けれどもレニンは『進軍するだらう』と云つた。

獨逸の兵卒が進軍を背んずるとしたならば、露國の軍隊は之と戰ふ爲に進軍するだらうか。

此時スモルニーにはペトログラード・ソエツト及び全露ソエツトの多數の委員が集つて、非公式の會議が開かれてゐた。

『進軍するだらう』と大きな聲で口々に叫んだ。『進軍しないだらう』とレニンは靜かに云つた。『それはヘルノポルでも戰はなかつた。當時ケレンスキーは政權を握つてゐた。彼は有ゆる權力と、有りたけの雄辯を揮つて戰はせようとした……けれども露國の軍隊は戰はなかつた。それは敗走した。敗走するの外なかつた。それは最早軍隊ではなくて、パンと土地とを欲する百姓に過ぎなかつた。露國の軍隊は、新たな革命軍に組織しかへる迄は、決して再び戰はぬであらう……』今レニンは極めて物靜かに斯う云つた。そして獨逸の平和條件に調印しなければならぬと云ふ理由を二十一箇條に書き分けて大學で講義でもしてゐる樣子で說明した。彼はたつた十五分間喋べつた。それも自分の立場を說明しただけであつた。

其跡にトロツキーが起つた。革命は獨逸に起りかけてゐる。彼は革命の步るいて來るのを見た！　同志（カムレード）レニンは過つてゐる。獨逸の同志は、ブレスト・リトウスク條件の爲に戰ふ程に陋劣ではない！

『吾々は革命的文句に醉つてはならぬ』

レニンは斯う云つた。けれどもトロツキーは集會を支配した。レニンは强いて爭はうともしなかつた。此當座は、レニンは頗る不評判であつた。ソエツトの首領連は大抵トロツキーに左袒した。カル、・ラデツクの如きは、或日のソエツトの集會で、坐席に突つ立ち上つてレニンを睨みつけ、『若しペトログラードに五百の勇敢な人があつたなら、吾々は

足下を獄舍に投じたらう』とまで極言した。

『全く、誰れかゞ牢に這入るかも知れぬ。けれども若し足下が能く將來の形勢を明らかにしたならば、それは足下が予を牢屋に入れるよりも、予が足下を牢屋に送ることの方が遙かに事實に近いことを知るだらう。』

レニンは冷やかに斯う答へた。

六

何も彼もレニンの云つた通りになつた。ソヱツトは、一度はトロツキーの態度を承認する決議をした。けれども二月十八日には、獨逸軍は遠慮なく前進し初めた。『要するに斯くの如き宣言は、政府を差措いての、人民と人民との間の平和の締結である』といふトロツキーの確信にも拘らず、ホフマンの兵隊靴は精密に『斯くの如き宣言』を無視してゐた。此日の夕方、ドキンスクの要塞は、戰はずして陷落した。

同夜、スモルニーの人民委員會では、トロツキーを初め委員の多數は防戰を主張した。其うちにも、獨逸軍前進の報は相次いで來た。投票の結果は、僅かに一票の差でレニンの調印說が勝利を得た。タウリード宮の全露ソヱツト執行委員會も、八十四票に對する百十四票の多數で調印說を採用した。

二月二十四日午前四時三十分、正式に條件承諾の電報が發せられた。それには唯だレニン、トロツキーの名のみが記されてあつた。調印は三月三日と定まつた。

『何事もレニンの云つた通りになつた。けれども何事によらず、彼が新規なことを言ひ出すと、それは四方八方から反對の嵐を引起した。

「吾々は、第四回全露大會を開くだらう」レニンが斯ういふと、「何んだつて？　今大會を召集する！　今、代議員を送るなどとは思ひもよらぬことだ。不可能だ！」之が答であつた。

「大會は莫斯科に召集しよう。」レニンが斯う云ひ出すと、「何んだつて？　莫斯科？　反動派の本據ぢやないか？　革命の市なるペトログラードを棄てゝ、華族會館と帝政派の巣窟の莫斯科に往く？　斷じて！」之が答であつた。

『ところが斯うなつた。レニンの云つた通りに、第四回全露ソヱツト大會は開かれた。レニンの云つた通りに、獨逸人は進軍した。大會はレニンの云つた通りに、莫斯科の華族會館で開かれた。そして大會はレニンの云つた通りに、平和條約を批准した。レニンの影はトロツキーを蔽ふた。それはラデツクを蔽ひ、カレリンを蔽ひ、そして誰れも彼もを蔽ふた……』（ロビンス）

然し莫斯科に往く時には、レニンは條約批准に多少の疑ひを抱いてゐた。といふのは、獨逸の軍國主義的條件を憎むことに於て、レニンは何人にも劣らなかつた。人々は私に、之は滅亡的の平和條件だと云つた。私は答へていふ。それは二倍も滅亡的の條件であると。人々は私に、之は不名譽の平和條件だと云つた。私は答へていふ。それは二倍も不名譽な條件であると。（全露ソヱツト執行委員會に於ける演說）唯だレニンが此不名譽な滅亡的の條件を甘受しようとしたのは此條件に應じなければ、一層不名譽な、一層滅亡的の條件を課せられることを洞見したからであつた。けれども玆に一つの殘された望みは、聯合國側の援助である。莫斯科のソヱツト大會が、若しも平和條約を破棄したなら、獨逸軍の侵入に對して聯合國は果して如何なる援助を露國に與へるであらうか。レニンもトロツキーも切に之を知らうとした。そこで二人は覺書を作成した。此覺書は當時米國大使と勞農政府との間の、非公式の仲介者となつてゐたロビンスと、ロイド・ヂョーヂの特別通信者として露都に止どまつてゐたロツカアトとの手を經て、倫敦とワシントンの政府に傳達されたのである。ところが莫斯科大會の日は迫つて來るにも拘らず、ロビンスもロツカアトも、本國政府から何等の回答をも得なかつた。

三月十日となつても、レーニンはまだ莫斯科に來なかつた。『レーニンは莫斯科へは來ないだらう。莫斯科は眞の露西亞である。』『昨夜レーニンは國立銀行の金をそつくり持出して芬蘭土へ逃げたといふが眞個だらうか。』莫斯科ではこんな噂が口々に傳へられてゐた。

十三日の朝レーニンは莫斯科に着いた。彼は停車場から國立ホテルまで、護衛もなしに無蓋の自動車で乘りつけた。そして見透しのホテルの階段を昇つて、只の旅客同様に帳場へ往つて自分の部室を取極めた。部室に這入ると、彼は小いさな鞄から書類を取出して早速仕事に取掛つた。

倫敦からもワシントンからも、未だ何等の便りがなかつた。大會の期日たる十四日が來た。ロビンスもロツカアトも本國から何事をも聞かなかつた。三月六日に、ロビンスは本國からの回答がおくれる見込で、大會期日の繰延べを求めたので、レーニンは十二日の期日を十四日に延期したのであつたが、今度はロビンスからの、再度の討議延期の希望を聞いても、レーニンは唯だ『討議は豫定通り進行しなければならぬ』と答へたきりだつた。

大會には千二百四人の代議員が集まつた。彼等は西はスモレンスク、東は浦鹽、南はオデツサ、北はムルマンスクの遠くからやつて來た。彼等は『事實に露西亞人の九割三歩たる農民と賃銀勞働者を代表して居つた。そして百分の七の紳士閥は代表してはゐなかつた――否な初めから代表しようともしなかつたのである。』(ロビンス)

平和條約の討議は十五日に初まつて、十六日の夜まで僅かの休憩を除いて殆んどぶつ通しに繼續した。演説者も演説者も、大抵みな講和に反對した。十六日の夜十一時三十分にレーニンが演説した。それきりで誰一人演説しなかつた。十一時三十分、レーニンは演壇の椅子に腰を掛けてゐた。彼はロビンスを擧麾さして斯う聞いた。

『本國政府から何か返事があつたかね』

『何にも……ロツカアトの方には、倫敦から返事があつたでせうか』

ロビンスは聞き返した。

『何も…ぢや私は講和贊成の演說をしよう。そして講和は批准されるだらう』

レニンは民衆が眞に求めて居るものを知つてゐた。そしてそれを、恐らくは民衆自身よりも能く知つてゐた。彼は此要求を代表した自己の立場が、必ず勝利を得ることを信じてゐた。そして此確信は二日間の大會の光景によつても、微塵ほども動搖しなかつた。多數の演說者は現に講和に反對してゐるではないか。それにも拘らず、レニンは大會が講和を批准することを知つてゐた。

レニンは一時間と二十分の間演說した。『右の手にマルクスの著書をもち、左の手にエンゲルスの書物をもちて獨逸の將軍に對したとて何にならう。獨逸にもそんな書物はある。たゞ獨逸の將軍は、それを理解し得ないのだ』恐らくレニンも斯く信じてゐた。

『彼れの政策はペトログラードにゐた時の通りであつた。彼は帝都にして又た革命の市なるペトログラードを明渡すだらう。彼は神聖な市、記念の市なる莫斯科をも明渡すだらう。彼はヲルガにまでも退却するだらう。若し何處かの寸尺の土地の上にでも、革命を保存し、そして革命的訓練を樹立することさへ出來得たなら、彼は何物をも引渡し、何處までゞも退却したであらう。そして此革命的訓練こそ、現に十二ケ月の後には、彼をして能く十六箇の戰線に戰ひ、能く聯合國の經濟封鎖に堪へることを得さしめたものである…』

投票の結果は、批准反對二百四票、棄權二百七十六票、批准贊成七百二十四票であつた。

八

この驚く可き力をもつた彼れの演說は、其全體の平々坦々たるが如く、平々坦々である。ジョン・リードは、レニンの此時の演說を敘して次の如く云つてゐる。

『演壇に立つと、レニンはテーブルの端を攫んだまゝ、しよぼ〳〵した小いさな目で群衆を見渡しつゝ、五六分間も默

采のやむのを待つてゐた。群衆が靜まると、彼はいきなり斯う云つた――「吾々は今、社會主義的秩序の建設に進むであらう」。再び恐ろしい喝采歡呼が起る。「第一に爲す可きことは、平和を實現すべき實際的の政策を採用することである……吾々は非併合、非賠償、人民自決といふソエツトの條件を基礎として、全ての交戰國の人民に對して、講和を提言するであらう……」

『演說する時には、笑つてゐるかのような彼れの大きな口があんぐりと開いた。彼れの聲は嗄がれてゐた――尤も嫌やな嗄がれ方ではなくて、如何にも、多年の演說の爲に嗄がれたらしい聲であつた。そして唯だ平々坦々と、一本調子で進んでゆくあたりは、何だか此調子で、何處までゞも續きそうに思はれる。語勢を強める爲には、ほんの少しばかり前方に身を屈がめる。何等の身振りもない。そして彼れの前には、一千の質撲な顏が、熱心な崇敬を以て見上げてゐる……其演說を通じて、人の魂をそゝり立てる靜かな、そして力ある或者があつた。そしてレニンが演說した時に、民衆が何故に彼を信じたかゞ解つたようであつた……。』

レニンの演說について、同じ記者は斯う書いて居る。

『……次にレニンが登壇した。平靜に、そして少しの感動的の樣子もなく、額に皺をよせながら、言葉を選んでぽつ〳〵と話しだす。そして一句一句、ハムマアの一擊の如くに人を打つ……』

レニンの演說が如何に大なる力をもつかを知る爲に、吾々はも一度、リードに聞かなければならぬ。

一九一七年十一月二十三日、ボルセヰキの提唱によつて、ペトログラードに農民大會が開かれた。當時尙ほ右翼社會革命黨の掌中にあつた全露ソエツト執行委員會は、有ゆる手段によつて此大會の開催を妨げた揚句、大會開催の止む可からざる形勢となつたので、今度は極力、保守的分子が代議員に選ばれるように運動した。大會には反ボルセヰキの空氣が漲ぎつてゐた。

『大會の三日目に、レニンは出し拔けに演壇に現はれた。十分間の間、會場は狂氣のようになつた。彼等は怒號した

──「引き卸ろせ」「吾々はボルセヰキの人民委員の演說は聞かない」「吾々はボルセヰキの政府を認めない」──

『レニンは兩手で卓子の端を摑んだまゝ、落着き拂つて立つてゐた。彼れの小いさな目は、演壇の下なる騷動を注意深く測量して居つた。そのうちに段々靜まつて、騷ぎは最早や士官の肩章をつけたり、家長然とした、髯のある、最も裕福な百姓の類の並んでゐる右翼だけになつた。

「私は人民委員會として、この所に來たのではなくて……」

レニンは之れ丈け云つて、又た暫く騷ぎの靜まるのを待つてゐた。

「……私は此大會に正當に選出せられた、ボルセヰキ黨の一員として來たのであります……」

斯う云つて彼は皆に見えるように、當選狀を差上げた。レニンは落着いた聲で語を進めた。

『……然しながら、現在露西亞の政府が、ボルセヰキ黨によつて造られて居ることは、何人と雖も否まぬであらう……』

レニンは又た、暫らく休まなければならなかつた。

「……して見れば、有ゆる意味に於て、それは同じ事である……」

右翼は大騷ぎを起したが、中央と左翼とはあつけに取られて默つてゐた。レニンの議論は單純であつた。

「私は農民諸君の打明けた答を聞きたい。吾々は何人に、大地主の土地を與へたか。そして諸君は今勞働者の、工業管理權獲得の妨害を欲するのであらうか……大地主は勿論、百姓に反對する。そして工業主は勞働者に反對する。そして諸君は、無產階級を分裂せしめようとするのであらうか。諸君は孰れらの側に立たうとするのであるか……」

大會はボルセヰキの勝利を以つて閉ぢられた。

九

その人物が面白い對照をなして居るように、トロツキーの演說振りは、レニンのとは丸切り違つて居る。レニンの演

その人物が面白い對照をなして居るように、トロツキー

說は靜かな海のようであるが。トロツキーの演說は、岩を咬む怒濤のようである。彼れの演說に於て、初めて文字通り壇上の獅子吼を聞くことが出來る。

一九一七年十月二十日には憲法議會の先驅として、全露民主大會がペトログラードのアレキサンドリンスキー大劇場に開かれた。ケレンスキーは此大會で最後の大雄辯を揮つた。

『彼は芝居がゝりで演壇から通廊を場の中央まで進み、それからツアーの玉座に登つて、祝盃を擧げるように、右の手を擧げて再び口を開いた……「民主的共和國萬歲、革命軍萬歲」――群衆は「ケレンスキー萬歲」と叫び返した。

『之がケレンスキーの受けた最後の歡呼であつた。若しも露西亞人か伊太利人か佛蘭西人の氣風をもつてゐたならば彼等はケレンスキーを崇拜したらうと思ふ。けれども露西亞人は、決して口先きで說得せられない。そして彼等は英雄崇拜者ではなかつた。彼等はケレンスキーの演說に失望した。彼は人心を魅するところがあつた。けれども彼等に何事をも語らなかつた……彼が退場して一時間の後には、彼の感化は消え失せた……』(ルイズ・ブライアント)そして二週間の後には、ケレンスキーの政府はボルセヰキの暴風の前に、枯葉のように吹き飛ばされた。

ケレンスキーの雄辯は一時は大會を支配した。トロツキーは其あとに登壇した。

『彼は落着き拂つて、壇の上を靜かに步いてゐた。彼は喋べつてはゐなかつた。否な喋べることは不可能だつた。何故ならば、聽衆の方で喋べつてゐた。彼等はトロツキーに對して喋つてゐた。而かも大きな聲で手酷どく喋つてゐた。彼等は、「親獨黨」、「獨探」、「犬」、「叛逆者」、などの言葉を浴びせかけた。彼等は咆哮した。壇上を往つき戾りつして居つたトロツキーは足を停めた。そしてポケツトから卷烟草を一本取出して、寸燐を擦つて火を付けた。彼は尙ほ往きつ戾りつしながら、スパ〱と烟草を吸つてゐた。傍聽席にゐたロビンスは、聽衆のうちの或男が、ピストルを持つてゐるのを見た。彼はトロツキーが演壇に現はれるや否や、射擊するつもりらしかつた。トロツキーは暫らく煙草を吹かしてゐた。そのうち少し鎭まつた隙を見出して、彼は手を擧げた。そしてあの聽衆を征服して、忽ちに沈默せしめて了

つた……

『トロツキ、は「親獨黨」、「獨探」、「犬」、「叛逆者」などといふ言葉には答へようともしなかつた。彼は全く無視してゐた。そして端的にボルセヰズムとボルセヰキの綱領とに突進した。そして直ちに政綱を論じだした……』

ロビンスの直話を叙したヰリアム・ハアトは斯う書いて居る。

『ロビンスは多くの演説者を聽いた。演説することは彼れの職業の一部であつたし、又た演説を聽くとも、殆んど彼れの職業の一部であつた……しかし流石のロビンスも演説の技倆にかけては、トロツキーに降参せざるを得なかつたようである。彼は、聽衆を征服することに於て、聽衆を思ひの儘に引廻す點に於て、熱情の飛躍に於て、また即時に言葉を織り出す秘術に於て、演説家としてのトロツキーに匹敵する人物を曾て見ないと云つてゐる。トロツキーは敏捷と猛烈とを兼ね有して居る。彼はロビンスの如き疑惑の眼を以て見てゐる者の注意をも鈍らす程の、深刻なる力を以て、其思想の毒を聽衆の上に撒りかける。ロビンスは何人の思想よりも、より多くトロツキーの思想を憎んで居るかも知らぬ。ロビンスは個人主義者にして宗教の說教者であり、トロツキーは共產主義者にして唯物論の說教者である。此の人の接觸する一點は、唯だ雄辯術である。そして此一點に於ては、ルビンスは不幸にして、トロツキーが全世界の選手たることを認めて居る。』

『ラ・レヴオルーシオン・ルス』の著者クラウド・アネーもトロツキーを許して斯う云つて居る。

『彼を支配するものは聰明である。辯論と思想の働きとは此人の生命であつて、彼が得意の壇場はこゝにある。彼の馳騁する舞臺は政治である。彼は彼處に、意志の權威によつて人々を支配すると同時に、千變萬化の機略と、巧妙なる方策とに富んだ彼れの才能によつて、彼等を思ふがまゝに導いてゆく。彼は斷えず其聽衆と接觸を保ちつゝ、彼等を豫定の方向に進ましめ、彼等を所要の頂さにまで引上げる。そして最早やこれ以上には、聽衆がついて來ないといふこと之れ以上に進んだなら、公衆が自己を離れるといふことを覩て取ると、彼はうんと拳に力を罩める。此身振りがまた如

何にも闊達自在で、思はず感歎の叫びを放たしめる。そして此身振りによつて、彼は聽衆を反對の方向に引戻し、そこで當然受く可き喝采を收めるのである。此有樣を見てゐると、唯だ不思議と云ふ外ない。』

十

トロツキーは一八七七年、南方露西亞の、エリサベトグラードの近くに生れた。彼れの父は裕福な商人であつた。彼の名はライバ・ブロンスタイン、又はブラウンスタイン (Leiba Bronstein or Braunstien) であつて、トロツキーは假名である。

『タウリード宮の演壇に立つてゐると大きく見えるが、體格は先づ中背で、細そりとはしてゐるが角張つて、如何にも力に滿ちてゐる。黑く茂つて頭髮の下に、立派な形をした前額が高く聳え、厚い唇を匿しきれぬ髭の上に、鼻が蔽ひかかつてゐる。皮肉なそして深刻な冷嘲の微笑が、大きな肉感的の口の邊りに漂ふ時には、口の兩端が引き下つて、沈痛な線が刻まれる。厚い眼鏡の後ろに、忽ちにして熱情に燃え、忽ちにして水のように冷たい陰欝な眼の光つてゐる顏にちよつぴりと顎鬚がくつ附いて居る。調和も純粹もない、不安な顏である。

『トロツキーは其細い指で斷へず髭を引張つてゐた。彼は演壇の上を往つたり來たり、立ち停まつたり、少しもぢつとして居らぬ。演壇の前には、兵卒と水兵と勞働者との群が、彼れの脚下に陣取つてゐる。そして莨の煙の中からは怒濤の如き騷ぎが聞こえて居る。

『トロツキーが演説を初めた。恐ろしい多感性にも拘らず、極めて沈着に、極めて自制に富んでゐる。金屬の碎けるような聲で、言葉は緩やかに、一語一語切り離された明確な言葉を、爆彈の如くに、彼は傾聽してゐる會衆の上に投げつける……』（ローゼル・レヴィー）

『政府を經營するといふことは、スモルニーの人達には新規な仕事であつて、途方に暮れるようなことも屢々であつ

た。彼等は、レニンには幾分の遠慮があつた。そこでこまくした雜問題は、何も彼もトロツキーの所へ持ち込んだ。トロツキーは過勞の爲に斃れそうなことも度々であつた。彼は怒りつぽくなり、屢々激怒を發するようになつた……

『トロツキーは細造りで、不隱な暗い目をして、厚い眼鏡を掛けてゐる。額は高く、髮の毛は黒く波打つて居る。彼は光彩あり、そして猛烈な演說者である。親しく彼を知つて見ると、獨逸から金を取つたといふ話は、全然嘘としか思はれぬ。彼は追放中、非常に貧乏であつたが、それでも親爺から金を貰ふことは、斷乎として拒絕した……』(ルイズ・ブライアント)

同じ記者は又た斯う云つて居る——

『……マラーの如きレオン・トロツキーの際立つた人格、猛烈な、蛇のような彼は、大風が長い草を靡かせるように集會を支配した。如何なる人も彼の如く、一と口喋べつただけで、あれ程の咆哮とあれ程の憎惡とを惹起するものはない。如何なる人も彼の如く、鋭どい言葉を用ひるものはない。而かも全てそれ等の言葉の陰には、斯くも冷靜な頭がある……』

ジョン・リードの筆からも、吾々はトロツキーの人物風采について、略ぼ同じ印象を受けるのである。

『……トロツキーは登壇した……彼れの痩せた尖つた顏は、確にメフィストフィリーズの惡意の皮肉を浮べてゐた……』

『……そこでトロツキーは、確信と覇氣に滿されて、一段高い演壇に突立つた。その口の邊りには、愚弄に近い嘲笑が漂ふてゐた。彼は鳴り響く聲で演說した、そして大群衆は總立ちとなつた……』

十一

レニンは一八七〇年、四月十四日シムビルスクの貴族の家に生れた。彼れの本名はウラヂミル・ウリアノフ(Vladimir Ulianov)で、猶太人ではない。勞農政府から出る文書にはウラデミル・ウワアノフ(レニン)と註がつけてある。父はシムビルス政廳の參議官であつた。普通に見るレニンの寫眞は、數年前、彼れが西比利亞流刑の宣告を受けた時分、監

獄で撮られ寫眞であつて、見たところは大變違ふと云ふことである。或日ロビンスに、クレムリン宮にレニンを訪づれた、三つ　の階段を昇ると天鵞絨の帷を張つて、細工の見事な美しい机を置いた部室がある。この小いさな一室こそ、曾てツアーの親しく政務を見たところであつた。

『そこに今、ずんぐりと頑丈な、灰色の眼をした禿頭のレニンが、靜かに腰を掛けて居る、彼は毛織のシヤツと、たいぶ前に買つて間もなく皺延しをしたまゝらしい衣類を着けてゐた。彼れの部屋は極く靜かである。「革命的の文句に醉ふこと」を罵つただけに、彼は革命的興奮に醉ふことをも擯斥するのだらう。彼は机の上の色々の書類に忙しく目を通ほして居るうちにも、十分間、五分間、一分間と云ふように、時間を切つて訪問者を引見する。彼は是等の人々と、聲を張上げる必要の無い人らしい小いさな聲で話してゐる……』

アーサー・ランソムの印象は斯うであつた。

『……この小いさな、禿頭の皺だらけの人は、自分の椅子を彼方に傾けたり此方に傾けたりしながら、何事にもよく笑ひ助言を求めに來るほどの者には、何時でも喜んで眞面目な助言を與へる。そして其助言は彼れの弟子に取つては、如何なる命令よりも多くの強制力をもつて居る程に、爾かく條理を盡したものである……。』

尤もルイズ・ブライアント女史は『彼れは連日閉ち籠つてゐて、逢ふことが出來ぬ。そこで私達は、演説後に彼を捉まへるのを常とした。そうすれば彼は打寛ろいで、他愛もないお喋べりをする』とも書いて居る。女史は又たスモルニーのことを書いて『……階上の一小室には何時も茶が沸いてゐた。トロツキーはよく其處へやつて來た。レニンを除いてはコロンタイも、スピトノヴアも、カミノフも、ウオロダリスキーその他の人々もよくやつて來た。私は曾て是等の場所でレニンを見たことがない。彼は超然として居つて、極く大きな集會にだけ顔出しをした。何人も彼をよく知る程に近づいた者はない』と云つてゐる。

『……ずんぐりと背が低くて、禿げたまゝ圓い大きな頭が肩の上に載つかつてゐる。眼は小さく、鼻は獅子鼻で、口

は寛つたりと大きく、頬が重さうだ。そしてズボンが引ずるほど上にすぎる薄汚い服を着けてゐた。恐らくは曾て歴史に比類のないほどに、愛と尊敬を受けたモップの偶像として、餘りに非印象的である。不思議な民衆的指導者――純粹に智力のみによる指導者、色彩もなければむら氣もなく、非妥協的で而かも浮世離れがして居つて、之といふ光彩ある特質が何もない――唯だ深遠な思想を、單純な言葉に言ひ表はし、具體的の形勢を分析する力をもち、大なる智力上の大膽と明敏とを兼備へてゐる。』(ジョン・リード)

トロツキーが天成の宣傳者であるのと、異なつた意味に於てレニンも亦た大なる宣傳者である。

『レニンは偉大なる宣傳者である。若し何人かゞ、獨逸と墺太利とに革命を起すことが出來るとしたならば、それは必ずやレエンである。彼は永く獨逸に住み、獨逸人の心理を解してゐる。そしてゴルキーが曾てレニンのことを、彼は化學藥品の代りに、人間的材料の上に作業して居る化學者であつて、化學者と同じく人間生活から離れて、冷靜公平無私とを以て作業を行つてゐると評したことがある。シャーレマンも、ナポレオンも、ヰリアム・ピットも、全ての征服者は皆な斯くの如く作業した……レニンは一本調子で、徹底的で、且つ頑固である。彼は首領の資質を殘らず備へて居る……』(ルイズ・ブライアント)

『ボルセヰキは五つの言葉で露西亞を征服した。彼等は「全ての權力をソエットに」と云つた。之は土地とも産業とも又は戰爭とも平和とも、直接何の關係もない一個の定式であり、合言葉であつた……繰返し繰返し、彼等は倦まず撓まず叫んだ――「全ての權力をソエットに！……」』(ロビンス)

彼等は民衆の心理を解してゐた。

十二

レニンもトロツキーも、常に暗殺の危險に脅やかされてゐる『私は一度、レニンが三發射撃せられたところに居合せ

た。彼は石で造られてゐるかと思ふほど冷やかであつた。こんな事があつたにも拘らず、彼等は一向平氣に、護衛なしで歩るき廻つてゐる……』(ブライアント)

二人の生活は極めて質素簡單である。

『トロツキーと殆んど佛蘭語しか話せない美しい小いさな妻君とは、スモルニー會館の三階の一室に住まつてゐた。部室は貧乏畫家の畫室のように仕切がしてあつた。部室の一方には、二つの簡畧な寢臺と、安物の小さな茶箪笥とが置いてあり、一方には一脚の机と、二三脚の粗末な椅子があつた。額も掛つて居らねば、何處にも目を樂ませるものはなかつた。外務委員であつた間は、トロツキーは常に此部室にゐた。そして多くの外國の貴顯大官も此部室を訪づれなければなかつたのである……』(同上)

『レニンもトロツキーも兩人とも、極めて貧しい生活をして居つた。兩人とも自分の室で、露國政府の最高官として一ケ月五十弗づつ取つてゐた。』(同上)

レニンとロツキーとは目の廻る程忙しい中にも、偶には思切つた惡戯をする。ブレスト講和談判の進行中のことである。ルウマニヤの南の方で、墺太利人がボルセヰキの軍隊武裝解除をしたことがある。トロツキーはブレストから、ルウマニヤ大使の逮捕を電命した。大使の逮捕などゝは、秘密外交文書の公表同樣、前代未聞のことなので、ペトログラードの外交團は、三十九名打揃つて、翌朝早速スモルニーに出頭した。レニンはそうとは知らず、的きり之は列國から、勞農政府承認に來たものと早合點して、ホク〱ものでゐた。

取別け上機嫌の時だつたから、レニンは直樣大使の釋放を約束し、三十九人と一々握手を交換した。

引揚げて來た外交家連は、食卓を圍んで、レニン、トロツキーも滿更の沒分曉漢でもなかつたと褒めかけてゐる所へ急使が驅けつけて、成程大使は釋放せられたが、同時にルウマニヤ王逮捕の命令が出たと云ふ驚く可き報告を齎らした。

『外交官は絕望の餘り歎息した。何故ならば、大使については外交上の禮遇を要求することも出來たが、王は外交官でないから、外交上の禮遇を要求する權利がなかつたからである!』

理想の大學教授アントン・メンガア

森戸辰男

一

「何者の權威をも恐れざる大膽なる眞理の愛」これぞ「學者の階級的名譽である、丁度軍人のそれが勇氣であり、裁判官のそれが正義であるやうに」と、メンガーは言つた。何者の權威にも屈せざる眞理に對する熱愛、それが果して私の裡に燃えて居るか、私は學者と言ふ名譽ある名前の冒瀆者で、實は單なる知識のブローカアに過ぎないのではないか知識のブローカアが株式のブローカア以上に尊敬せらるべき理由が何處にあるか、忠君愛國を生活の糧にしてゐる連中が所謂奸商よりもヨリ惡むべき奸商である如く、知識取引の鞘取りは、米や株の鞘取賣買よりもヨリ愧づべき職業ではないのか。

斯樣に自ら省みるとき、私は唯私の面を伏せ私の口を緘するのほかはない。實際、我國の學者の中、果して幾人が能く亂されざる心を以て、此のメンガーの言葉を繰返し得るであらうか。

併し、私がメンガーは敢て之を公言した、而もそれは麗はしくはあるが收穫の少ない言葉の花を通してのみではなく實に彼の生活其者を通して之をなしたのである。

彼の生活は、以下誌すやうに、外部から見れば、極めて平穩且つ順調なものであつた。生涯の大部分をキーン大學に於て、私講師、員外教授、正教授として、更に學長及總長として、終りに名譽教授として、過した彼の生涯の外的經過は、吾々の興味を惹くべく餘りに平凡であり、餘りに單調である。併し、一度吾々が彼の外的生活から轉じて、彼の學者としての內的生活に向かうと、彼の辿つた人生の行路も亦、山の彼方の幸福を求めつつ、曠野を旅行く、淋しき旅人

のこれであつた、ことを認めないわけには行かぬ。

社會主義者や民主主義と云へば、直ちに隱然たる反逆者を以て見られて居た時代、無宗教と聞けば未だなほ不倫不德を聯想する時代、帝政と資本主義との牢固として確立し、カトリク教の勢力盛なる墺國に於て、その首都キーンの大學而もその學長、總長の要職にあつて、彼は斷乎として社會主義者民主主義者無宗教者を以て自らを聲明した。彼の學問的生活の大部分は、專制主義と資本主義との學問的檢討と、民主主義と社會主義との學問的樹立とのために費された。而も彼の之をなすや、我國の賢明なる教授諸先生の如く、「發表の自由」なき不姙なる「研究の自由」の範圍に於て之をなしたのではなく、眞理に對する愛と忠誠とに溢れた彼は、その研究の結果を、最も平明簡素なる文體を以て、天下に發表するの確信と勇氣とを缺いでゐなかつた。

多くの讀者にとつては、之は極めて單純な事實に過ぎぬかも知れぬ。併し、私は自ら省みて想ふ。此の單純なる事實の背後には、必ず數多くの內的鬪爭の隱れあることを。安樂を愉む心はどれだけ彼を誘惑したであらう、權威を恐るる心はどれだけ彼を臆病にしたであらう。而も彼は眞理に對する愛によつて、凡て此等の誘惑と威嚇とに打ち克ち、內的鬪爭の勝利者となつた。かくて彼は內的生活に於ける自由を征服したのである。

既に內的自由を征服した彼にとつては、法律上の自由の問題はたいした關心事ではなかつたらう。幸に、彼は此の外的自由をも征服した、キーン大學は彼を休職にもせず放逐もしなかつた、のみならず彼は大學教授としての最も名譽ある經歷を進むことが能きた。併し、若し彼が彼の生活を顧みて之に滿足と幸福とを見出したとすれば、それは外的自由が彼に保障した平穩順調の生活からではなく、實に彼が眞理の愛のためにする絕えざる內的鬪爭に於て征服し來つた所の彼の內的自由からであつたらう。

彼の胸には壓制者に對する憤激と被壓制者に對する同情とが溢れんばかりに湛へられて居た。併し、彼は巷に出でて民衆の實際運動に參加することをせず、また政界に入つて彼れの理想の政治的實現を圖らうともしなかつた。彼の天地

は主として大學であつた、講義であつた。彼の思想は多く嚴密なる科學の形を採つた。斯樣に振舞ふことのために、彼はどれだけの自己抑制をなさなければならなかつたことであらう。かくて、吾々は冷靜鐵の如き彼の論理の中にも、なほ、感激の源泉を見出し得るのである。

眞理と民衆との熱愛者たる我がアントン・メンガアは寔に理想の大學教授であつたのである。

二

アントン・メンガア Anton Menger は一八四一年九月ガリシヤのマニオウManiow と言ふ農場に於て、小貴族の第四子として生れた。父はアントン・メンガー・フォン・ウォルフエンスグリューン Anton Menger von Wohlensgrün と云ひ、母カロリネ Karoline と同じく、その家はドイツ領のボヘミヤ出であつた。父は私領の司法を業として居たが、財産もなく收入も少く、加ふるに十人の子持――其内四人は夭折した――であつたから、彼の生活は決して樂ではなかつた。特に、一八四八年の夏に、彼の父が死んで以來、六人の子供を引き連れて身分相應の暮らしをして行くには、彼の母の心勞は一通りではなかつた。

三

メンガアは父の最後の居住地であつたビアラ Biala の小學校――それに彼は一八四七年の秋に入學した――と實業學校の第一級とを卒へ、一八九二年の秋、テシェン Teschen のカトリク國立中學校（シュタートギムナジウム）に入學した。併し、此の學校は年と共に、彼には耐え難きものとなつた。と言ふのは、此の學校は非常に宗教臭くて、その教師の大部分は坊主であつた然るに、早熟なメンガアは舊教に凝り固つた兩親の許に育てられたために、夙に宗教上のドグマに對して疑を懷き、それが殆んど無信仰の狀態に迄嵩じて居たのである。更にまた、彼が哲學書や歷史書の非常な讀書家であつたと言ふことも

彼の此の傾向を一層強めたに違ひない。斯樣な次第であつたから、彼の天才と好成績にも拘らず、教師連の覺えは決して芳ばしいものではなかつた。

遂に、彼は四年級の時に宗教の教師と衝突し、それがため一時トロパウ Troppau の中學校に就學するやうになつた。二年の後、彼はテシェンの六年級に復校したが、ものの半年立つか立たない内に、また「當然なすべき服從を強いて拒み之を固執したために、及び反抗をしたため」に退校處分を受けた。それは、彼が宗教の時間に『宗旨問答』中の「若し生兒が洗禮を受けなければ、永久に亡びに運命付けられる」と言ふ主張に就いて爭論し、之を取消すやうにとの申出を拒絕したのみならず、更に明瞭に彼の立場を確持したがためであつた。

此の出來事は、も少しのことで、彼の一生の方針を一變させる處であつた。と言ふのは、當時の官僚的墺國に於ては宗教上の爭論のために、中學校を逐出されたやうな者は、先づ學問的研究の繼續を斷念するのほかはなかつたから。此の場合、彼に殘された道は、實業學校に入つて、商業若くは工業にすることであり、且つ彼は少さい時から、肉體的勞働殊に手工が大變好きで、そう云ふ方面で身を立てようとさへ思つたこともあつたから、彼は再びその方へ彼の考へを向けたのである。併し、彼の蒲柳の體質と熾烈なる研究心とは、遂に彼をして之を思ひ止まらせた。そこで彼はクラカウの州廳に赴いて中學卒業の檢定試驗を受け、一八六〇年一月、即ち規定の年限よりも半年早く、中學卒業者の資格を得たのである。

四

メンガアは最初言語學者にならうとしたが、後友人の勸告に從つて、法律學を志すやうになつた。暫くクラカウの大學に居て、後、キーンの大學に轉じたが、何處でも彼は大學の教師連には感心しかなかつた。彼等教師連は、「眞實の學問に不可缺の要素である所の自由批判」を缺き、彼等が多少とも自由批判の形跡を示す場合にも、「古代のローマ法や中

世のドイツ法や教會法やに對して之をなさずに、却つてヰーンに於てはドイツ民法、ベルリンに於てはプロシヤの國法——此等の法典は啓蒙時代の産物であつて、多くの自由思想を含んで居る——に對して之をなした。」で、彼は初から自分で獨立に、有名な原著作を讀み、「成法の大海に埋沒しないやうに」啓蒙時代の法理學の研究に從事した。其の中でも、彼はルソオからとりわけ深い感化を受けた。

併し、法律學は始めより彼の生計の爲の學問であつた。從つて、彼はその外に、哲學、政治史、文化史及數學を勉强した。彼等は非常に多方面で、一八六二年乃至六四年の間に書かれた多くの論文中には、法理學、法制史、法律學說の問題は勿論、純正哲學、論理學、高等數學の問題も好んで取扱はれ居り、吾々は其の中に於て既に彼の後年の著作の萠芽を認めることが能きるのである。

彼の學生生活は、酒と女と歌とより全然絕緣した嚴肅な眞面目なものではあつたが、併し彼は惡戯や滑稽も仲々やつたらしい。例へば、クラカウの大學にゐた時代、一人の友人と組んで、クラカウ及その近郊の方々の僧院を訪ねて、さも殊勝げに、新改宗者として仲間に容れて吳れと願出で、——勿論本當に、そうする氣は毛頭なかつたのである——皆んな謝られて、ヰーン迄遠征したこともある。ヰーンでは教授連の鋭い批評家として學生間に知られ、一度は嘲弄の詩を作つて、不評判な總長にデヂケイトしたこともあつた。

彼は、彼の學生生活を通じて、決して所謂『善良』なる學生ではなかつた。而して彼の眞價はむしろ彼の『不良』なる點に存して居たのである。

五

一八六五年七月法學博士の稱號を得てより、彼は暫くの間學問生活から遠ざかるやうになつた。

彼は辯護士を志し、一八六五年八月裁判所の調書起筆者（コンツィピエント）となつた。併し、新參者のことであるから、何程の金にもな

らず、且つ其の頃以來母からの仕送りも止まつたので、彼は內職に新聞の編輯者になつたり、キーンの貴族の家庭教師になつたりして、その收入の不足を補ふて行かねばたらかなつた。其後、一八六九年一月に辯護士の特許を獲て以來、彼の經濟狀態は漸次順調に向ひ、彼が辯護士を獨立でやるやうになつてからは、(一八七二年八月乃至一八七五年七月)彼はその卓拔な法律上の知識と明晰な頭腦のために、非常に流行り、生活の餘裕も大分出來て來た。

けれども、辯護士の職業は彼を滿足させなかつた。此の職業の獨立的性質は彼の氣に入つて居たが、單に金儲のための活動に安じて何時迄も從事して居ることは、彼の耐え得ざる所であつた。彼は小供の時から簡素な生活に馴れて居た從つて、財產は彼の心を惹きは惹いたが、それは單に獨立を獲得維持する手段としてであつて、決してそれ自身が目的となるやうなことはなかつた。彼の希望は最初より、專心に且つ自由に、學問の研究に從事せんことであつた。かくて彼は大學の方へと彼の步みを向けたのである。

六

彼は初めローマ法の私講師とならうとして、それがために既に論文の用意にも取りかつてゐた。ところが、一八七一年二月、突然キーン大學のハビエティエク教授が司法大臣に任命せられたために、その擔當して居た手續法の講座が空くことになつた。そこで、メンガアは此の機會を捉へ、直ちに私講師論文に着手し、十週間もたたぬ間に、『强制執行の學說を論ず』Beitrage zur Lehre von der Exkution を脫稿して教授會に呈出した。一八七二年、彼はその志望通り、キーン大學法學部の墺國民事訴訟法の私講師となり、一八七五年七月員外教授に任ぜられ、二年後正教授に進み、一八九九年九月の隱退迄、その地位に留まつた。

初めの內は多少の困難もあつたやうであるが、其後彼の生活はだんだんと順調に向ひ、學生からも同僚からも、非常に信頼せられ、教授として受け得た一切の名譽を持ち得た。彼は數年間法學部の評議員となり、一八八〇—一八八一年及

一八八七――八八年の兩度法學部長となり、一八九五――九六年にはキーン大學總長となつた。なほ、一八九七年の春には宮中顧問官の榮位を得、退職後は法學部の提議によつて、墺國民事訴訟法及法理學の名譽教授に任命せられた。

七

自分と自分の勞作との外何物にも依頼することなくして、贏ち得たる彼の外的生活の成功を顧みて、メンガアは勿論不滿足には思はなかつたらう。併し、之が彼の願望の歸着點だと思つたら、それは大間違である。彼の狹い專門は勿論彼の教職も亦、彼の人格の僅かの部分をしか充たさなかつた、而も充したと言ふても、それは比較的僅かの期間のことであつた。墺國民事訴訟法の學者及教師としての彼の活動は、根本に於ては、彼の生計の方便であるに過ぎなかつた、勿論それは、內的にも外的にも、他の職業に比しより高尚により大なる程度の行動の自由を彼に確保するものだつたが。とは云へ、彼の手續法學者としての功績は、そのことによつて少しも傷けられはしなかつた。反對に、それは世間並みの大學教授に比べては、餘程、學問的にも價値があり、實際的にも効果の多いものであつた。

無味乾燥な手續法も彼の講義や著書に表はれては、決して單なる乾からびな理窟や七面倒な文句の註釋ではなかつた。と云ふのが、彼は長年辯護士生活をして充分實生活に關する知識を持つて居た上に、古代及近代の外國法に通曉し、巧に比較的研究方法を用ゆることが能きたからである。グリューンベルヒ教授の云ふて居るやうに「彼は特に法學者が屢々陷る危險を遁れた。彼は單なる專門の奴隷となることなく、專門の上に立つた。彼はまた國內法制は勿論一般成法の狹隘な制限內に跼蹐せず、むしろ彼は合目的性(ツエノメイシヒカイト・エルエーグンゲン)の考量によつて導かれ、jus hominius causa factum est と言ふことを念頭から離さぬ、洞察力ある批評家として、國內法並に一般成法に對したのである。」此のことは、彼の手續法の著述のどれに就いても言ひ得られるが、就中未完成の彼の大著『墺國民事訴訟法體系』System des österreichischen Zivilprozesrechtes に最もよく當嵌まる。

手續法學者としてのメンガアの活動は非常に收穫の多いもの・であつたけれども、その期間は比較的短かつた。卽ち彼の活動は一八七二年乃至一八八〇年の九年に限られて居り、その内でも、正教授になつて以來、(一八七七年)彼は正規の講義のほかには、殆んどこれと言ふ勞作を出さず、また自分の專門に深い興味を持たなかつたやうである。

一八七四年に彼はキーンの『法曹會』と共同して、墺國の公法及私法の歷史の研究に對して二つの懸賞を提供したことがあるが、併しこれは彼が特に此種の研究に同情したからではなく、他に理由があつたのである。此の事は偶々彼の人格の一端を示すと思ふから、序に誌すが、一八七三——七四年の冬學期に、彼は辨護士の仕事と著述と講義との過重の負擔から、通常七時間の墺國民事訴訟法の本講義を五時間でやることにきめた。同時に、彼は慾張りと思はれたり、不正な競爭をするものと疑はれたりするのが嫌さに、その講義より入る聽講料を二倍にして、上記の懸賞論文の費用に提供したのである。此の一事にも彼の恬淡な所潔癖な所がよく表はれてゐると思ふ。

彼の講義には多くの學生が集つた。併し、彼は彼一流の學派を造ると言ふことは決してしなかつた。學派を造ると言ふことは、必ずしも學問進步の上に有益であると言ふことは能きぬ。或る學派に屬すると言ふことは、其人に確固たる立場を與へることはあるけれども、同時に、凡庸の人にとつては、獨創と獨立との障害ともなり得るものである。メンガアは左樣な學派を造らうと言ふ野心も持たず、それに適しても居なかつた。彼は彼の全力を擧げ彼の畢生の事業に從事し、殆んど他を顧みるの遑がなかつたのである。

八

メンガアの畢生の事業は、云ふ迄もなく、法學的見地よりする社會民主主義の樹立であつた。

一八七三年以來彼は「社會主義の學者の徑路を進むやうに確乎たる決心」をなした。これは、彼の長兄だちと好箇の對象をなすのである。卽ち一人の兄マクス Max は自助主義の主張者として墺國勞働運動に參加し、なほ自由黨の代議

士として長く議會に重きをなし、他の一人の兄 Karl は、人も知る如く、オーストリヤ經濟學派の樹立者にしてまたその頭目である。メンガアは自分の事業のためにはあらゆる犧牲を辭せず、自分の主張の爲めことあり得べき運命――それは幸にも遂に襲ひ來らなかつた――に就いても、充分な覺悟をしてゐたやうである。一二の例を擧げて見れば、彼は完全なる行動の自由を持ち得ることのために、度々そうした誘惑があつたにも拘らず、遂に自分の家庭を持つことをしなかつたし、また一八七三年には迫害や虐待やの場合に備へるために、『困窮』の場合に千二百グルデンの年金を與れると言ふ定になつて居る、辯護士保險組合に加入した。

メンガアは若い時から民主主義の崇拜家であつた。彼は一八六〇年以降は彼は貴族の稱號を一度も用ひたことがなかつたし、員外教授に任命される際には、辭令から此の稱號を取去つて貰ふやうに、公然と運動したこともある。なほ、彼は夙くより現代の私有財產制度の基礎に就いて批判的態度を採り、社會主義に同感してゐた。此の傾向は既に一八六七――六九年に起草に着手した『民法體系』Zur Systematik dsr Zivilrechts ――之は始め私講師論文として提出する積りであつた――に於て表はれて居る。彼は此の論文に於て、共產的法律制度と私法的法律制度とを、一切の法律秩序の兩極端であるとなし、其の際、社會主義のこともかなり詳しく論及し居る。尤も此の社會主義の論述は極めて不充分なものであつたが。併し、彼は其後彼の生活上の地位を得るために勢力の大部分を傾倒したので、自然此の研究は中絕となり、論文は不完全の儘、梓にも上らずして終つたのである。

正教授の地位を得てからは彼は再び彼年來の宿望に歸り、全勢力を擧げて彼自身の學問的理想に突進することが能きた。正教授任命の翌年（一八七八年）に彼は既に社會主義の積極的論述に着手した。これは其後の研究を竢て四半世紀後に『新國家學』として世に出でた所のものである。同時に、彼は彼の計畫を實現するには參考書が著しく不備であることを見出し、前後四回（一八八三年、一八八五年、一八八六年、一八八七年）パリ、ロンドン、スヰス及ベルリンに大規模の書籍蒐集旅行をやつた。之に關聯した一つの珍談がある、それは彼がベルリンで大變に所謂危險書類を買込んだ

ので、はしなくも同地の警察の注意を惹き――警察は何處の國でもそうした取越し苦勞をするのが好きらしい――此のキーン大學正教授はドイツの帝都在留期間、注意人物として取扱はれてゐたそうである。此等の旅行によつて蒐集された藏書は、非常に貴重なもので、英、佛、獨の社會主義の原資料の豐富なる點に於ては、パリのビブリオテクもブリテイシユ・ミユゼアムも比較にならぬ位で、其後、此の文庫が國際的に有名になつたのはさもあるべきことである。

かくて、彼は社會主義學說の文獻史的起源並に關係を研究するに最も好適の狀態に置かれたのであるが、併し、彼はなほ『新國家學』の完成を怠がなかつた。その前に彼は準備研究として、社會主義學說史の研究に從事し、その結果は『全勞働收益權』Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag in geschichtlicher Darstellung の表題の下に一八八六年に世に出た。此の名前は非常に有名になつたが、著者が初めに考へた名前『現代社會主義根本思想の起源』Über den Ursprung der Sozialen Grundideen unserer Zeit の方がよく、著書の見解を示すやうに思はれる。彼が全勞働收益權の外に、なほ簡單にではあるが、生存權と勞働權のことを論じて居ることを考へると、益々後者の方が妥當であるやうに思はれる。それは兎も角、此の著書によつてメンガアの名聲は祖國とドイツ語の限界を越え、世界的の者となつたのである。

其後二年、ドイツ民法の草案が公表され、學界は勿論一般社會の輿論の對象となつた。我がメンガアもその仲間入りをすることを辭しなかつた。初めの計畫では、彼は單に草案の評論に止める積りであつたが、書いて居る内に、私法秩序全體の批評になつたのだそうである。之は『民法と無產階級』Das bürgerliche Recht und die Besitzlosen Volks=klassen と題して『社會的立法及統計集誌』(一八八九――九〇年)に出で、其後同名の單行本となつて居る。

此の仕事がまだすまない内に、彼はスキス聯邦政府の委囑により、一八八九年の秋、『スキス聯邦法律國家學高等學校設立建議に關する意見書』Gutachten über die Vorschläge zur Errichtung einer eidgenössischen Hochschule für Rechts= und Staatswissenschaft を起草した。

續いて彼は、一八九〇――九一年冬學期に『社會科學演習』Sozialwissenschaftliche Seminar を開き「彼の文庫の

莫大な寶庫から、社會主義の歴史並に文獻に就いて聽講者を教ふる筈であつた」。之は一八八六年以來屢々、殊に最近の著書の發表以來頻りに、同好者によつて繰返された要求に應ずるためであつた。併し、彼は教育行政殊に演習制度を研究した結果「ドイツ大學の教授の自由は、本來何よりも先に創始されなければならぬ所に於て、即ち最も有力ある人人と利益團體との忌憚なき批評をなすに場合に於いて、忽ちなくなつて仕舞ふ」——それが權力者によつて許容されたる一切の自由の本質である——と言ふ彼の古くから見解の正しかつたことを見出し、遂に彼は此の計畫を放棄するに到つた。そこで、彼は『新國家學』の研究を復興するに最も適當な狀態に置かれたのであるが、玆に再び不慮の事件の發生が、之を妨げることになつた。

九

一八九一年の始め。彼は重い肺患に罹り、人も自分も殆んど回復を絶望する迄に到つた。彼は古の賢者の如く、何の恐怖もなく從容として死に面した。彼は既にずつと以前に遺言書を作成し、その內に葬式を非宗教的に取行ふべきこと指定して居たが、今死に瀕した彼は、靜かに口ずから最も印象深く之を繰返した。彼は遂に危機を脫し、急速に回復した。併し、此の病氣の結果、彼の學問的研究の方向は一大變化を受けた。

若い時からメンガアは大の數學好きであつた。未だ辯護士志願中であつた時分、彼に幾分の餘暇が出來た場合、彼が先づ着手したのは數學の研究であつた。彼は夫の『民法體系』に取かかる以前に、既に『マクラウリン級數に適用したる微分法の新原理に就いて』über ein neues Princip der Differentialrechung angewendet auf die Maclaurinschen Reihe を書き上げた。之は彼の最初の大きな學問上の論文であつた。其後、正教授任命の前後に、更に二つの數學上の論文を書いて居る。一八八〇年代に於ては、彼は大分數學と縁遠くなつてゐたが、其後彼の年の老ゆるに從つて昔の興味が復活して來、特に罹病に方つて、彼は一般に社會科學的研究、特に『新國家學』を一時放擲し、「第一次に彼の數學上の發見を纏めやう」と堅く決心した。彼は、數學的研究の方が社會科學的研究よりも高尚なものであり、且つ

彼は數學者として彼の最高の貢献をなし得ると考へたのである。

彼の志した所は、單に「彼の最高の貢献」であるばかりではなく、若しそれが成功しさへすれば、實に數學上の極めて重要なる新發見であつたのである。一八九一年から九二年にかけて、彼は『高等數學の新計算方法』Die neuen-Rechnungsmethoden der höheren Mathematik 以下三ケの論文を發表し、其の中に於て、微分法積分法を補足すべき新計算方法を提唱した。彼に從へば、此の計算法を用ゐれば、今迄解けなかつた幾多の高等學上の問題も立ろに解決がつき、且つ此の方法は單に數學のみにも限らず、自然科學にもよく應用のできるものであつた。彼は此の新發見を重大視し、此等の論文を著明な數學者や各國の圖書館に送附して、できるだけ廣い範圍の人々の注意を促さうとした。併し、勿論それは期待したやうな承認も受けず、注意をさへも拂はれなかつた。彼は、偉い人によくあるやうに、自分の性質や能力の限界に就いて自己欺瞞に陥つてゐたのである。併し、彼は此の失敗に懲りもせず、愈々熱心に彼の研究を續け、一九〇四年には、また一論文を草し――之は『數學及物理學雜誌』に投稿して沒書された――その完成後には、從來凡ての數學者によつて、解釋不能とされてゐた問題、即ち『楕圓積分』を單純な具體的な形に現はさうとの問題を、彼の新積分法を用ゐて解釋しようと試みた。一八九九年頃迄彼は、閑な時があると直ちに此の稍々狂氣じみた計畫に之を捧げてゐたやうである。

病後靜養の十年の間に於ける社會科學上の彼の收穫は、唯だ、一八九三年秋キーンに開かれた『社會政策協會』でなした講演『勞働權』Das Recht auf Arbeit と一八九五年十月の總長就任講演『法律學の社會的使命に就て』Über die sozialen Aufgaben der Rechtswissenschaft とがあるのみである。

十

病氣の回復と共に、彼は自分から教授の職を退いた。彼は學者としてなほ多くの生命を持つてゐた上に、まだ法定の退職年齢にも達して居らず、而も退職は少からざる經濟上の損失を伴ふものであつたにも拘らず、彼は之を敢行したのであ

る。是は彼が一八九年以來絶えず肺患に煩されてゐた爲と、若い時から近視眼であつた彼の視力が非常に衰へ爲とによるが、その最も主な理由は、彼が職業其他一切の煩累から離れた自由の身となつて、彼の社會主義研究の計畫の一部をでも實現したいと考へたことに存するのである。此理由から、一八九四年の總選擧に際し、ヰーン社會民主黨の公認候補として第一區より立候補をするやう慫慂された場合にも、彼は何の躊躇もなく之を謝絶したのである。而も議政壇上の人となると言ふことは、彼の小壯時の理想であり、當選も確實であつたけれども、ゴタゴタや當て違の多い實際政治は最早彼の心を惹かず、彼も亦、年來負ひ來つた研究の重荷の上に更に新しい重荷を加へることを好まなかつた。唯、彼は總長の職だけは、折を待つて之をやつて見ようと思つてゐた。教授の地位以外曾て彼が『幾分乘氣』になつ求めたのは、此の總長の地位のみである。これがために、彼の隱退は多少遲らされて、一八九九年に至つて初めて實現された。

併し、退職後も彼は大學と全然關係を絶つ積りはなく、現に名譽教授として之れと關係を持ち、それも單なる形式上の關係だけではなく――遂に實行し得なかつたが――隔年の夏學期に法理學の講義をする豫定であつた。其他彼は熱心を以て直接間接に大學と利害關係する一切の運動に從事した。その主なるものは非宗教運動と大學普及運動とである。

メンガアは幼時よりカトリク教權に對する反感を持ち、其後もあらゆる機會に於て教育界よりその勢力を驅馳しようと試みた。一九〇一年に墺國の監督はザルツブルグにカトリク大學を設立するために、教書を發して、寄附金を募集しだが此際メンガアは斷乎として此の擧に反對した。其の根本理由は特定宗派大學は根本に於てよくない、蓋し一定の獨斷を誓言して居る教師達は「何者の權威をも恐れざる大膽なる眞理の愛」をい缺て居るから、と言ふにある。更に、彼は斯樣な宗派大學の創立は、そうでなくても團結力の脆弱な墺國に一層の分爭の種を蒔くと言ふ理由をも付け加へた。從つて、彼は、此の僧正の計畫の對抗策として提唱せられた『科學休暇講習會』Verein für wissenschaftliche Ferialkurse には、眞先に贊成した。更に、一九〇四年、キリスト教社會黨の多數を占めて居る低墺地方議會が帝國小學校法附律を議決し、黨派的利益の立場から、學校行政に於ける國家と自治團體との間の勢力の均衡に變更を加へた際、ヰーン大學の

八十四教授が之に對する反對宣言を公表したことがあるが、メンガアの名は勿論その中に加はつてゐた。終りに、彼は同一精神に從つて、教育立法に於けるキリスト教社會黨の企圖に對する反對輿論を喚起するための委員會を造り、且つ『カトリック學校協會』の活動に對抗するための非カトリック團體『自由學校』協會 Freie Schule の設立者の一人となつたのである。

又、メンガアは退職の當時迄、『民衆大學講座』volkstümliche Universitätskurse の指導者であつた。此の講座の計畫は、一八九四―九五年の各學期に私講師ルドオ・ハルトマンが始めて之を提唱したのであるが、主としてメンガアの盡力によつて案外早く實行を見るに到つた。當時法學部の評議員であつた彼は、此の原案を作成し、大學の評議員會に就いて報告をなし、彼の總長時代に此の制度を創設したのである。彼の見る所に從へば、之は「決して氣紛ぐれな企圖ではなく、長い間の歴史的發展の要石」である。之を通して彼は社會の民衆化の進捗と並行して漸次勃興して來た所の要求、即ち從來の專門的門戸閉鎖の態度を一擲して、一般民衆と接觸せんとする」要求を滿足し、且つ民衆の間に知識を普及することにより、單に傳統的の政治的國家的理想のみならず、社會的理想の涵養をも圖らんと努めたのである。なほ、彼は大學隱退後も同樣の運動に關係した。彼が同志と共に、ヰーン『民衆館』Volkshein を設立して、種々な民衆教育施設の間の連絡機關を提供した如きはその一例である。

十一

退職後死に到る迄、メンガアは多くはイタリヤのニザ、アバツィヤ及ローマに送り、夏は主としてアルプスの南腹に過し、春と秋の一部分とをヰーンに暮した。ヰーンに來ると彼は毎日の午后、大學近所の珈琲店を訪づれて其處で新聞雜誌に眼を通したり、打ちくつろいで彼の友人と會談するのを樂んで居た。

併し、此の六年の隱退期間は彼の絶えざるそして最も豐富なる創造の時期であつた。青年時代の彼を動かしてゐた所のもの、三十年の間壯年時代の彼の頭と心とを充たした所のものは、今はその最も圓熟した形を採つて世に出でるやう

になつた。

既に一九〇二年の三月に、彼は永年の計畫であつた『新國家學』Neue Staatslehre を完成した。此の本は出版に際し、それが社會民主主義的未來國家の說述であることのために、出版を引受けた書店との間にイサゴザが起り、從つて少し遲れて一九〇三年の四月に別の書店から出版された。

一年後に、彼は『民衆政策』Volkspolitik を脫稿し、併し此の本は彼の死後遺稿中から出版された、――此の本が終つて數週間たつやたたずに、不撓なる彼は、既に『新道德學』Neue Sittenlehre の著述に着手し、一九〇四年の夏の重病のために妨げられたが、翌年の三月終り迄に之を完成し、一九〇五年八月に之を公刊した。

此等數篇の著作の結びとするために、彼は『認識論』Erkenntnislehre の一篇を草する積りで、一九〇三年の晩秋以來、既に之に着手してゐた。これは彼にとつては四十年前の仕事の連續である。と言ふのは、彼は一八六四年二十三歲の時に、論理學の體系に關する研究を初め、一八六八年にも亦之を繼續した。なほ彼の『民法體系』の研究と密接の關係があり、それは、云はゞ、民法の領域に於ける彼の論理學の適用であつた。今、彼は六十二の老齡に達して、再び彼の當年の事業を始めたのである。併し、不幸にして彼は之を完成するに至らず、盛なる創造的活動の眞唯中にあつて、無情なる死は彼を他界に拉し去つたのである。

十二

彼の死は突然であつた。一九〇六年の二月二日には、未だ彼は彼の『回想錄』Lebenserrinnerungen――彼は一九〇五年の夏にそれを書き始めた――を誌してゐた。四日の後に、彼は彼の宿痾である肺患のために斃れた。彼の死の家に侍してゐた者は、殆んど三十年の間彼の誠實な愛に充ちた伴侶であつた所の、一人の女の友人のみであつた。

「メンガアは死んだ、丁度彼が生きて來たやうに、即ち牢乎たる無宗教者としてまた民主主義及社會主義者として」とグリューンベルヒは誌して居る。彼が生前に於て、その著述を通して彼の思想の宣傳を實行したやうに、彼は墓の彼方に

於ても、遺言を通して彼の思想の宣傳を努めたのである。

一九〇六年二月十四日、ヰーンに於て彼の葬式が取行はれた。それは彼の意志に從つて、僧侶の行列と一切の宗教的儀式を伴はぬものであつた。併し、數千の人々は嚴かに此の偉大なる人の遺骸をその葬場に送つた。

メンガアは彼の貴重な藏書をヰーン大學に遺贈した。それは爾來同大學の國家學部に於て一般の閲讀に供せらて居る。メンガアの生前に於て、それが少からざる社會主義史の研究者に原資料研究の機會を與へて多大の貢獻をなしたやうに、此の文庫は其後社會主義歷史の研究の中心點となつて居るのである。

尚メンガアは、彼が生前自分の所得を蓄積して造つた所のかなり澤山の財産の大部分を提供して、『アントンメンガア文庫』Anton Menger-bibliothek と名くる財團法人を設立した。此の財團の目的は、民衆的傾向を有する前代著作家の獨創的著作を批判的な、嚴密に科學的な新版に翻刻することに存して居る。而して此の文庫を形造るものは、政治學の著作の中からは唯民主主義的のもののみ、經濟學の著作の中からは、唯社會主義的のもののみ、神學の著作の中からは、唯反正統派的のもののみである。

彼の生命が墓の彼方に存續すると言ふことは、彼と共に、多くの人々も亦之を承認しないであらう。併し、彼の如き無私にして高潔な偉大なる人格の遺業と感化とが、永く人類の記憶と生命との中に生きると言ふことを何人が敢て之を否認し得るであらうか。

(附記)本文に於けるメンガア傳記は、凡て Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung Bd. 18 中の Karl Grünberg の論文 Anton Menger, Sein Leben und sein Lebenswerk の前半によつたものである。同論文は Bettelheim-Bibliographische Jahrbuch Bd. XI 中に寄稿した彼の論文 Menger-Nekrolog 若くは一九〇八年二月七日メンガアの二回忌に際して、ヰーンの Soziologische Gesellschaft に於てなした彼の講演を敷衍したものである。その傳記に關する部分はグリューンベルヒ教授の個人的記憶の外、メンガアの際した綿密な自叙傳的斷片に基いて書かれたものであつて、最も信憑するに足るメンガアの傳記である。

國家の進化と愛國的精神

長谷川如是閑

一　日本人と愛國的精神

愛國的精神といへば、哲學的にも、法律的にも、倫理的にも一も二もなく、肯定されるべきものといふ風に教えられ覺え込まされてゐる人々は、この自明の理に向つて、更らに考察する必要が何處にあるかを訝かるであらうが、それほど解つてゐるらしい愛國的精神なるものは、殊にその精神の獨占者であるが如く自信してゐる日本人に於てさへ、實は最近の產物で、一二代前の私達の祖先には、決して自明的に解つてゐた精神でもなければ、忠實に守られた精神でもないのである。

封建時代の武士は、書で見ると、悉く一廉の愛國者でもあつたかのやうな面魂をしてゐるが、その實彼等ほど愛國者でなかつたものはない。彼等は、自己の使へてゐる主君に對しては殆んど無條件の順從と愛着とを捧げてゐたのであるが、國家といふものに對しては、殆んど沒交渉であつたのみならず、國家といふことの普通の理解すら缺いてゐたのである。それは元來、彼等に日本といふ觀念を強く抱かしめる動機も刺戟もなかつたからである。從つて彼等は殊に日本國を愛する必要を感じてゐなかつたのである。いな寧ろ日本國とは如何なるものであるかさへ、明確には意識してゐなかつたのである。啻に日本國と沒交渉であつたのみならず、彼等の多數には、鄉土といふ觀念さへも薄弱だつたのである。彼等のローヤリティーは全く對人的であつた。自己と主君との精神的結合の外には、殆んど彼等を拘束する道德法も自然法もなかつたのである。彼等は遊牧の民のやうに、主君の所住地の變轉又は擴大さるゝまゝに、ローヤリテイー

の領土的對象を變更して、少しの不安も感じなかつたのである。

彼等は、戰爭をし、屯田をし、行政事務を取り、敎化を施す等いろ〳〵の仕事をしてたのであるが、その一つでもが、日本國といふ國家への責任であると考へたこともなければ、考へることも出來なかつた。實際日本といふ纒つた國が彼等の上に臨んで、彼等に奉仕を求めてはゐなかつたのであつて、それを求めてゐたのは、彼等が依賴してゐた主君、彼等の生活を保證してゐた主君其の人であつたのである。無論主君の領土の爲めといふ觀念もなかつたのである。彼等には愛人的精神があつて、愛國的精神は無かつたのである。

それはそれで好かつたのである。人間は、自己の生活に密接した關係を一番强く認識し、一番確かに觀念し、一番それに忠實にする性質のものだからである。當時の武士の遊牧的生活と割據的政治狀態とは、戰國時代は勿論平和時代に入つてからでも、その遊牧的割據的性質に於て變りはなく、全體的日本としての認識は彼等の生活にとつては、不必要であり、非實用的であつたのである。彼等の生活を互に最も密接に結びつけてゐたものは、領土的結帶でなく、對人的のそれであつたのであるから、彼等が愛人心を主たる精神としてゐたのに不思議はないのである。

此のやうな關係が破れて、全日本的觀念が發生したのは、封建的割據の障壁が撤廢された最近の歷史的結果に外ならないのである。それはいふまでもなく、外來の刺戟の爲めに全日本的觀念が彼等の生活の對象として必要となり、實用的となつたからである。

で日本の愛國的精神は、最も新しい亞米利加合衆國の愛國心よりも後輩であつて、英國や佛蘭西のそれに比べたら、遙かに硬度の足りない塊である。その點でやゝ全獨逸の急製の愛國的精神に似てゐるが、然し兩者の間に存する重大の差違は、獨逸のそれには、その統一的愛國心を結びつける對人的關係がない——普魯西王は自分免許だけで、實際その資格はなかつた——これに反しては、日本には皇室といふ、封建的主君よりも一層廣汎な對人關係が歷史的に存在してゐたので、全日本と云ふ觀念は比較的手早く又堅固に成立したのである。

が鬼に角それは新しい精神に違ひない。然るに今の日本の國家の役人達は、自分達が今だに封建的の深閥の爭などをしてゐることを棚に上げて、日本人は、國家といへば、何事でも盲從する數千年間の修養を持つた國民の如く心得を、何でもかでも國家に持つて行つて、國民を納得せしめやうとしてゐる。

假令さういふ盲從が國民の間に成り立つてゐたにせよ、その盲從を利用して、それによつて國民の正當な批判力を鈍らして、國家の非國家的發動や、國家を口實とする個人の反社會的行動を反省する機能を失はしめるといふことは、社會の爲めにも國家そのもの丶爲めにも危險なことゝ云はざるを得ない。況んや日本人の間には、古來から決して今の國家の役人の考へてゐるやうな國家盲從の精神はなかつたのであつて、それに盲從を敎え込んでゐるのは、さういふ役人その人なのである。さうしてそれは或る程度まで役人の思ひ通りに成功したやうな外觀を呈してゐる。

二　愛國的精神と虛僞の規範

今の日本の國民の役人の取つてゐるオルソドックスの見地は、その編纂にかゝる國定敎科書の類を見ると直ちに了解される。それは必らず、判で押したやうに、國家に盡す爲めに學問をしなければならない、國家を富ます爲めに金を儲けなければならない、國家に役立つ爲めに健康にならなければならない、國家の爲めに米を作れ、國家の爲めに芋を掘れといふやうな事が臆面もなく書かれてゐる。

無論それは、子供を相手の書物であるから、云はば裸になると雷に臍を取られるとか、慈善を施せば寶物の葛籠を貰ひ、惡を施せば化け物の葛籠を貰うとかいふ類の話をして聽かせてゐるのだとも解せられるが、それは畢竟或る時期に達すると危險に陷る智識なのであるで。その結果は謂ゆるもの丶所期と正反對になるのである。卽ち雷といふ角の生へた人間の居ないことが、子供に明かになれば、その子供はもう裸を遠慮するに及ばないことを感ずるであらう。寶物の葛籠も化物の葛籠も嘘であることが明かになれば、慈善を施す要もなく、惡事を愼む要もないと感ずるであらう。

國家は無論角の生えた雷や化物の葛籠などと同一視すべきものではないが、然し人間の意識に絶對の價値として映ずると定つてゐるものではない。絶對の價値として映じてゐないものを、生活の最高目的として、或る力を有するものが標示して、それに依據すべきことを命ずれば、そこにもう一種強制と作爲とを以てした虚僞の規範が成立する譯である。その虚僞の規範が成立しなければ、その道德は行はれる筈がないから、國家は無理にも成立させやうとするのである。大小樣々の國内的葛藤は即ち、この虚僞の規範の强制から生ずるのである。

それは國家には限らない。家族に於ても、もし家長權といふものを絶對至高の價値の發動と見て家族の生活を悉く家長權に從屬せしめやうとすれば、必らず作爲的、强制的の目的觀を以て、同家族を束縛しなければならない。さうなると家族は乾度その虚僞に堪えないで、家長對家族の葛藤が生じ、道樂息子を生じ、不良少年を生じ、情死者を出し、全家族が家長の思はくとは正反對の狀態に陷る結果となるのである。

國家至高主義の道德は、三度の飯を喰ふのさへ「國家の爲め」といふ信條に依るといふのであるから、實際腹が減つたので飯を喰ふのだと思つてゐるものは、そんな言葉は立派な虚僞であると感ずるより外はない。同樣に、遊戯を爲し、數學を學び、土を掘り、詩を作り、算盤を取り、電車の切符を切り、電燈會社を立て、……いろ／＼の仕事をしてゐるものも、それが或る至高目的に對する奉仕であるといふ意識の下に爲されてゐるといふ事實は殆んどない。況んやそれは國家といふ至高目的の爲めとは感じてゐないのが事實である。

尤も、他人をして眉を顰めしむるやうな仕事を遣つてゐるもの、乃至遣らうとするものは、大抵「國家の爲め」を標示してゐる。例へば、個人には必要のないほどの巨額の利益を獨占したり、或はさう云ふ利益を不合理の方法（投機など）で獲得してゐるものゝ如きは、大抵「國家の爲め」に富を作るのだと云ふやうなことを標榜する。罪を犯すものゝうちにも往々同じ筆法を採用してゐるがある。軍國的の義賊の類がそれである。で普通眞面目で正業に從事して居るものは、却つて「國家の爲め」なんてことを考へもしなければ、無論そんなことを廣言してはゐない。それは「自分自身の爲めだ」と

いつても別段咎め立てをされる虞れはないからである。「自分の爲め」だと云ふと、聊問題にされ相な仕事をしてゐるものだけが、「國家の爲め」といふ防禦線を張つてゐるのが現在の實狀である。

三　常に批判を脫れなかつた國家

事實に於て、國家といふものは何時の時代に於ても、國家自身が考へるほど、絕對的、目的觀的、乃至道德的にさへ考へられては居なかつたのである。さういふとそれは近代の學問が嚴正な國家批判を行ふに至つたので、一般がさういふ傾向になつたのだといふかも知れないが、必ずしもさうではない。日本人のことは前にいつたが、敢て日本に限らずもつと確かな國家生活を營んでゐた人民の間にさへ、國家は、早くから批判を受けてゐたのである。プラトーの典型的國家なども實際の國家が、至高は愚か、殆んど成つてゐないといふところから、哲學者を王にした空想國家を作り上げたのである。プラトーはそんな國家が出來たならば、それは殆んど至高目的の權威を與へても差支ないやうに感じたのであるが、そのすぐあとでアリストートルは、國家といふものは、そんな高い所に上げるよりも、寧ろ低い人民の間に引き下ろすべきものであることを主張したのである。元來希臘の國家は小都市から成つてゐた家族的の國家で、人民も少なく、土地も狹く、比較的人民の思ひ通りになつたもので、後々に出來た國家のやうに、人民が何と思つても何うにも斯うにもならない、動きのとれないやうなものではなかつたのである。卽ち國家としは最も始末に好い國家だつたのである。それであるから、希臘人ほど國家に好感を持ち得た人民は、その後の國家にはない位なものであるが、それでさへいろ／＼と批判されてゐたのである。その後の國家は皆征服國家で希臘の諸邦のやうな比較的純粹な種族國家ではなかつたのであるから、勢ひ人民達は國家といふものが各人の頭に低氣壓のやうに蔽ひかぶさつてゐるのを感ずることを脫れないのである。而かもその國家が至高至尊の絕對的存在であるといふことを、その國家自身から人民强制することは、愈その低氣壓を重苦しくしたのである。

殊に近く迄で遊牧的な生活を樂しんでゐた支那大陸の人民などには、國家といふ强制的な至高體の出來たことは、寧ろ殃であつたらしい。堯舜の天下といへば、支那人は理想的な、殆んど無政府に近いほど、强壓を感じなかつた良國家と信じたのであるが、その國家を自分に讓り渡されるといふ噂を聞いたゞけで、汚らはしいといつて、耳を洗つたものがあるといふ傳說さへ殘つてゐる。此の傳說は一方では國家を有り難いものと一般が信じてゐる證據なので、その誰も彼れも有り難いと信じてゐるものを、汚らはしいと排斥したところに、傳說の意味があり、後世に傳唱されてゐる所以であるが、然しそれを排斥した道德を、これを尊崇する道德の上に位せしめたところに、嚴正な國家批判が潜んでゐるのである。

東洋でも西洋でも、國家といふものは決して盲滅法に尊崇されたものではなかつたのである。如何にして國家を肯定し、それを價値づけやうかといふことを多くの學者なり政治家なりが殊更ら苦心をしたことでもそこの消息が何はれるのである。しかもその苦心は何時でも成功したとは限らない。前云つたやうにその反對に、その價値を低下せしめた道德や哲學が、寧ろ有力に創造され信仰されて居たのである。

然るに、國家といへば、神といふと同じやうに昔から盲從的に信仰されたものであるかの如く考へて、一切の生活の標的を「國家の爲め」に持つて行けば故障なく通ると思つてゐる我が國定敎科書の如きは、人を愚にするといふよりも、自から愚にした話である。昔から、國家については、前いつたやうに或は沒交渉であつたり、或は侮蔑的の哲學や道德が傳唱されてゐたが、神については、決してそんなことはない。神を否定する哲學も道德も澤山あつたに違ひないが、その否定者といへども、神には相當な敬意を拂つてゐて、決して神と聽いて耳を洗つたといふ類の話は殘つてゐない。それが爲めに國家は、この神を味方に入れて、國家尊崇の値打をつけやうとした歷史が何處の國にも在るのであるが、この野合は、今日では、神の味方と、國家の味方との双方によつて引離されてしまつたのである。が兎に角神は目下の處でも國家よりは尊崇の對象として健在してゐる方なのであるから、もし國定敎科書が、絕對の標的を是非とも

必要とするならば、「神の爲め」といふ方が、實踐的効果を有つかも知れないのである、無論私は受け合はないが。

私は決して愛國的精神といふことを頭から否定するつもりはない。苟も國家生活を營んでゐる以上は、その體制を組織する分子である個人は、何等かの意味で、これに奉仕するのは當然のことで、それは組織的生活に必然の事態なのである。それは會社や銀行の使用人に愛社心を必要とするのと根本の事情に於て同一なのである。

これに對して、會社や銀行と國家とは違う、會社や銀行は何かの事業の爲めの手段としての組織に過ぎないが、國家はそれ自身の目的を有し、且つ其の目的は人間の生活の最終最高の目的であるから、會社や銀行に對する忠誠は、手段に忠實なことであり、國家に對する忠誠は目的に忠實なことであるといふ論があるのである。そこが即ち私の國家に對する社會倫理的立場と、さういふ人々の超國家的立場と異なる所以で、私が本論を草する目的も畢竟その觀念を私の立場から批判しやうとするものに外ならないのである。

愛國的精神が、國家を組織してゐる人々の心理として必然のものであると考へることの誤謬は前段に述べた通りであるが、然らば何故に國民は國家を愛し、國家に對して忠誠でなければならないかといふ問題を生ずる。

この問題は、批判的に考察すると、二段に分けて考へなければならない。第一には、國家に對する服從の問題で、第二は國家に對する積極的奉仕の問題である。所謂愛國心といふものは、國家に對して、この服從と積極的奉仕の兩面に於て充實した心理狀態をいふのである。順序として第一の國家に對する服從の問題から考へて見る。

四　國家に對する服從――立憲式

國家に對する問題を、專門的に取扱ふのは政治學、法理學等、廣い意味の國家學の範圍に屬し、然かもこの問題に對する見地の分かれるところが、國家學上學說の岐かれる所となる位重要な問題なのであるから、それを簡單に片付ける

ことは大體に失するが、兎に角本論に必要な範圍に於て考察することに止める。

國家に服從する理由を說明する學說は、何れもこれも檢討を受けると隙のあるものばかりである。然しいろ〳〵の考を大別して見ると、大體二つに分れる。一は絕對命令に對する無力が服從となつて現はれるとするもの、他の一は承認による服從である。前者はホッブスの恐怖說がこれを代表し、後者はルソーの契約說が代表してゐることになつてゐる。現代の學者は、口を揃へて右の兩學說を廢物と貶してゐるが、然し今日の學說といへども、要するに、右の兩者の何れかが衣を更へるか中味をかへるかして現はれてゐるに過ぎない。新しい立憲主義の多くは後者の側に立つもので、こ更らに新しい社會連帶說の如きは、寧ろ前者に反りつゝあるものである。無論共にホッブスやルソーのやうな單純な非科學的見地からは脫したものではあるが、非服從を事實上不可能とするか、乃至は自主的服從かの何れかの道を步いてゐるのである。

ところで肝要なことは、前說に於て、非服從を事實上不可能とするといふ理由を、昔は國家といふ絕對にして全能の存在物から派生する力に歸したのであるが、今日絕對服從說を採るものは、さういふ個人の上に超然たる人格的の存在の力は（國家にしろ君主にしろ）認めないで、却つてそれを國家を組織する個人の協同的生存の上に求める。社會連帶說が卽ちそれである。それは立憲主義の國家が個人の自由に出立して、個人の承認による國家的權力のみを肯定してゐるのと、その間に一縷の共通點を有つてゐるものである。立憲主義に殘存してゐる舊觀念と云へば、それは國家の權力といふものが、何處か個人を離れた高い所にでもあつて、個人はそれを「承認」するのであるとしてゐるところに在る。この考は根本に於て、國家の權力が、個人を離れて外部から臨んでゐる外物であつたといふ歷史的事實に立脚してゐるので沿革的に强い根據を持つてゐるのである。

實際今日までの國家は、決してそれを構成してゐる多數人民そのもの〻國家ではなかつた。封建時代に於ては、それは大名階級的利害に立脚した國家であり、王朝時代に於ては、それは國王の個人的意志を完成する爲めの機關が、乃至

は朝廷を中心とする貴族等の機關であつた。立憲時代となつたとて、此の現象には變りはなかつた。人民の投票によるとはいひながら、始めは階級的特權者のみが投票權を有したので、明らかに特權者の利害を代表する國家であつた。今日の日本の如き國家は決して多數人民の希望する通りの行動を採らないで、或る一階級の利害を大切に傷けまいとして擁護してゐる。これを傷けることは社會的脅威であると國家はいつてゐる。國家といふ抽象體か、それら國家の代理者以外に、何處かに、本人として嚴存してゐるのかも知れないが、そんなものは姿も見せなければ、聲を出しはしない。畢竟具體的の國家は、その時々の代理人の意志を意志とした集團であつて、それが國家であるといふ外はない。果してさうだとすると、全人民の昌榮を目的とする國家といふのは、影のやうな、煙のやうな國家で、形のある國家は、如何なる時代に於ても國家の實權を把つてゐる階級の昌榮を目的としたのであつたといふのが歴史的の事實である。で立憲主義は、かういふ風に國家の意志を放恣ならしめることをば、人民自からの參加によつて制限しやうとしたのであるが、今も云ふ通り、さうすると今度はその參加した人民だけの意志が國家意志といふことになつて、國家といふものは、依然として、全人民の外に超然と構へ込んだものになつてしまうのである。で立憲主義は今一層徹底的に貫徹せしめるか、又は別の方法に讓るかしなければ存在理由を疑はれるといふことになつてゐる。米國に於けるイニシアティーブ、レフアレンダム、リコールといふ三位一體式の徹底的立憲主義が唱へられ出したのもその爲めである。

五　連帶觀念に基く服從

別の方法といふのは、即ち立憲主義でないことであるから、大體に於て前述の二方式以外に名案がないとすれば、今一の絶對服從式に歸ることとであるが、これは即ち先きに云つた社會連帶的觀念による服從觀を採ることである。がこの連帶觀念は、在來の國家の根柢に向つて大斧鉞を加へるものである事を知らなければならない。それは本來社會法に絶對權威を認めるもので、在來の國家的人格やその人格的發動たる國家主權といふやうなものを認めない。それは在來の

國家に必須の條件である領土的權力などは國家に必至的のものとはしないで、社會構成の要素を爲す社會的各集團の自主的權力を認めるのである。この考によると國家といふのはたゞ政府と人民との集りで、之を綜合してその上に抽象的人格の國家などいふものはない。さうして政府と人民とは何れが從屬の關係にあるかといへば、寧ろ人民が主で政府は義務のみを負ふてゐる從屬者である。それは一切今までの國家價値を顚倒した考へ方である。この立脚地に立つた日には人民に愛國的精神などといふものは必要なく、政府の方に愛人民的精神が必須であるのみである。

六　立憲國家の本質的の無力と連帶主義

かういふ考へが、今日の國家には未だ事實の上で通用しないとすれば、(それは色々の意味で今日の國家意識の根柢に喰ひ込んでゐるが) 今の國家生活の現實に於ては立憲主義を採るものと見なければならない。然し立憲主義を採るとすれば、何うしてもその本國たる英國に於て、立憲主義の發達當時に行はれた思想から全然離脫することは困難である。その理想といふのは、國家をして出來るだけ餘計な干涉を行はしめまいとすることである。もしそれを行ふ時には嚴重な人民の承認を必要とするといふ觀念である。無論この放任主義が、經濟上の自由競爭と結びついて、現代の社會的不公正を發揮せしめたといふので、今日の政治學者なり實際政治家なりは放任主義を時代遲れとして斥けてゐるが、然し放任主義はいけないと云つて見た所で實際、代表制度の下では國家はさう思ふやうなことを積極的にドシ／＼實行出來るものではない。國家の成立は何時でも利害相反した分子から成り立つてゐるのであるから、それの承認を必要とするとなつたら、決して官僚國家が思ふまゝにやるやうな政策の自由發展は六かしいのである。代表制度によるそのことが、國家をして出來るだけ餘計なことを爲せまいといふ方法なのである。

然るに社會の現狀は、國家をして積極的にいろ／＼の政策を實行せしめる必要を感じて來た。此の必要が生じても、投票制の立憲國では、甚だ圓滑迅速には進行しない。同じ立憲國でも戰前の獨逸のやうに、官僚專制の多少とも行はれ

てゐた國に於ては、純立憲國の英國よりも、さういふ積極的政策が機敏に行はれたので、社會政策では英國は常に獨逸に一籌を輸して居つたのである。

元來今日要求されてゐる社會的立法は、一方では、現社會組織の安全を期する爲めの自己改造であるけれども、他方から云へば、それは社會的法則の强行であつて、今日までの國家精神からは、自家撞着的のものである。言ひ換へれば、舊國家の自壞作用である。原氏の認めてゐる通り階級の存在を要件としてゐる現國家に對して、社會政策なるものは、その階級的利害の削減、平均、破壞に僅かづつなりと步を進めて行くものである。それを極端まで推つて行けば、社會連帶の國家にまで行ける自然的可能性を有つたものなのである。今の國家が社會的立法を行ふのは、武士が自から長刀や大小を鍬や鎌に打ち直ほさせてゐるのと同じで、自分の武器を自分で打ち壞はしてゐることなのである。

右の如く承認による服從の見地を採つても、その服從たるや、個人に反映しない國家生活の否定を如何ともすることの出來ないものである。今日の觀念に於ては、國家生活は、個人の生活の福利の爲めにのみ存在するものであつて、その點を具體的に云へば、畢竟社會連帶の觀念を具體的にしたものと同一歸向を見るのである。であるから必ずしも、社會連帶說を採らないものでも主權の絕對性は勿論、その單一性をも否定して、もつと自由な國家の建設を主張することを得るのである。

七　現代國家に對する服從の意味

國家に對する思想の進化がかういふ風に走つてゐるとすると、愛國的精神の最初の要件であるところの國家に對する柔順なる服從といふことも、絕對にして神秘的なる國家──個人の頭上に太陽の如くに高く輝いてゐる特別の存在──に對する絕對的歸依といふ意味には解することは出來ない。國家は要するに個人の集團的生活に必要なる機關に過ぎないのであつて。それ自體目的である意志の具體化であるといふやうな解釋は事實が破壞してしまつてゐるのである。神

に對する信仰は、迷信の形に於ても良心の世界に於て今も有力でないとは云へないが、國家に對する信仰は、神に對するやうな意味では全く絶無になつた。但これあるが如き場合は、丁度商賣的の僧侶が神佛に對する場合のやうに、その信仰を利用して自己の階級の利益を計ることなのである。

國家が神秘的存在としてでなく、制度としての存在として認められるやうになつた今日に於ては、それは人民の眞善な生活を保障し得なくとも、責めてはそれを妨げるものではないといふことだけも承認を受けなければ國家自體の肯定が拒まれるのである。故に國家の道德は、今日に於ては如何に人民を國家に忠誠ならしめるかといふも問題よりも、如何に國家を人民に忠實ならしむるべきかといふ問題の方が、國家にとつて大切なのである。

この道德は、なほ昔の國家道德としては、曖昧ながらも存立してゐたものなのである。それは國家形成の初期に於ては、征服國家の順序を持つた國に於ても、なほ種族的連帶精神が旺盛であつて、英雄の個人的意識よりも、一般にこの連帶的精神が働いた爲めではないかと思はれる。それが愈征服者の國家が成立し發展するに及んで、個人又は階級の意識が旺盛になり、連帶精神に打ち勝つた結果、今日の國家的精神——個人を犧牲としてのみ解釋する國家精神——が完成された譯なのである。國家有機體説の如きは、その精神に科學の衣を着せたものなのである。この精神から進化し來つた今日までの思想によれば、國家に對する服從は、相對的であり、相互的であり、承認的であり、これを要するに立憲的服從とも稱すべき條件附のそれである。今日の國家が外人の歸化を許し自國民の他國に對する歸化を許してゐるのも、國家が不承々々に此の事實を認めた證據なのである。

八　國家に對する積極的奉仕

次ぎに、愛國的精神の現はれである國家に對する積極的奉仕について簡單に考察して見やうと思ふ。これは今まで說き來つた國家に對する服從の積極的の現はれなのであるから、服從に關する考察は、此の場合にも延長される譯である

國家はそれを通して個人が生活目的を達するいろ〳〵の機關の一つである、當然目的に對する手段として、それに對する奉仕が理由づけられるものなのである。

國家それ自體を目的としないといふことになると奉仕の觀念に於て、國家を目的論的に見る人々の考とは大分違つた結果を生ずる。即ち始めに云つたやうに、學問をするのも、金を儲けるのも、米を作るのも國家の爲めといふやうに、私達の日常の行爲や、自分の生活目的を實現せしめるすべての行動やを總べて國家の爲めといふやうに解することは出來なくなる。國家は生活の最終にして全一の目的ではなく、それ自體一定の目的を持つたものであるから、その特別の國家自身の目的の爲めに奉仕するものでなければ國家的奉仕とはいはれないのである。即ち國家が國家として働く時にその代理者となつたり、國家の事業の實行に參加したり、その他國家が特別の目的で何事をか實行しやうとする時には悉く個人に依らなければ出來ないのであるから、さういふ仕事を擔任することが國家への積極的奉仕となるのである。

學問をしたり、金を儲けたりすることを國定倫理書は、國家への奉仕であるが如く說いてゐるが、これは明らな事實無視である。學問はそれが國家といふ機關にそのまゝ役立つか、又は特定の國家などには役立たないで世界に役立つかそんな結果を顧慮すべきものでは無いのである。金儲けも、成るほど國家が戰爭を起したり事業を起したりする時、租税を必要とし、公債を必要とするので、國民に金を儲けさせて置く必要もあるのであるが、個人が金儲けをするのは、決して租税や公債の爲めではないのである。又大工が家を建て、百姓が米を作り、樂人が唱ひ、畫家が畫を描くのも、それ〳〵各自の創造的衝動を滿足せしめるか、又はもつと單純な生活の意義を充さうとするのであつて、その家や米や歌や畫を國家に役立たしめやうと考へることも、希望することもないのである。

人間のさういふいろ〳〵の生活の衝動は、全く國家とは沒交涉に發動するのであつて、人類の社會は、國家といふ制度以外のいろ〳〵の體制の下で、それ〳〵自由の發展を遂げてゐるのである。家族でも、寺院でも、學校でも、いろ〳〵の職業の組合でも、それ〳〵自己の目的と職能を以て、全社會機關の進轉を助成せしめてゐるのである。國家は多

くの場合に於て、さういふ諸系統の組織の安全を保障してゐるが、又多くの場合に於ては、その諸組織の發展を随分阻害してもゐるのである。卽ち個人の自由なる發展の保障であるべき國家は必ずしもさういふ理想的の役目ばかりは勤めてゐないのである。それは當り前の話である。前云つた通り、國家といふものは、プラートの空想から產れだ理想の組織ではなく、歷史上の事實から產れた尨雜にして、必ずしも道德的とは限らない目的を持つた組織なのだからである。

九　社會的道德と國家的奉仕の不一致

その譯で社會に對する奉仕は必ずしも國家に對する奉仕とは一致しないといふ結果を生ずる。卽ち社會道德と國家道德との背馳である。それは丁度家長に對する服從と君主に對する服從とか兩立しなかつた場合に、忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならずといふ破目に陷るのと似た關係なのである。此の不一致の場合に、社會に從ふべきか、國家に從ふべきかは、矢張前の國家の本質に對する解釋の異なるに從つて異ならなければならない。

國家至上主義の見地に從へば、それはもう疑問のないことで、假令反社會行動を採るとも、國家に對する奉仕を貫徹せしめなければならない。これに反して、國家も亦社會の他機關と同じく吾人の生活の手段に過ぎないとすると、反社社會的行動を、國家的行動の名によつて道德化するといふことは許されない。故に或る行動の可否について、國家と反對の見地をとるものは、自己の良心に從つて、國家的奉仕を拒絕することを得なければならない。日本の國家などは、まださういふ道理を承認してゐないやうであるが、外國には往々それを認めてゐるものがある。一國が戰爭をしやうとする場合に、それを國家の代表者の投票で決する國に於て若し過半數が戰爭を贊成したとしても、殘りの半數以下の人人は、その戰爭に出征すべき命令を拒むことが出來ないといふことになる。これは良心ある少數にとつては堪え難い苦痛である。そこで眞に良心よりして戰爭に反對せざるを得ざるものを、軍事より免除することを國家が承認する。かう云奉仕の解除は、舊式の國家觀念に於ては全く理解し得べからざるものである。日本の如きは戰爭は法律上は、君主の

獨逸に任せられてゐるが、事實に於ては、時の政府の判斷に委任されてゐるので、國民は全く一部少數國民の命令によつて戰爭を開始しなければならないことになつてゐる。さうしてその强制的奉仕からは、自己の無能力による外は、何うしても脱れることは出來ない。かういふ强制を肯定するには、何うしても國家至上の觀念を借りて來なければ不可能なのである。

實際今の國家に於ては、何方かといへば、總般的力の發動としての國家主權によつて、國家の爲めの奉仕を强制し、之を肯定してゐるのである。その結果は、往々子供に質問された時に大人が答辯に困むやうな矛盾な解釋を國家奉仕に對して取つてゐるのである。學生等は、一方に於て獨逸の暴戾について說き聽かされながら、他方に於て、その暴戾なる國家の意志を遂行した同國の將士の勇敢について語られてゐる。それは石川五右衞門の惡事を說くと同時に、その義理と情愛とを說く講談の類と一つだといへばそれまでゞあるが、講談師と雖も、惡事の遂行を道德化しては語つてゐないのである。國家の場合には、國家の爲めの惡事の遂行は大抵道德化されてゐる。

國家の代理者は、現在の國家生活が、道德的に嚴正ならざる狀態にあることを理由として、社會的若くは個人的に不道德である行爲を、國家の爲めには道德化してゐる。最も不道德であることを、最も能く道德化する術を心得てゐることをステーツマンシップと稱するのである。獨逸が國家の名で肯定したといつて各邦から咎められてゐる諸罪惡——海賊、條約破棄、裏切、背德、中立侵犯、敵國の人民及財產等對する殘虐等——は大抵な國の政治家又は軍人等が、國家の名に於て肯定することを憚らないことなので、又實際憚らずにそれを實行してゐることなのである。

十　國家的奉仕と道德的判斷

國內の政治は勿論、外交や軍事行動も大分改善されたと云ひ條、今の國家は根本に於て、從前の國家からさう改悛はしてゐないのである。それは實質に於て、征服的であることからは、未だ全く離れてゐないのであるからなのである。

かういふ國家を愛することは、動もすれば反社會的行動の肯定となるのであるが、それも國家全能時代ならば敢て差支ないのである。然るに今日は、國家が昔の全能者たる態度――少くとも心持――を改めないにも拘らず、社會的に國家は、その全能を失ひつゝあるので、國家意志の反社會的發動を、餘りに無批判に受け入れたり、その意志の實行者になつたりすることは、畢竟國家自體の存在を危くすることになるのである。眞の國家的奉仕は寧ろ人間的良能に從つて、その國家意志と稱されてゐるものを批判して、然る後にその批判に從つて行動するにある。

少しく極端の例ではあるが、英國人が愛蘭問題に對して何ういふ態度を採つて好いかといふ問題は他國民の研究に値する一例である。現英國は愛蘭の獨立は絕對に承認しないといつてゐるのであるから、英國人にして愛蘭獨立を肯定するものは非愛國的であると云はれるに違ひない。然し局外者として愛蘭問題を研究してゐるもの丶內には、何等英國の國家に對する恩怨なしに、全くの研究的態度から、愛蘭の獨立を可とする意見に到達したものがないとも限らず、また事實あるのである。然れば若し英國人にして、此等の局外者と同じ研究的態度によつて同じ結論に到達したらば何うであるか。それは矢張り非愛國的であるだらうか。英國人である以上は、外國人と同じ研究的態度を採るといふことが非愛國的であると云はれるであらうか。それならば若し英國の皇室は英國人の多數が、右と同じ研究的態度を採つた結果同じ結論に到達して、愛蘭の獨立を承認することを可なりとするに至つたらば何うであるか。英國の皇室及び多數の英國人は、非愛國者となるのであらうか。

人間の認識や判斷は、要するに自己の性向、氣質、境遇等いろ〳〵の事情によつて決定するものであるから、英國人である以上は、自ら自國の一部を喪失する愛蘭の獨立を肯定するやうな心理になることは困難であらうが、それは、彼れの認識や判斷がより正確であるといふことではない。苟もその點よりいへば、暫らく英國人たる偏見から立ち離れて認識し判斷した結果の方が正確でなければならぬ。果して然らば、一二の英國人が、多數の英國人の認識や判斷から離れて愛蘭獨立に同情したことは、英國の皇室及び多數の英人がさうした場合と同じく、寧ろ賞贊すべきことなのでは

なからうか。(尤もこれは抽象的にいふので愛蘭を獨立せしめた方が英國の爲めに實際に善いか惡いか、それは別の問題なのである。)

今日の國家が、まだそこまで寛大の道德を有つて居らず、從つて國家奉仕が個人的乃至社會的道德に反する場合にもその奉仕を個人に要求するのであるが、愛國的精神とはその奉仕の性質を批判して、自己の良能に從つて處置することであるとし、國家がそれを許すといふことになれば、國家は社會的に道德化されたことになるのである。

尤も國家生活に限らず苟も協同の生活に於ては自己の批判や意向を或る程度まで犧牲にする必要に迫られることは當然であつて、各自の批判や意向を絕對に固執することは協同の精神に反する。然し今の問題はそこに在るのではなく、「國家の爲め」といふ呪言によつて、あらゆる不道德が潔められるといふ愛國主義の不合理をいふのである。

十一　結論

最近までの國家道德――今日も尙ほ多分の程度に於て同樣である――が極端に個人道德や社會道德に反したものを肯定した原則の上に立つてゐたことは、國際狀態をかくの如く劣惡にした重な原因だつたのである。然るに個人的若くは社會的批判が國家道德に加はるゝ力の強くなるに從つて、此の關係は改善され、やゝ國際狀態の改善される曙光を國際聯盟に於て認めたのであつたが、それすら舊心理の復活によつて實質を夥しく低下せしめられてしまつた。それでも形式と辭令だけでも、國家道德を個人的乃至社會的道德に合致せしめんとしたのは進步といへば進步に相違ないのである。

國內的には、多數民衆の覺醒に伴つて、社會狀態の認識が一層現實的となり、國家と社會との距離は次第に近接して來て、國家はこの社會的意識を無視して、昔のやうな國家それ自身の超越的の意志を遂行せしめると稱して、その實少數又は階級の自我のみを發展せしめることが困難になつた。民衆的傾向は次第に急進的となり、理論の上では、實際の

國家より遙か進んだ合理的な國家の建設が唱へられ、その理論は國家の無意識の受け入れによつて、政策の裏や立法の一隅に片鱗を現はすまでに立ち到つた。舊國家の有機的改造はこの間に行はれつゝあるのである。けれども、それは樂觀するには餘りに廻りくどい進轉である。組織の進化を促進するより有力な、より具體的な然かも合法的な運動は切に要求されてゐる。かゝる時代に於ける愛國的精神とは、私がこゝに粗略に記述した意義に於ける服從と奉仕とでなければならない。それは一言にしていへば、盲從的の服從と奉仕ではなく、批判的の服從と奉仕とでなければならない。

さうして人民をしてこの批判を正確に握かませることは、時に或る國家の有つ目的を妨げ、その國家的行動を鈍らせることになるが、さういふ國家的自制が、國家そのものゝ道德であり、社會道德に對する國家の順應なのである。從つて國家は人民をして國家自體の偏見に盲目的に服從せしむる策を取るよりも、自由に獨立の批判を國家に加へることの出來るやうな人民を有つことが、自家の安全の爲めに必要なことなのである。合理的の批判によつて國家組織の進化を促すことは、不合理な理想によつて國家組織を硬化せしめよりも、遙か愛國的なのである。

社會思想と輿論の及ぼす組合心理

賀川豐彦

社會思想と輿論の組合心理に及ぼす影響

民主思想と組合心理　相互扶助の發達と、都市生活の發展、團體生活の訓練（敎會軍隊學校市場等）を機械工業の發達の爲めに工場なるものが現れて、今迄に見無い民主思想の勃興となつて、近代史に飾られて居る。

近世に於ける民主主義は勿論その背景にマルクスの唯物史觀的經濟史の保證があることは拒むことは出來ない、然し人類全體に於て成長して來たことも事實である。そして發明と發見の力は必しも宗敎的、神秘的なものでは無くして、それは經驗的、歸納的に與へられるものであると知り、此處に新しく社會思想の變動が起り、たゞ一人によらず、民主民本的な思想が樹立せられることとなつたのである。

でもし、民主思想なるものが發達して居ら無ければ、勞働組合の運動が眞に可能であるかは問題である。中世紀の如きギルドは完全に出來て居たが、それは敎會に隷屬したものであつて、今日の所謂勞働運動とは全く異つたものである。今日には凡ての人が非常に自由である。

佛蘭西革命は所謂勞働者の革命では無かつた。寧ろ中產階級の革命であつた。然中產階級のデモクラシーを經ずして、民主主義が先づ確立し無くて、經濟的デモクラシーが直に來るとすれば、それは餘程社會組織の急激に進化する國であらねばならぬ。

勞働組合は進化の歷史を以つて發達するものである。それは勞働者の成長史である。それで、勞働者の內的自覺を待つて初めてなし得るものであつて、外部にひつつけても何の役にも立たぬ專制的のものとなり了るのである。

夫で過去に於ても勞働組合は最も產業革命の早く來た、民主思想の最も確立した國に著しく早く發達したのである。即ち英

國米國に勞働組合が最も早く發達し、獨逸では勞働組合が發達せずして、社會主義が先づ發達した。佛國に於ては、昔からのギルドが或形を持つて殘つて居てそれが近世的の形を取るようになつたのである。

それで、勞働組合の心理は一種の經濟運動としての心理的影響を受けるのみならず、常に民主思想の指導を受けるものである。ユートピアの時代には、ユートピア思想を受け、マルクスの時代にはマルクスの感化を受け、サンヂカリズムの思想の時代にはその感化を受け、ギルド・ソシアリズム、アナアキズムそれから、それへと感化を受けるものである。殊に政治的に各種の主義主張が現れてくるとそれに感化され易いものである。

英國に於ては今ヨまで勞働組合は思想に於て四時期を劃して進んで來て居る。卽ち、個人主義時代、社會主義時代、サンヂカリズム時代、ギルドソシアリズム時代の四時期である。組合は同一であつても、その時代時代に於て之を導く指導者が或思想によつて導かれ、組合員もそれを甘受する所に面白味があるのである。それで常に組合は白紙である。然し思想の侵入を拒絶することは出來ない。卽ち英國に於ては次の如く組合の思想が變化して行つて居る。

第一期　個人主義思想時代(一八六七―七六年)

英國の勞働組合の第一の指導的思想は、コントの實際哲學主義者の一團卽ちフレデリツク・ハリソンや、トマス・ヒユース又基督敎社會主義に依つて導かれたが、一八八〇年の頃この人々の勢力が衰へ出した、と云ふのは彼等が個人主義であつたからである。この時代にはアレキサンダー・マクドナルドが鑛山坑夫を指導してゐた。そして主義に於ては、御都合主義的で、組合運動は實に注意して進んだものである。

第二期　社會主義時代―一八八九―一九一一年

一八八九年から社會主義の全盛時代で、フアビアン社會主義とアイ・エル・ピー卽ち獨立勞働黨が指導してゐた。之は一九一一年の勞働不安の時代まで續いた。

第三期　サンヂカリズム時代

其の後一九一一年及び一九一二年に佛國のサンヂカリズムが侵入して來た。そしてトム・マンによつて指導せられてゐる米國のI・W・Wの思想も米國を襲ふたので、サンヂカリズムは、一時流行の形で有つた。然しその後この波はすぐ去つて了つた。そして現今の二流派となつた。

第四期　マルキシズムとギルド・ソシアリズム

今日の二大思想はマルクス的産業組合主義と、ナショナル・ギルドと稱する、ギルド・ソシアリズムの二派である。之はサンヂカリズムが去つた後に起つたものであるが、マルクス學派は共産的であるが、ギルド・ソシアリズムは、生産者と消費者とを二大區分して今日の政府はそのまゝにして置き、今日の衆議院を上院とし、勞働者を全部下院にをて代表せしめやうと云ふ考へで活動してゐるのである。

茲に注意せねばならぬことは英國の勞働組合の思想に於ても又佛國の勞働組合の思想にしても最近一つの新しい事實が現れて來たことである。

直接行動即思想の觀念　即ち彼等の間には、組合思想は白紙であるけれども、行動が即ち思想であると云ふことを唱へて來たのである。この考は(1)唯物史觀が凡ての文化が生産形式の上に載せられて居ると敎へる間は、どんな贅澤な思想が出て來ても結局は資本主義であるから、そんな思想にかまつて居れないと相手にしないのが白紙主義の起る所であるが、(2)然し、人間的に互に團結して物質的商品主義を拒否することとそのことが既に一種の思想運動で有つて新しき社會は、その人間的團結のものの上に築かれるものであると考へるので、思想は言葉の上に現はされずして、直に行動その者の上に現はれるのである。

今迄のものは思想と云ふものは言葉の上にのみあると考へられて居たが、即身定佛主義とも云ふ可き新らしき體驗の思想は、唯物的資本主義所産の思想を拒否して、肉體そのものの勞働の上に凡ての思想を置かんとする爲めに勞働即思想となり、組合即思想、ストライキ即思想となり、表象としての思想を、思想としての行動で現さんとするのである。

それで、勞働組合は勞働組合運動その者の外に別に思想を持つ必要が無くなつたのである。それで新しき思想は寧ろ、實在を基礎とし、實在を出發點とする如く、新しき社會思想は、社會運動その者を基礎としてそれから出發するとになつた。(二枚缺)

即ちサンヂカリズムのソレル哲學にしても、ギルド・ソシアリズムにしても、勞働組合を基礎にして新しい社會哲學を組立て居るのである。之が實に面白いのであつて、……

………………………………

………………………………調度物理學の實際問題が數學の方程式に導き、病理學から細胞學が産れたように、今日では勞働組合が社會思想そのものを導くようになつたのである。それを猶押しづめてゆけば、これからは勞働組合の心理

そのものが社會思想そのものを産むと云ふことになり、或は組合心理そのものが社會思想そのものであると云ふ時代が來ることと思ふのである。即ち勞働運動の思想は之からは充分人間的となり體驗となるわけである。

政治思想と組合心理　こんな心理で米國勞働總同盟の如きは政治的結社には這入らぬとまで言明して居るのであるが、それは米國に於ては勞働組合が二回の苦き經驗を持つて居るからである。第一回は一八三四年に勞働黨は議會に議員を出したが、その主張であつた「十時間勞働」の如きものを民主黨も、共和黨も共に賛成した爲めに勞働黨の實在の意義が無くなつて、組合が分裂し潰滅したばかりで何の效も無かつたためである。第二の場合はそれから約四十年後即ち一八七二年に一八六五年に出來た全國勞働同盟が農夫組合と團結して大統領候補者を指名して、同盟を破滅させたことがあるのである。この苦き經驗から米國では勞働組合は政治問題と相離れて行きたいと云ふ立場を取つて居るのである。

佛國のサンヂカリズムの人々も之とも少し違つた意味ではあるけれどもその時その時で變つて行く政治思想や政治問題に關係することを排斥して、生の根柢に横はる經濟組織其者を改革せねばならぬと考へて居るが、從て獨逸の社會主義者が取つて居る議會政策の如きを佛國の勞働組合では反對して居るのである即ち政治的に行くか、經濟的にのみ止るかと云ふことも一種の社會思想の現れであつて、どうせ本質に於てはこの二つを分離することは出來ないものであるけれども、勞働組合が、生活の安定すら得無い中に政治運動に走るならば必ずや、その組合は顚覆するものである。それで最も徹底的なやりかたは今日の資本主義に勝つまで、勞働組合は、資本主義政治には手を延さ無いことである。手を延ばせば、延ばす程墮落する一方である。然し廣く云へば、勞働組合の存在そのものが既に資本主義政治の管轄區內にあるのであるから或特別な問題だけ、即ちその組合の實在と運動を妨害する者にはどうしても反對せねばならぬのである。この意味に於ては一種の政治運動は免れ難いものである。

勞働組合と社會主義との關係が同樣である。組合員が社會主義者であることには少しも差支へは無からうが、組合全體として一つの主義綱領に縛られてその時その時に移る社會思想と共に分裂し無ければならぬものであれば、經濟組合としての勞働組合はすぐに分裂せねばならぬ。それで勞働組合は社會思想に對してはいつでも受身である。

經濟思想と勞働組合　けれども、經濟思想の理解が社會に傳播すると共に、勞働組合の運動は容易になるのである。又不景氣が來て失業問題が現れてくると、勞働組合運動は一層容易になるのである。之は經濟思想が傳播するからである。同樣に八時間勞働問題等に關しても同樣である。

一度川崎のサボタージが大正八年九月八時間勞働の要求で擧をあげると、日本全國の百以上の工場が一週間たゝぬ中に、それを採用したなどは全く經濟思想に對する理解が廣く傳播して來たからである。

然し或はストライキに關し、或は工場締付(クローズドショップ)に關して色々な思想が社會に有つて、まだストライキを以つて勞働者の正當なる行動であるとは認め無いで、それはたゞ社會の脅威だとのみとるものが多いのである。

勿論今日の資本主義の社會から云へば、資本家が甘い汁を吸へ無い點から云へば、ストライキは一つの社會脅威であるに相違ない。然し勞働者はその全酬權を主張する爲めにはどうしてもストライキによるより外に方法は無いのである。然し今日の輿論なるものも危ない輿論であつて、自己の都合の善い時には勞働者に贊成するが、今日の輿論はそれが新聞紙の輿論であり、資本主義に飼れた輿論である爲めに少しも資本主義より進んだ輿論は出さ無い。今日の輿論は全くの溫情主義である——勿論口では溫情主義には反對して居るが、彼等は或處まで行けば此勞働者を捨てゝ了ふのである。之は最近の東京電車ストライキの場合を見ても、昨年八月の新聞ストライキを見てもよくわかるとである。十六新聞社はその前日まで勞働運動に贊成して居たが、その當日になると全く之に反對するのである。

それで、公共機關に關係して居る勞働團體のストライキの如きは勿論よく愼んでやらねばならぬ者であるけれども、もしも輿論がいつでも勞働者を維持してくれると思へば眞違である。

工場締付に關しても同樣である、その最も問題になる所はいつでも公共事業に關係した場合の締付である。一九〇三年五月十三日米國の印刷局に於て勞働組合が一人の勞働者が組合に這入つて居らぬと云ふので政府の工場で勞働せしめ無かつたのである。之が政府及社會の大問題となつて、遂に勞働組合と大統領の爭ひとなり、大統領は政府が組合員ならざるものをも雇ひ得ると主張して勝利を得たとであつたが(Stockton: Closed Shop in A.T.U.P.47)輿論は或程度の所にまで連れて行つてくれるが最後の處へ行けば捨てゝ了ふのである。それで、今日最も問題の

多く起るのは、政府の關係して居る公共事業と一般私的公共事業の問題であるが、勞働者はいつでも不利な立場に置かれて、資本家はいつでも獨占的の立場に居る。之に打勝つためには、勞働組合はどうしても徹底的に思想を確立する必要があるのである

社會敎育と組合心理　社會敎育と云ふのは二重の働きをするものである。一つは勞働者自身の自發的勞働運動の自覺となり、他方に於て勞働者ならざる外部的なものが、勞働に對する了解をするやうになるのである。それで英國にかける勞働大學の英國の勞働運動に盡した任務は實に大きなものであるが、一般に義務敎育が進み凡ての人々が新聞を讀む爲めに起つた社會的進歩はどれだけ大きいものであるか知れない。

日本で東京や神戸の勞働者の頭の進んで居るのは全く社會敎育の賜である。神戸では補修敎育の結果、勞働者が自覺して來たのと東京では色々な講演會などに出席して、勞働者自らが敎育して來たことである。然し一體に古い市では勞働運動が困難であるのは、社會敎育が何の役にもたゝないからである。

近世の民主思想を一層力づけたものは、一般に進んだ義務敎育であるが、社會が更に進んで高等普通敎育を凡ての人——勞働者も含んで——が受けるやうになれば必ずや勞働組合の運動も一層進歩することであらうと私は思ふのである。

勞働組合の人格

勞働組合員としての個人の人格

職業　勞働者個人の心理に就ては、私は比較的詳しく、私の論文『勞働者の心理』(『人間苦と人間建築』三五一——三八一)で論じておいたが私は此處では主として、組合員としての勞働者個人の人格を研究したいと思ふのである。

職業によつて人格の違ふのに色々な理由がある。下等な不熟練勞働には人格の惡い技術の無い人間が多く集り勝ちであるのが一つと、その職業が元來惡い人間によつて、經營せられ操られて居たものが、段々來る人々に傳染して墮落さすことになつて、その社會的遺傳が傳つて行くのである。

それで同じ鐵工業の中でも製罐の如きは惡い人間の集る所とされて居るし、仕上工の如きは比較的上等の人間が集るところとされて居る。鑛山には惡い人間が集ると云ふ傾向があり、土木、建築手傳には頗る惡人があるのである。また沖人足には喧嘩と賭博が專門で人足が副業だと云ふ人間もある位である。

造船工などでも、取付の人々は、コンプレスド・エヤーの空氣槌を持つてやるものは自然氣が荒くなつて居るのみならず、火になつて居る鋲を持ち運ぶものであるからつい〳〵その火になつた鋲で敵を擲りつけることなどがある。

要するにその職業上の器具器械に感化せられて性格を造るところに職業から來る感化があるのである。絹糸工場の女工は幾萬よつてもまだ蠶の繭のよふなものであつて、それこそストライキの一つだつてようし無い程溫順である。信州上諏訪生糸區域の警察署長が云ふて居た、彼等の間には犯罪も非常に少ないと。紡績女工の間にはさまれて居る男工がそうである。印刷會社でも植字の方は柔和で歐字活版はハイカラで機械場は荒いと云ふ傾向がある。一般に智識の入る技術工は紳士的勞働組合を作つても、立派に造る。

然し日本の勞働者の舊い人々の間にはまだ他人を使用する頭があるのでデモクラチツクに組合をやつて行くことに慣れて居らないので豪らそうにする傾向があるのが多い。

今日、最も有望な組合は立派な職工の多い鐵工業、交通勞働、印刷、などである。

年齢　日本では年のよつたものは、どうも組合に對する理解が少ない。今日の勞働組合の運動は青年勞働者及職工の間々力を得て來ると共に愈々勢力を得るであらうと思ふ。然し今日の處はまだ老人が勢力を握つて居るからどうかすると資本主義と妥協したがるのである。米國の鑄物工組合には五十五才以上の組合加入者は一度本部の承諾が無ければならぬことになつて居るが、日本でも將來はそうなるかも知れぬ。

然しまた年齢の若いものばかりでは勞働組合は出來ない。日本の紡績女工の間に勞働組合の出來ないのは彼等の七割五分が十五歳から十七歳までと云ふ實に若年者が多いからである。

性別　男女によつて、勞働組合を作る能力が違つて居る男子は矢張り組合を造る能力を大に持つて居る。その反對に女子は遅れて居る。日本の紡績女工などでも男子と全然別にして勞働組合を造る能力を持つて居るか否かは頗る疑問である。

米國抔でも一八六〇年代まで男子組合は女工組合に反對して居たものであるが、一八八〇年代には、女工組合を奬勵するようになつて居るのである。一體に米國などでも女工の多く居る**職業**——特に二十五種類職業に於ては、女工組合を作ることを奬勵して居る。

英國に於ける女子勞働組合も最近に、メリー・マクアーサー

Macarthur やボンドフキルド夫人 Mrs. Bondfield の力で發達し、現今では五つ許りの全國的の有力な組合が出來て居るようであるが、女子組合はなか〱發達しないものである。日本ではまだ餘興を入れなくては女工は集らない狀態である。

敎育　敎育が高いもの程勞働組合を造る能力を多く持つて居る。敎育の無いものは親分を持ちたがる。日本などでも工場に民主的思想が這入つて來たのは日清戰爭後であつて、中學校を途中で退いたものなどが、工場へ這入つて來る樣になつた爲めに、民主的になり親分兒分關係が薄らいで來たのである。西洋でも無學なものの間には、ボッス制度（親分）なるものが有つて、日本と全く同じである。それが西洋などでも敎育ある者が職工となる者であるから勞働者の間の空氣が違つて來たのである。

日本でも職工學校の卒業生や、工業學校の卒業生などでも、矢張り一個の勞働者として大工場で執務して居る者であるから、どうしても今迄のボッス制度と違つた組合主義が發達せざるを得なくなつたのである。之が英國のように勞働大學のような者が出來るようになれば全く變つた勞働運動が出來ると思ふ。

移動性　産業上から來る移動性のことに就ては既に述べたが、個人として特に移動性に豐んだものがある。それは職業的に然るものと、地理的に然るものとがある。職業的に然るものは職業を轉々として變へるのであつて、今日は鍛冶屋、明日は仲仕、明後日はゴム會社と云つた風に變つて行く爲めに一定の專門も無くその爲めに熟練工となり得ずして、勞働組合に對しては誠に不都合なものと、もう一つは米國で所謂トランプ（Tramp）勞働者と稱するもので有つて、たとへば鐵建築組合に例をとれば今日は、紐育の地下鐵道の仕事をして居るかと思へば、明日はサンフランシスコの博覽會に飛び、明後日は市俄古の大建築にと移つて行く職工の如きがそれであるが、これらの人々は熟練職工ではあるが、地理的に見物したいと云ふ青年のはやる心をそのまゝ放逸にやりばなして行く爲に一地方の組合の爲には少しもならないのである。それで組合としては移動性の少ない一地方に落ち付く者を歡迎せねばならぬ。此點から云へば中年者が矢張り最もよく組合に盡してくれる人人である。

品性　一つの勞働組合を見て見ると色々な人間が居る。それを大體別けると十種になる。

（一）喋りたい人（二）名を賣りたい人（三）人の集ることが好きな人（騒ぐことが好きな人）（四）世話が好きな人（五）野心的で勢力の得たい人（六）眞に自覺をして居る人（七）利益の爲めに這入つて居る人

（八）黙つて人の後から自覺してついて行く人（九）流行でやつて居る人（十）無理に入れられて何にもわからぬ人。

（一）（二）勞働組合と云ふものが一種の社會的の團體である爲めに社會表示を喜ぶの傾向ある人が集る傾がある。然しそれ等の人々も訓練を經るならば必ずや、立派な組合員になれるのであるけれども、初めの程は自己が表示運動に成功し無い場合には決して組合について來ようとはし無い。その爲めに組合はいつでも分裂せんとする傾きがあるのである。

（三）大勢の中であるから上手に話する人もあれば文章のうまい人もある。それ等を適所に適材を當て嵌めることが指導者の役目であらねばならぬ。また或人は何でも騒ぐことに興奮することが好きで、少し酒でも飲むと集會の所へ來たくて仕方が無いものがある。そんな人々に限つて過激なことと破壊的なこととし云へば偉いように思ふて、少しも建設的な所が無いのである。それでこの種類の人々は組合に取つては常に反感心を蒔く種を作るので、こちらへ行けばあちらの惡口を云ひ、あちらへ行けばこちらの惡口を云ふのである。それは互に離反することによつて少しでも社會が險惡を呈するならば、その期に乘じて仕事をしようと考へて居るのである。

またその反對に酒を呑ま無ければ演說の一つも出來ぬものがある。その代り酒の上であると實に恐ろしい無責任なことをずば〱云ふのである。それで勞働組合の演說會で最も困ることはこの酒の上で演說をさせてくれと申込むことである。勞働組合に訓練が無いもの程、之が多いのである。

（四）勞働組合の一つの支部が出來るとその中に一人は必ず世話ずきの人がある。そんな人は盲目滅法に世話をよくしてくれる。黙つて居て世話をしてくれる。こんな人は陰では他の人が努力してくれぬと云ふてこぼして居ても決して表には出さぬ。こんな人は組合の寶であつて、こんな人が無ければ組合は永續きするものでは無い。私は日本の勞働組合の幾十を見たが大抵一人か二人かはこんな人が居る。仕合せなことである。

（五）然し野心家には困る。之は智識階級から來るものもあれば、壯士のようなもの、新聞記者のような部類また勞働者の階級からも來る。そしてたゞ勞働組合の主義も目的も充分理解せず、またそれに永年の努力をしようとは思は無いで、野心の爲めに勞働組合を作らんとするのである。大正八年四月三日に大阪中央會堂で發會式をあげて直に破壊された帝國勞働協會の如きは全く野心家の企てた仕事であつて、數萬圓の金をまいて體拜式

と云ふものを、勞働組合がやつて、衣冠束帶で幹事長が現れてくるのだから驚かされるのである。その他自己の野心の爲めに名利の上に勞働組合の名を十五六も並べて見たり、たゞ勞働界の事情が明瞭に知られて居らぬ爲めに善い加減に誤魔化さうとするである。

然し勞働組合の初期には、こんな野心も賣名も少しは効用があるが、段々勞働者間の組織がついて來ると、もうそんな野心は効用をなさ無くなる。自己の名譽の爲めにストライキをさせて見て、關東勞働聯盟に注告を受けると直に逃げ出すようなものもある位であるから之からは勞働聯盟が强固になると共に、野心がきか無くなる。

(六)一體勞働組合にどれだけ自覺せるものがあるかと云ふ問題である。自覺あるものは幹部だけでも善いが、それは教育を通じ、事件を通じ宣傳を通じて常に組合員が自覺するように教へ込まなければならぬ。この教育と宣傳を怠れば、勞働組合が衰へるものである。

然し勞働者の八分の一が團結すれば、その工場は自由に働かすことが出來るものである。之は一九一六年米國全鐵道從業員のストライキが有つた時に團結して居たものは僅かに全員の八分の一であつた爲めに輿論はそれを馬鹿にして居たので有つたが、矢張り八分の一で全線を動かす力を持つて居たのであつた。この外僅か三百人位の結束で二萬人を動かしたことも日本に例の無いことも無いが一割の自覺するものがあれば必ずやその工場の全部を動かし得るものと見て差支へは無からうと思ふ。勞働者の多くは中立か、反對か、贊成の三部に別れて居るが、最も多いものは中立の無頓着ものであつて、もし中立の無頓着ものはいよ／＼の場合になれば最も刺激の强い方に傾くもので、また輿論なるものに常に贊成するものであるから――この輿論は善にも惡にも――强い刺激を與へて居る自覺者はいつでも最後の勝利を得るのである。

之を最も好く例證したのは大正八年九月農商務省に於ける國際勞働代表者豫選會に送るべき委員を全國各縣廳で豫選した時に、その縣廳に送る委員を工場で選ぶ場合に、自由投票の行はれた處は、平常から勞働運動に熱心な平職工が絶對多數で選出せられて、組長や伍長の如き『長』階級は落選して居ることである。それで私はいよ／＼と云ふ場合には、平常から自覺せるものを勞働者は決して捨て無いものだと知つたので有つた。それで自覺せるものの少ないことを決して悲しむ必要は無い。自覺

せるものは少數で有つても常に民衆を動かすものである。

(七)工場締付の行はれた場合、ストライキの有る場合、利益の爲めに多くのものは組合に這入る。そしてこんなものに限つて、今日の資本主義に對して何等根本的の考を持つて居ら無い。然しもしもこんなものを基礎として勞働組合を作るならば、それは直に破滅して了ふ。それは利益を保證し無い場合には直に逃げて了ふからである。そして勞働運動は功利的であることはそう多くは無くて、大抵の場合は犧牲的のことが多いからである。

(八)默つて自覺せるものについて來てくれるものは頗る多い。彼等は資本家を恐れて主動的の位置に立た無い。然し彼は隱れたる恐ろしき力を持つて居て、いざと云ふ場合には一大勢力となるものである。

(九)流行で組合運動をやるものがある。不良少年が傳播性を持つ如く、ストライキが傳播性がある如く、組合も流行性を持つて居る。彼等はすぐ造つて、すぐ潰して了ふのである。然し二三度一工場で流行性の組合が出來た潰れると今度は新しく造ることは實に困難である。

(十)無理に入れられる人々、この種類の人々も決して寡くは無い。組合が伍長や組長で初められた場合はこんな傾向がある。會員は何のことかわからぬが伍長組長が這入らぬと意地惡くするので仕方なしに這入と云ふものがある。工場中心の縱斷組合にこんなものがある。

自覺　勞働者の間で自覺のあるものは、熟練工に多い。今日の日米の工場で、技術の進歩して居るもの程自覺の程度が高い。それで同じ鐵工でも鑄物の技術は遲れて居る爲めに自覺して居るものは少なく、組立工や仕上工は技術が進んで居る爲めに自覺したものが多い。また比較的位置の高いものには自覺して居るものが多い。一工場に五年十年と居るものには勞働問題が耳に這入り易い。そしてこんな人々は信用があり、勞働に對する技術上の教育がある爲めに自覺し易い。工場で壓迫せられて居ても少しも自覺して居らぬものがある。然し彼等が負傷するとか、病氣にかゝるとか云ふことが動機となつて自覺するものもある。そしてそれ等の動機で自覺すれば、實に強く頭に這入るものである。

信仰　日本の勞働運動に自覺したるものゝ中に基督教徒者の多いことは驚く可きことである。彼等の多くは新教徒であるが、舊教徒も頗る多い。神戶友愛會聯合會々長須木純一氏は

羅馬舊敎の人であるが、その人格は神戸三千の自覺せる勞働者をして信頼せしむるに足るものである。彼は川崎造船所の模範職工として神戸新聞から表彰されたこともある。私は全國の勞働組合に自覺した基督敎勞働者を發見して、彼等こそ眞に大工イエスの弟子であると思ふたが、デュルチムが、新社會の基礎は勞働組合であると云ふたことを思ひ出して、献身的に努力する精神的勞働に感謝せざるを得無いものである。勿論、彼等は勞働組合の中に於ては決して信仰のことは口にだもし無い。他の組合員の中に彼の信仰が何であるかを知る人も少ない位である。然し彼等の內的自覺がそこにあるのを見て私は喜ぶものである。然し勞働組合の中には色々の人が這入つて居る佛敎徒も金光敎も種々樣々であるが、勞働組合に訓練されてくると組合それ自身が宗敎のようになり仲がよくなり融和して來るから面白い。

伊太利の勞働組合はまだ敎會中心のギルドの形式であるが、其勞働組合は凡て敎會を中心にして發達したものであると思へば、日本の將來に於ても、勞働組合を中心とする宗敎が勢力を持つかも知れない。米國の勞働大會は今日でも議會に見習ふて、祈禱を持つて初めて居るが、勞働運動の如きものはそれ自身が人格運動である爲めにどうしても精神的になるのである。即ちそれは常に理想主義的である。

勞働組合の群團的人格

組合の精神　組合の精神は、その宣言、主張、綱領等に於て多く發表せられて居るものであるが、それが1產業的のものであるか、職業的のものであるか2社會主義的のものか、所謂勞資協調的のものか3夫がサンヂカリスチツクのものか或はギルドマン的のものか4それが戰鬪的のものか、敎育的のものか、等のことは宣言綱領を見てすぐわかるのである。然し之は組合の智的方面であるが、組合の主情意的方面は團體としての意力を使用する時に現れてくるのである。即ち1組合としての主情意の訓練2組合根性をどれだけ持つて居るか3團體として橫暴であるか否か4それは落付いたものであるか、過激なものであるか等の問題が殘つて居る。

組織としての訓練に就ては後に述べるとして、精神を構成する主情意の訓練は此處に述べる必要がある。たとへば、バクニンの如きは初めは正義と自由の爲めに戰つて居たので有つた

が、發動と戰鬪が彼の乘ずる機會であるとした爲めに、最後には發動のために發動が面白くなつた傾向がある。

それと同樣に或種の勞働組合は主義として發動とかストライキがやつて見たくて仕方が無いものがある。或者はストライキをやると云ふて基金を貯蓄したものが、貯蓄金が貯つた計りにその貯蓄金に發じてストライキをせねばならぬものがある。又或者は初めて勞働組合を造るとその威力を示す爲めに主義としてでは無くてストライキをやつてみたいものがある。九州炭坑などで勞働組合を造ると彼等はストライキがしてみたくてたまら無くて直に罷工する。之は主義としてでは無く變つたことをみたいのと、刺激としてである。それで之に訓練が出來るならば、ストライキの支配が出來て、英國の如く一年に約六百件平均にストライキをする樣に訓練されるのであるけれども、然らざるものは、訓練無くしてやつ付けて了ふのである。こんな中には、たゞ意地を張つて、勞働組合全體の責任を思は無くて、『やれ、やれ』と教唆して自分は知らぬ顏をして居ると云ふような者もある。この心理狀態が訓練され無い以上はどうしても完全な勞働組合は出來ない。

米國勞働省のシユチアード氏 Steward が數百の勞働爭議に關係して、もし今日の勞働組合の或人が心理的に柔和で有つてくれるならば、幾萬の人が罷工などをしなくつても善いのであるが、彼等がたゞ戰ひの爲めに戰ひを好むものである爲めにその罷工が非常に困難なものになると云ふて居るがそれは全く至言である。同盟罷工の如きが經濟運動であるかのように見えるけれどもその奥を叩くとまた人間運動であると云ふことが、よくわかるのである。それで勞働組合としてもこの感情の訓練に餘程注意せねばならぬ。

殊に組合全體が興奮狀態に入ると特殊な心理作用が動くものであるから特別に注意せねばならぬ。

興奮狀態に置かれたる勞働組合　興奮狀態に置かれたる勞働組合に於ては、刺激の最強烈なものが要求せられ、言語が簡單になり、小さいことが知覺の擴大性の爲めに大きく響き組合全體の平素の感情が一度に爆發し、又は敵に當る時に於ては凡ての感情が忘れられ、個性が滅却せられ、平素親しく無いものが親しくなり、平素亂暴で無いものが亂暴となり男女が共にストライキする時には興奮する爲めに姦通したり、私通したりすることは必ずあることであつて、興奮しなければ無いことをよく見るのである。之は大正九年三月芝浦製作所でもあつた

ことであるが、男工女工が興奮のあまり二組も私通して警察の問題となつたがこんなことはよくあることである。

興奮すると團結力が強くなるものと、弱くなるものとがある。平素から訓練されて居るものでも、ちよつとした感情の爲めに一瞬間に破滅して了ふことがある。興奮に低下意義が伴ふと、暴行脅迫、誹謗、煽動は普通のことになつて、民衆は知らず、知らず、自らを恐怖時代に誘ひ入れるものである。その反對に自制力のある平素より訓練されたるものは、興奮した爲めに道徳的になり、犯罪が減少し、秩序的となり、結束力を强めるのである。國家でも同樣で、戰爭の爲めに國民意識を强くした米國もあれば、分解してしまつた露西亞、墺太利の如きがあると同樣に戰鬪狀態に還入つた勞働組合がそれと全く同一の狀態に置かれるものであることをよく理解して、組合の指導者はよく注意する必要がある。それで興奮狀態に還入ると共に絕對に禁酒令を發すると共に、必要ならざる集會は出來るだけ開かず、信用ある委員が凡ての事務を出來るだけ早く處決する必要がある。

そしてこの興奮狀態は早く醒め易いものである。…………………………………………………………………興奮せる時に無用な會合を開くとそれは必ず急進黨が勝つことにきまつて居る。興奮時の大群衆で穩健黨が勝つた實例が無い。そんな場合には部分的に意見を纏めて綜合せねばならぬ。群衆は教訓を受けることを欲し無い。彼等は云はんとすることを知つて居る。然しもしも彼等の云はんとすることを知つて居る指導者のある場合は彼等はその言葉をきく。然らざる場合には彼等は直接行動に出るものである。

煽動として主動者が警察署へ引致されるようなものでも、演說者から見れば何でもないものであるが、興奮の刺激曲源を昻つて居ら無い局外者から見れば何だか亂暴に見えるが、實際そう大したものでは無いことがある。

組合根性　組合根性と云ふのは團體を利用して橫暴をして見たり、工場締付をやつて居るものが組合根性を起して組合外の人々を人間と思はぬことである。米國では軍樂隊と市內の組合派の樂隊がどうも中が惡い。然しその爲めに市民が困るので輿論にまけて軍樂隊と一緒に演奏せねばならぬことなどが屢起るのである。之などが組合根性であつて、極端なものは一九〇

五年米國オハヨ州クリヴランド市の鐵板工組合は組合外のものが建てた建築物を一度破壊して自分等は新しく立てたと云ふ様な不經濟なことをするのであるが（The Clised Shop in A. T. U. P. 87. 92. 93.）又非組合のものの塗つたペンキの上は塗らぬとか、非組合工場から來た材料はどんな場合でも使用せぬと云ふて惰けるなどは、それが組合根性になれば仕方の無いものである。

かく勞働組合の精神はその主義綱領の外に實際運動の訓練方法に於てよく現れて來るものである。之が歷史的に、傳統的に各種の風俗習慣として殘る時に一層明白に之が現れてくるのである。

組合の傳統と歷史　その實行上の各種の風習が組合の各方面に影響するものであることは、直接に勞働組合に關係し無いものには殆ど理解の出來ないものである。卽ち組合の精神はその不文憲法とも云ふ可き、組合の傳統の方に多く現れてくるのである。

一つのストライキ、一つのサボテーヂは過去の語であるけれども之が組合員にはよく歷史的に記憶せられて居て、決して精神的レコードとして忘れられるものでは無いので愈々と云ふ場合にはいつでも昔の歷史がまた飛び出してくる。それで足尾銅山の大ストライキは物語の様になつて山の歷史として殘り、日立は日立に、萬田は萬田に、それ等の人は直にそのレコードを記憶せしめられるのである。殊に組合には色々な傳說的な風俗が出來るものである。卽ち會長の地位初め幹部の組織が非常に專制的に出來て居るものとデモクラチックに出來て居るものとは自ら空氣が違ふが、日本の勞働組合は一般に儀式的な風習が好きである樣である。たとへば友愛會には選任狀授與式と云ふのがあり、又會旗授與式と云ふのが屢々行はれる。それは會員の中に在郷軍人などが居つて、そんなことを悅ぶのである。それで『會長樣』と云へば非常な豪いものであると思ひ込むのである。米國の組合では會長 president と云へば何となしに親しみが感ぜられるが、日本ではすぐ在郷軍人式に考へられるので困るが之は國狀の然らしめるものである。

佛蘭西などでもギルドからサンヂカに移り變る時などには、頗る珍妙な入會式が擧行せられた樣に背かれて居るが、英國でも米國でも最近まで組合には各々珍妙な入會式などが有つたものである。之などは全く心理的に解す可きものである。

組合の成立の動機が惡ければ、その動機が永遠に傳つて行く

のは建國の意圖が子孫に傳つて行くのと少しも變ら無い。

たとへば、目的の爲めには手段を選ば無いとする宣傳法を取るとすれば、それが爲めにその組合は實に危險な團體となるのである。I・W・Wの如きはその宣言書を讀んで見てもその組織を見てみても何處にも之が一種の恐怖主義宣布の團體とは見え無い。然しI・W・Wが新聞紙の上に書いた歴史は、目的の爲めに手段を選ば無いものであるが爲めに、それは破壞と暴動によつて血塗れて居るものである。日本の初期の社會主義者の間には壯士の樣な服裝をするのが流行して居て、みな筒袖に黑の筒袖の羽織を着て居たものである。それは社會主義そのものと何等關係のあるものでは無いけれども社會心理を研究するものには、その服裝の表象だけで、彼等の心理を解剖する種には充分なるのである。『日本の社會主義暗闘史』を讀むと心理的にそれが浮んでくる。

勞働組合がそうであつて、日本の勞働組合の發會式は式後に女郎屋に流れ込んで行つてしまつたのであるが、そんなにして始められたものは長くは續か無い。どんなに主義が立派でも個人の心理的訓練が傳統として傳はる爲めには爭闘的に始めたものは内部に爭闘を導き入れて、紛爭の絕え無いいやなものとなるのである。

その組合には演說から、文章までに一つの型が出來て、その指導者が演說する時に足を蹈み鳴らすならば、勞働者は矢張り足を蹈みならすのである。言葉の使ひ方から、『てにをは』の使ひ方までも眞似てそれが傳統的に傳つて行くから恐ろしいものである。そこで指導的人格が大切になつてくるのである。

創立者の人格　科學的社會主義者の創立者と見る可きマルクスの人格は今日も各方面に感ぜられて居る如く、一勞働組合の創立者の人格が信用すべきものであるか否かによつて、その勞働組合は非常に違つたものになつてくるのである。

勞働組合の成立するに三個の要素がある。それは、人格によるか、組織によるか、機會によるかであるが、組織も大切であるが組合員の増加するのは人格の力に負ふ所が多い。たとへば、米國の鑄物工組合の如き一八五九年には十二地方組合しか無く、一八六三年にも二十六組合であつた。それが會長が宣傳に出掛けると二年間に新しい組合が六十四組合も出來た程で有つた。然しその後また會は衰退の徵を現したのも全く會長の人格に待つ所が無かつた爲めである。（Weyforthe: The Organizability of Labour p. 15）之は日本でも同樣であつて、野心と

賣名の爲めに勞働組合をやることはその組合の發達する理由とは決してなら無い。之を米のゴンパースやジョン・ミッチェルのような高潔な人格と考へ較べると日本はまだ奮發せねばならぬ。

編制委員の努力と人格　然し組長の發達とその心理的反應は會長ばかりではないことがある。殊に之が組合が選出した名義だけの組合に於て殊に然りである。そんな時には編制委員の(Organizer)人格は非常な力である。米國のA・F・L(米國勞働總同盟)では一九一四年の如き千七百九人の多數を編制委員として使用したことがある。(ibid p. 20) 日本でも地方で有力な編制者が現れて組合を發達させてくれるので一大勢力となるのである。之等の編制委員は組合の傳說の製造者であつて、彼等が有力な人格であるか無いかで組合の色彩空氣が全く違つてくるのである。

組合の人口　日本の勞働組合の一地方組合に於てその人員が千名以上に超過すれば、それから先は必ず衰退の兆が現れることを友愛會關西勞働同盟會總務久留弘三氏が私に注意してくれたが、その後よく研究してみるとそうであるので、近頃では我等の間では一支部組合が千名以上になれば必ず之を二つ以上の支部に分離することに務めて居る。

之は日本だけのことかと思つて居ると、米國の勞働組合にも同樣の經驗があると見えて紐育の鋼鐵建築工組合は一地方組合が大き過ぎた爲めに過去に於て頗る苦き經驗を持つて居たことを報告して居る。紐育の同組合は四千人からの團體であつた爲めにサム・パマクスに自由にされて困難し、それを三組合に分けたと報告して居る。又煉瓦積立工は五百人を一地方組合の定員とし、大工組合は一八八六年に於て四百人を定員としたこともあるそうである。勿論定員を定めることも無理であるけれども一組合に人員が多過ぎると、紛爭が起つたり、誤解が有つたり充分代表者を出して議論が出來なかつたりして必ず分裂する。又それを一つに纏めて行く人も無いのである。それで私は最少限十五名最大限千人位が地方組合の定員だと思ふて居る。(Theodore W, glocker: The government of American Trade Union, P.30,31)然し組合は聯合會を作るには少しも差支へは無い。そして組合は大きなもの程威力がある。然し不熟練工が増加すると組合員の生活其ものが安定を失ふから歐米の組合では徒弟の數に制定を與へて組合員數が將來に於て増加すべき數までも制限して居る。たとへば米國などで少ないもので

一人に對して四人、多いもので鑄工の如きで一人の組合員に十人の徒弟と云ふことに制限して居るが（Wolfe: Admission to A.T.U. P. 44）それは必しも若年者では組合が造れ無いと云ふのでは無い。全く組合人口に對するマルサスの人口論を實行して居るのである。

宣傳の心理　勞働組合は常に宣傳をせねばならぬ。民衆運動に宣傳を中止するならば、それは必ずや衰退するものである。何故に宣傳すべきと云へば、勞働者の人口は常に新しくなるから教育的の意味に於て宣傳せねばなら無いのである。キリスト教は千九百年宣傳に宣傳をつゞけて居る。民衆運動は宣傳が無ければ、民衆的意味が無くなつてしもう。その宣傳に用ゐるものは（一）演說會、（二）講演會（三）ビラ、（四）トラクト、（五）リーフレツト、（六）新聞、雜誌、（七）個人宣傳。

演說會は感情と示威の加はつたもので有つて。勞働組合の演說會には實際問題の多いことに於て他の政治演說會などと違つて實に効力のあるものである。講演會は感情を加へ無い靜かに理智的に行くもので有つて、演說會のように群衆が來ては駄目であるが四五百人を限度として行ふ可きものである。五七百人となると餘程上手な話方をする人で無ければ聽衆は講演に飽きる。演說會は聽衆を指導するよりか、聽衆の云はんとすることを表白すれば善いのである。それで五千人、一萬人になると、聽衆は決して講演會を聞くものではない。聽衆はその云はんとする所を自ら叫ぶものである。之が演說會の彌次の心理である。

然し演說會を續けて開いて居れば勞働者はその刺激に飽きるから今度は靜かな準備のある講演會を聞きたがる者である。それで民衆の心理作用の刺激の要求に從つて、或は演說會を擬國會にしてみたり、討論會にしてみたりせねばならないのである。民衆は一體に競爭とか、勝敗に非常に興味を持つものであるからそれを利用して擬國會を開くことなどは民衆を問題に引きつけるに力あるものである。パンフレツト運動も必要なことである。西洋の勞働組合も社會主義もパンフレツトを多く用ゐて居る。雜誌、新聞も實に有力なものである。それで組合としてはどうしても有力な雜誌、新聞を經營せねばならぬ。

米國に於て一工場を凡て組合工場にする爲めに、或組合員は九十日間の猶豫を與へられたのである。その間に全工場を組合化し得無いものは無氣力なものとされる。（Stockton: Closed Shop P. 128）その爲めに、先づ一工場の職工は凡て會員にす

ることに努力する。そして多數決を得るまで努力する。そして多數を得るや否や全工場のものに一度に組合に這入るように勸める。

…………………………………………………………

……そうして最後には組合に加はると云ふ結果になるのである。(ibid P. 126) こんな冒險は屢々米國などでは行はれて居るのである。

宣傳は心理的から云へば、矢張り一種の興奮狀態に置かれるものであるから、餘程注意しないとお祭騷ぎになるものである。このお祭騷ぎの弊害に陷ち無いようにするには、個人的宣傳を民衆的宣傳と同時に行ふことである。然し個人的宣傳も民衆的宣傳を行つて無いと成功するもので無いから、兩者相待つて行くのが善いのである。日本人の國民性としてまだ民衆運動的宣傳にはどうも感應する速度が鈍いものであるから、民衆運動が個人的宣傳の準備無くして行はれぬならばそれは必ず失敗に了ることは覺悟して居らねばならぬ。

示威運動と組合心理　組合の示威はストライキ、ボイコツト、サボテーヂと組合證票(ラベル)を用ゐるが、組合の示威は勝利を得るものでは無い。景氣不景氣によつて、この示威の成功することと成功せぬことがある。社會が他の問題に考を集注して居る時には全く失敗する。米國の全鐵道組合員が全國的ストライキを宣言して居たが、その時に米獨戰爭が近づいたので、大統領は之に勸告して之を取消させた。

ストライキは不景氣の時に之を實行するならばその成功率は低いものである。これは色々議論があるが不景氣には組合までが潰れる位であるからストライキも失敗するのである。次の統計は之を示して居る。

米國に於ける鐵の生產とストライキ成功の比例

年次	銑鐵の生產		ストライキの成功せし工場數		ストライキの成功せし工場の百分率	
	生產實數 千噸單位	前年との比例	實數	前年との比例	百分率	前年との比例
一八八一	四一四	…	一七九八	…	六一・三七	…
一八八二	四六二	一一一・六	一一一八	六二・八	五三・五六	八七・三
一八八三	四六〇	九九・六	一六〇五	一四三・三	五八・一七	一〇八・六
一八八四	四一〇	八九・一	一二一九	七五・九	五一・五〇	八八・六
一八八五	四〇五	九八・八	一二〇六	九八・九	五三・八〇	一〇二・五
一八八六	五六八	一四〇・二	三四六八	二八七・五	三四・五一	六五・三
一八八七	六四二	一一三・〇	三〇〇五	八六・七	四五・六四	一三二・五
一八八八	六四九	一〇一・一	一八三〇	六〇・九	五二・二二	一一四・二

一八八九	七六〇	一一七・一	一七六〇	九六・二	四六・四九	八九・一
一八九〇	九二〇	一二一・〇	四九六六	二八二・二	五二・六五	一一三・三
一八九一	八二八	九〇・〇	三〇七五	六一・九	三七・八八	七一・九
一八九二	九一六	一一〇・六	二一七七	七〇・八	三九・三一	一〇三・七
一八九三	七一三	七七・八	二三一八	一〇六・五	五〇・八六	一二九・五
一八九四	六六六	九三・四	三一二二	一三四・六	三八・〇九	七四・八
一八九五	九四五	一四一・九	三八五〇	一二三・三	五五・二四	一四四・九
一八九六	八六二	九一・二	三二三三	八四・〇	五九・一九	一〇七・二
一八九七	九六五	一一一・九	四八六六	一五〇・五	五七・三一	九六・八
一八九八	一一七七	一三三・〇	二四四六	五〇・三	六四・二一	一二二・〇
一八九九	一三六二	一一五・七	八二八四	三三八・七	七三・二四	一一四・〇
一九〇〇	一三七九	一〇一・二	四二九一	五一・八	四六・四三	六三・四
一九〇一	一五八八	一一五・二	五三二三	一二四・〇	四八・七七	一〇五・二
一九〇二	一七八二	一一三・二	六七三九	一二六・六	四七・三一	九六・九
一九〇三	一八〇一	一〇一・〇	八二八一	一二三・九	四〇・八七	八六・五
一九〇四	一六五〇	九一・六	三六〇一	四三・五	三五・二八	八六・三
一九〇五	二二九九	一三九・三	三三三三	九二・六	四〇・一四	一一三・九

この統計によつてイラ・クロス博士 Ira Cross は不景氣の方が反つて罷工が成功するのであるけれども、ウエーフオース博士はそれに反對して、カールピアソンの計算によつて生產總噸數とストライキ實數との比例を取るならば、その比例は .39±.12 (.12は公差Probable error) となつて三十九%の比が出て來て確かに景氣がストライキの成功を三十九%だけ成功さすと云ふことを示して居ると取るのである。クロック博士はそれを前年との比例によつて計算してその反對を云ふのである。然し一般にストライキは生產の增加と共に絕對に於て增加して居るのを見ても、生產が多くなると共にストライキ成功率が減退せぬことは事實であるから、どうしても增加すると考へねばならないのである。(Weyforth: Organizability of Labour P.248—250,267)

ストライキに似たサボターヂの成功率も同樣である。ボイコットの成功率は職業によつて違ふが之はまた景氣不景氣に非常な關係がある。ラベル(組合證票)は米國が元祖で米國で最も成功して居る。之は組織發達と共に社會の同情によつて成功するのである。一體示威は社會の同情が無ければ成功するものでは無い。直接行動では無いけれども示威行列がそうである。まだ日本では示威行列に加はるものが少ない。それは彼等が社會的輿論と示威に依賴することが少ない證據である。日本では勞働者は示威行列を子供臭いと云ふ。然し社會組織が複雜になると共に示威行列が毎日行はれる樣になるから見て居給へと私は云ひたいのだ。英米乃至は歐洲大陸で示威行列の行はれるのは

全く必要と社會心理の約束から離れて居るのである。そして勞働組合の規律ある所を示すには示威行列が最も善いのである

組合の訓練　之は組合の精神としての方面の空氣とも云ふ可きものでは無くて實際の訓練の問題である。

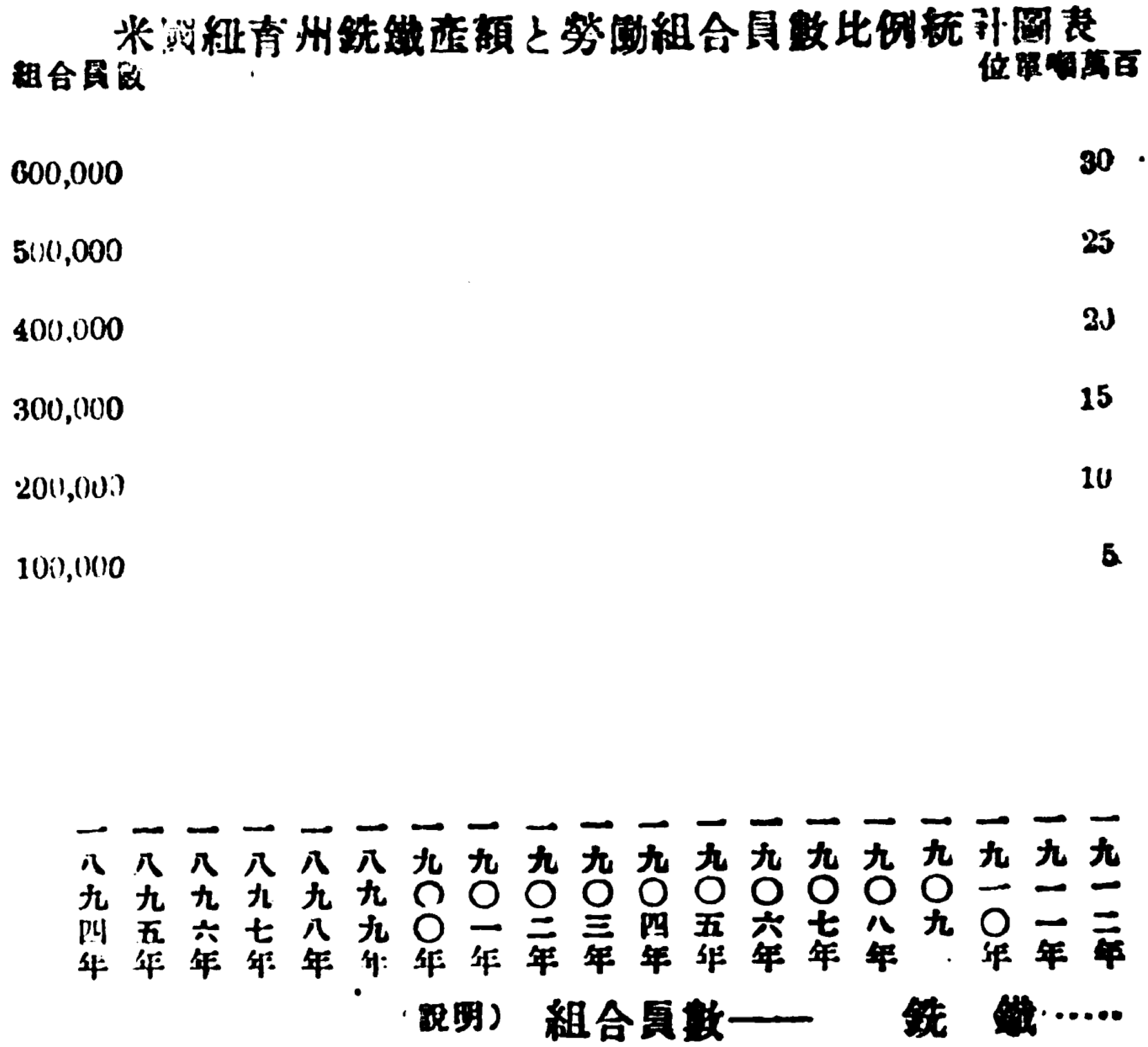
即ち組織上の訓練、採決の問題、ストライキの支配、入獄者の救濟、會社の整理の問題等色々とある。訓練の無いものは團體と云ふことは出來無い。それは中心が無いから常にゴダついて居る。討議しても仲々裁決が出來ない。訓練のあるものはそれを二三分間にかた付けるものを訓練の無いものは一晩討議しても決し無い。殊に組合員中に賭博を行ふものが有つて會計を誤魔化すものがあつてもそれをよう處罰せずに捨てゝ置くようなことは日本の組合にはよくあることだし、組合を一人で專斷的にかき廻して居つて、組合の會計と會長の會計との間に區別が無くても默つて居らなければならない様なことがあればそれは完全な組合と云ふことが出來ない。殊に幹事は會員が選擧せずして、自己の欲する儘に選ぶような組合長がある場合が日本の勞働組合にはまだあるが、そんなことではデモクラシーの基礎となる可き組合運動としては實に耻かしいことであると云はねばならぬ。またストライキする場合にも（同情罷工を求めて來た場合でも）之を斷然拒絶し得るだけの勇氣の無い勞働組合では、まだ愈々と云ふ場合に之を援助することの出來ぬ能力の無いものである。一體日本の組合はまだ出來て間も無いことであるが、我儘でいかない。自己の決定したことは絶對である様に考へて他の組合も之に從はねばならぬ様に考へることがある。之は訓練の無い證據である。

米國ではストライキの支配が完全に實行されて居る。一九一一年シカゴ市の新聞紙にストライキが有つた。之は印刷工全國組合の約束に背いたものであつた。それで全國組合長リンチ氏は命令を發して直にストライキを中止して復業し新聞紙を印刷すべきを命じた。然し之を地方組合は聞か無かつた。それでリンチ氏は更に市俄古の他の組合に命じて直に新聞紙を印刷すべきを命じた。新聞紙の印刷工も頑固を折つて遂に中央部の命令を聞いて新聞を發行した。（geoge Miltor Janes: the control of Strikes in American Trade Unions, P. 67）こんな風に訓練されてくるので初めて勞働組合と云ふものは團體としての仕事が出來るのであつて、英國の勞働組合の如きが矢張り國家内の一大勢力となつて居るのは全くこの訓練の結果であると考へて善いのである。

殊に勞働者の中にはすぐに名士になつて了ふものもあれば、ストライキを賣渡すものも出來るのである。日本の海員組合の中にはストライキを調停して兩者から金を取る習癖があるが、米國などではそれで食ふて居る組合運動者もあり、敵に買收されるものもある。又急に名士になつて大臣と交渉したと云ふことが得意になつて、すぐに資本家氣取になり勞働組合が資本家臭味を帶び一寸と走るにも自動車で無ければ走らぬようになるのである。『政黨社會學』の著者ミカエルス氏は米國に於けるこの邊の消息をよく書いてくれて居るが日本に於ても段々それが見えるので矢張り敎養ある分子が組合の中に奉仕する必要があると私は考へて居る。即ち組合の精神的訓練は矢張り大學卒業生が書記として這入つて、蔭に居て指導する必要が大にあるのである。殊に唯物史觀で組合を導く時にその組合が殺伐になつて仕方が無いものであるからそこは知識階級の人々が常に新理想を以つて愛の中に包んで行く必要があるのである。

團結力の心理　勞働組合は景氣が善い時には組合員も增加し團結力も強いが、少し不景氣だとすぐ組合員が減退し、會費が滯り、團結力が鈍ることは既に論じた通りであるが、米國紐育州の銑鐵の生産額と同州の勞働組合員の增加率を比較すると次の通りな圖表が出來る。

米國紐育州銑鐵産額と勞働組合員數比例統計圖表



（說明）……銑鐵　――組合員數

之を見てもよく分かる通りに團結力が殆ど景氣不景氣によつ

て支配せられ、今日の唯物史觀の上に立つ資本主義の支配に打勝つことが出來ないことを我等に敎へてくれるのであるが、組合と云ふものは然し不景氣に打勝つて、產業界を支配したいと云ふ希望の下に出來る唯心的運動であるから、境遇に敗れつゝも之に打勝たんとする努力がいつでもある。そして今は之に打勝てなくとも遂には勝ち得る望みがあるのである。それでその支配權を得る時代までに多くの組合が出來たり潰れたりするのである。

例へば米國植字工組合の四十七年間（一八六八年――一九一四年）に就て調べて見るに、同年間に其勞働組合數は七十九より七百二十三に增加して居る。卽ち六百四十四の增加である。然し其間に組合の出來た數は、實數に於て、千五百の地方組合があつたのである。卽ち四十七年間に、約九百の勞働組合が出來たけれど直ちに潰れたことになつて居る。之を百分率にすれば六十パアセントは潰れて居るわけである。

一九〇三年十二月一日より、一九一三年十二月一日迄十年間に煉瓦積立工組合は、八百十九より九百五十七組合まで增加して居る卽ち百三十八支部の增加である。然し其間に四百九十三の支部組合が出來て潰れて居る。其間に合併したものが五十あるとしても三百は明かに破滅したものである。卽ち約六割が破壞されて居る譯である。

同樣に農具工組合は、一九〇四年七月一日より一九一二年九月一日までの八年間に、七百十四の支部が出來て其中の七百十までが解體するとか、除名せられるとかして居る。卽ち殆ど十割の勞働組合が破滅して居る割合になつて居る。（Weyforth: Organizability of Labour, P. 87）こんな風であるから、勞働組合の經營と云ふものは中々困難である。日本に於ても友愛會の如き今迄何百の支部が出來たであらうけれども、やはり米國のそれの如く破滅したものが何割かあるのである。

それで團結力を增す爲めにはどうしても…………………全國的に結束し、資本家の團結切りくずしの方策や法律を撤廢せしめねばならぬ。全國的に組織する必要は『ストライキ破り』を無くする爲めである。治安警察法の第十七條などの撤廢を要求するのは資本家が法律を利用し無い爲めである。然し猶それでも不足な場合――殊にストライキの場合などではピケチング（巡察制度）を設けて他の市から來たストライキ破りを工場に入れ無いようにして、團結を破られ無いようにするのである。

そして勞働組合も今日では段々進歩して昔はたゞ賃金の要求や時間上の要求であつたが、今日では、團體として契約權 Collective Bargain や團體としての産業支配權、從ふて資本家に對して組合承認權を得ることの爲めにストライキをするようになつたのである。即ち團結そのものが勞働組合が最後の目的を達する手段である爲めに、その團結を維持し、その團結を通じて文化組織を根柢より改造することが、勞働組合の目的となつて居るのである。それで勞働組合はマルクスが云ふ如く『萬國の勞働者よ團結せよ』との綱領を徹底的に實行しその團結を鈍くする凡ての障害物を排除せねばならぬ。

組合の他組合及社會に對する心理　昔から民衆運動は常に進歩と保守の二派に分れることにきまつて居る。之は各種の色彩を帶びて現れてくるが、それは民衆運動は生命の本能を直接に感得して時間的に發表せねばならぬ爲めに、時間的の刻みの關係上進歩と保守の二つに別れざるを得ないのである。それで組合はいつでも進歩と保守に別れる。そして近いもの程多くこの進歩と保守の思想に就て相爭ふものである。殊に之に分業が加はれば加はる程その色彩は濃厚になる。

それで組合を組織して居らぬ中には相當の禮儀のあるものが組合を組織した爲めに禮儀が無くなるものである。即ち反對派に對して尊敬の無くなることを、米國鉛管瓦斯スチーム管設計雜誌の主筆が一八九六年四月同雜誌に於て嘆いて居る。（Stockton : Closed Shop in A.T.U.,P.66）

又利益上の關係から團體の勢力の關係から似たものが相爭ふものである。殊に職業別組合には之が多いのである。例へば米國では（硝子瓶工とフリント硝子工』『大工組合と木工組合』『鉛管工とスチーム管設計工』『花崗石切工並石工と大理石工』『煉瓦積立工と石造建築工と左官』之等は互に相爭ふのである。（ibid P.65）

米國の勞働組合史を見るに一八三五——三六年にかけて、勞働組合は著しく發達したが餘りに組合が多過ぎた爲めに、鍛冶工組合と馬締工組合が爭ひ、手紡工と紡績工が爭ひその爭鬪の間に不景氣が一八三七年にやつと來て勞働組合が丸潰れになつたと云ふようなこともあつた位である。（『勞働年鑑』三四九頁拙文參照）こんな風であるから日本に於ても職業組合を作つて互に相嚙む代りに相互に團結して禮儀と寛容の德を以つて勞働組合を發達させたいものである。英國などに於てもよく勞働組合が社會の中軸となつてくると共に今日までの職業別組合間の

爭鬪を捨てゝ大合同の產業別組合に傾きつゝあるのである。

組合が社會に對する使命特に國家に對するものは組合を基礎として國家を改造するものであるから、國家は今の種類の國家で無いかも知れぬがそれは決して無政府的にはなり得ない。萬國的にはなり得るが、それは必ずしも超國家を意味し無い。それは國家を飛び越さ無い點に於て常に保守的に見える。獨の大戰に際するレギエン Legien の態度を見ればよくわかる。之は必しも理想的な行動で無いかも知れないが、（エドワード・ビーヴアン著田邊忠男譯最近獨逸社會民主黨運動史一二〇頁）英米佛の凡ての勞働組合が同一方向を取つたことを見ると勞働組合が對國家の心理は超國家的のもので無いと斷言することが出來よう。

然しそれでは勞働組合は國家を鑄換へる力が無いかと云ふに決してそうで無い。今日獨逸を支配して居るのはエベルトでは無くして勞働組合のレギエンであると思へば、勞働組合は組織を重じる爲めにその道程は永くかさなるけれども最後にはそこへ到着することが出來るのである。それでももし勞働組合が萬國的に團結し得るならば、必ずや佛のジヤーレスが豫想して居た如くまた詩人ヴエルハアレンが幻想に畫いて居た如く眞の世界平和が勞働組合を通じてくることと私は信じて疑は無いのである。（をはり）

時事と社會

日米戰ふべきか

法學博士　末廣重雄

一

正義と人道とは、米國人が常に揭ぐる所の招牌である、今次の大戰に參加したのも亦之が爲めであつたが、米國人が、黑人支那人及び最近日本人に對して爲す所を觀るに、如何にも殘忍酷薄を極め、人をして其の正義人道は、遂に白人に對する正義人道に過ぎないと云ふ感あらしめる。今、玆には米國人の黑人や支那人やに對する橫暴を說く暇はないが、恰も加州に土地法改正問題が起り、加州の開發に大功勞のある日本人を、犬猫の如く同州より驅逐せんとする際の事であるから、米國人が日本人に對し、過去に於て爲し、又現在爲しつゝある所を說き、其の排日に果して十分なる理由ありや否やを明にしやう。

二

日本人が、支那人に代つて加州に赴く事となり、初めて農業上に使用されたのは、明治二十一年の事である。其れ以來、日本人は、農業勞働者として渡米する者が多く、西米戰爭後加州の發展に伴ひ、益々增加する事になつた。間もなく、無制限に日本移民の入國するは危險であるとして、排日論が加州人間に唱へられるやうになつた。是れ實に明治三十三年の事である。六年後の明治三十九年には、有名なる桑港學童問題を惹起し、翌明治四十年、該問題は、我國に取りて有利に解決せられたが、交換的に移民轉航禁止となつた。

然るに、米國に於ける排日熱は益々旺盛になつたから、我が政府は日米親交の爲め、明治四十一年所謂紳士協約に依り、日本人の渡米に制限を加へ、移民にして米國に渡航し得る者は、再渡航

者、米國在住者の呼び寄する父母妻子、並に組合農夫に限る事としたから、新に移民として男子が渡米する事は不可能となつた。其後で我が政府は、此の協約を誠實以上に履行して居ると同時に、排日の爲めに前途を悲觀して、米國を去る者も少くなかつたので、在米日本人は出産に依つて、其の數を增すの外がない事になつた。然る所、加州の排日派は、尙ほ之に滿足せず、徐に適法に入國居在する者に對して迫害を加へ、之を加州より驅逐せんが爲め、大正二年春開會の同州議會に種々なる排日法案を提出した。其の中で、最も重大であつて、一時日米國交上に危機を生ぜしめたのは、所謂加州土地法案として知らるるものである。

三

抑も、在加州日本人の營める產業には種々あるが、其內最も盛なるものは農業である。日本人は農夫として、卓越せる技量を有して居るから、先づ勞働者より始めて、借地人となり、地主となり、瞬く間に急速の發展をして、大正二年加州土地法案が議會に提出せられた當時、借地は二十八萬英加所有地は三萬英加に上り、加州の全耕地の約四十分一に達した。而かも將來一層勢力を增大する見込みがあつたから、排日派は在加州日本人の勢力の中心を衝く爲めに、土地法案を議會に提出したのである。

是に於て、我國の輿論は沸騰した。我が政府は米國政府（ウイルソン）政府に對して、日米親交の爲め、此の法案の成立を防止する事に努力せん事を求めたから、國務卿ブライアンは遙遙加州に赴き加州政府及び議會に對し、種々緩和運動を試みたけれども、遂に其の顧みる所とならず。土地法案は議會を通過して法律となり、同年八月より實施せらるゝ事となつた。是が現在行はれて居る加州土地法である。

四

加州土地法は、米國歸化法が日本人に歸化を許さないのに乘じて、外國人を、米國市民たるを得る者と得ざる者とに區別し、米國市民たるを得る外國人、例へば英國人、佛國人等には土地所有を許しながら、米國市民たるを得ざる日本人には、之を許さない（但し既得權は之を侵害せない。）會社に在りては、其の社員の過半數が日本人であるか、又は其の發行株式の過半數が、日本人の所有に係る場合には、同じく土地を所有する事を得ない。更に同法に依れば、日本人及び日本人が利害關係を有する上記の會社は、三年を越へざる期間に於て、農業地の賃

借を爲し得るに過ぎない事になつて居る。斯くの如くにして、日本人は加州に於て土地を所有する事が出來なくなつたし、借地につき大に制限を受ける事になつたから、過去十數年間に築き上げた農業上に於ける其の勢力は、多大の打擊を蒙る事になつた。

此の法律に關しては、種々なる方面より非難を加へる事が出來る。抑も米國の國法及び米國の或る州の法律に於て、外國人を、米國市民たる意志表示を爲した者と、爲さざる者とに區別し、前者には土地所有を許し、後者には之を許さない例があるが、米國市民たる意志表示を爲した外國人は、唯米國市民とも云ふべき者である。市民たるを得る外國人で未だ市民たる意志表示を爲さない者、又は全く米國市民たるを得ざる者に比べて米國市民に近い者であるから、二者の間に差別待遇をする事は、理由があるものと認めねばならぬ。之に反し、加州土地法の如く、外國人を米國市民たるを得る者と、得ざる者とに區別して、土地所有の許否を定める事は、全く非合理的で、如何にも不都合と云ふべきである。此の外、加州土地法は、當時我が政府が米國政府に對して、抗議するが如くに、日米通商條約の明文及び、精神に據り且つ國際間に認めらるる、修好善隣の通義通則と相容れぬものであつて、當時我が政府の抗議に對して、米國政府が、何等根本的に答へる所がなく、又問題の要點に關する我政府の所信を動かすに足るものがなかつたのは、大に所以ありと云はねばならぬ。

五

今茲に至りて、在米日本人の頭上に新なる打擊が來た。それは寫眞花嫁の渡米禁止である。是より先、紳士協約に依れば、在日本人は、自由に妻を呼び寄せることが出來るけれども、結婚の爲めに、態々太平洋を横切つて歸朝する事は、啻に莫大なる費用を要する許りでなく、又多くの日子を費さねばならぬので、往々其實行が困難とされる。寫眞結婚は斯る事情の下に在る者が、米國に居ながら、內地から妻を迎へ得る爲め工夫した簡便で安價な方法である。然るに此の寫眞結婚をした花嫁の入國を許す事は、協約の大缺點であるとして、明治四十一年紳士協約成立後直ちに反對論が起つた。其れは何故かと云へば、第一に寫眞花嫁の多くは、入國後勞働者となつて、夫を助けるから、其の入國を自由にする時は、日本人の排斥を目的とする紳士協約の存在を無意義にする事になる。第二には、寫眞花嫁の爲めに、米國市民たるを得ざる父母より、多數の米國市民權

を有する者が生れ、而かも日本人は、鬼の如く出產率が高いから、米國の將來の爲めに大に憂ふべきである、と云ふのである。

昨春來、排日論の勃興と共に、寫眞花嫁入國禁止論も亦大に熾盛になつたから、我が政府は排日緩和の爲めに、新に米國に讓步し紳士協約が認むる寫眞花嫁の渡米を、今春三月より禁止する事になつた。禁止の結果、今後渡米し得る婦人は、在米日本人の渡米以前に結婚した者か又は今後態々歸朝して結婚する者に限るのであるが、後者は、前述の事情で、寫實結婚の如うに多く行はれないから、今後渡米する婦人は著しく減少しやう。排日派の憂ふる如く、米國の西海岸に、黃人が繁殖して、白人を壓倒する危險は全く除き去られて、白人の繩張が大に安全となつた譯である。然るに、其れでも尙、加州人は滿足せない、白人の殘忍性を極端に發揮して、最後の日本人に加へ、之を全滅する事を企圖して居る。目下の問題だる加州土地法の改正が其れである。

六

大正二年加州土地法實施後、日本人は市民權を有する米國生れの子の名義に於て、又は是等の米國市民と共に、會社を組織し其の名義に於て、新に土地を取得したから、直接間接に、日本人の支配下に在る土地は、漸次增加した。更に借地期間の制限は躁期の打擊を日本人に加へる事が出來なかつた。排日派は、此の事情に鑑みて、加州土地法以上の法律を制定する事を必要としたけれども、戰爭中は、日米國交を阻隔する此の種の問題を惹起するを憚つて居たが、戰雲歐米に及び、日本人を加州農業經營の上から驅逐し、延て農業を中心とする、日本人の經濟的活動に致命傷を加へんとする運動を起した。而うして、普通の立法手續に依らず、卽ち加州議會を經由せず、加州憲法第四條第一項の發案權を利用して、來る十一月上旬に、加州土地法改正案を選擧人の一般投票に附する事になつた。左に同案の主要なる點を略述する。

(一)加州土地法に依り、日本人は加州に於て、土地を所有し得ない事になつたけれども、米國市民例へば、米國生れの日本人と共に會社を組織すれば、其の名義で土地を所有し得るのである(但し米國市民たるを得ざる外國人たる日本人が、社員の半數以下であるか、又は發行株式の半數以下を所有する場合に限る)然る所改正案に依れば日本人は、將來新に、農業用土地會社の社員又は株主となるを得ない事になるのであるから、加州

土地法實施後、日本人が農業上に於て、發展を續け行く爲めに案出した有力なる方法を奪はれることになる。

(二)加州土地法には、土地を所有する未成年者の後見人たる者の資格に就て何等制限する所がない。然るに、改正案第四條に依れば、日本人及び日本人が社員の半數以上を占め、又は發行株式の半數以上を所有する會社は、其の被後見人たる未成年者の所有財産中、土地に關しては權限を有せないから、將來日本人は加州土地法を脫る爲め、未成年の米國生れの子の名義で、土地を所有することが出來ない事になる。

(三)加州土地法第二條及び第三條に依れば、日本人及び日本人が社員の半數以下を占め、又は發行株式の半數以下を所有する會社は、農業用として、三年を超えざる期間ならば、土地を賃借し得るのであるが、改正案は是等の規定を全然削除して了つた。然るに、米通商條約第一條に依れば、日本人は米國に於て住居及び商業の目的の爲めに、土地の賃借を爲し得るのみであつて農業の爲め土地を賃借することに關しては、何等の規定もない。所で、改正案の第二條及び第三條によれば、日本人及び上記の日米合辦の會社は、現に日米兩國の間に存する條約に規定せられたる方法、範圍及び目的に於てのみ、不動産、又は不動産上の利益を取得する事を得とあるから、改正案が成立つ曉は、農業の爲め、土地を賃借し得ないことになる。主として借地に依りて、農業を營んで居る現狀に照せば、借地權の剝奪が在加州日本人の大打撃となるは疑ひない。

(四)加州土地法は、規定綿密を缺き、之を脫ることが困難でないから、改正案は、第九條を以て斯かる弊害を防止する爲め、嚴重なる規定を設けて居る。

此他尙種々なる規定があるけれども繁を避けて、玆には之を說かぬ。

七

此の一般投票の成行は如何うであらう。米國朝野の之に對する態度は如何うであらう。從來其の態度を明にせなかつた加州知事スチーヴンスは、最近米國國務卿に提出した陳述中、日本人は同化せない、加州人の幸福の爲めに加州を保存するには、日本人を排斥せねばならぬ、と公言して居るから、氏は立派な排日論者である。ウイルソン政府は、七月上旬以來、加州に出張して日本人の狀態を調査中であつた。米國下院調査委員の報告を待て、其の態度を決定するさうであるが、其の報告は未だ發表されて居らぬけれども、其の委員長が私見として、七月末

に、同化不能の移民を許容すべからざる時期に達したとして、日本人排斥の必要を公言して居るから、如何うやら政府も信頼するに足らぬらしい。六月の國民大會に於て發表せる政綱に於ては、共和民主兩黨共に、亞細亞人排斥の必要を提唱し、黨略に出るとは云へ、兎に角米國の二大政黨は排日に賛成して居る。

大正二年の頃とは形勢頗る異り、今や米國一般に、日本移民を排斥せねばならぬと云ふ思想が普及し。其の上に國外に於ては、英國の殖民地たる濠洲、ニユージーランド等に於て、加州が排日の目的を達しなければ、自國の不利なる影響が少くないと云ふので、遙かに聲援を與へて居るやうな有様であるから、此儘で進んだなら、加州の一般投票は排日派の勝利に歸するに相違ない。在加州日本人の運命は岌々乎として危いと云はねばならぬ。

加州の排日派は、加州土地法改正案で勝利を得れば、勢に乗じて、米國生れの日本人より市民權を剝奪せんと、目論んで居るが、今日既に米國諸州に於て、之に應ずる者が多少ある。抑も米國憲法追加第十四條に依れば、米國生れの日本人は米國の市民權を有し、州は此の米國市民たる者の權利を制限する法律を設ける事が出來ない。從つて米國生れの日本人は、加州土地法の適用の外に立ち、土地を所有する事が出來る、尤も上述の如く、加州土地法改正案に依れば、日本人は今後被後見人たる米國生れの子の名義を利用して、土地を取得する事を得ないから、當分の處少からぬ不自由があるけれども、將來成年に達する米國生れの日本人の數が增加するに伴ひ、日本人の地位は段々安全になる譯である。斯かる次第であるから、日本人に根本的の打擊を加へんとするには、如何しても憲法追加第十四條を改正して、米國生れの日本人に市民權を附與せない事にせねばならぬ。排日派が憲法第十四條改正運動に着手したのは之が爲めである。

斯くの如く、加州の排日運動は執拗に行はれて居るが、進んで、加州並に、汎く米國に行はれて居る排日は、如何なる理由に基くものであるかを述べ少しく其の批判を試みやう。

八

米國の移民入國に關して、歐洲の移民ならば、其の英人たると、佛人たると、土耳古人たると、如何なる國民たるとを問はず、米國移民法の規定に依り、只移民其人の質の良否を見て許否を定める。然るに日本人の場合には、質を觀ず、只人種上日本人であると云ふ理由で排斥し、黄白人の間に、不正不當なる

差別待遇をするのである。然し親日論者でさへ、今日紳士協約のなかるべからざる事を說き、日本人に對する米國の門戶閉鎖に就て、殆んど全く異論がない。此事は、如何にも不都合千萬であるが、其れよりも一層甚だしきは、加州を始め米國の諸州に於て、適法に入國居住して居る日本人に迫害を加へ、黃白人間に差別待遇をする事である。正義人道を標榜する米國としては非常な言行不一致にて、米國が支那に關して主張する機會均等主義の精神を蹂躙するものである。

　日本人が加州の開發に貢獻した所、極めて大なるものがある。殊に瘴癘の氣に滿てるサンオーキン河盆地方、炎熱白人の耐へ得ざるインペリアルバルレー、不毛にして沙漠の如きフレスノ、リヴングストーン等を開拓し、砂を化して、黃金と爲し、今日の加州あるを致したのは實に日本人である。然るに今や此の日本人から土地の所有權も、賃借權も奪つて、加州から驅逐しやうとするのである。排日が正義に反する許りでなく、折角發達した加州の農業を全く衰退せしむるもので、加州に取つて自殺的行爲である事は、恰も、目下我國の問題となつて居る米國の新船舶法が、折角勃興しつゝある米國の極東貿易に非常なる障害を與ふるのみならず、之より發展せんとしつゝある米國の工業の利益を顧ないと同一である。斯くても、尙ほ何故に米國は排日を敢てするのであらうか。何故に、正義に反し、自己の利益を犧牲にしてまでも、排日を叫ばねばならないのであらうか。

　排日派の擧ぐる排日の原因には色々ある。加州土地法制定の理由として、米國政府が我が政府に對する回答に依れば、全然經濟的であつて、農業經營上の競爭を避けんとする。加州人が見て以て同州に存在するとする特殊の經濟事情に基くものに他ならぬさうである。然し乍ら單に經濟上の理由を以てするならば、何故に日本人に劣らず勤勉力行する伊太利人等を差措いて、特に日本人を排斥するのか其の理由が解らぬ。經濟上の理由もあるであらう。然し乍ら私の見る所に依れば、排日主因は日本人の不同化と云ふ事にある。ルーズヴエルト、ウイルソンの如き皆同意見である。ウイルソンの如きは、白人と同化せざる移民を以て純一なる米國市民を作る能はざる事を以て、日本人排斥の理由として居る。加州知事スチーヴンス、米國下院日本移民狀態調査委員長の排日の理由も、亦同樣である事は、前に述べた通りである。

九

最近米國に取つて、重大なる問題の一は、移民の米國化と云ふ事である。移民を同化して、之を米國人と云ふ型に鑄直す事である。此の同化が行はれるか否かは、政治上、社會上、米國の將來に取つて重大なる問題である。果して然らば、若日本人が同化せぬものならば、其の米國内に在る事は、同國に取つて少なからぬ危險であるから之を排斥するのは當然であるといはねばならぬ。

然らば、日本人は果して同化せないであらうか。私の見る所に依れば、在米日本人は容易に米國に同化せぬ如くであるけれども、之は日本人に限つた事ではなく、戰前毎年非常に多數の入國を見た南歐州及び東歐洲諸國の移民が、一向米國に同化せぬ事は隱れもない事實であつて、米國の大問題となつて居たのである。然るに米國人は是等の南歐、東歐移民の事は捨置て、獨り日本人の不同化をのみを八釜敷云ふのは何故であるか。更に考ふるに、今日までのところ、日本人が米國に同化せないのは、半ば米國人の罪である。日本人に歸化を許さぬ許りでなく、或は立法的、或は社會的手段を以て、非常なる迫害を加へ結局之を米國より逐ひ出さうとして、全く同化の機會も與へぬ以上同化せぬのが當然ではあるまいか。日本人を不同化を理由として排斥せんとすれば、其れ以前に一應日本人を白人と平等に待遇し斯くしても尙ほ同化せぬ場合、初めて排斥すべしである。更に米國生れの日本人の多くが、最早や精神的に日本人でなく、南歐東歐の移民の子の或者以上の立派なる米國人である事は、公平なる米國人の認むる所である。惟ふに或る國の移民を、不同化の理由を以て排斥すべきや否やは、初代の者より、二代目の者を見て、決すべきであつて、二代目の日本人が立派に米國化する事實ある以上、排日論者は其の排日の根本的理由を失ふではないか。要するに、米國が歐洲移民を排斥せずして、獨り日本人を排斥するのは、主として人種的偏見に基くものと考へられる。

十

米國の排日は、斯くの如く主として人種的偏見に基き、極めて不正不當な事である。此の排斥に對して、吾人の態度を如何にすべきか。人或は、排日問題は、僅に東米國十餘萬の日本人の問題に過ぎぬ。現在の我國は十年前、二十年前の我國と、大に事情を異にし、工業非常に發達して、世界大工業國の一に列する位であるから、生産の要素である所の人を其儘に輸出する時代は過ぎ去り、從つて移民問題は其重要さを失つて了つ

た。斯かる些々たる問題を荒立て、日米の國交を阻害する事は、我國の爲めに取らぬと云ふやうである。然り、現在の移民問題は、在加州數萬、在米國十餘萬の日本人の問題に過ぎないが、私は結局の所、我か移民を制限否な殆んど禁止する紳士協約其ものが問題であると思ふ。と云ふのは、我國の人口は現在一ヶ年に約六十萬宛增加して居るのであるが、此の全部を、天惠に乏しき我國の產業のみで養ひ得るであらうか。海外移住は決して人口問題解決の主なる方法ではない。然し其の一方法たるを失はぬ之が爲めには如何うしても、我が移民に對して、米國の門戶を開放させる事が必要となつて來る。更に米國以外に於て現に閉鎖して居る所を開放させ、現に開放して居る所を閉鎖させぬ爲めには、先づ米國の門戶開放が必要である。是に於て私は紳士協約を以て、日米間に移民問題を永久に解決するものとは考へる事が出來ぬ。

今後機會ある每に、入國に關して、歐洲移民と平等の待遇を要求せねばならぬが、今日は此の要求を爲す時機であるまいから、先づ第一に、既に入國居住する者に關して、公正なる待遇を要求せねばならぬ。移民問題は、決して少數の日本人に關する輕微なる問題ではない。移民に關する日米問題の重要なる所以に存するのである。

十一

移民問題は、我國の重大利益の問題である上に、大國としての我國の面目威嚴に關する問題であつて、對支問題と淺からぬ關係を有するものである。日本人が、英國米國等に於て差別待遇を受けて、之に甘ずる以上、支那人の眼に映ずる日本人は、白人よりも遙かに劣等なるものである。我國は大國と云はれ乍ら、二等國、三等國並のものと見做されて、我國の面目威嚴を傷くる事幾くなるかを知らぬ。對支外交上、甚だしき不利のある事は云ふを待たぬから、我が朝野協力して、排日問題の根本的解決を圖らねばならぬ。

外交政策の確立と財界の回復

法學博士　神戶正雄

（一）

財界が不況になつてから、もう彼是れ半年になるが、まだ前

途光明がしかとは認められない。好景氣の時ならば一寸したことでも凡べて樂觀の材料に入れて騷ぐ所であるが、今は萬事を悲觀の材料にしてしまつて居る。其れは恰かも此現代經濟界の特質であつて、別に不思議のことではない。一旦好景氣に向ひ、事實以上の假想的の需要が現はれてどし／＼と物の價を競り上げる。併し反動が來ると相率て投げ出す。皆な人が臆病になつて買控へる。急轉直下することになる。好景氣の反動として恐慌に陷る、恐慌過ぎて暫らく不景氣續くのが普通の順序で、さう急には好景氣にならない。餘程强大なる好景氣の動機がない以上は、先づ社會心理上沈滯を續けるのが當り前で、まだ半年ばかりで、もう良い加減に好景氣に戾らぬであらうかなどゝ質問するのは、餘り虫が良過ぎるといふものである。

（二）

其處で問題は强大なる好景氣刺戟の動機が目前にあるかといふことである。處が遺憾ながら見渡した所其がない。例年下半季は輸出季だといふが、今年は何うか最大顧客たる米國財界が不況で警戒中であり、大統領選擧があり、生絲の滯貨があり、絹織物生產減が行はれて居り、生絲商が弱つて居るといふから、悲觀材料といはなければならぬ。第二の大顧客支那は何うかといふと銀相場の下落が對支輸出上には不利であるが、此方ばかりでなく、排日の氣勢尙ほ衰へず、特に最近には親日派政治家の沒落があり、決して此方も樂觀を許さない。今日困まつて居る所の我邦綿絲布の大なる滯貨も、支那さへ都合良かつたならば、容易に解決がついた筈であるが、其が出來ない所に、幾の日から見て事情の推移の甚しいことが、窺はれる。其他にしても歐洲諸國は購買力が乏しくなつて居り、南洋南米等では漸く日本品に對する不信用の聲が大になつて居る。到る處、思はしき販路もない、內地を顧れば事業は可なり多く休止減縮乃至解散となつて、資本家も勞働者も困つて居る。田舍も蠶繭不況で普ねく困つて居る。ただ米價の尙高いので持て居るが、此が今年の作柄が良くて米價暴落になつたら、田舍の人々が嘸弱るであらうし、反對に作が不良で、米價一段の騰貴にならば、都會の勞働者貧乏人が困らう。何れにしても厄介なことである。

（三）

尙ほ其外に一の壓迫は米國船舶令で、此が實施されたら、日本の船は活動上非常に困る。其には英國船なども困るといふから、日英共同抗議又は對戰といふことも考へらるゝが、英と日とは利害異り、英は英だけでも其廣大なる殖民地を以て抗爭す

ることも出來るので日本の道伴れにしないかも知れない。それなら日本單獨で米國に當り報復戰を初めやうといふのに、實は日本には經濟上之を爲すを利とせざる事情がある。其のみでなく最近には日本の西伯利亞政策に對する米國の抗議があり、其外交上の經過の如何に成り行くやにも少からず心配がある。其と共に日米關係は如何、日支關係は如何、凡べて外交上の不安は經濟上の不安ともなる。好景氣の時には左まで氣にも留めなかつたことが、不況になつて來ると、無闇に心配になる。

（四）

で決して樂觀は出來ない。勿論半年前の好況の復活などは夢想してはならぬ。今は其の當時餘りに樂觀し過ぎた反動もあるが、世界大局から見て此度の大戰後の疲弊の齎らしたる。不況の現はれるものをも認むべく、總て此先きあまり好況の望めぬものと觀念して、早く事業を整理し取引を始末し、是より新規蒔き直しで仕事に取掛ることとするより外はない。此先は人々は眞面目に計畫し眞面目に經營し、一日と雖も改良工夫を怠らない態度で經營し、暴利を貪らず專ら適當なる薄い利益に甘んずる心掛で往かなければならぬ。此態度此心掛で往くならば、我邦の海外販路も自ら大に開けるであらう。夫の數年前の如き好況は決して眞に我國力を增進する所以でない。今の不況時より出發し、右の如き眞面目な經營を初めるに於て、初めて眞に我國力の發展の基礎が確立する。今の不況は眞の不幸ではなくて、他日の幸の基である。特に日本は何といつても此大戰爭で物質的には得をして居る。在外正貨二十億近くにもなり、生産の材料並に設備は確かに戰前よりは增して居る。たゞ精神的では戰爭が餘り儲かり過ぎた爲めに墮落したけれども、今此不況に際して反省し改心したならば、此增大したる物質力を有益に利用することが出來る。日本の本當の發展は此からである。餘り悲觀し過ぎて失望又は絕望してはならない。

（五）

で私は日本の人々が此から心を入れ換へて眞面目に事業を計畫し經營したならば、假令世界一般の大勢が不況であつても、此間に立つて相當の地步を占めることの出來ないことはないと思ふ。併も何時までも半年前の榮華を夢想してはならない。此は斷然思ひ切らなければならぬ。新しい世界に生きる積りで往くより仕方がない。其處に永遠の樂しき世界が開かれるものと思ふ。斯く一般人心の革新が此際望ましいが、他方我國の外交政策の確立といふことも大切と思ふ。對米、對英對支此三大外交を如何にするか。此方が朝令暮改でぐら〳〵して居ては經濟界の人々は安心して計畫するを得ぬ。是れ亦當面の最大政治問題で、速かに擧國一致して攻究し確立しなくてはならぬと思ふ

議會政治を否認する思想

法學博士　堀江歸一

一、議會政治を否認する思想

近頃我國では一部論者の間に、議會政治を否認する思想が醸成されて居ると云ふことである。此說か果してドノ位の勢力を持つて居るか、私の知らざる所であるが、臨時議會の狀況などを見ると、氣の早い連中の間に、上記の如き思想を生じるのも偶然でないと思はれる。卽ち臨時議會の狀況を云へば、政友會が多數黨たるの故を以て、殆ど私黨に類する程度まで、横暴の態度を發揮したこととの一事で盡される。政府の提案は如何なるものであつても、必ず衆議院を通過する。反對黨議員の言論で、少し政府や政友會に不利のものがあれば、直に懲罰事犯を惹起す、懲罰まで持つて行けない言論に對しては、極度の妨害を加へ、議場を驅つて、一大修羅場と化せしめた諸點は何としても見逃し難き事實であつて、何處にも國事を議する熱誠や眞摯は見出されず、議會と云ふ處は亂暴雜言の間に、雜兵の頭數を數へて、勝敗を決する場所に過ぎないと云ふ感が頗る强烈ならざるを得ざるに至つた。

議會の內情を見れば、議會否認說に裏書を與へる動かす可からざる資料はあるやうであるが、然らば何故に民衆は盛に院外運動を起して、議會に飽き足らない所を民衆自身の運動で補はうとしないのであるか。普選案が衆議院の討議に上る前から。」上つた當日の如き、モット〳〵民衆運動が熾烈であり、普選案に反對する政友派の議員などをして面を上げるを得ざらしむ可き筈であるのに、民衆運動が存外薄弱であつたのは、何故であらうか。固より其一原因は警察權が此種の運動を未然に抑制し又其起つたときに、之を取締るに就て、全力を惜まざることに存するのであるが、同時に、民衆の熱の足らないこと、政治問題に就て理解を缺いて居ることも、有力な原因であることを否

定するを得ない。議會は何だか頼りにならない、然し我々はドウにかコウにか喰つて行けるから、大した事もあるまいと云ふのが、多數の人の考であつて、是れが民衆運動の起らざる所以であらう。

然し何時まで民衆が斯う云ふ醒めざる狀態に居るであらうか政友會を基礎とする原內閣が經濟上に暴政を縱にすれば、近年の國民生活難が起つたのではないか、暴政に對する善後處分を怠つたればこそ、今春來の恐慌が襲來したのではないか、恐慌が起つても、政府は殆ど何等の救濟策を講じないではないか、隨つて今や我國の經濟生活は不景氣と失業との兩方面から大なる脅威を受けて居るではないか。コンナ不都合な政府でも單に衆議院に多數を占める政友會に支持されて居る爲めに、何時までも政權を握つて居ると云ふのは、何たる不合理の事であらうか。斯う云ふ事實が自然世人をして議會政治其ものを否認せしめるに至るのであつて、我國でも政治と民衆の利害とを今日以上に接觸させることに力を盡さなければ、政治上に危險なる思想の釀成することは免かれないであらう。

二、上下兩院の關係

上下兩院は我國に於ては殆ど對等の關係に立つて居る。或る場合に貴族院が政黨內閣の組織や維持に對して、暗中から妨害を加へたり、公然の反對を試みた際には、國民は上院其ものを非難して已まなかつたが、今日に爲つて見ると、政黨の跋扈を制するに就て、有力な機關と爲るのは、實に貴族院に外ならない、貴族院あるが故に、或る程度まで政府の非違横暴を制止するを得るのは、掩ふ可からざる事實があつて、今度の議會に於ても、種々の機會に於て、此點に就て貴族院の本分を發揮したやうである。國民が各自の是なり信ずる政治の行はれることを衆議院に求めずして、却て其非なりとする政治の貴族院に依て抑止されることを望むと云ふのは、何たる政治上の錯覺であらうか、私の甚だ不快に感ずる所であるが、事實は之を如何とも致し難いのである。

貴族院には政友會系の團體があり、又憲政會系の團體もある夫れ〱各政黨の政權を掌握した時代に、勅選された議員が中堅と爲つて居るやうであるが、此事實から考へると、議會は結局貴衆兩院を通じて、議員の屬する政黨政派の別に依て、縱斷されるに至るやの趣なきを得ない。然し私は貴族院が斯る政爭の渦中に投ずるよりも、同院には政爭に動かされず、至公至平

國事を裁斷する團體あつて、或る時には政黨內閣の橫暴を制する作用を爲すに至ることを希望する。某侯は臺灣山林の拂下で某子は特殊會社の社長に就職する內約で、某會員の多數は權利株の分配で、何れも政府に懷柔されたとか、買收されたとか云ふやうな風說は今期議會を通じて、私の屢々耳にした所であつたが、貴族院議員たるもの、今少し自重することが出來ないものであらうか、衆議院の現狀の亂脈なることに對して、私は特に此感を深くせざるを得ないのである。

三、各種の利益問題

今度の議會で利益問題として、最も士人の顰蹙する所と爲つたのは、國務大臣の株式投機事件である。如何とも辯解の辭はあらうが、市價最も高かつた時に、株式を賣却して、私利を謀つたこと、妻子眷族の名義に屬する株式を主人自ら管理處分の任に當つたことの諸點は明白の事實であつて、殊に文部大臣の如きは、自家に使役する下婢に十數萬圓の價格ある株式を贈與したと云ふ常識で解されない言を弄して、辯解に充てやうとしたことなどは、誠に醜態の限りを極めたものである。大藏大臣や農商務大臣が國政を疎にして、一身一家の理財に忙はしい、文部大臣は虛言を吐ひてまでも、自家の非行を蔽うとする、而して與黨は是が非でも斯る嫌疑を蒙つた大臣を保護しやうとして、恰も博徒仲間で自分等の身內の者の罪科を犯した場合に、彼を曲庇すると同樣の態度を取つたとして、如何にして議會政治の下に、社會の秩序が維持されるであらうか、却て其破壞されることを嘆ぜざるを得ないのである。

鐵道國有と云ふ根本方針は既定の事實であつて、今更ら國有鐵道を民有に移さうとか、半官半民の組織に移さうとか云ふやうな計畫もなく、議論もない今日、政府が殊更に半民半官の電力會社を或る保護の下に、成立させやうとするが如きは、內部に深い魂膽の藏されるものと見なければならぬ。貴族院に於て此法案が握潰されたに就ては、朝鮮開墾會社補助案の否決と同じく、營利を夢みだ議員達を失望させたかも知れないが、同時に貴族院をして、相當の働きをしたのであつて、邪の正に勝つ能はざる所以の證據とも云へやう。

四、責任觀念の消磨

尼港事件で陸軍大臣は二枚舌を使ひ、瀆職事件で、大藏、農商務、文部三大臣は其品性を疑はれ、更に大藏大臣は自己の提出した所得稅法案に對して、一度ならず、二度ならず、或は與黨自身に依て、或は貴族院に依て、修正を受けたに拘はらず、

平然として其地位に安んずるに至つては、彼等に責任觀念の缺如して居るのは勿論士人の待遇すら與へられない人物であると云はなければならぬ。

始め所得税改正案の前期議會に提出された當時大藏大臣は所謂源泉主義から、綜合主義に移することを以て、改正の骨子とし、此點に重きを置いたのである。然るに修正又修正の結果議會を通過した改正案では綜合主義は大概打破されて、餘程多くの點まで源泉主義に復歸して居る、夫れでも大藏大臣は恬然職に居り、自分の理想(若しありとして)自分の主義(是れも前同斷)に背馳した改正を實行する衝に當るのである。是れが責任を重んじ、所信に生きやうとする立憲政治家の爲す可き所業であらうか。彼等は尼港で幾百の同胞が殺されやうが、自分の提出した法案が蹂躙されやうが、之に對して何とも感じない一種獨特の神經を備へて居る人々であると云はなければならぬ。

大藏大臣の責任として、最も重要なことは豫算の實行であるが、彼は今年度の豫算を實行するだけの自信を持つて居るであらうか。二億幾千萬圓の公債を募集しなければ、今年度の豫算は到底實行されないが、是れだけの公債は金融市場の現狀では何としても募集さる可くもない、郵便局を經由して發行することも、經濟社會が不景氣に襲はれ來つた今日に於ては、容易に望まれないであらうし、結局公債財源は日本銀行に公債を背負ひ込ませて、調達する外に、然る可き道はなからう。斯くて再び通貨が膨脹して、物價が騰貴するか、少なくとも其低落せんとする勢を遮斷するのは、當然の成行であつて、此點から大藏大臣は世間攻撃の焦點たらざるを得まいし、又日本銀行と云つても、幾ら政府の命であるとして、政府の要求するだけの公債を引受けるであらうか、疑問とせざるを得ない。

以上の點に就ては、衆議院で憲政會側から議論があり、又貴族院でも相當に問題に上つたには、相違ないが、兎に角斯う云ふ實行の能否の明かでない、又無理に實行した場合に、弊害の百出する豫算が成立するに至つては、我國議會の信用の爲めに之を惜まざるを得ない。財政當局者は昨今明年度の豫算編成に腐心しつゝあるさうであるが、明年度は兎に角、今年度の豫算だけなりと、滿足に實行し得る工風を講ず可きである。恐慌以來經濟社會の恐慌心は容易に一掃されず、公債の發行も容易に出來なければ、租税の收入も減少すると云ふ狀態で、豫算の實行は何と爲るであらうか。後は野と爲れ、山と爲れと云ふ流義で、一年一年の豫算を編成して、役目を濟ませるやうな大藏大臣をして何時までも職に安んぜしむる國民の呑氣さ加減に至つては、唯驚くの外ないのである。

日本社會主義同盟の組織を評す

日本社會主義同盟は我國社會主義史上の一轉機

早大教授　北澤新次郎

目下計畫されつゝある日本社會主義同盟が首尾能く實現する事が出來たなら（吾等は之れを非常に疑ふ。何故かと云ふに目下官憲の態度を見ると到底出來そうもない樣である）確かに我國社會主義進化の一轉機であると云つても過言でない。蓋し從來我國に於ける社會主義を信奉する者が社會のあらゆる方面よりも抑制迫害され其れが爲めに彼等の經驗した艱苦の多大なるは實に深刻なるものがあつた。そして此の抑壓狀態にあつて尚我國の社會主義者が其の主義を固執し、且つ其の宣傳に餘念のなかつた事は吾等の敬畏する處である。しかるに最近世界に澎湃として漲る諸種の新思想の勃興と共に社會主義思想も急激なる速度で高潮して來り、從來の社會主義者と稱せられた人々以外にも社會主義的傾向の所有者が數知れぬ程顯はれて來た。尤も只一言に社會主義と云つても種々樣々な色彩があるが、兎も角社會主義的思想に共鳴する者が增加し、之れが啻に智識階級ばかりでなく、勞働者の階級的に覺醒するに及んで勞働者の間にもかゝる思想が次第に廣がつて來た。これは一面には時代思潮の進展の影響である事は勿論であるが、他方に於ては從來の社會主義者と稱せられたる人々の間斷なき熱心なる宣傳の結果であるとも云へる。

然しながら何んと云つても今迄の社會主義者は其數に於ても、從つて其の力に於ても比較的强大であつたとは云へない。のみならず殊に我々此等の人々の種々の內的事情を知らない者が兎や角云ふ事は頗る僭越かも知れないが、此等の人々が御互に何等かの事情で相爭ふて居り、其の必然的歸結として其勢力

を目[illegible]自らが弱めて居りはしまいかと憂へさせる事がなくはなかつた様に思はれた。尤も共處が新思想の所持者の長所でもある。かの官僚閥や軍閥者流の如き頑迷者流の仲間では總體が命令と服從と虚飾と形式とで鐵筋コンクリート式に堅められてあるから外觀的には秩序整然として居るが新思想所有者は何處迄も個性と自由を尊重するから、自分の意思を無遠慮に吐露する結果、屢々衝突や爭論が起るのである。斯くしてゐる裡に進歩と向上とが可能であるが、時によると餘り喜ばしからぬ極めて些細なる感情的な無見識な事項に就て相互に鎬を削つて居つた事もありはしまいかと思はれた。斯かる私情に囚はれて相互に相反目し、彼方の使命を忘却しないでも、之れを一時的にも等閑に附す事があつては誠に殘念であるが故に、矢張り細少の諸點はさて置いて大體の點に着眼してマルクスの「世界の無産者よ團結せよ」の勸告に從つて協力すれば、夫等の人々の勢力は益鞏固になるのではないかと思はれた。這回の計畫は此必要に加ふるに四圍の形勢と機運が好都合である處から其の同盟の發生せんとするに至つたのではないかと信ずる。

此事は今回の日本社會主義同盟の趣意書を見ても能く理解せらるゝ處で且つ同盟が或る一定の型にはまつたものでなく、極めて廣い意味の社會主義者の結合である事は其の發起人の顔觸を一瞥しても會得せらるゝ。即ち此等の人々の内に從來社會主義者と稱せられたる人々もあると共に友愛會信友會正進會、交通勞働組合、時計工組合、鑛山勞働同盟等に屬してゐる者もある。又帝大の新人會、早稻田の建設者同盟、並びに曉民會、法政の扶信會に加盟してゐる者もあり、更に文化學會、北風會等の思想關係を形ちづくつて居る人々もある。斯くして總べての社會主義的傾向を有する人々が過去の感情と反目とを水に流して御互に協同的の歩調を取る事になる事は誠に有效なるとだと云ふのに歸結しだのであらう。

然るに傳聞する處に依ると官憲は該同盟の設立を許可せぬ方針であるとも云ふ。又既に同盟事務所より將に配付せんとしたる同盟規約ビラの發賣及頒布を禁止したと聞く。實に無鐵砲無茶と云ふ字は斯かる場合に適合する言葉であらう。由來膽量の豆ツブより細少な當局者は白衣を見ても恐ろしき幽靈かと戰慄し、社會主義と云へば直に一も二もなく國家を顚覆する陰謀の如く思惟するは此上もなき誤解謬見である。事の本體を見極めずして皮想的な觀察をして急いで見當外れの結論に到達する位危險思想はない。十數年前我國の頑迷なる官僚は「社會」と云ふ

守を聞いた、其の瞬間に於て戰慄恐愕し、其當時の所謂新進思想家現在は大部分は墮落して協調主義學者となつたが大學して社會政策學會を設立したる時は、之れを危險團體として之れを恐れ、其の會員を危險人物として取扱つた事がある。處が其後時の力と原首相の不可抗力に依つて歷代の內閣及官僚輩に到る迄社會政策なる社會と云ふ字のつくものを振りかざさねば民心を收攬する事が出來なくなつた程、彼等は或意味に於て進化したのである。尤も之れは彼等が自發的に好意に左樣するのでなく、四圍の形勢が餘儀なく、彼等を强制したのである。だから已むを得ずやつて居るのであるから、眞實の處は彼等の化石の如き腦裡には浸潤して居らないのである。從つて今日に於ても未だ社會主義と云へば無暗に惡質の危險思想であると思つて之れを罪惡視してゐる。然し彼等時代錯誤的頭腦の所持者の深く考慮しなければならない事は彼等が無差別的且無方針的に社會主義者の團結を抑壓する其の歸結である。自分等はクド〱しくは論ずる必要がない。唯政府者は未だ彼等の何等知識のなき新思想を抑壓する政策の如何なる結果を來すかをせメて相當に飜譯の出來得る屬僚に命じて歐米諸國の實例を調べて熟知する事が肝要である。今回の日本社會主義同盟は其の設立と共に或は其れ以前に禁壓する事が出來るであらう。然し其れが形式的に實現出來ないとしても其の氣分が晝夜を別たず刻々として進展し行く形勢は之れを阻止する事は出來まいと信ずる。兎に角其れが事實設立せらるると否とに係らず、斯くの如き團結が必要である事が社會主義者の間に認識せられて來た結果であらうと信ずる。

時勢の大石が轉落し始めた

菊地寛

資本主義を基本とする現在の社會組織が、ホンの一部分の者のために、多數の人間を如何に不正に不當に虐げて居るかと云ふこと、又それに對抗して起つた社會主義の理論が大體に於て眞理であることは、少しでも思索的良心のある者の否定し得ない所であると思ふ。

世の中が、社會主義化することは、たゞ時の問題である。時と手段の問題が殘つて居る丈である。

社會主義その物が、合理であると同じやうに、社會主義化する手段も、出來る丈合理でありたいと思ふ。改造の徑路に於て日本が現在の露西亞のやうな混亂に陷ちるか、何うかは現在の日本國民全體の心掛一つにあると思ふ。勞働者が自覺して、猛獅の如く立ち上る前に、現在の特權階級が飜然として、その非を知ることが、緊急なことであると思ふ。維新の時の大名の版籍奉還が、多く混亂から日本を救つたやうに資本家が自覺して彼等の不當な不正なことから脫出すことが、將來の日本を混亂から救ふ、第一の良策である。

どうせ一度は、投げ出されなければならない以上、彼等が自から進んで投げ出すことが、ヒロイツクであると同時に、資本主義のせめてもの罪滅しとなるであらう。さうした贖罪に依つて新しき社會組織に於ても、資本家たりしが故を以て、継子扱ひにされることから免れ得るだらうと思ふ。

が、人間の慾は、限りがない。資本家達が「まだい丶〱」と、彼等の贅澤な坐り心地よい椅子から、腰を上げないで居る內に、「まだい丶」筈であつた世の中は、何時の間にか「もう遲く」なつて居るだらう。進んで投げ出し得る權利と機會とを失つた時は、大なる時勢の鐡腕は彼等の位置を奪つた上に、彼等自身さへが何人からも徵集しなかつたやうな延滯利息を責めはたることだらう。

社會主義など丶云つて、一部の人々丈の主張議論だと思つて居る內に、それが何時の間にか現在の社會組織の下積になつて居る國民の大多數の思想となり宗敎となり信仰となつて行くだらうと思ふ。

社會主義者の同盟を警視廳で禁ずると云ふ。國家主義資本主義の宣傳機關として、國家のあらゆる機關を利用し得る政府が、力も金もない烏合の集の同盟が何故そんなに恐ろしいのだらうが、その恐怖は烏合の集に對する恐怖でなく、彼等が懷いて居る眞理その物に對する恐怖だらう。そして、それは確に彼等の恐怖に價して居る。

現在の政府當局者は、よく何々調査會と云ふのを起すのが好きだ。社會主義者の同盟などを取締る前に、眞に時代を知る燮世の人々を集めて、社會主義を基本とする大改造調査會を作つて、改造の手段と時期とを考究したら何うだらう。

「まだ大丈夫だ」と思つて居る中に、一度時勢の大石が轉落し始めたら、觸る丶ものを悉く慘害しつ丶何處まで落ちて行くか分らないと思ふ。

不合理な禁止

大庭柯公

社會主義に對して、我が政府は依然禁止主義若くは壓迫方針を採つてをる。西園寺内閣時代に一度社會黨の成立さへ是認したことのある以外、此の禁止主義若くは壓迫方針は、十數年來同一で何んの變化もないと言ふ外ない。私は私自身本來の率直な考へからして、政府のこの禁止若くは壓迫の方針を、如何にも不合理千萬な事として、不思議に堪へぬものである。

第一社會主義の文書による講釋は可い、學究的研究は可い、併し口舌による講演々說は相ならぬ、學者以外の者共の研究は危險と見做すと云ふ理由は、どうしても正當な理由ではなく、國民を承服させるに足る理由ではないと思ふ。研究と宣傳、理想と實行との境域は、一體何を標準として政府はそれを定めるのであらうか。立派な學者——といふ意味は政府者の立場から見て、安心の出來る位地にゐる學者が、社會主義の研究をやつてゐるとする、そして其研究を社會公衆の前へ發表してゐる。そしてこの場合個人的の研究が、既に公衆の研究と變じてゐる。則ち一種の宣傳が行はれたことによつて、公衆の研究と變つた以上は、元の個人の研究は明かに一種の「實行」ではなからうか。ツマリ研究が何時の間にか主張となり、宣傳となり、宣傳が當然の結果として、多數の信仰者を得たと云ふことである。則ち此方法が一方で明かに行はれて居るのに、單に「私は社會主義者です」と名乘つた者だけには、此の研究乃至主張及び宣傳が許されないと云ふことは、何んと云ふ非條理的な偏頗な處置であらうか。

第二には「社會組織の變更を理想とすることが悪い」と云ふか。日向の新らしい村はどうだ。「理想とする」どころではなく明かに「實行」してゐるものではないか、その所謂變更の程度に差違はあるにしてもが、彼等も亦現在の社會組織を變へることを理想としてゐるものではないか。假令小規模にしても何んでも、一方で現に此種の「實行」の許されてある傍で、單に社會主義だけに、「實行」どころか主張も宣傳も許さぬといふことは、非條理千萬な偏頗な政策であると私は思ふ。

第三世界の列國今日では、社會主義者の團結及び運動を公認してゐない國は殆んどなからう。社會黨の結黨を許さぬなどと

いふ國が何處にあらう。何處の國の社會黨も、理想は理想、實行は實行で、可なりな奮鬪こそしてゐるが、理想の標的までにはどれも到達することは出來ずに、唯だ出來る範圍の「實行」に努めてをるので、その現に成し能ふ範圍の「實行」ぞけは、何處の國でも公認されてゐる。然るに我國では單に「社會主義者」といふ名だけで、實行も理想も何も總てを禁止する。即ちそれは道理に基いた政治政策でないことを自證するもので、唯だ或る階級との便利のみを念ふての――それが爲めには道理も眞理も沒却してまでも顧みる所のない――政治であると言ふ外ない。

第四今度社會主義者の團結が出來たについても、出來かゝる時分に政府は早くも打壞しにかゝつたと云ふ。政治はモット公明にありたい。出來上つた上で其運動方法でも激烈に亘つたと云ふやうな場合には、禁止するも不可ではなからうが、まだ卵のうちに打壞すとは何事であるか。從來より厄介なものが出來上るか、安心なものが出來上るか、性質が普遍化するか、新入加盟者がどんな考を有つてゐるか、そんな事は成立して後に之を吟味して然るべきことではないか、瘦せても枯れても一國の政府ではないか、警保局の役人共も、もつと肝たまを大きくするが可いではないか。社會主義者が何んだい、やつぱり普通の人間ぢやないか、それを化物か魔物のやうに、人でも國でも取つて喰ひでもするかのやうに、まだ化けもせぬ先から退治などは大國の爲政者として恥づべき遣り方である。

一方同盟聯合した社會主義者も、從來通りの小ぜり合ひは止めにせよ。止めたから同盟が出來たのだと云へば夫れまでだが大同に合して大に氣勢を擧げるが可からう。併し氣勢を揚げると云つても、可哀さうにたゞ巡査ふぜいをなぐつたり何かするやうなケチな眞似は止めにするに限る。なぐるならなぐるべき時に、なぐるに足るものをなぐるがよからう。同盟が出來ての私の感想はこれ丈である。（八・一六）

社會主義同盟の死產

大山郁夫

一

社會主義同盟は、まだ產まれない前からその筋に依つて殺されることになつて居ると聞いた。まさか、と思はれる樣な話だが、しかしその豫告と規約草案とを載せた印刷物が既に押收せられたと聞いたから、或はそんなことがあるのかも知れない、赤ん坊の手をねぢるといふことはあるが、まだ產まれない赤ん坊の咽喉首までを締めなくてはならないとは、『その筋』も可なり氣骨の折れた筋だといはなければならない。

社會主義同盟が運命づけられてゐる死產！　斯う言ふと如何にも陰慘な悲劇的氣分になる。けれども、そんな氣分になるのが、あたまから間違ひであるのかも知れない。政府の思想取締りのことを眞面目に考へ込んでゐた日には、いくらかでも思想問題に首を突込んでゐるものは、毎日鬱ぎ込んでばかり居なければならないことになる。——尤も例の『閻魔帳』に關係のない安全思想家達は別だが。——取締る方が得意になつて暢氣に世の中を渡つて居るのに、取締られる方だけが毎日鬱ぎ込んでゐるなんて、そんな馬鹿げた話があつて堪るものでない。して見ると、こつちの方でも、斯ういふ問題はもつと陽氣に考へて當局者が幽靈と履き違へた枯尾花と必死になつて取り組んで居る圖でも描いて、それを見て樂んで居る方が、餘つぽど悧巧な少くとも『現代式』にかなつた行き方なのかも知れない。

それにしても、我々はなぜこんなに、物事を一つ一つ皮肉に見なければ生きて行けないのだらうか？　我々はなぜ一切の物事を正面から素直に見て、そしてその見たまゝを率直に何のこだわりなしに述べることが出來ないであらうか！——いけない、いけない。また愚痴になりかけた。しかもそれは我々がもう百萬遍も繰返した愚痴だ。そんな愚痴の使ひ古るしを今更のやうに持ち出さうよりは、例のもつと陽氣な氣分になつて、そしてもつと『現代式』に行つて、この問題の滑稽なsideを見てやらう。それは、どうせ問題が思想取締りといふことに關係してゐるのだから、それには屹度滑稽sideの一つや二つはあるに決まつて居ようではないか！

二

から考へ直して、も一度我々の問題を振り返つて、何かそこに腹の皮のよれるやうな種がないかと見ると、ある！ ある！ 社會主義同盟の取締りが、例の大愛嬌ものゝ大本敎の取締りと妙に絡み合つて、場面が餘程面白く展開して來てゐるのである本來ならば幾分悲劇氣分を帯びて居る筈の『社會主義同盟の死産』劇の幕間に、道化の大本敎が飛び出して、舞臺の上で散々にふざけ散らして居るところが、例の怖わいおぢさんのお眼玉に止まつて、頭から一喝を浴びて首をすくめたかと思ふと、相手のおぢさんの態度が、危險思想に對する時の態度とは違つて幾分のゆるみを見せて居るのを見て、忽ちもとの元氣に歸つてまたく＼減らず口を利き始め、しまひには新聞を發行して大に『敎義』の宣傳をやるなどゝ、際限もなく發展して來かけた。そこで喜劇氣分が、大に高潮して來た。

三

その次の場面では、ハムレット擬ひの、しかしもつと間抜け顔をした男が出て來て、一かどの哲學者氣取りの態度で、舞臺の上を歩るき廻はりながら、次のやうな獨白を言ふ。

『迷信と危險思想！ もつとも「危險思想」ツて、それは何も騒ぐほど危險なものではなく、殊に日本の新聞雜誌なんかに出て居る「危險思想」なんてものは、本物の「危險思想」の卵子にも當らないものなんだ。けれども社會問題に關する議論などゝ來ると、當局は馬鹿に警戒して、すぐそれに「危險思想」の赤札を掛けて馬鹿騒ぎをするんだ。知つたか振りの評論家といふものが「思想は思想で戰へ」といふやうな、尤もらしいことといつて居るが、それが當局の耳に入らないのか、それとも生憎思想の持合せがないので、思想で戰ふ譯に行かないから、「國家權力」といふ大業物を振廻して、生優しい「危險思想」に當るのか。どちらにしても、隨分人を笑はせる。其角とかいふ昔の俳人が、大刀で背を斫られた夢から覺めると、からだのどこかに蚤のあとがあつたので、『斬られたと見たは夢かや蚤のあと』とかいふ發句をよんだといふが、今俺はそれを思ひ出さずに居られない。「國家權力」といふ大業物を振上げて、腕を刺した蚤を追ひ廻はすなんて餘程珍な圖だ。

『迷信の方だつて同じことだ。殊に大本敎のやうな道化めいたものを國家權力で取ツちめやうなんて、餘程振つてゐる。大本敎が日米戰爭を豫言しようが、世界戰爭を豫言しようが、そんなことを眞に受けるものは、大本敎の凝固り屋になる程のもと

くからの馬鹿者どもだけだ。そんな馬鹿者どもは、どうせ濟度が出來ない代物だから、何でも信じたいことを信じさせておくがいゝ。もつとも悧巧で大本敎に歸依して居るものも澤山あらうが、さういふ手合は、馬鹿げたことを信じて居るやうな顔をして居ると金になるから好い加減のことを言つてゐやうが、內心ではせゝら笑つて居るに相違ない。彼等には何でも、好きな豫言をさせて置け。いくら日本の安寧秩序でも、まさか彼等の世界戰爭の豫言位では紊亂されまいよ。そんな「言論」をさし置いては、外國の疑惑を招くといふのか。馬鹿な！對支二十一個條や、シベリヤ出兵でもあるまいし、外國が「何年何月に世界戰爭があつて、日本が勝つぞよ」といつたやうな氣違ひの世迷ひ言めいたことで氣をわるくするものか！』

四

似而非ハムレットの獨白は尙ほつゞく。

『それにしても、當局が迷信と危險思想とを一つに取扱つて居るのは、無論無意識でやつたことであらうが、茶氣があつて、餘程面白い。

『最も迷信と危險思想とは、双方の間に全然交渉がない譯ではない。迷信が廣がるやうな社會は、いづれ變態的社會に違ひないが、さういふ變態的社會には、社會改造論が最も要求せられるのだ。この社會改造論は、當局が「危險思想」呼ばゝりをして居るやつだ。しかし、社會改造論は、社會からみれば危險思想でも何でもなく、實は社會そのものゝ要求に應じて出たものなのだ。それだのに、それを一律に「危險思想」扱ひにする當局はこの點に於ては、まるで社會と衝突してゐるやうなものだ。當局と社會との衝突とは一寸奇拔だ。

『しかし、當局が社會改造論系統の思想を「危險」扱ひにするのは、考へ樣に依つては、全然無理でないやうにも思へる。といふのは、當局が信條として居る——少くとも思想取締りの標準として居る一種の國家主義は、ヘーゲル流の國家哲學と國史に對する或る神秘的解釋との結合から生れた混合兒のやうなものであつて、俺たちの眼から見れば、それも矢張り一種の迷信であつて、科學的批評に堪へないものらしい。ところが社會改造論などを叫ぶ連中は、どうかすると、かういふ國家主義の批評をしたがる。縱しまた正面からそれを批評しなくとも、彼等は社會問題の合理的解決をやかましく言ひ立てるのだが、それが

つまり、當局の虎の兒である國家主義に對する間接の批評になるのだ。だもんだから、當局がそれに對して、假借なき警察眼を向けるのだ、當局も馬鹿げたことをするものだが、社會改造論者たちも、始めからその位のことは覺悟の上でやつてゐることだらうから、文句はいへまい。』

五

獨白はだら〳〵とまだつゞく。

『しかし、當局の思想取締の規矩準繩である一種の國家主義が俺たちの眼には矢張り迷信に見えるのだから、迷信は迷信づれで。大本教といつたやうなものとは、仲が善さうなものだが、さうゆかないのは、どうしたものだらう。』

『いや、待てよ。それにも譯がありさうだ。思想の取締りに關して當局を導いてゐるやうに見える一種の國家主義は、同じ迷信でも、いはゞ「高等迷信」といつたやうなもので、中々種がわからないやうに、複雜に仕組んであつて、その上に哲學の鍍金が掛けてある。「國家は道德の體現であつて、それに隷屬するのは、各人の至高義務だ」といつたやうに、ヘーゲル派の國家哲學の鍍金も掛けてある。それだから、相當の教育を受けた連中のうちにも、この高等迷信に隨喜渇仰してゐる手合が可なりある。で、當局が常識で迷信だといふことが判り切つてゐる。大本教のやうなものに敵意を見せると、當局はつまり、どこまでも迷信には反對だといふことに見られる利益がある。いよ〳〵當局が迷信反對といふことに決まれば、ヘーゲル流の國家哲學の鍍金も、それに隨喜渇仰して居るものらの眼には、ます〳〵光彩陸離なものと見えて來よう。それだとすると、當局も中々考へたものだ。』

六

獨白はまだ〳〵うるさくつゞく。

『だが待てよ！當局が社會改造論系統の思想と迷信とを一樣に扱つて居るのは、實はそんな込み入つた考へからではなく、もつと實際的な着眼點から來てゐるのかも知れないて。』

『原首相は、議會でゞも、また政友會の各種の會合でも、頻りに近來國民思想は惡化して來たが、政府はこれに對して極力善導政策を取るつもりだといつたり、また或る場合にはもつと脫線して、ヨーロッパ諸國では大戰前には國家の基礎を危くする樣な思想が流行したこともあるけれども、今日では餘程眞面目になつて來て、穩健着實な反動思想が再び勢力を盛返して來る・やうになつた(!)から、我國でもこれに倣はなければならない

といつた様なことを述べてゐる。これは現內閣の思想取締りに關する方針を表明したものに違ひない。してみると、內務當局の對思想政策は、今後一層嚴重になるかも知れない。それは、單に社會主義者及び社會主義的傾向の思想家等を糾合して組織しようなどといつて居るにすぎない社會主義同盟の計畫のやうなものにまで干渉を試みようとするほども、それほども嚴重になるかも知れない。そして、それがまだ產れない前からその絞殺を企てるほども、それほども嚴重になるかも知れない。殊に公然とかういふ會を組織しようといふのを禁止すると、それが秘密結社を奬勵するやうな結果にならうかも知れないのに、そんなことに構つて居られないで、唯一圖にそれを禁止することに腐心するほども、それほども嚴重になるかも知れない。

『それにしても、まだ海のものとも山のものとも決まらないこの思想團體を、それがまだ出來上がらないうちから打壞しにかゝるなどは、殆んど信じられないやうな話だが、もしそれが事實だとすると、當局の言論思想といふものに對する取締りが餘りに嚴重すぎるといふ非難が、持上がらないものでもあるまい。

『けれども、我當局にして 、特に社會改造論系統の言論思想だけに對して過酷な態度を採つて居るやうに思はれたくないに決まつてゐる。そこで、他方に於ては大本教のやうな迷信でも取締つて置いて釣合を取らうといふことに落着いたのかも知れない。そして「苟くも安寧秩序を紊亂する疑ひのあるものは、過激な社會主義でも、大本教のやうな迷信でも、一様に嚴重に取締る」といつて見得を切ることになつたのかも知れない。さうだとすると、當局の深謀遠慮と周到細密とは、大に感歎に値する譯でもあるが、しかし、折あしくそこに居合はせた道化の大本教こそ、いゝ面の皮といふものだ。

『けれども、社會主義同盟が果して時勢の必要に促されて產まれようとしたものならば、その組織者らが眞面目に行動する限りは、一つの大なる社會力となるやうになつたかも知れない。そして若しこの點から當局が一種の脅威を感じて、それを生れない前から絞殺しようと計畫してゐるもの、假定すれば、まだ生れない赤ん坊の威力も大したものだ、といはなければならぬ。そして縱しその赤ん坊が死產の運命を免れないとしても、その赤ん坊を孕ませた一方の相手たる時勢は、第二、第三の赤ん坊の種をどこかに撒きちらすかも知れたものでない。……』

似而非ハムレット先生の獨白はだん／＼熱を帶びて來かけたが、同時に、それだけづゝ面白味が減つて來かけたから、私は中途で先生に失敬して、喜劇見物をよすことにした。

新時代に適應すべき新敎育

所謂女子敎育よりの解放

――（良妻賢母主義の批評）――

森戸辰男

一

現代の女子は何よりも先に、所謂『女子敎育』より解放されなければならぬと思ふ。何故なれば、『女子敎育』の根本精神は、啻に敎育の本義と隔絶してゐるのみならず、正にその正反對に立つものであるから。

敎育の本義は、自由なる人格が出來上る手助けをすることにある。少しく誇張して云へば、敎育の目的は、眞實の人間を造り出すことにあるのである。奴隷、卽ち生きた器械を造り出すことは、それが如何に有効且つ巧妙に行はれたとしても、それは敎育の本義への叛逆でなければならぬ。然るに、今日我が國に行はれてゐる正統的『女子敎育』は、以下述べてあらうやうに、女子から自由人を造り出すのではなく、丁度その反對に、彼等から奴隷を造り出すことを以て、その最も重要なる使命となしてゐるが如くである。

現代國家の中にあつては、敎育の名に於て、此の似而非敎育を强要されつゝある三つの集團がある。それは女子と勞働者と被征服民族とである。而して、此等三者に對する敎育の基調は、良妻賢母主義とか、同化政策とか、協調思想の鼓吹とか、色々に奇麗な名で呼ばれて居るが、要するに奴隷敎育である。と言ふものは彼等の敎育の期する所は、此等の者を人格として尊重し彼等をして自由にその個性を發揮せしめ、彼等をそれぞれの支配者と對等の地位に立たせようとするのではなく、却つて、精神的方法によつて征服の事實を確定し、それぞれの支配者の優越地位と彼等の隷屬的地位とを刧久化することに存してゐるから

である。女子と勞働者と被征服民族を合算すれば、人類の大部分は其の内に包まれることになる。而も此の大多數を有する彼等は、教育の名に於て眞實の教育から妨げられつゝあるのである。果してさうだとすれば、近代國家の下に於ける教育の發達なるものが、如何に多く人類の福祉に寄與したかに就いては、自ら別の判斷があるべき筈である。

二

丁度、宗教が國家と結び付いた時、外面的に非常な發展を遂げたにも拘らずその內的生命は著しく損傷されたやうに、教育が國家と結び付き、國家の事業となる時にも、同樣な危險が常に伏在するのである。國家は教育の普及に逸大な寄與をなし來つたし、又之れから後もさうするであらう。と同時に、教育が其眞使命から誘ひ出されるとも亦、此時其端を發するのである。

支配階級は國家と云ふ政治的機關を通してその理想と利益とを實生活に實現しようとする。それは勿論、軍隊、警察、法律と言ふやうな露骨な手段を好んで用ゆることもあるが、また同時に宗教、道德、教育と言ふやうな精煉された手段にも訴ふるのである。かくて、吾々の今問題としてゐる教育——特に道德教育——は、屢々支配階級の理想のプロパガンダに利用されるに至るのである。勿論、支配階級のプロパガンダは教化と言ふ名前を以て呼ばれるであらう。公設の機關と公儲の人員とを以て、最も大規模に最も永續的に行はれるであらう。併し此の事のために、それが支配階級の人生觀、社會觀のプロパガンダであると云ふ事實は、少しの變更も受けるわけのものではない。多くの人々が、そのプロパガンダであることを氣付かぬと言ふことも、そのプロパガンダが、最も一般的に最も巧妙に行はれたために、甘く成功し來つてゐる、ことを證するだけのことである。所謂『女子教育』なるものも亦、その根本に於ては此の支配階級——此の場合には男子——の理想並に利益のプロパガンダの一つに他ならぬ。而して此の理想並に利益を最もよく現した合言葉は、所謂『良妻賢母主義』である。

三

現代の所謂『女子教育』の基調は『良妻賢母主義』である。所謂『女子教育』は此の思想の宣傳機關に他ならぬ。『良妻賢母主義』と言ふ名前共者は、溫情主義や善政主義と同じやうに非常に立派なものである。恐らく、溫情よりも冷酷を、善政よりも虐政を、推賞する者が少いだらうやうに、惡妻愚母を主義とする人も亦稀であらう。母となれば賢い母、妻となれば良い

妻、此の理想を何人が批議し得るであらう。そして、今日の所では、女子の大多數はやがて、妻となり、母となるのであるから、此の意味に於て、女子教育が良い妻と賢い母とを造ることを重要なる目的としてゐることは、寧ろ妥當なことであらう。併し、所謂良妻賢母主義は、斯樣に單純な自明の理を主張するのではなく、更に深遠(?)なる意義を藏してゐるのである。

四

然らば、良妻賢母主義の教育は何を謂ふのであるか。

良妻賢母主義は、其の字の示すやうに、凡ての女子を良妻賢母に育て上げようとする教育である。先づその積極的意義に就いて考へて見ると第一に、それは女子をし妻たらしめ、母たらしむるため、の教育である。玆に注意しなければならぬことは、母と言ふ言葉も妻と云ふ言葉も、著しく、特に性に着目した言葉であり、而も、それから吾々の想像するものは、單なる自然的意味に於ける妻若くは母、卽ち子を生み育てる者、若くは男子との共同生活者と言ふことではなくて、歴史的に定められた女子の社會的地位である。そして、此の女子の社會的地位は、幼にしては親(男)に、嫁しては夫に、老いては子(男)に從はねばならぬ隷屬的地位である。此の奴隷的地位のために、政治上の形容を藉りて云へば、男權專制の王國である所の家庭の臣隷として、凡ての女子を育て上げることが、所謂『女子教育』の使命である。かくて、凡ての男子は如何なる者も、常に一人の奴隷のタイラントたるの權利を與へられ、凡ての女子は心身を擧げて一人の獨裁君主に奉仕しなければならぬと言ふ社會的義務を課せられる所の社會秩序が成立つのであつて、『女子教育』は實に此の社會的義務のプロパガンダによつて、此の如き社會秩序の確立に資せんとするのである。

從つて、良い妻賢い母と云ふことも、此の女子の隷屬的地位に關聯させて初めて、其の深遠さ(?)が出て來るのである。若し、良妻賢母主義の理想とする所が自然的意味での、若くは合理的意味での良き妻賢き母であるとしたならば、所謂『女子教育』は今日のそれと著しくその內容を異にしたものであつたに違ひない。最も批評者にとつて都合の惡い一例を採つて云へば、家政就中家庭經濟の教育と性に關する教育とが、良き妻たり母たる者のために、最も大切なるものであることに就いては、保守論者も敢て之を否認せぬ所であらう。それにも拘らず『女子教育』は前者を甚だ輕視し、後者を殆んど無視し來つてゐるではないか。之と丁度正反對に、『女子德育』に於て特に貴

んぜられてゐるものは女子の教育、即ち婦德の教育である。ところが、此の婦德なるものは大體に於て奴隷道德である。婦德なる名稱其者が既に二重道德の事實を證明してゐるではないか。即ち、それは道德が分かれて男德と婦德となるのではなく、完全なる道德に附隨うて所謂婦德なるものが存在してゐるのである。故に、婦德の精髓は自己の主人である所の男子に對するものであつて、彼への服從であり、奉仕であり犧牲であり、貞淑であり、柔和である。即ち此等の諸德は女子をしてタイラントである所の男子の良き奴隷、良き奉仕者たらしむるに適するが、女子をして男子と對等の地位にある共同生活者とするのは甚だ不充分なものであると言はねばならぬ。併し、丁度、斯樣に婦德の教育が一種の奴隷教育であることのために、婦德の教育が『女子教育』の中核をなしつつあるのである。

五

第二に良妻賢母の教育は凡ての女子を家庭向きに仕上げることである。カイゼルには嘗て女子の使命は三つの即ち料理（Küchen）と育兒（Kinder）と裁縫（Kleider）とであると演說したことがあるそうであるが、カイゼルを待つまでもなく、之れは我國固有の良俗として昔より存在し來つてゐる所である。家庭は屢々社會生活の避難所として、その團欒の樂しさや、その慰安の貴さが美しき言葉で讃美されてゐるが、それは多く、男子から見ての、而も恐らく或部分の男子から見ての家庭觀である。多くの女子は果して之と同じ家庭觀を持つたであらうか。所謂家庭の樂しさと貴さの多くは、丁度、上流階級の樂しさや貴さが下層階級の犧牲に於て成立つて居ると同じ樣に女子の犧牲に於て男子の爲に生産されつつあるのではなからうか。

家庭向きに教育さられると言ふことは、臺所向きにしつけられると言ふことである。中流上流に行はれる長火鉢の向ふに坐るやうな教育や、サロン向きの教育やは、むしろその一變態と見るべきであらう。その教育の下に於ては數分間でもその手を空けてゐることは、非常な罪悪とされるが、一日中その頭を空虛にして置いても、そのことは少しも氣に留められないのである。次から次へと、起つて來る種々雜多な、而も感興を惹くことの少ない精神を殺すやうな仕事を其儘に受け容れて、つぶやくことなく、之を仕遂げるやうな奴隸的忍耐が養はれなければならぬのである。

斯樣な家庭が女子の生活の終始すべき天地である。男子の舞臺が社會であるが如く、女子の舞臺は家庭である。女子は此處

に於て初めてその本性を全うし得るのである。女子が家庭外に出ようと志すのは、魚が空中に跳り出さうとするのと同じ不自然である。家庭の生活が如何に苦痛であれ、家庭の仕事が如何に面白くないものであれ、此の家庭の内に閉ち籠り、此の仕事をなすことが、即ち女子の天職である、と良妻賢母主義は敎へる。或人は嘗て此の點に着眼して、家庭は女子の屠殺場であると言つた。勿論、その言方には誇張を伴うてはゐるが、併しそれは最も急所を突いた警句であることを失はぬ。所謂屠所の羊の如く、此の屠殺所におとなしくつれ行かれ、おとなしくその處分に身を委ねるやう、女子を準備すること、これが良妻賢母主義の敎育の使命である。

六

之れを以て良妻賢母主義の敎育の積極的意義のあらましを説明したのであるが、此の敎育の特質は、その消極的意義を檢べて見ることによつて、一層明かにされると思ふ。

第一に良妻賢母主義は女子を人間として、即ち男子と對等なものとして敎育しないことを意味する。之れは丁度良妻賢母主義が女子を女としてその隷屬的地位に敎育すると言ふことの他の反面である。女子が男子と異なる生理的機能と之に應ずる社會的職分を持つてゐる限りは、勿論、之に照應する敎育を彼等は必要とするのであらう。併し、此の事は、女子の敎育を此の點にのみ集中しろと言ふのとは丸で別物である。女子も亦男子と同じやうに、先づ獨立自主の人格であり、その行爲の標準が、男子の課したのでなく、自分自身の內部の要求から出たものでなければならぬ。此の如き敎育を背景としてのみ、初めて女子の特殊敎育は女子の人格完成に資する所あるのであるが、所謂『女子敎育』は此の如き自由と獨立の地位に女子を敎育することを以て最も恐るべき異端なりとして、之を排斥するのである。良妻賢母主義の最も注意すべき特徴は、女子に全人格的敎育を拒否する點にある。人間を奴隷制度の下に繋ぎ置くに最も有効なる手段は、彼等の人格的意識の覺醒を妨遏することであることを思へば、此の點に於て良妻賢母主義の敎育が男權確立の最も確實なる手段であることを認めざるを得ない。

七

次に、良妻賢母主義の敎育の第二の消極的特質は、女子に對して社會的知識と社會的活動とを拒否することに存してゐる。而してこれは、女子を家庭向きに育て上げると云ふことと相表裏する所のものである。

今日の場合、女子が男子に比しヨリ多く家庭的であると言ふことは事實であり、從つて、之れに關するヨリ多くの知識が女子に與へらるべきことは何人も之を否認しはしない。併し、此の事は、女子に社會的知識並に社會的活動を拒否する理由には少しもならぬ。

良妻賢母主義が如何に努力しようと、今日の女子はも早社會と絶緣して生活することは不可能になつた。彼等は或は受動的に或は能動的に、益々多く此社會と接觸しつゝある。而も此の大勢に逆行して、良妻賢母主義は女子と社會との絶緣を主張するのである。

併し、考へて見ると、家庭に於ける女子の地位が今日の如く劣惡であつて見れば、少しく自覺した女子は、所謂家庭の女となることを好まぬであらう。序でに書いて置くが、此の如き現象を見て、新しき女の不健全を責める者があるか、それは大變な間違で、非難さるべきものは、彼等ではなくてむしろ今日の家庭其者である。それはともかく、斯様にして家庭奴隷に解放の道が開けることは、男權專制の存續の上に最も危險なることであるから、何はともあれ、此の如き遁れ道を塞がねばならぬ。そこで、一方では女子の公的活動を禁止する法制を造り、他方では所謂『女子教育』によつて、此の如き行動の不道德なる所以を教へ込むのである。女子をその隷屬的地位に抑留すると言ふ目的から云へば、女子を世間に出さず、それに世間を知らさぬと言ふ方法は、最も有效な手段の一つであるに違ひない。

八

以上に說述し來つた所は、良妻賢母主義の教育の典型的形態であるが、現代の『女子教育』は左様に單純簡明に之を具現してゐるものではない。その代表する所は、時勢の變轉によぎなくされて、多くの讓步と妥協とをなした所の稍々緩和された形の良妻賢母主義である、或は之を呼んで開明的良妻賢母主義となすことも能きよう。それは丁度溫情主義・協調主義と變つたと同じ程度の變化である。それは時代に應ずる新裝を付けてはゐるが、その本體は依然として舊の如くである。即ち女子の隷屬的地位を肯定し、之に適應するやう女子を教育することを以てその使命としてゐるものである。

女子教育に就いて改革すべき點は頗る多からう。併し私の見る所を以てすれば、何よりも先に、なされなければならぬことは、奴隸教育の一種である所の所謂『女子教育』より、女子が解放されることである。凡ての眞の意味の女子教育は、それから始まるのである。

教政雜話

法學博士　佐々木惣一

一

日本ほど教育を輕蔑して居る處は多くあるまい。國家の政治に於ても又社會の生活に於ても然うである。政治家には始めから教育問題などを念頭に置かないものが多いし、世間では教育家のみじめな生活を深く意としない。其のくせ二口目には教育の尊重といふことを叫ぶ。妙な現象である。かゝる事情の下に於て行はるゝ教育に遺憾の點の多いのはいふまでもない。尤も教育問題といふても、技術上の方面から見るのと、制度上の方面から見るのと二つを別たねばならぬが、技術上の方面から見るのは教育學者の事であつて、私は勿論制度上の方面から見て云ふのである。問題は數多くあるが、教育制度の全體を通覽した觀家と個々の問題を引離して別々にする觀家とに別れる。

二

全體を通覽する觀家に於ても、制度其のものの得失の問題と制度運用の適否の問題とがある。併し今制度其のものの得失論を簡單に話すことは出來ないから、先づ現行の制度は今定まつたものとして置て、其の運用を見るに、どうも、行り方が分らない。運用に就て何等の方針が立つて居ない事はないかと思はれるのである。それは色々の點から採察出來るけれども、次の二點を主なものとする。

第一に、教育制度は實際上殆んど空文に歸して居ることに注意しなければならぬ。小學や中學の制度は制度の精神に從て行はれて居る。尤も最近行はれた小學五年卒業の中學入學や中學四年卒業の高等學校入學は其自身としても利害得失目下研究中であるが、唯たとひそれが利ありとするも、制度上は例外的のものであるといふことを忘れてはならぬ。從て運用上に於ても濫りに其の風潮を助成しないやうにせねばならない。若し萬一それが殆と原則のやうになり、即ち小學五六年になり、中學四

年になると、すぐ上の學校に入學の準備をすべきものだと一般の教育關係者（即ち教師、生徒、父兄）が思ふやうな風潮となるやうでは、制度の精神は失はれて居る。寧ろ廢止せねばならぬやうになるかも知れない。最も徹底しないのは高等教育である。中學から大學に接續する關係を見るに、現行制度では、七年制中學を原則として、之を卒業して直ちに大學に接續する事を本來の趣旨とし、高等學校制度は過去の遺物として、例外的のものとして、認められて居るに過ぎない。もとより、七年制中學が可きか、或は高等學校が可きか、其れ自身に問題はあれど、兎も角も制度上で此問題を決定し、七年制中學を原則とした。其れにも拘らず、實際に於ては、政府の方針は七年制中學を設置せざるにあるらしい。彼の、政府が近年頻りに高等學校を增設するの方針を採れるは、即ち之れである。若し眞に、制度を實現するの誠心あらば、七年制中學を試みるべきものであらう。之は實に所謂高等學校なるものに就ても、さうで有て、舊制度に依れば、高等學校は、實は大學豫科が本則ではなく、高等普通教育を授くるを本則として居て、只大學豫科を設くる事を得る事となつて居たが、其れが高等學校と云へば、大學豫科とな つてしまつたのだ。今回の七年制中學は、高等學校に關する制度と同じく、制度の表面のみで、少しも實際に行はれて居ない之れは蓋し、制度の制定に當つて、只事務的に諸種の意見を調和して、事を纏めやうとするに急にして、之を實行すると否とは餘り問はないと云ふやうな考があつたのではあるまいか。又專門學校なるものを考へて見るのに、專門學校は大學以外に特殊の必要を認むるものとして、制度を設けたのであつて、從來の專門學校は其必要に應じて設けられたものである。然るに、大學令を發布せらるゝや、所謂專門學校の昇格なる事が頻々として起つた。もとより、大學の增設は非常によい事であるが然し、其れは現在の專門學校の昇格と云ふやうな事とは、無關係に行ふべきである。現在の專門學校は、大學以外に存在の理由が有て認められたものである、若し其れを總て昇格すると云ふ事になるならば、遂に專門學校と云ふものはなくなるであらう。斯くして制度上、專門學校令なるものは又空文に終るであらう。又大學に就ても考へねばならない。大學は成るべく多く作るがよいが、唯其の內容は飽くまで大學令に依て學問研究に適當なる施設を具備せねばならない。が果して然う云ふ方針が何處まで交つて居るかどうか。

斯く考へ來ると、教育制度は空文に終て居る點が少くない。

故に根本的に云ふと、此の制度が可いので有るか、又は此の制度を表面に置て、其の下に實際行つて居る實狀がいゝのであるか。更に研究をするの必要があらうと思ふ。

第二に制度の精神たる敎育自由主義が行はれて居ない。之は特に云ふまでもなく何人も知つて居る通りである。小學を卒業しても當然に中學に入學出來ず、中學を卒業しても當然に高等學校に入學出來ず。敎育を受けたいと思ふ者が之を受け得ないと云ふ結果を生ずる。之が國家的にも非常な損失であることは云ふまでもない。全く學校數の不足から來るのである。我國財政窮すと云ふも、全般の整理をすれば、增設出來ないことはない。

三

右は敎育制度の全體に就ての觀察であるが、更に個々の問題を云ふならば、限りがない。唯一つ二つの根本的のものを述べやう。

今日の敎育社會に就て尤も不滿を感ずることは、敎育界に生氣を缺いて居ると云ふ事であらう。生氣を缺く所以のものは、もとより人の問題である。所が人の問題と云ふも二つのことを考へねばならない。其の一は敎育界には人物が入らぬかどうかと云ふことと及び、たとひ人物が入つても生氣を發揮し得ないのではあるまいかと云ふことである。併し、敎育界に人物が入らぬ理由と人物が入つても生氣を發揮し得ないと云ふ理由とは、必ずしも別々のものではないから、之を一まとめにして人物の問題と云うて差支ない。所で一體人物の問題といふと、人間を其の置かれる事情から引離して考へる。嚴格に云へば然うである。が併し、今日の如く人間が或組織の下に活動せねばならぬ時代に於ては、所謂人物の問題を組織の問題と引離して考へることは無理である。其の組織の問題が、まことに重大なるものである。普通の人を以て標準とせば、其の置かるる組織の如何に依て、所謂人物たる所以のものを發現すると否とが分れる。吾々は、敎育家に就ても、普通の人たる事を前提として考ふべきものである。それ故に、組織の問題を無視して、徒に敎育家を責むべきではない。組織の問題としては、敎育家の言動が、餘りに窮屈であると云ふことを擧げなければならぬ。窮屈であると云ふのは、敎育家以外の社會に對して從屬的の立場になると云ふことに外ならない。具體的に云ふと敎育家が一方普通の行政廳に左右せられ、又他方一般社會の人氣に氣兼せねばならぬ立場に在ると云ふことであるが、今は前のことのみを一言す

る。

普通の行政廳と教育家との關係は實は難問題であるが、併し根本見地として、教育家の獨立な立場を認めねばならない。所が今日の實狀は之に反して居る。之では人物が來ない。來ても氣持よく其の能力を發揮し得ない。教員界に人物を招く方法としてよく、待遇のことを云ふ、勿論待遇も其の重大原因であるが、併し、私の考では、如何に待遇をよくしても、今日の如く從屬的立場に置かれては、到底人物は來ず、來ても、其の能力を發揮せずして、常に不滿を感じつゝ仕事をするであらう。然れば、教育家に今少し獨立的の立場を認めることが肝要であると思ふ。

次には、何人も云ふ事であるが、教育家の待遇を改善せよ、と、云ふ事である。此點に就ては、特に中等學校の校員の現狀を注意するの必要がある。小學校教員も、もとより待遇をよくせねばならぬが、然し此の問題は近來遍く世上に論議されて居るにも拘らず、中等學校教員の待遇問題に至つては、比較的世上に議論されて居ない。斯は最も注意に値する問題である。

一體、教育は何れの階級も夫々特殊の意味が有て、何れを輕重すべきものではないが、現今の我國の實狀に於ては、中等教育の刷新を計らなければならない。現今、頻りに、國家思想、政治思想の涵養を叫ぶも、是等の思想の注入される時代は、正に中等教育の時代である。吾々が、個人と云ふ事を離れて、多少社會思想卽ち、公の觀念を養ふのは、中等教育の時代にありと思ふ。從て中等教育の任に當る人は、學識は勿論、其の識見に於て、卓越した人が必要である。

元より、中等教員の總てを斯る人とする事は困難だらうが、然し乍ら、少くとも各學校に一二の卓立せる人物有らば、自然に、生徒に對し公の觀念を與ふる事が出來るのである。所が、現今の中等教員の待遇に於ては、何人も之に身を投ずる者がない。其れは當然の事である。故に之等の諸點を改良するにも、如何にしても、中等教員の待遇を改善するの必要があるのである。兎に角、中等學校教員の待遇問題の解決は目下の急務である。(談)

我邦教育と社會教化運動

文部省普通學務局長　赤司鷹一郎

從來我邦に於ける一般民衆の教化運動は何等の組織系統もなくして僅かに斷片的に存したと言ふに過ぎない卽ち小數の篤志家であるとか或は地方の先覺者抔の手に依つて如斯運動が行はれて居たと言ふに止まつて廣く教育教化の組織系統としては殆んど其存在を認めなかつたのである。強ひて言ふならば曾て通俗教育調査會なる名目のもとに一般民衆に對する教化の調査研究を行つた事がある。併し不幸にして行政整理の爲に其の官制は其の後間もなく廢せられたので設立後日猶淺かりし爲に調査の結果を以て或組織的の運動を起すと言ふ處までは至らなかつた。其の後僅かに文部省の一部に通俗教育事務を擔任すると言ふ事を規定するに止まつて謂はゞ有名無實のものとなつて時日は經過した。然るに大戰の後を受けた我國は時代の要求に應じて專ら社會教育の施設を行はんとする機運になつて來たのは後れ走せながらも我民衆教化運動の爲に慶賀すべき事である。

顧るに社會教育と云ふ事業其れ自身が文部省の事務の一つとなつたと言ふ事は如何に時勢の趨勢とは言へ聊かに一種の奇蹟の如き感を起させるものがある。數年前までは社會と言ふ文字其れ自身に就て世間は餘りいゝ感じを持つて居なかつたのである。處が今日となつては其の社會を相手としての仕事は頗る重要になつて來た、寧ろ學校教育の效果を完全に收め又は其の缺陷を救濟する途は此政策を措いて他に俟つべきものが無いと言ふ如き考へを抱くに至つたのは、我國教育史上に一大時期を劃するものと言つて差支なからう。然らば社會教育の範圍と既往並に現在の實情は如何であるか、更に進んで將來之を如何に進展せしめてゆくべきかと言ふ事が玆に問題となつて來るが其の範圍たるや頗る廣汎たるものがあるので一々此處に詳論する遑がない、其の二三に就て考へて見ても現代に於ける我邦教育の施設上社會教育の一日も忽にすべからざるを知る事が出來やう

と思ふ。例へば貧困兒童の保護に就て見るに我國從來の教育の制度は專ら學校教育に力を注ぎ、而してその學校教育も父兄又は兒童が之を受くる事の出來る者丈けに是を施すと言ふ程度であつて或は貧困の爲めに子弟を通學せしめ得ない父兄があつたり或は兒童自身が病氣の爲に普通の子供と同樣に授業を受け得ないと言ふ樣な者に對しては敢て是を顧みなかつたと言ふのは過言かも知れぬが是等に對して甚だ手が廻つていなかつたと言ふのは事實である。卽ち今述べた貧困な父兄の爲に執つた態度としては僅かに授業料を免除する程度のものであつたり、甚しきに至つては就學を猶豫したり、免除したりする規定すらあつて國家は斯かる不幸なる兒童に對して國民として必須なる知識や技能の修得竝に德操の練磨と言ふ事に就て佛教の所謂『無宿善不及力』と言ふ樣な態度を執つて、彼等をして自暴自棄、唯、爲すが儘に任せたと言ふのは如何に貧困は貧者自身の自業自得だとは言へ其の罪なき兒童に對しては洵に不憫此上もなき事と言はねばならぬ。然も是等の兒童は將來國民の一員として世に起つべきものなるに拘らず、國家は是が救濟に何等の意を用ふる事無しと言ふは他の文明國に於ては殆んど見る事の出來ぬ現象である。而して是に依つて國家の被る損害は蓋意表の外に出づるものが有るであらう。殊に今日の如く經濟問題、勞働問題に依つて動ともすれば國家の存在を脅威し國家生活の安定を脅かさるゝと言ふ時代に於て甚だ重大なる關係の存する事を見ても、我國民教育家竝に爲政家の既往に於ける用意の不周到なりしを察せざるを得ぬ。

外國に於ては宗教團體や慈善團體さては其の他の篤志家達の力に依つて官公の命令や力を俟たずして自發的に是等の缺陷を補ふ資力がある上に更に其の國の爲政家は斯くの如き救濟事業を重視して國家竝に地方自治體の仕事の重要なるものとして居る。反之我國の是等の團體は殆んど全く斯かる處に着眼せず、加ふるに教育當局者も上述した通りの次第であつたのである。が之が爲に今日我國家が如何に大なる損害を蒙つて居るかは想像するに餘り難くはない由來我國民は同胞に對する眞の救濟、同情と言ふ事に就ての研究が十分でないようである。例へば米暴動のあつた當時には施米や寄附金があり物價暴騰に際しては簡易食堂や公設市場が設けられて一般勞働者階級に對して物質的に濕す處はあつたが、精神的に殊に戰後颶風の如く卷き起つた此文化運動の熾烈な時代に於て彼等を救ふと言ふ事をしなかつた。乍併彼等勞働者は物質的には一部の中產階　者より　富

裕なのであるから救ふとすれば寧ろ精神的の教化方面に就て一層切實に其の要を認るのであるが此方面に關して徹底した考が官公私と謂はず凡ての團體に依つて現れて居るのを見ない併し唯救濟とし言へば金錢や物品を與ふれば事足ると言ふ此皮相な唯物的觀察は軈て其れが齎すであらう結果を豫想する時寔に寒心に堪へたものがある不幸にして貧家に生れたが故に終生教育の恩惠に浴する事が出來ず人としての修養、國民としての知德の練磨の機會を得ない處の謂はば社會から見棄てられた呪はれた子弟は決して鮮少ではないが從來の教育者は單に出席歩合がよいとか、就學歩合が如何うだと言ふ形に現れた處を以て得々として居たのであるが猶其の裏面に斯かる不幸な兒童の幾十萬ある事には餘り同情を表しなかつたのである而して是等の憐むべき兒童が今や成人して我國家社會の組織に如何なる意味に於て貢献して居るかと言ふ事を考へると思はず戰慄せざるを得ぬのである。

以上は單に貧困兒童にのみ就て一言したのであるが此外に盲啞者の教育は果して如何なる狀態にあるか此方面に就ては官も公も唯一つの特殊の教育として僅かに申譯的に或施設をして居るが殆んど解すべからざる狀態にあると言ふも過言ではあるまい、更に又不良少年の感化事業は何うであるか、民衆教化の事業に就ては内務省系統の手に依り警察の取締りの方面より發達して何うにか斯うにか漸く着手せらるゝに至つたと云ふ狀態に過ぎない。隨つて從來此種の事業が現に歐米先進國に行れて居る様に國民教育の一事業として顧みられなかつたと言ふも強ち過言ではあるまい、其他外國では盛んに行れて居る病弱兒童結核兒童、不具兒童等の教育の如きは我國現行の小學校令に於ては頭から是等の者には教育を施さんでもよい事になつて居るのだから謂はゞ全然顧みられない者と言つてよからうが是は文明國の教育制度としては甚だ不完全極まるものと謂ふべきである、況んや我國では結核兒童と稱すべきものが列國に比して頗る多數であるに於ては國家の將來の爲に之を放任すると言ふのは危險極まる事である。要之一言にして盡せば過去に於ける我國の國民教育は頗る非科學的で一時を糊塗する間に合せのものであつたと言つても差支へない。

以上は民衆教育の施設中消極的方面に就て述べたのであるが積極的に施設すべき事に就て今後の社會教育が如何なる意義を持つて國民の教育上に重大なる地位を占むるかと言ふ事を述べて見よう。

元來學校の教育は或一定の年限に一定の學科を多くは劃一的に教授するに止まつて個々の社會や個々の國民の要求する知識や技能の修養の機會を與へる事の出來ぬのは今更贅言を要しない。殊に國民の大多數は普通教育を受くるに止まつて、よし其れが高等普通教育を受け乃至は專門教育を受ける者でも彼等が實際生活を營みつゝ自己の生活に必須なる知識以外に廣く國民としての修養の上に此日進月歩の世界文化の恩恵に浴すべき機會を得る事が多ければ多い丈け、其の社會が　歩し且つ幸福なるべき筈で、唯形式的な學校教育を以て此複雜極まりなき人生の修養に、十分なる滿足を與へ得ぬと言ふのは解り切た話である。況んや我國の學校教育の現狀は今日世界に於ける先進文明國の何れと比較して見ると甚だ殘念ながら劃一的、形式的に傾いて居るに於ては更に然りと言ふも過言ではあるまい。茲に於てか是等の學校教育を終へた者に對して生きたる教育を授け又彼等の求めつゝある修養の機會を之に與ふる事は我國に於て特に必要を感ずる次第である。

余は現代の學校教育は世界を通じて硬化せられた教育と言ひ度いのであるが此硬化教育を受けた國民には一層其の實生活に接した教育を與へる爲に非常なる努力が必要だと思ふ殊に最近の外國の狀況を見るに各種の高等の學校や大學等に於ても學生々活の教授と對立して是等の學校が一般社會の爲に各種の教化事業を施設して居る事を見るに於ては如何に我國の教育が是等の國々に後れて居り且その能率の如何に　きかを想像する事が出來る即ち米國の如きは數百の大學及專門學校に於て學校擴張事業として社會民衆に對する公開講演、通俗講演、實地指導、質問應答等有ゆる手段に依つて年中此方面に努力すべき特殊の機關を設けつゝあるのであるが、是れを僅かに夏期を利用してしかも一部の教育者の爲にのみ催さるゝ講習會のみで滿足して居る我國と比較する時は實に雲泥の相異があると言はねばならぬ。

以上を綜合して考ふるに、今後我國に於ける民衆教化運動が學校教育そのものゝ進步發達を促し、又之と相俟つて學校教育そのものゝ性質より來る教育上の缺陷を補ふ重大なる使命を帶びて居る事が了解される。最近我國文部省が社會教育の一課を設け各府縣に社會教育主事を置いて漸く組織的系統的に是等の事業に沒頭しやうとして來たのは晩播きではあるが我教育界の過去並に現在の狀態に徵して重大なる意義を持つて居る事と思ふ。　大正九・八・一三）

新時代が必要とする教育方針

早大教授　杉森孝次郎

國家は全社會大ではなく、社會内の一組織と既になつてをり、今後ますます其の關係が進んで行く事を、今明日の教育當事者は十分に理解せねば失敗だ。社會は範圍に於ては國際的である。隨つて國家は、内にむかつては國民の各個性に自治、責任、及び創造の機會を供給することに努めると同時に、外にむかつては自國をして國際的社會即ち唯一の全社會のために自治責任及び創造の方法によつて成るたけ大きく奉公せしむるやうに努むべきだ。新時代の教育は、子供乃至被教育者を單に國家の財寶とのみ觀ずして、國際的社會の財寶と觀る事を忘れてはいけない。國家のためになる人物を養成する事は從來以上にその要を増すが、國際的社會のためになる人物を養成する要が飛躍的に増進して來た。國際的社會に奉仕する能力の高い人物を多く産出する國民ほど、生存の條件が強い。教育は開發だ。天分に對する開發の機會を、今後の教育者は國際的社會の隅々から狩り集めよ。一人の幼少青年者を、その賦質に從つて保護するための手段ならば、人類社會の總舞臺に動員せよ。國際的社會を愛し、欲し、信じ、救濟し完成する心臟と頭腦と手足とは、國際的社會の水と空氣と熱と光りの限りを盡して成長した人でなくては所有する事が困難だ。村に産まれて、生涯村のためを思ふ事は美だ。村に産まれて生涯村以上の社會を愛し得ないことは醜だ。新時代の教育はこの意味に於ての醜を除き美を加へる學と術を有するものでなくてはならない。

民族自決は自治の不完全なる一徴候だ。國際聯盟は責任の不完全なる一徴候だ。創造に至つては未着手だ。グーデンベルクの印刷術發明や、コラムバスの米大陸發見や、コパーニカスの地動説發見に幕をあげた近代は創造的時代を孕んではゐた。けれども今迄の成績では物の發明や機械の創造が勝つてゐて、道徳的創造には到達してゐない。今後の教育は、創造を基調と

するものでなくてはならない。創造は個性の創造を始終の必要條件として、組合的團結の形に於て、國家的組織の形に於ても、國際的協力の形に於ても、吾人の今後の努力を待つ人類的義務だ。そしてこの義務を遂行するための準備に於て最大責任を負ふ位置には教育が立つ。なぜ創造が人類的義務であるかといふに、蜜蜂でさへも、白蟻でさへも、蜘蛛でさへも、豫備し、組織し、計畫すれども、古今同軌、進跡を示し得ないからだ。生物の中に於て、人獨り創造し得る。心理的生理的素質たんだ。教育は素質に對して消極的及び積極的自由を與ふる人間的活動だ。消極的自由を與ふるとは成長の障碍を除去する事だ。積極的自由を與ふるとは成長の助力を供給する事だ。勿論こゝでいふ素質は人のだ。個性と言ひ換えてよい。個性は、詳しく言へば人の個性は、自由意思の所有者であると同時に成長する多態だ。成長する多態を内容とし、自由意思を形成とする實在が人の個性だ。教育はこの實在に奉仕する方法の内で最直接なものだ。ただ人が多數に生活し、個性が多種に存して相關係してをるが故に、倫理が自治と創造の他に責任を主張するが如くに、教育もまた自治と創造を個性のために目的とすると同時に責任を目的とする。自治、責任、及び創造新時代の教育の原則はこの三位一體を教育上に實現するにある。

質疑を解放して、智慧の空氣を眞空壜の栓の除去された腦髓に供給するの要もある。自力で立派な判斷や推理や決行の出來るやうな能力者に人を誘導し訓練する事が教育の一要件だ。この意味に於て教育に各人を一個の獨立思想家にしてやる事だ。教育者　被教育者に對して結論、確信、意見の手段と原因を被教育者自身の内に發見させる。自治能を護助するが教育だ。

參政權、參産權を國民の全體に分配する事が最も必要だ。同時に參教權を國民の全體に分配することが最も必要だ。低級の品性と智識を有する人を國境内に一人たりとも無いやうにしなくてはならん。進んでは國境外にも無いやうにしたくてはならん。制度、習慣を全員の意思によつて、即ち自發的に改正し、改善する唯一の準備は教育だ。



行列虫の話

——ファブルの『昆虫記』から——

大杉榮

松毛虫の行列

羊飼ひデンドノオの羊は、パニユルジユがわざと舟のそとへ投つたラムのあとを追つて、一疋一疋皆んなすばしこく海の中へ跳びこんだ。『御承知の通り』とラブレエは云ふ。『何處へでも、先頭のものゝ行くところへは、必ず隨いて行くと云ふのが、羊の性質なのだ。』

ところが、此の行列虫の松虫はもつと羊的だ。それも其の愚かさからではなく、必要からなのだ。先頭のものゝ行くところへは、皆んなが、其の間に隙もつくらずに、一本の紐になつて進んで行く。

たゞ一本の紐になつて、隙間もなく相續く列をつくつて、銘が自分の頭を其の前にゐるもの丶臀にくつつけて、進んで行く。其の先頭に立つ松虫がむら氣に描いて行く複雜なうねりが、入念に後からの皆んなによつて描かれて行く。エリウシスの祭りにまでうねりくねつて行くギリシアのテオリアも、決してこれ程秩序的ではなかつた。で、そこから、此の松虫へ行列虫と云ふ名がつけられたのだ。

それに、此の虫は生涯綱渡りをしてゐるのだと云へば、それで其の性質は云ひ盡されて了ふ。松虫はたゞ、其の進む場所に布かれてある絹糸の線路の、しつかりとした綱の上だけを歩く。其の行列の先頭にゐる松虫は、絶えず糸を垂らして行つて、自分の移り氣のまゝに進んで行く道の上にそれを粘りつかせる。此の糸は、擴大鏡で見ても、ちよつと見えない程の極く細いも

のだ。

が、二番目の松虫が此の細い足臺の上を歩いて、自分の糸でそれを二倍にする。三番目のがそれを三倍にする。そして皆んなが、よしそれがどれ程多くゐても、其の糸嚢から出る粘々した糸を附け加へて行く。で、其の行列の過ぎ去つたあとには、其の通つたしるしとして、細い白いリボンが殘つてゐて、其の輝かしい白さが日にきらきらと光る。此の道をつくる仕方は、吾々人間のよりも餘程贅澤で、栗割石を敷くかはりに絹糸を張つて行くのだ。吾々は道に割石を撒いて、それを重い蒸汽ロオラアの壓力で平らにする。松虫は其の道に柔かい絹糸のレエルを布く。そして此の公共の仕事には、各人が皆な其の糸を寄與する。

こんな贅澤なものが何んの用に立つのだらうか。彼等は、ほかの毛虫と違つて、こんな高價な仕度がなければ歩く事が出來ないのだらうか。私はそれにユフの理由があるのを知つた。

行列虫が松葉を食ひに出かけるのは夜だ。彼等は眞暗な中を、幹の頂きにある其の巣から出る。そして、まだ食つてない一番近い枝のところへ行き着くまで、縄にされた枝の上を降りて行く。此の枝は、上の方のを縄にして了ふに從つて、益々下の方のになるのだ。斯うして彼等は、まだ手をつけてない枝に向つて行つて、其の綠色の針の間に散らばる。

彼等が夜食を濟まして、夜の冷たい空氣を感ずるようになると、こんどは其の家の避難所に歸らなくちやならん事になる。直線で測れば、其の距離は漸く一二尺の近いところだ。が、さう云ふ風には歩いて行く事は出來ない。松虫は葉から小枝に、小枝から大枝に、大枝から幹に、次ぎ次ぎにと交叉點を伺つて、そして其の幹からは眞直ぐに家へ歸らなくちやならん。

此の長い迷路の旅に視力を送る案内として頼るのは無駄な事だ。松虫は其の頭の兩側に五つづゝの眼を持つてゐる。が、それは極く小さくて、擴大鏡を透してゞも容易には見つからない。從つて此の眼には大した視力があるものとも思へない。それに、こんな近眼のレンズが、光りのない眞くら暗の中で何んになるだらう。

又、其の嗅覺の事を考へてもやはり無駄だ。行列は嗅覺を持つてゐるか、それとも持つてゐないか、私は知らない。此の問ひにははつきりした答をする事は出來ないが、少なくとも私は、其の嗅覺が極く鈍いもので、到底道を探すのを助ける事は出來

ない。とだけは云ふ事が出來る。それは、私の實驗で、幾疋かの餓えた松虫によつて立證された。長い間絶食させたあとで、松の枝の直ぐそばを歩かせても、少しもとまつて見ようとする氣はいを見せない。彼等に自分の居場所を知らせるのは嗅覺なのだ。其の脣が偶然牧場の土地に觸れない限りは、どんなにがつがつしてゐても、一疋も其處には止まらない。彼等は遠くから匂つて來るものなぞを食ひに行かうとはしない。其の道でぶつかつた枝に止まるのだ。

　然らば、此の視覺と嗅覺とを除いて、何にが彼等を其の巣へ歸るのに導くのだらうか。リボンが道の上に布かれてある。テシアスは、クシタンの迷路の中で、アリアドヌがくれた糸玉があつた爲めに漸く迷はずに濟んだのであつた。松葉の中の廣い迷路は、殊に夜には、ミノスの爲めに造られた迷路と同じやうに解く事は出來ない。行列虫は其の中を、間違ひなしに、其の絹糸の助けによつて道を見出して行く。家へ歸る時には皆んなは譯もなく自分の糸か、或はいろいろと分れて行つた群が扇の骨のやうに擴げた近所の糸の、どれかを見つける。斯うして、あちこちに散らばつた群は、一つ一つ、もとの巣から出發した共同のリボンを傳つて行く。そして、もう腹のふくれた此の隊商は、絶對的の確實さを以て、其の家に歸る道を見つけ出す。

　もつと長い旅が、天氣さへ善ければ冬の間にでも、著行はれる。

　其時には、松虫は木から降りて、地上を冒險して、三十ヤアドもある間を行列をつくつて進んで行く。此の遠征の目的は食物を求める爲めではない。何故なら、其の故郷の松の木はまだまだ食ひ盡されてはゐないのだ。剪み切られて了つた枝は廣い簇葉の間に數へる程もない。それに松虫は夜になるまでは決して食物を取らない。されば此の松虫には、たゞの保養か、近所の見物か、それとも又やがて自分等が變態をする爲めに砂の中に埋もれる場所の檢分か、のほかに目的はないのだ。

　此の大旅行中に、例の道案内の綱が忽かにされない事は、云ふまでもない。今はいつもよりもそれが必要なのだ。いつでも行列がある時には不變の規則になつてゐるやうに、皆んなが其の糸嚢の中から糸を出してはそれに合力する。其の口から出す糸を道に粘りつけないで、一歩でも前へ進むものは、一疋もない。

　行列の人數が多ければ、リボンが大きくなつて、たやすく見

つけ出す事が出來る。それでも、家路に歸る時には、それを探し出すのに多少の骨が折れる。何故なら、松虫は進行中に決して其の行列がそつくり轉廻して、あとのものが先きになる事はない。其の綱の上で廻れ右をすると云ふやうな方法は彼等には全く知られてゐない。で、前に布かれてある道に戻るのには、先頭のもの丶氣まぐれ次第でどうにでもなる、うねり／＼ねつた線を描いて行かなくちやならん。それだから、往々、探し廻りうろつき廻つて、遂には夜ぢうそとで暮らすやうな事も起る。が、そんな事は大した事ではない。皆んなは一と塊りに集まつてぢつとして待つてゐる。翌朝再び道を探しに出る。そして遲かれ早かれ成功する。尤も、多くは、其のうねり／＼ねつて行く曲線が最初の試みの間に例の道案内の糸に出會ふ。先頭の松虫が此のレエルの上に其の足を置けば、もう今までの躊躇はやまつて了ふ。行列は急いで其の巣に歸る。

此の絹で織つた道の効用は、更に次ぎの見方からすると、もつと明かになる。

松虫は、斯うして働いてゐる間にやつて來る冬の嚴しさを防ぐ爲めに、自ら避難所をもつくつて、其の中で此の天氣の惡い、無理強ひの怠惰の日を暮らす。其の絹糸の貧弱を貯へるほかに何んにもない彼等は、たゞ一疋では、風に吹きつ曝らしの枝の頂きで暮らして行く事は出來ない。雪や風や氷のやうな霧に堪へられる堅固な家は、多數のもの丶協同に待たなくちやならん、そこで松虫の團體は、各個人が積み重ねた極微分子で、厚い永持ちのする建物をつくり上げる。

此の仕事は仕上げるのに長い間かゝる。天氣さへ許せば、毎晩、其の建物は丈夫にされ大きくされて行かなくちやならん。で、此のあらしの季節が續き、又此の虫がまだ毛虫である間は、其の協同はどうしても解かれないようにしなくちやならん譯だ。

然るに、何等特別の手配りもなしに、食時事の夜の遠征がいつも分裂のもとをつくる。此の食慾の時に個人主義への復歸があるのだ。松虫は多少あちこちに散らばつて、一疋づゝ近所の枝にとまつて、別々に松の葉を食つてゐる。此の松虫等は、どうして、やがてお互に出會つて、再び協同の團體になるのだらうか。

道に殘してある幾本もの糸が譯もなくさうさせるのだ。此の道案内があれば、銘々の松虫は、よしどんなに遠くにゐても、

決して道を迷はずに其の仲間のところに歸る。あつちからもこつちからも、上からも下からも、小枝の簇葉の中から急いでやつて來る。そして直ぐに、其の散らばつてゐた群が一と塊りになる。されば此の絹糸は、道をつくつて行く方法と云ふよりも、より以上の何にかなのだ。卽ち、其の一族の各員を分かれないように結びつけて置く方法、社會的結束なのだ。

行列の首領

どの行列、長いのでも短いのでも、の頭には、私が其の行列の首領と呼んで行くだらう先頭の松虫が行く。そも此の首領と云ふ言葉は、私はほかに善い言葉がないので、使ふのでこゝでは少々あてはまらんのだが。實際此の松虫とほかの松虫との間には何んの區別もないのだ。それはたゞ、其の進んで行く順序から起つた事で、ほんの偶然がそれを先頭にしただけの事だ。だから、行列虫の間では、大將はほんの廻り合せの士官なのだ。今は現在の首領が率ゐて行く。が、若し其の行列が何にかの出來事の結果壞はれて、新しく違つた順序でつくり直されゝば、前の首領は陣笠になつて了ふ。

其の一時的の職務は、彼れに、彼れ自身の獨立の態度を取らせる。ほかのものは皆んな默々として其の行列に隨いて行く間に、大將たる彼れは、其の頭を左右にもち上げては、ふいと、其のからだので面をあちらこちらに跳ばして行く。それは先頭に立つて行くので、其の道を探して行くやうに見える。實際彼れは其の場所を探つて行くのだらうか。一番いゝところを選んで行くのだらうか。又、其の躊躇するのは、たゞ、まだ道を布かれてない土地の上に道案内の糸がない結果だらうか。其の部下共は、自分の足の間に捉まへてゐる綱に安心して、至極呑氣に隨ひて行く。が、此の支えのない彼れは不安らしい。

見たところちよつとタアルの一滴のやうな、黑いピカピカした其の頭の中に、どんな事が起つてゐるのか、どうしてそれが私に分らう。しかし、其行爲から察するに、いろいろと實驗して見て、凹凸のひどい場所や、すべすべする場所や、何んの障害もない埃だらけの場所や、又何によりも先づほかの探檢隊が、殘して行つた糸などを見分ける認識力と云ふやうなものは殆んどない。これが、松虫との長いあいだの私の親しみが其の心理狀態に就いて私に敎へた總て、殆んど總てゞある。實に、憐れな腦だ。其の團體の安寧が一本の糸の上に懸かつてゐる憐れな虫だ。

此の行列の長さは隨分いろいろと違ふ。地上を匍つて行くのを私が見た一番立派なのは、二三十ヤアドもあつて、三百ばかりの松虫がきちんと一本のうねりくねつた樣に並んで行つた。が　一列の中にたつた二疋しかゐないと云ふやうな時にも、やはり其の秩序は整然として、二番目のが一番目のにくつついて隨いて行く。

二月になると、私の溫室の中でいろんな長さの行列が見られる。其の行列にどんな惡戲が出來るだらうか。私はたゞ二つの方法しか知らない。即ち、其の首領を取つて了ふのと、糸を切つて了ふのと。

行列の首領を取つて了つても別に大した事は起らない。それが混雜を惹起さないように行はれゝば、其の行列は今までの仕方をちつとも變へる事はない。大將に昇級した二番目の松虫は、即座に其の大將としての義務を勤める。道を選んでは皆んな率ゐて行く。と云ふよりは寧ろ、躊躇ひ躊躇ひ摸索して行く。

又、絹糸のリボンを斷ち切つても、やはり大した事は起らない。行列の眞ん中から一疋の松虫を取りのける。そして、其の行列に混雜を起させるやうな事のないようにして、其の松虫の匍つてゐるリボンを剪刀で斷ち切る。すると、其の結果、此の行列はお互に獨立して進む二疋の首領を持つ事になる。尤も、あとの方の首領が、ほんの少しばかりの間を隔て離された前の方の列に結びつく事もある。其の場合には、矢張もとの狀態に歸つて了ふ。が、多くは、其二つの部分は一緒にならない。そして此の場合には二つの別の行列が出來て、其の各々が勝手な方へうろついて行つて、分れ分れになつて了ふ。しかし其何れも、其の長い間の遍歷の間には、遲かれ早かれ、斷ち切られて了つた前のリボンを見つけ出して、其の巣に歸る事が出來る。

堂々廻りの行列

此の二つの實驗は大して面白いものでもない。私はもう一つ、もつと可能性の多い、方法を考へ出した。それは、此の松虫に切れ目のない圓を描かせるように、其處からほかに走り出て其の方向を變へさせるようなリボンを切つて了ふのだ。機關車は其の道が支線に分れてゐない限りは、其の進路を變へずに走つて行く。行列虫は、若し其の眼の前の絹糸のレエルが、何處にも轉轍がなくつて、何んの障害もなかつたら、いつまでも

同じ路を續けて行くだらうか。永久に終る事のない道をいつまでも迴つて行くだらうか。それには、先づ吾々のしなければならんのは、普通の狀態ではない此の圓周を人工でつくる事だ。

最初に浮んで來た考へは、行列のうしろにあるリボンをピンセットで挾んで、それを搖らないようにして曲げて、其の行列の前へ持つて行く、と云ふのであつた。先頭に立てつゐる松虫が其の上を步けば、それでもう事は成就する。ほかのものは忠實に其のあとに隨いて行くだらう。此の方法は理論では甚だ簡單だが、實際には極めて困難で、うまい結果には行かない。其のリボンは、非常に細いものなので、それに引つついてゐて一緖に持ちあがつて來る砂粒の重さで切れて了ふ。又、それが切れないでも、うしろの方にゐる松虫共が、どれ程そつとやつて見ても、直ぐに動搖を感じて塊つて了ふか、或は行つて了ふ。

それにまだ大きな困難がある。首領が自分の前に置かれたリボンを拒絕する。其の切目になつた端が不安になるのだ。いつものやうな切れ目のない道ではないので、彼れは右か左かによけて、切線（タンヂェント）を描いて逃げて行く。私がそれに手を出して、私が選んだ道にそれを引戾さうとすると、彼れは飽くまでも拒んで、縮みあがつて動かない。そして直ぐに其の全行列が混亂して了ふ。

いつまでも斯んな方法を固執してゐるのは止さう。貧弱な方法だ。結局どうなるか分らない成功の爲めの、甚だしい努力の浪費だ。

吾々は出來るだけ手出しをしないで、自然に出來る輪を見つけなくちやならん。が、そんな事があり得るだらうか。それはある。吾々は、少しも手出しをしないで、完全な輪の轍（わだち）の上を進んで行く行列を見る事が出來るのだ。私は此の大いに吾々の注意に價ひする結果を、全くの偶然から得た。

松虫の巢を置いてある砂を盛つた棚の上に、上の方の周り一ヤアド半ばかりある、幾つかの大きな棕櫚の鉢があつた。松虫は折々其の股を登つて、緣（ふち）の周りの蛇腹になつてゐる縁形（くりがた）のところを匍ふ。其處は行列をするのに丁度いゝところなのだ と云ふのは、多分、其の表面が極くしつかりしてゐて、下のばらばらした砂地の上のやうに土崩れのする心配もなく。又、多分、下から登つて來て疲れたあとで休むのに具合よく水平になつてゐるからであらう。私は私の計畫に都合のいゝ機會の來るのを待つだけでいゝのだ。しかも此の機會は遠からずして來るのだ。

一八九六年の一月三十日、晝の十二時少し前に、私は大勢の行列が其處へ登つて、だん／＼に蛇腹のところへ行き着くのを見た。靜かに、一列になつて、松虫共は大きな鉢を匍ひ登つて、縁に登つて、規則正しい行列をつくつて進んで行く。あとの方にゐるほかの松虫共も、やはり絶えず登つて來て、其の列を續けてゐる。私は其の紐のあとさきが一緒になるのを待つてゐた。丸い線形の上を匍つて行く首領がもとの出發點に歸るのを待つてゐた。私の目的は十五分ばかりで達せられた。殆んど圓に近い切れ目のない立派な輪が出來た。

次ぎにはまだ登つて來る行列のあとのものを取り去つて了はなくちやならん。あとからどしどしと登つて來ては、行列の此の立派な秩序が亂されて了ふだらう。それから又、蛇腹と下の土とを聯絡させるやうな道は、新しいのも古いのも、すべて皆な取り除かなくちやならん。私は太い毛筆であとから登つて來る餘計な虫を取り拂つて。そして、其のあとに何んの臭をも殘さないやうな大きなブラシで——臭ひがするとあとで松虫を混亂させる事が出て來る——丁寧に鉢を擦つて、松虫が其の進行中に置いて行つた有りと有らゆる糸を取り去つて了つた。これだけの下ごしらへが終ると奇妙な光景が吾々を待つてゐる。

此の切れ目のない圓周の行列には、もう首領はゐない。各々の松虫がかの松虫に先立たれてゐて、全團體の作物である絹紐に導かれて、前の虫の足跡を追ふて行く。其のあとにもやはりほかの仲間が引つついてゐて、同じ秩序正しい仕方でそれに隨いて行く。そして此の同じ事が、其の全行列を通じて、何んの變化もなく繰返される。誰れも命令はしない。と云ふよりは寧ろ、誰れも自分のむら氣のまゝに其の道を變へない。皆んなが、當り前ならば其の進行を導いて行く筈の、しかし私の惡戯で實際には無くなつて了つた、案內者に信賴して隨つて行く。

其の行列の始めて鉢の縁の下を一周した時から、絹糸のレエルがちやんと布かれて、行列は其の進行してゐる間は決して糸を垂れる事をやめないので、直ぐにそれが細いリボンになつて了つた、レエルはたゞ太くされて行くばかりで、何處にも支線は出さない。出れば、私は直ぐに、それを皆なブラシで掃き取つて了ふ。松虫共は此の人だましの出口のない道の下でどうするだらうか。力が全く盡きて了ふまで、いつまでもぐるりぐるり廻つて行くだらうか。

昔しの學校の先生等はよくビュリダンの驢馬の事を話した。

此の有名な驢馬は、秣を一束づゝ離してそばに置かれると、此の相等しいしかし反對の方向の引力の平衡を破つて、其のどちらかを取る決心がつかないで、遂に餓え死にする程になつたと云ふ。先生等は此の人の善い獸を罵詈雜言した。が、ほかの誰よりもより以上に馬鹿ではない此の驢馬は、こんな論理の罠にはかゝらずに、兩方の束を食つて了ふだらう。私の松虫もほんの少々の其の持つて生れた頓智を見せるだらうか。いろいろと試みて見たあとで、こんな出口のない道の上に閉ぢ籠めて置く、其の切れ目のない輪の平衡を破る事が出來るだらうか。二尺とは離れてゐない直ぐそばの秣の束、緑の枝のところへ行き着くたゞ一つの方位である、どちらかの側へ逸れて行く決心がつくだらうか。

私はさうするだらうと思つた。私は間違つてゐた。私は斯う思つたのだ。

『此の行列は、暫くの間、恐らくは一時間か二時間か、ぐるぐる廻つて行くだらう。が、やがて松虫は其の間違ひに氣がつくだらう。そして此の人だましの道を棄てゝ、何處からか降りて行くだらう。』

ほかへ行く何んの邪魔もないのに、餓えては來る屋根はなしでひどく苦しめられながら、いつまでも其處にとゞまつてゐると云ふのは私にはとても考へられない馬鹿な事だと思へた。然るに事實は私に此の信ずべからざる事を受けいれるように餘儀なくした。私は其の事實を詳細に書いて見やう。

出口のない魔法輪

此の堂々めぐりの行列は、前にも云つた通り、一月三十日の正午頃、すばらしい上天氣の時に始まつた。松虫共は、銘々前のものゝ臀に自分の頭をくつつけて、泰然とした歩調で歩いてゐる。此の切れ目のない連鎖は、首領もなく、従つて其の方向を變へる事もない。皆んなが、丁度時計の針が其の周圍を忠實に追ふて行くやうに、機械的に辿つて行く。頭のない行列には自由もなければ意志もない。それはたゞのぜんまい仕掛になつて了つたのだ。そしてそれが幾時間も幾時間も續く。私の成功は先きのそゝつかしい疑ひを遙かに超えて進んで行つた。私はびつくりして立つてゐた。と云ふよりは寧ろ、ぼんやりして了つた。

其の間に、幾度も幾度もの堂々廻りが、最初のレエルを幅一インチの十二分の一（八厘弱）程の立派なリボンにして了つた。

私は鉢の赤い地の上にぴかぴか光つてゐるそれを今は容易に見る事が出來るようになつた。日は終りに近づいた。が、其の行列の位置はまだ少しも變つてゐない。それは次ぎのやうな著しい證據が確認する。

其の軌道は平らな曲線ではなく、或る一點で少々蛇腹の下の方に降り曲つて、其處から八インチ程のところで再び上の方へ向つて行つた。私は始めに此の二箇所の偏倚點を鉢の上に鉛筆でしるして置いた。ところが、其の日の午後ぢう、そしてもつと確證的な事には、其の次ぎの數日間、丁度此の氣違いじみたダンスが終つた其時まで、私は此の松虫の行列が第一の點のところでちよつと綫を降りて、再び第二の點のところで上の方へ昇つて行くのを見た。一旦、最初の糸が置かれゝば、進んで行く道は永久にきまつて了ふのだ。

其の道は變らないが、速度は變はる。私は一分間の平均距離九サンチ米突（三寸）と測つた。が、折々多少長い間の休息がある。時々、殊に溫度が落ちて來た時には、步調が緩む。夜の十時には、其の步きかたはまるでのろのろとからだを盪めかしてゐるやうなものになつた。寒さと、疲れと、それに無論餓えとで、もう直ぐにとまつて了ふのだらうと私は思つた。

食事の時間が來た。松虫は、溫室の中のどの巢からも、其の絹糸の袋のそばに私が植えてやつた枝を食ひに、ぞろぞろと出て來た。庭の中の松虫も、溫度が穩かだつたので、同じやうに其の巢を出て來た。燒物の蛇腹の上を步いてゐる例の松虫共も、喜んで此の御馳走に與らなくちやならんのだらう。彼等はもう十時間も步きつめて腹がへつてゐなくちやならん筈だ。[illegible]の枝は、直ぐそばに、堪らない靑い色をして立つてゐる。其處へ行くには、たゞ降りてさへ行けばいゝのだ。が、自分等のリボンの愚かな奴隷である此の憐れな虫共は、其の決心をする事が出來ないのだ。十時半過ぎに私は此のがつがつした虫共と分れた。彼等が一と晩ゆつくりと相談して、あすの朝は其のふだんの有樣に歸つてゐる事だらうと信じて。

が、私は間違つてゐた。私は彼等に、其の餓え渇へた胃の腑の苦悶が當然喚び起さなくちやならん筈の、叡知の幽かな光りがあるものと思つて、彼等に餘りに多く期待してゐたのだつた。夜明け頃に私は彼等を見舞つた。きのふと同じやうに、尤もぢつとして動かずにはゐたが、一列になつてゐた。そして空氣が少し暖かになり出したら、その無知覺な狀態から目醒めて、生

き返つて、再び又歩き出した。前に見たのと同じ堂々めぐりの行列が又新しく始まつた。其の機械のやうな頑固さには、別に前と少しの變りもなかつた。

其の晩はひどい晩だつた。それに寒さもはげしかつた。これは庭の中の松虫が夕方既に豫言した事であつた。私の鈍い感覺には、寒の上天氣が續くだらうと思へたのに、彼等はどうしてもそとへ出なかつた。其の翌朝は、迷迭香(まんねんろう)の葉が霜で眞白になつた。ことしになつてから二度目のひどい霜だ。庭の大きな池が凍つた。溫室の中の松虫はどうしてゐるだらう。行つて見て來よう。

皆んな其の巣の中に蔭れてゐた。たゞ、例の宿なしになつた、鉢の緣の上の頑固な松虫だけが、ひどい一夜を過ごしたやうに見える。私はそれが二つの塊りに塊つてゐるのを見た。彼等は、斯うして塊つてゐて、大して寒さに惱まずにゐたのだ。

夜のひどい寒さが彼等を二つの塊りに分裂させて了つたのだ。そして此の事は、恐らくは、救はれる機會を彼等に與へるのだらう。各々の塊りには、それが再び生き返つて歩き出す時には、一人の首領が先頭に立つだらう。そして其の首領は、自分が隨いて行かなくちやならん前のものがゐないので、多少行動の自由を得て、恐らくは其の行列を脇へ逸らして行く事が出來るだらう。前にも云つた通り、普通の行列では、先頭に立つた松虫は斥候の役を勤めるのだ。ほかの者共は、混亂を起させるやうな何事も起らない限り、其の列にくつついてゐる。そして先頭のものは、首領としての其の役目に就いて、絶えず其の頭を左右に振り動かしながら、道を探し求めて選んで行く。そして一切が此の首領の決定通りになるのだ。皆んなは忠實にそれに隨いて行く。それから又、前にも云つた通り、既に歩いて來てリボンの布かれてある道にでも、此の首領はやはり其の道穿鑿を續けて行くのだ。

されば、蛇腹の上で其の道をふみはずした此の松虫共が、其處で救はれる機會を見出すであらうと云ふ事は、十分信ずるに足る理由があるのだ。そこで彼等を見守つて見る。此の二つの塊りは、其の眠りから醒めると、だんだん二つの別々な列になつて匍ひ出した。從つて其處には、お互に獨立した銘々勝手なところへ行ける。二疋の首領が出來た。さて此の首領等は果して其の魔法のない輪から脱け出る事に成功するだらうか。其の大きな黒い頭を不安さうに左右に動かして行くのを見てゐて、一時は私もさうなる事と思つてゐた。が、直ぐに私は間違つて

ゐた事が分つた。其の行列が出來あがると、二つの鎖が一緒になつて、又前の輪が出來て了つた。ほんの一時の首領が又もやたゞの陣笠になつた。そして再び又、松虫共は一日ぐるりぐるりと堂々めぐりをしてゐた。

其の晩は、極く靜かな星の多い晩であつたが、引續いて又ひどい霜だつた、翌朝、鉢の上の松虫共は、彼等だけが一と晩ぢう宿なしで過ごしたのであるが、一つの塊りになつて、例の厄介なリボンの兩側に餘程はみ出してゐた。私は斯うして無感覺になつてゐる虫共の眼の醒めるのを見てゐた。最初に歩き出したのは、偶然がさうしたのであらうが、轍のそとにゐた。其の虫は不安さうに未知の道へ進んで行つた。そして椽の頂きに達して、其處から又反對の側の方の鉢の中の土の上に降りて行つた。それには六疋ばかりが随いて行つた。ほかの虫共は、多分まだ夜の眠りから十分目ざめないで、起きあるが事が億劫だつたのだらう。

斯うして暫くの間ぐづぐづしてゐた松虫共は、やがて又もとの道に歸つた。例の絹のレエルに乘つかつて、堂々めぐりの進行になつた。尤も、こんどは途切れの出來た輪の形になつた。それでもやはり、其の途切の先頭に立つたガイドには、新しい道をつくつて行かうと云ふ氣は少しもなかつた。一度は其の魔法輪のそとへ踏み出す機會があつた。それでも彼れはそれをどう利用していゝのか分らなかつた。

先きに鉢のうち側の方へ歩いて行つた松虫共も、其の運命はやはり同じ事であつた。彼等は餓えて、食を求めて、椶櫚の頂きまで登つて行つた。が、其の口に合ふ食物が何んにもないので、自分が先きに布いて來た道をあと戻りして、鉢の緣形のところへ登つて、又皆んなと一緒に行列をつくつて、そして何んの不安もなしに其の列の中に加はつて了つた。そして再び又輪が完成され、再び又其の輪がぐるりぐるりと廻つて行つた。

苛責の後の解放

そこで、いつ解放が來るのだらうか。

憐れな靈魂（たましい）共が果てしのない廻り路の中に引き入れられて、一滴の靈水の爲めに漸く此の地獄の魅力から遁れた、と云ふ御伽話がある。私の行列の上には、其の輪を解かせて巣に歸らせる、どんな滴（しづく）が落ちて來るのだらうか。私は此の呪ひを破つて其の輪から解放させるたゞ二つの方法を知つてゐるだけだ。し

かも此の二つの方法と云ふのは恐ろしい呵責(かしやく)だ。不思議な因果の緣だ、悲嘆と不幸とから善が出て來るのだ。

先づ、其の第一には、松虫共が寒さに堪へられなくなつて縮みあがつて、何んの秩序もなく寄り集まり、或者は道の上に、そしてもつと數の多い或者は道のそとに、塊つて了ふ事だ。此の後者の間から、早晩、古い轍を見棄てゝ新しい道につく、そして其の列の家へ導いて行く、革命家が出て來る。吾々はたつた今其の實例を見た。七疋松虫が鉢の中へはいり込んで、棕櫚の木に登つて行つた。尤も其の企ては何んの結果をも齎らさなかつたが、それでも企てはやはり企てだ。それが完全に成功する爲めには、たゞ反對の坂の方へ行くだけでよかつたのだ。ちよつとしたはづみが一大事になる。されば、いつかはそれで成功する事があるだらう。

第二には、疲れと餓えとで弱り切つて了ふ事だ。どれかゞ一疋もう歩けなくなつて立ちどまる。此の落伍者の前には、行列がまだ暫くの間は依然として進んで行く。そこで、其の列は間がつまつて來て、途切れた場所が出來て來る。そして此の途切れを生じさせた落伍者が、再び自分に歸つて歩き出す時には、もう自分の前には何んにもゐない首領になる。ちよつとでも解放されたいと云ふ望みがあれば、彼れはたゞ其の團體を救ひの道になるだらう新しい道へ、引きつれて行きさへすればいゝのだ。

要するに、此の行列虫の列車が難局に陷つた時には、其のしなければならん事は、吾々人間の列車とは違つて、其レエルを踏みはづす事だ。脇道〻する事は首領の勝手に任されてゐる。首領だけが右へでも左へでも曲がる事が出來る。そして此の首領は、例の輪が壞れない間は、どうしても有りようがないのだ。そして最後に、ほんの偶然に出來る此の輪の壞れは、主として疲れか寒さかの餘りに激しい事かが起る、ごたごたした停止の結果なのだ。

此の解放に導く出來事、殊に其の疲勞の場合のは、隨分屢々起る。一日の間に、其のぐるぐる廻つて行く輪が幾分も二つか三つかの部分に切れる。が、いつもそれは直ぐにもとのまゝに歸つて、何んの變化をも起さない。すべてが前と同じやうになる。其の地位を救はなくちやならん筈の大膽な革新者が、まだ其の靈感(インスピレエシヨン)を持つてゐないのだ。

前の晩と同じ寒い夜を過ごした四日目には、別に何にも新しい事はなかつた。次ぎに云ふ一細事のほかには、何にも話す價

の事はなかつた。

きのふ私は、鉢の中へはいつて行つた松虫共の殘した道を、其儘掃はずに置いた。其の道は、固い輪の道とそれとを結びつける交叉點と共に、朝の間に發見された。行列の半分はそれを利用して、鉢の中の土を見舞つて、棕櫚の木に登つた。ほかの半分は縁形の上にとゞまつて、相變らず古いレエルの上を歩いてゐた。そして午後には、其の移民隊がほかの松虫共に結びついて、再び輪は完成され、又もと通りにぐるぐると廻つて行つた。

五日目になつた。夜の霜は、まだ溫室の中までは來ないが、益々ひどくなつた。そして其のあとへ、靜かな澄み渡つた青空の中に、かゞやかしい日光が照つた。朝日の光りが少しくガラス板を暖めると直ぐ、塊つてゐた松虫共は起きあがつて、鉢の縁の上のぐるぐる廻りを始めた。が、こんどは其の最初の間のきちんとした秩序が亂れて、其の混亂が益々甚だしくなつた。解放の兆が近づいたのだ。一昨日と昨日と布かれた鉢の內側の道が、今日も又縁の上の交叉點のところまで、行列の一部分によつて歩かれて、直ぐに又棄られて了つた。ほかの松虫はやはりいつものリボンの上を歩いてゐた。此の分裂の結果は、二つの殆んど同じ長さの列が縁形の上を少し間を置いて同じ方向に進み、それが時々ひつついたり離れたりして、其のたびに多少の秩序を亂す事となつた。

疲勞が益々其の混亂を大きくした。もう歩けない落伍者がだんだん增えた。從つて切れ目も增えた。行列が幾つかの部分に分れて、其の各々に首領が出來た。首領等は其の行く先きを操り操り進んで行く。斯くして、すべてが救ひを齎らすであらう分裂をめざしてゐるやうに見えた。が、再び又、私の希望は欺かれた。夜になる前に、それが又たゞ一本の列になつて、例の如何んともする事の出來ないぐるぐる廻りになつた。

急に寒さが來るやうに、ふいと暖かくなつた。今日は——一月四日——上天氣の和かな日だ。溫室は活氣に充ち滿ちて來た。巢から出て來る數多い松虫の花綵模樣が、棚の上の砂のところをうねりくねつてゐる。其の上の方には、鉢の縁形の上の輪が切れたり結ばつたりしてゐる。始めて私は、大膽な首領等が、暖氣に醉ふて、燒物の縁の端にあとの方の足だけで立つて、からだをあちこちへと突進させながら下の深さを測つてゐるのを

見た。此の努力が幾度も繰返された。其の間全行列はとまつてゐた。松虫共の頭が急に跳びはねて、其のからだがのたくつて行く。

此の先驅者共の一疋が思ひ切つて突進する事に決心した。そして蛇腹の下の方へ滑り落ちた。ほかの四疋がそれに續いた。ほかのもの共は、まだ其の人だましの絹の道にたよつてゐて、前のもの丶眞似をする事も出來ず、相變らず古い道を步き續けてゐた。

本線から分れ出た此の短い糸は、あちこちとさ迷つて、長い間鉢のそと側をうろついてゐた。そして半分程下に降りて、又斜に登つて來て、もとの行列と一緒になつた。其の企ては失敗したのだ。しかも鉢の下には、九インチも離れてゐないところに、松葉の房が置いてあつたのだ。それは私が腹の空つた松虫を誘ひ寄せようとして其處に置いたのであつた。それだのに、其の臭も見えも彼等には何事をも語らなかつた。彼等は此の目標のそばまで來て、また上へ登つて了つた。

しかし此の企てにはそれ相應の効能があつた。其の步いた道には糸が布かれた。そして此の糸は將來の企ての誘惑になるだらう。即ち、其の解放の道が最初の目じるしをつくつたのだ。

果して、それから二日後に、即ち最初の實驗の日から八日目に、松虫共は——始めはたつた一疋であつたが、直ぐにそれが幾疋かの小さな群になり、やがて又多少の長さの紐になつて——此の同じしるの道を傳つて蛇腹から降りて來た。そして日沒頃には、一番遲れた最後のものまでも巢の中に戻りついた。

そこで少々算術をやつて見る。二十四時間の七倍、即ち百六十八時間の間、松虫共は鉢の蛇腹の上にゐた。疲れて止まつた時間や、夜の長い間の休息の時間などをたつぷりと計算して、其處から半分の時間を引く。すると八十四時間と云ふ步いた時間が出て來る。其の平均の步調は一分間に九サンチ米突（三寸）だ。そこで、其の步いた總體の距離は四百五十三米突、即ち一哩の四分の一餘りと云ふ、此の小さな虫にとつては大變な遠い路となる。鉢のまはり、即ち行列の輪の周圍は、精確に一米突三十五（四尺四寸四分五厘）だ。そこで、いつも同じ方向に、且ついつも何んの結果も得ないで、ぐるぐる步き廻つた輪が、三百三十五回描かれた事になる。

私は此の虫の底の知れない馬鹿さ加減に就いてはよく知つてゐるのだが、それでも此の數字を見ると驚かされた。そして、

此の松虫は其の暗い心の中に少しも叡智の光りがないからではなく、寧ろ下へ降りる事の困難と危險との爲めに、そんなに長い間其處にとゞまつてゐたのではないか、と疑ひたくなつた。しかし事實は降りるのも昇るのと同じやうに容易いのだと答へる。

松虫のからだは極く柔かくて、出ばつたところに絡みついたり、下の方に滑り落ちたりする事の出來るようにうまく出來てゐる。で、此のからだを下にしても、上にしても垂直にも、水平にも同じやうに容易く歩く事が出來る。それに松虫は其の糸を地に粘りつけない間は決して前へ進まない。其の足に此の支へがあれば、どんな位置にあつても、落ちる恐れは少しもない。

私はまる一週間眼の前に其の證據を見た。前にも云つた通り、其の轍は、同じ水平のところを行かずに、二度も曲つて、其の一點では蛇腹の下の方にちよつと降り、そして少し行つて又頂きのところへ昇つて來る。で、其の行列は、輪の一部分では、緣の下のところを歩いてゐる。しかも此の轉倒した位置が殆んど何んの不安も危險もなく、すべての松虫が最初から最後まで一まはり毎にそれを繰返してゐる。

されば、斯うして出り角毎に巧みに廻はされて行く、緣のはじから落つこちやしないか、と云ふ心配があるなどとは、どうしても思へない。宿なしになつて、寒さで縮みあがつて、餓えて、苦しみ切つてゐる松虫共が、頑固に幾百回も絹のリボンの上を堂々めぐりしてゐるのは、それを見棄てるより彼等に敎へる理性の幽かな光りもないからなのだ。

彼等には經驗も反省もない。五百ヤアドも歩き廻つて、三四百回もぐるぐる廻らされる苛責が、彼等に何んにも敎へないのだ。若し夜の野營の混雜と疲勞の爲めの休止とが其の輪の道のそとへ糸を投げ出さなければ、彼等は其の人だましのリボンの上で死んで了ふんだらう。三疋か四疋かのものが、何んの目的もなしに置かれた虫の足跡の上を踏んで、暫くさ迷ひ歩く。そして此のさ迷ひ歩いたお蔭で、下に降りる道が準備される。そして遂に、偶然うまくつゞいた短い行列の紐となつて、其の下に降りて行く事が成就される。

今最も高い名譽を擔つてゐる學派、即ち進化論學派は、動物界の屑の中に理性の起原を見出さうとしてあせつてゐる。私は其の注意を此の松虫にさし向けさせたい。



近視遠視斜視亂視

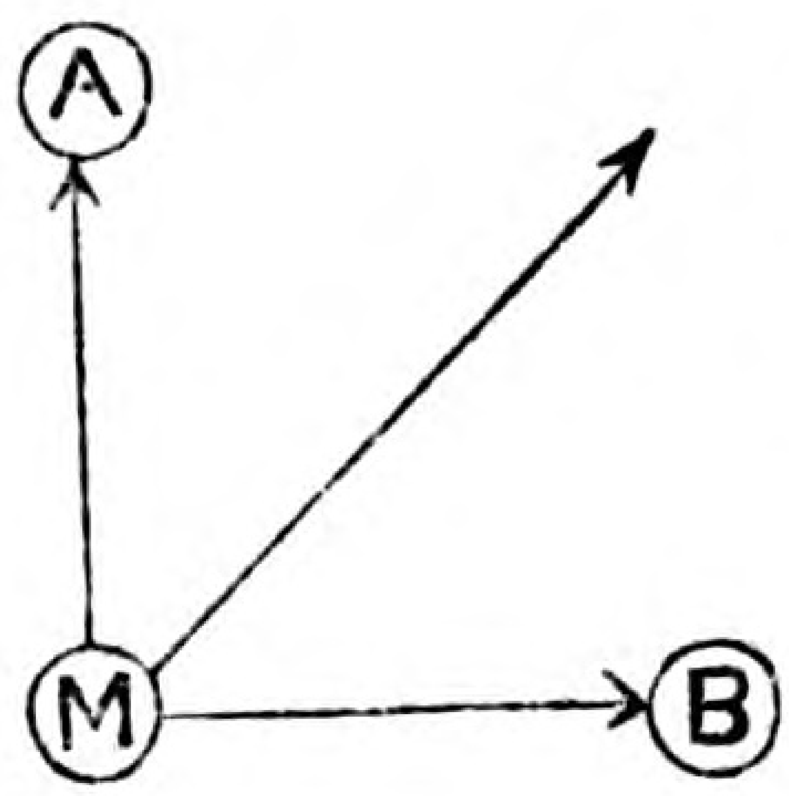
＝色眼鏡の東京新繁昌記＝

元祖『日本一のユーモリスト』　貝塚澁六

序

三十餘年前、私が十七歳で初めて東京に來た時、學校の敎室のうしろの方に坐ると、黒いボールドに書かれた白い文字の、線や點が幾つも幾つも重なりあつて、どうもハツキリ見えなかつた。東京の字は田舍の字と違つて斯うも讀みにくいものかと思つたりしたが、東京なれた先輩の友人に聞いて見ると、それが卽ち私の近視眼の始まりだつた。

それから以後、私の近視は年と共に其度を進めて、然し右と左とは進行の足並が揃はないで、今では、片や六度山、片や十二度川と云つたような取組になつてゐる。所が近來になつて一つ不思議な現象が生じた。若い時に聞いた話では、年を取ると誰でも段々に遠視眼になるのだから、近視の者は自然にプラス・マイナス差引がついて、近視でもなく遠視でもない、丁度好い加減な視力になるのだと云ふ事だつた。或る先輩の友人は其事の確實を論證する爲に、力學上の實例をさへ私に講義してくれた。卽ち、圖に示すが如く、Mと云ふ物體に對して、ABといふ二つの同じ力が直角を成して牽引する時には、MはAに向つて行進する事も出來ず、Bに向つて行進する事も出來ないで、つまり其の二つの力の均衡上、對角線の方向に進行する爲だと云ふのである。



此の深遠なる學理的說明に對して私は固より感服するの外は無かつた。そして、成るほど、父は學資を

七圓しか出してやらないと云い、母は十圓にしてやつてくれと云ふ、其の二つの力の均衡上、私の學資が八圓五拾錢に決定されたのと、正に同一理法に依るものだなと私は深く心の中に發明する所があつた。(因みに云ふ。當時一ケ月八圓五拾錢の學資は寧ろ上等の方であつた。)

あだし事はさておき、私の近眼は然しそう云ふわけに行かなかつた。私は近頃になつて新聞などを見るのに、近眼鏡を掛けたまゝ、手の長さの許すだけ前の方に遠く離して見るようになつた。云ふまでもなく、これは卽ち漸く老境に入つた人の遠視の現象である。そこで私は人が遠視かと問はれてもさうだと答へねばならず、近視かと問はれても矢張さうだと答へねばならぬ事になつて來た。若い時から信じこんで來たプラス・マイナス說が全く誤謬であつて、力學上の對角線說も視力には應用され得ないものだといふ事が、此ごろ初めて分つて來た。誠に晩學でお耻かしいわけだが、勞資協調の不可能を未だに悟り得ないで、貧富の對角線を永久の理想にする學者先生達もあるのだから、かばかりの晩學が必ずしも貝塚澁六の文壇的地位を動かすには足りまいと安心してゐる。

然るに私は 每度世間の善良な紳士達から、『君等はどうも藪睨みで困る』といふ非難を受ける。藪睨みは卽ち斜視である。私は未だ曾て斜めに物を視る癖を持つた覺えはない。尤も、芝居などを見る時に、少し仰向になつたり俯向になつたりして、斜めに眼鏡を透して正面の舞臺を見る事はあるが、それは度の足りない近眼鏡を成るべく有效に使はうとする苦心に過ぎない。私は未だ曾て横そつ方を向いて正面の人の顏を見たりした事はない。然るにも係はらず、私は兎かく藪睨みだと云はれる。どういふわけだかサッパリ分らない。

或る善良な紳士達は又こんな事をおつしやる。『君等は色眼鏡を掛けて物を見るからイケナイ』と。私は現にいつでも無色の近眼鏡を掛けてゐる。無色の近眼鏡を色眼鏡といふ人こそ、よつぽど視力が怪しいと云ふのだけれど、紳士のおつしやる事だから、いつもマア其まゝにしておく。

こんなわけで私は近視であると同時に遠視であり、併せて又(諸紳士の判定に從へば)斜視である。そうして猶(諸紳士の判定に從へば)無色の色眼鏡を掛けてゐる。

更に又かういふ事もある。或の集會の席で、『僕の見る所に依ると、朝鮮人は日本に聯合されてから、獨立時代に數倍した幸福を享樂してゐるのだからなア』と私が云ふと、『ホウ、

君もさういふ見方をしてゐるのか、それは好い』と、國家主義帝國主義のチヤキチヤキ先生が大滿足の樣子で私の主義を嘉納した。又或時、自由畫の話が出て、『保守的な教育家などが自由畫の精神を理解しないで、馬鹿々々しい反對をするのに困る』と或る藝術家が憤慨したから、『それは憤慨する方が無理だ。國民教育の精神からすれば、自由は總て宜しくない。自由戀愛、自由結婚、自由道德、自由思想、皆な然りだ。自由畫は高が畫の事だから許されて居るのだが、そして或る程度までは若い教育家のハイカラぶりで獎勵もされて居るのだが、少し深く其の精神を考へると、規律と服從とを旨とする國民教育として斷じて許す可らざる者である。眞に國家を思ふ教育家がそれに反對するのは當然だ』と私は云つた。すると其の藝術家は、大ぶん不思議さうな目色をして私の顏を見ながら、『だつて國家が合理的に國民を教育しようとするなら……』と云ひだしたから、私は更に『イヤ、其の合理的が抑々イケナイんだ』とおつかぶせると、藝術家はいよいよ不思議さうに、そして甚だ不平さうに、然し品の好い人だから其上の言ひ爭ひはないで、話頭を外に轉じて了つた。此の二つの場合では、私は立派な國家主義者になりおほせたわけで、から云ふ場合の私の目は、外の場合の私の目とに比べて、其の見方がスツカリ違つてゐるように見えたゞらう。して見ると、私は近視、遠視、斜視の外、更に亂視であるかも知れない。

此に於て、私は今、現在の此の私の目で新たに東京見物をして、其の記事を作るにつき、先づ近視、遠視、斜視、亂視の次第を有りのまゝに讀者諸君に告げるのであります。さうして更に善良なる紳士の『色眼鏡』と云ふ評語をも其まゝ素直に受領して置くのであります。

獨、小生が『日本一のユーモリスト』たる事については、今更吹聽にも及ばぬ儀でありますが、近來粗惡なる似せ者續出の樣子がありますので、特に『元祖』の二字を冠して其の由緒を明かにした次第であります。

食堂見本三種

二重橋は申すも畏しとして、上野、淺草、九段、泉岳寺、それが先づ東京見物の月並の遣方である。それも私は遣つて見る積りである。

次に少しくお上品な所では、今日は帝劇、明日三越。それも勿論いつかは遣つて見る積りでゐる。

然し私は此の東京見物の振出しとして、妙に『食堂』と云ふ物に心を引かれた。東京の新繁昌を感じさせる新現象としては、カフヱもある自働車もある、貸事務所もある、女車掌もある、勞働運動者もある、其外種々雜多の者もあるが、『食堂』と云ふ新現象には私に一種の哀れさがあつて、それが私の心を引いたらしい。

偖、食堂と云ふ言葉は、ホテルの食堂、寄宿舍の食堂などゝして我々の耳に熟してゐたのだが、それが最近になつてズット通俗な意義を帶びて來た。平民食堂、簡易食堂、公衆食堂、さういふ看板が市中の方々に揭げられて、謂ゆる社會政策の實施だと稱されてゐる。飯屋なら昔から澤山あつた。無論今でもある。其の飯屋が食堂と名を變へただけなら、別段社會政策でもない筈だが、そこには自然多少の意味がある。飯屋は固より商賣だが、食堂は決して營利事業でない。從つて食堂は飯屋より少し品が好い、或は少し割が安い。そして其の割の安い、或は品の好い食堂を必要とする所に、又別の意味がある。即ち中の下階級の生活がいよいよ窮迫して、家庭らしい者を作る事が困難になり、或は辨當らしい辨當を持つて來る事も、それも注文して取寄せる事も六かしくなり、さりとて厭な臭でのムットする飯屋では我慢が出來にくいといふ事と、今一つは、純粹の勞働者の中に、醬油樽の上で矢大臣をきめこむだけの餘裕のない者が次第に多くなつて來たといふ事とである。食堂といふ新現象の哀れさは即ちそこに存してゐる。人生第一の要件は何んと云つても腹を膨らす事に在る。

一　公衆食堂

或る夕べ、私は先づ牛込神樂坂上の横寺町にある公衆食堂に行つて見た。

兎にかく可なり大きな二階建の西洋館である。勿論質素な木造ではあるが、其の塗塗の色合なり體裁なりが餘り貧弱の感を起させない。正面の入口は中々堂々とした作りで、大きな檜の木の鉢植を西側に控へて左右に開いたドアの上に、セセッション式か何かの新らしい意匠を加へた『公衆食堂』の額がある。字體はゴジックで、一字づゝ丸い輪の中に入れてある。石段の前には棕櫚靴拭ひも植ゑつけてある。二階を見上げると、入口の眞上の大きな窓の外に、種々の植木が一列に並んでゐる。總て

が存外しやれた拵へで、さすがは『東京市公設』である。

入口の右側に黒塗の掛札がある。それには斯う記してある。

定

一、本堂開場時間左ノ如シ

朝　自午前六時至同八時

晝　自午前十一時至午後一時

晩　自午後五時至同八時

二、一食の料左ノ如シ

朝　十二錢

晝　十五錢

晩　十五錢

三、入場希望者ハ料金ヲ支拂ヒ食劵ノ交付ヲ受ケラルベシ

四、左ニ掲ゲタル者ハ入場ヲ謝絶シ又ハ退場ヲ求ムルコトアルベシ

イ　泥醉者

ロ　特ニ嫌惡サルベキ風體ヲナシタル者

ハ　不快ノ感ヲ起サシムル言動ヲナシタル者

入口をはいると直ぐ右側に食劵賣場の窓がある。十五錢出すと、薄い銅貨のような食劵をくれた。人が皆二階に上るから、それについて上つた。階下にも食卓が並べてあるが、今は使つてゐないらしい。梯子段は幅が廣く折れ曲りになつてゐて、ちよつと西洋料理室の二階に上る氣持がした。而もそれが下駄ばきで上れるのだから大きに便利だ。

二階は隨分廣い。殊に天井が高くて窓が多い。明るくもあり風通しもいゝ。床はコールタの叩きになつてゐる。電燈はカフエ・ライオンなどで見るような、乳色の鉢で球を隱した奴が釣してある。食卓は左右の窓際から櫛の歯の形に取りつけられてあるお客は中央の通路からとそれぞれ右なり左なりの序に列ぶと給仕人は窓際の方から膳を運んで來る。其の仕組も誠に順序よく出來てゐて混雜がない。食卓も膳も堅牢で清潔で、少しも不快の感を生じない。そして食卓のところどころには、秋草などの小い植木鉢が置いてある。殊に或る一角には、氷柱と見まがふような、大きな、高い四角な硝子の鉢があつて、中に金魚が活かしてある。食卓の一部には、黒塗の三角柱に白い文字で『婦人席』『同伴席』と書いた所がある。そこは梯子段の上り口の直ぐそばだが、態と少し婦人席をかこつたつもりか、ちよつとした衝立が置いてある。其の衝立の緑色のカアテンなど、色は少しさめてはゐるが、兎にかく洒落れた場所柄の器具の眞似だけ

は出來てゐる。

之なら申分はないといふ氣がして、悉く感心しながら私は同伴席の隣りに着席した。『夕食献立』の張札を見ると、『まぐろさしみ、しんこ、右の通り』とある。之も申分はないと思つて待つてゐると、やがて白の詰襟の白の洋服を着た給仕人が膳を持つて來てくれた、茶もついでくれた。まぐろの刺身の黑い色をしてゐるのが少し厭だつたが、給仕人の至極丁寧なのが嬉しかつた。給仕人の中には隨分白服のよごれたのもあるにはあつたが中には又、散髮のしたてを七分三分に奇麗に分けたハイカラの青年もゐた。

扨どんぶりの蓋を取つて見ると、飯の分量は可なりに多い。力わざの勞働者などには不足だらうが、私などには十分だつた。それに米が存外いゝ。外米ではないらしかつた。まぐろの刺身の黑いのには少し避易したが、食つて見ると左程でもなかつた。刺身のツマは唐菜のゆでたのといふ珍らしい物だつたが現にかく私は相當うまく夕食を濟ます事が出來た。

それから茶を飲みながらお客の人々を見わたすと、總計五六十人ばかりで、浴衣が一番多く、洋服もちよいちよいあり、新聞の賣子と見えたのや、土方と見えたのもあつたが、大部分は先づ安月給の勤め人と書生と職工とであつたらしい。

同伴席に十ばかりの可愛らしい女の子を連れた中年の人が來てゐたのは特に、私の目を引いた。子供は洋服まがひの洗ひざらし物を着てゐたが、ニコニコしながら父親のそばに腰かけてうまそうにまぐろの刺身を食べてゐた。父親も存外屈托の無さそうな顔付ではあつたが、それでもどこやら寂しく見えた。

婦人席は中々賑かだつた。一人の婦人は五つばかりの子供と二人で、一人前の飯と刺身とを分けてゐた。身なりの惡くない二人連の若い娘は、何か頻りにヒソヒソ語りあひながら、黑い刺身を少し持てあまして、あちらこちら見まはしてゐる所は、案ずるに餓をいやす爲に來たのでなく、多分夏休み中の見學の一科目だらうと思はれた。一方には子供を交へた四人連の細君風が前後してやつて來て、『お待たせしたわね』『いゝえ、ツイ今よ』などといふ挨拶をかはして、持つて來た福神漬の罐だの、辛し漬の小鉢だのを出して、面白そうに話しながら食べてゐた。其中の一人は前髮を眞中から分けてゐる程の當世風で、現はした胸元まで白粉がついてゐた。いづれの顔にも疲れの跡はアリアリと見えてゐるが、それにしても萬皿行詰りの女房達とも見えなかつた。現に『奥さん』『奥さん』と呼びあふ聲が聞えてゐた。

そこに又一人『奥さん』らしいのが來たが『今日は食べてお出でになりますか』と給仕人が云ふと、『いゝえ今日は』と云ひながら風呂敷の中から鉢を出した。飯だけ買ひに來たらしかつた。

私は之だけ見て二階をおりた。食券の賣場にはまだ四五人つめかけてゐた。入口を出ようとする時、少し變つた風體の猫背の男が、曲りくねつた太い杖をついて、直ぐ私の前をトボトボと行くので、私は其横をすりぬけて先になつたが、ツイ振返つて見ると、それは盲人だつた。多分按摩さんだらうと思つた。

其の翌朝、私は今一度そこに行つてみた。食券の賣場のそばに、『朝食十回分一冊一圓二十錢、晝食二十回分一冊三圓』といふ張出しのあるのに氣がついた。成るほど、こゝにも回數券があるのだ。其外昨日氣の付かなかつた事で今朝はじめて見たのは、梯子段の下に便所のある事と、其の便所の戸の前に洗面所のある事とだつた。そして丁度今、洗面所では、一人の洋服男が上着をぬいで顔を洗つてゐた。起きぬけにやつて來たものらしい。

二階に上つて見ると、昨晩よりは人數が少なかつた。多くの人はモット朝が早いのだらうと思つた。膳部は味噌汁と梅干と白瓜の漬物二片とであつた。汁の身は茄子で、汁は熱く、分量も多かつた。之も相當にうまく食べた。

婦人席には今朝は誰も居なかつたが、やがて一人のおかみさんが鉢と薬罐とを持つて來て、飯と味噌汁とを買つて行つた。

私と前後して梯子段をおりた一人の老人は、もう六十を過ぎてゐさうに見えたが、折目の正しい、然しながら隨分色のさめた浴衣を着て、ヒダのキチンとした木綿袴をはいてゐた。之からどこぞと務めるものと見えた。薄い顎髯が半分白かつた。

梯子段をおりきつた所で、私は又昨日の按摩さんに出會つた。彼は今丁度、入口から右に折れて、手さぐりに食券の賣場の窓にたどつて行く所であつた。

其の歸り道に、神樂坂をぶらぶらと歩きながら私は考へた。兎にかく新らしい現象だ。あれが將來の生活樣式の卵かも知れない。差當り、あれが皆んなロハになりさへすれば我慢が出來る。

『馬鹿を云ふな』と、忽ち或る聲が私の頭の中で云つた。『あれは皆んな家屋のない人達だ。其の家屋のない寂しい人達が、毎日あそこに行つてあの殺風景な食事をしてゐる。植木鉢が何だ。金魚が何だ。人生がそんな事で胡魔化され得るものではない。

毎日々々あの丼飯を食つて見ろ。貴樣に其の我慢が出來るかい。あんな悲慘なものが將來の生活樣式であつて堪るものかい。』

それもさうだなと私は思つた。然し私は矢張り、將來の少くとも都會に於ける過渡時代の生活樣式はあれより外にあるまいと考へた。そしてベラミーの空想に畫いた『百年後の新社會』を思ひだした。あゝいふ食堂が町々の到る處にあつて、それが市民の共同の臺所であり、共同の炊事場であり、共同の家屋の一部であつて、皆が自由に出入し、自由に飲食する事になればどれだけ經濟であり、どれだけ便利であり、どれだけ愉快であるか知れぬと考へた。それでこそ初めて人間の社會らしい共同生活が始まるのだと考へた。

すると又、頭の中の聲が云つた。『貴樣は又してもそんな馬鹿た考へばかりするからイケナイ。あのみじめな公衆食堂を理想社會の生活樣式と考へたりするのは、丁度、歐米の勞働階級が鐵道の國有を要求してゐるのを見て、日本では疾くの昔しから鐵道は國有だと云つて自慢すると同じような馬鹿らしさ加減だ。外形の類似ばかりを見て、實質の全然違つてゐる事を知らないタワケの沙汰だ。』

成程、それもさうだと私は又思つた。然し私は少し抗辯もして見たくなつた。だから俺も、あれをあのまゝで感服してゐるのぢやない。差當りあれが皆んなロハでありさへすれば我慢が出來ると云つたんだ。

『イヤ、それでもまだイケナイ。たとへばあれがロハであつたにせよ、あんな粗末な、あんな無趣味な、あんな殺風景な食事を毎日あてがひ扶持にされて、それで自由の人間に滿足が出來るかい。貴樣はそれで我慢が出來るのかい。』

頭の中の聲が餘り高飛車に出るので私は少しムツトした。『ああ出來るよ。俺には我慢が出來るよ。我慢をするとなれば隨分出來るよ。現に俺は何年間か四分六飯で我慢して來た。』

『だから貴樣は馬鹿だと云ふのだ。貴樣は社會の全體を監獄同樣にしようと云ふのか。だからソーシャリストは厭だよ。』

斯う云はれると私は又辯解したくなつた。イヤ、さういふ意味ではない。今ではあの公衆食堂の人達が、只た命を繋ぐばかりの爲にあそこに行つてるのだから、丸で意氣銷沈の有樣だ。たまたま面白さうにあの丼飯を食つてるのがあれば、それが却つて悲慘にも見えるのだ。然しあの人達が皆な社會建設の理想を持つて、其の理想の爲に活動してゐるとしたらどうだ。勝利の

大希望を持つた激戰中の生活としたらどうだ。自分達の組織した理想軍の兵站部として、自分達の經營する共同食堂としてあれを見たら、あれで我慢の出來ない事はない。皆があれで我慢して行く所に却つて悲壯な滿足を感ずる事もあつただらう。俺はさういふ意味で、あれが過渡時代の生活様式の卵だらうと云ふのだ。そして其中から本統の新生活の様式が生れるだらうと考へてゐるのだ。

少し苦しい辯解だつたかも知れぬが、私はこれで頭の中の聲を云ひまかした積りで、好い氣持になつて牛込見附から電車に乘つた。

（神樂坂と同じ性質の公衆食堂が下谷車坂町にもあると聞いたが、それは見に行く機會を得なかつた。）

二　簡易食堂

次に私は神田昇平橋際の簡易食堂に行つて見た。成るほど簡易だ。鐵道のガードの下の穴のような處が即ち其の食堂であるそして食費が朝、晝、夕、各十錢である。

入口の上の屋根に横長い額があつて、それに『神田慈善協會經營、昌平橋簡易食堂』と大筆してある。『慈善』の二字が毒々しい光を放つてゐるように感じられた。『貴様は之をも理想社會の面影と見ようとするのか』と、頭の中の聲が直ぐに差出口をきいた。マア姑く默つてゐろと、私は其の聲を制しながら掲示板の文句を讀んで見た。

一、本食堂には酒類は一切出しません、又御持參になる事も御斷り致します

とある。別段それには異存はない。直ぐに十錢で食券を買つて中にはいつた。見わたした所、一體の光景が神樂坂とは丸で違ふ。室が狹い、光線が少い、風通しが惡い、食卓も器具も皆きたない。それでも植木の鉢が一つだけ置いてあつたが、それは此の慘憺たる一室に風情を與へるよりは、寧ろ態とらしい滑稽を感じさせた。人物の種類も神樂坂とは違つて、大抵が純粹の勞働者であつた。

食卓の作りは矢張り大體櫛の齒形になつてゐるが、こゝではお客が兩側の壁際から着席して、給仕人が中央の道路から膳を運んで來る事になつてゐる。三四十人も腰かけるとモウ空席がないので、あとから來た人達は壁際に立つたり、腰かけた人の直ぐうしろに立つたりして順番を待つてゐる。

私はやつと一つ空席を見つけて究屈なベンチに腰かけた。蒸

し暑くて汗がタラタラ出るが、そんな事に構つてはゐられない。間もなく膳部が運ばれた。膳もテーブルも別だん汚れてゐるわけではないが、何んとなくきたならしい。汚たならしいと云ふよりは見すぼらしい。

飯は矢張り丼鉢に盛つてある。蓋を取ると、プーンと臭ひがする。即ち外米の臭ひである。おかずには蒟蒻の味噌まぶしだ。別に澤庵が二片ある。先づ蒟蒻を一つ口に入れて見たが、水臭いばかりで味が無い。次に飯を一口やつて見たが、之もボソボソして幾ら噛んでも飲みくだしにくい。成るほど俺も小さな貴族だなと考へた。前の日神樂坂で『我慢が出來る』と云つた言葉が少し耻かしくなつて來た。

室内を見わたすと、色もさめた絆天を着た人、汗じみたシヤツを着た人、髪毛の延びてもつれた人、赤黒い顏に目のギロギロに光つ人達が、皆な熱心に丼の飯を掻きこんでゐる。彼等は今、食ふ事にのみ全力を注いで脇目もふらない。彼等が食ふのは味はふのでなく、只すいた腹を膨らすのである。水くさいのボロボロするのといふ事は問題でないらしい。順番を待ちかねてゐる人達は、前の人の立ち次第、爭つて其あとを腰かける。直ぐに又膳が來る。間もなく平らげて立つて行く。直ぐに又次の人が腰かける。之が十錢で一度の腹を拵へようとする人生のモガキである。

小さな貴族たる私は、飯を二箸三箸食つて、澤庵を一片かぢり、湯を一杯のんだだけで席を立つた時、隣席の人達に對し、給仕人に對して、極りの悪い、耻かしい思ひをした。

表に出て私は又考へた。あの人達はあれで我慢してゐる。『慈善』といふ侮辱をも忍んでゐる。否、其の侮辱にも無感覺になつてゐる。あれでは幾ら何んでも新社會の生活様式の卵だなどとは云はれない。

『それ見ろ』と頭の中の聲が又差出口をした。

マア待て。私は又その聲を抑へた。君の云はふとする事はモウ聞かなくても分つてる。俺は降参した。昌平橋は更に角安い。神樂坂は少し品がいゝ。昌平橋は慈善の銘を打つてゐる。神樂坂は市設である。兩者の差異は只だ其の客筋に適否する爲である。慈善であらうと無からうと、少しばかり品が好からうと悪からうと、要するに今日の雇傭制度、賃銀制度が、多くの人を滿足に養ひ得ないといふ事實から生じた、止むを得ざる姑息の彌縫策に過ぎない。兩者の性質に根本の差異はない。あゝいふ性質の食堂を總て無くする事が本統の新社會建設であつたの

だ。
『ウム、そういふならマア勘辨して置いてやらう。』と頭の中の聲は斯う云つて引込んだ。

然し私は又考へた。あれもだ。あの慈善食堂の人達もだ。今に新社會建設の希望と要求とを持つて來たらあの水くさい蒟蒻と臭い飯とで我慢はしまい。外の人が善美な食物に飽いてゐる限り、或は相當な食物を得る限り、彼等も亦必ず其の善美と相當との分け前にあづかる事を强要するだらう。若し又、混亂の過渡時代に、矢張り暫くあの臭い物、水くさい物で我慢せねばならぬ場合があるとしても、其の場合には、彼等は最早や慈善を受けるのでもなく、他人から强制されて一食十錢に甘んずるのでもないから、彼等はある食堂を直ちに自分等の共同食堂として、我慢すべき事は寧ろ喜んで我慢しつゝ、建設の事業の爲に働く事になるだらう。其時にこそは、あの色のさめた絆天にもあの汗じみたシヤツにも、あの延びてもつれた髮毛にも、あの赤黑い顏にも、あのギロギロ光る目にも、そこにもこゝにも勃々たる生氣が張り溢れて、………、建設の力あらゆる强い力の源となるであらう。

三　平民食堂

最後に私は新橋停車場のそばの平民食堂に行つて見た。こゝは社會政策實行團の經營とある。公設ではないが、慈善ではない。『團員の外は食事を供給せず』と云ひ、『組合團結の利益を徹底的に覺らしめ』る爲と云ひ、加入者は住所姓名を記し、入團金五錢を出せと云ひ、本食の際は團員章を携帶せよと云ふ所など、大ぶん外とは違つてゐる。

獻立と料金の規定とを見れば、『朝食。飯、味噌汁、漬物、九錢。豆飯、味噌汁、漬物、八錢。』『晝夕食。飯、平民汁、漬物、十一錢。飯、煮〆物、漬物、十一錢』とある。別に『一品づゝ飯七錢、豆飯六錢、飯半分四錢、豆飯半分四錢、平民汁、煮〆物五錢、味噌汁三錢、漬物一錢』の張出しもある。

猶ほ別に『平民の食糧調節と營養改善とを主旨とせる最も新しき試み』として『平民歐洲式パン食堂開始』の張出しがある其の獻立には『甲。野菜付ゼルマンビフテキ一皿、野菜スープ丼一杯、パンバタ付、紅茶一杯、三十五錢。』『乙。平民スチュウ、パンバタ付、紅茶、十五錢。』『丙。パン雜煮、五錢』としてある。(但し『甲』は當分休みとある。)

聞く所に依れば、こゝのパンは特製の御自慢物であるさうな。『平民パン一斤十四錢』『半斤七錢』『味付平民パン大五錢、小二錢五厘』といふ張出しもある。

今一つ大きな張出しがある。『暑い時に暑い食事を侑むる理由 顧問加藤時次郎談』として、其の理由が細々と書いてある。要するにこゝの仕事は總て加藤君の發案に成り、經營になるものらしい。加藤君は私の友人である。こゝの事を餘り色々書いては提灯持の嫌ひを生ずるから、此くらゐにしておく。

私の行つたのはモウ大ぶん遲くて、普通の夕食の刻限を過ぎてゐたが、表に大勢人だかりがしてゐるので、何事かと思つて樣子を覗ふと、何かの團體旅行者が來て特約の食事をしてゐるらしく、受付の婦人が忙がしさうに『總計五十三名、それで丁度いゝんですよ』と奧の方に向いて叫んだりしてゐた。表に立つてゐるのはモウ食事を濟ました連中で、あとの組の出て來るのを待つてゐるらしかつた。

食堂の中を覗いて見ると、二十人ばかりのお客が、四列に並んだ幅の狹い食卓に向つて、片手に丼をかゝえ、片手にスプーンを持つて立つてゐた。察する所、平民スチユウなる者をやつてゐるらしかつた。それからこゝの特色は腰掛のない事で、皆な立つたまゝでサツサと片づけるといふ遣方だ。食堂は狹い方が、立食制度の結果、交代が早くて、存外多人數を受入れてゐるらしい。立食に落ちつきのない事は勿論で、こんな忙がしい食事をして生きて行かなければならないのかと思ふと、少し淺ましいような氣もするが、然し働き場から飛んで來て、サツサと食ふだけの物を食つて、又働き場に飛んで行くのだと見れば其元氣らしい所に戰鬪的の氣分が現はれて、却つて愉快に思はれないでもない。

やがて最後の組の食事が終ると、巡査に似たような服裝をした、團體の世話役らしい人が、表に群がつてゐる人々に向つて、『之から新橋を渡つて銀座に出で、京橋日本橋を經て神田から電車に乘り代々木に歸る』と訓令した。そして皆が元氣よく出發した。

代々木に歸ると云つた所から察すると、明治神宮の築造について地方からやつて來た忠君愛國の青年團員ででもあつたらうか。それはいづれにせよ、之が若し、社會建設の平民軍であり、理想軍であつたなら、そして此の平民食堂を本據として、出でては働き、入つては食ふと云ふ如何に賴もしい事であらうぞと、私は其のうしろ影を見送りながら考へた。



引越し騷ぎ

伊藤野枝

毎日よく降りますね。鎌倉へ來てまる一日天氣だつた日は一日もないのです。本當に退屈して仕舞ひます。家の中から見える青葉の山々も、はじめはうつとりと見惚れる程美しく珍らしく思ひましたけれど、毎日のにらめつこでいやになります。

例によつて、此處に越すと同時に警察がさはぎ出す、新聞記者がおしかける、大家が驚く、差配が困ると云ふ紋切型の騷ぎがはじまりました。そして町中がそのうはさで持ち切つてゐるさうです。私達が雨の晴れ間を散歩に出ますと、彼方からも此方からも、物珍らしさうな顔をつき出して見てゐます。

鎌倉では、社會主義者と云へば、もうそれは、大變な者のやうに考へてゐます。それは、今年の正月か二月頃に、例の國家社會主義の木つ葉天狗連の竹村、小栗などと云ふ連中が圓覺寺にゐて、一と騷ぎ持ち上げた事が大變に影響してゐるんです。町の人々の間ではその記憶が新しいのに持つて來て、それ等よりももつと惡い奴だと云ふのですから、どんな風に想像してゐるか分りません。

ところが、その圓覺寺のさわぎと云ふのが馬鹿らしくて話にならないやうな事なのです。何んでも町の人の話によりますと、二三人が醉つぱらつて街道の眞中に荷車を横にしてキッチンペッタンとシイソオをやりながら、

『さあ、通れるものなら通つて見ろ』

と云つて威張つて往來止めを食はしたので、荷馬車、自動車、人力車、人間と大變な滯りが出來たのださうです。そして、連中は、その通知に驚いて飛んで來た巡査を毆つて圓覺寺へ歸つたのださうです。

此の報告を受とつて驚いた鎌倉の署長は、あの連中の何に怖れをなしたものか、警察中の警部や巡査を狩り出して、なをその上に六十人の消防手を召集したと云ふのです。そしてその消防手の内の二十人を圓覺寺

の正門に、二十人を西の門に張らして、あとの二十人と巡査とて、署内の、連中の借りてゐる家を囲んだと云ひます。ほんの三四人の人間を拘引するのに何んと云ふ馬鹿な真似をしたものですかねえ。町の人達が云つてゐます『あの署長はバクチに手を入れる事だけはうまい』と。多分あの馬鹿な署長は、バクチをあげるより以上の大手柄をするのだからなどと云ふつもりで、逃げでもされては大變だと云ふので、念には念を入れて大警戒をしたものでせう。署長の考へでは、さうしたので、あの四五人の危険人物を牢屋にぶち込む事が出來て、大手柄をしたと思つて得意なのでせう。けれど實際にはこれで、署長はすつかり町の人達に馬鹿にされる種を蒔いたのです、自分では知らずにゐるのでせうが。何しろ、七八十人の人間を狩り集めて騒ぎながら、肝心の罪人共を縛る事も出來ないで、遠巻きにさせて警察へ連れ込んだと云ふのです。しかも裁判が確定して見ると、五六十錢の菓子を借りたのを無錢飲食と、云ふ名義で、たつた三ケ月の懲役なんです。町の人々、殊に消防手たちが馬鹿らしく思ふのも無理のない話です。

その時の消防手の一人の話が面白いぢやありませんか、「本當に馬鹿にしてやがる。俺達は火を消すのなら役目だけれど、巡査の下働きなんか眞平だあね。お負けに巡査共はみんなあの長い奴を抜くつてんだらう。抜いた日にや向ふだつて死者狂ひになるだらうし、怪我をするだけ馬鹿々々しいから、あの剣を抜いたら逃げて仕舞ふつもりでついて行つたんだ。彼奴等はもう門をはいると、今にも抜きさうにツカに手をかけてやがるんだらう。俺は何方に逃げようかと思つて考へてゐたけれど何しろ彼處は石がゴロ〳〵してやがるんでねえ。構ふことたあねえ、山の中に逃げ込むのが一番危つ氣がねえやうだからさうしようと極めてゐたのさ。處が巡査なんて意久地のねえもんだぜ――」

とまあ云ふ風な話です。そして皆が腕組みをして、三尺四方位離れて取り巻いて來る巡査共を尻目にかけながら悠々と歩いて來たのを『流石にあの連中は違ふな――』と感心してゐたさうです。その話を取りついだ男も同感して『バクチででも捕つて御覧なさい、嫌やだの何だのと云つた處で聞くもんぢやねえ。それこそ皆んなで踏んだり蹴つたり殴つたりの揚句に手取り足取りフン縛つちまひますよ。全くの處何んですね。奴等も吾々だと馬鹿にしやがるんですね』と云つてゐました。

私達が此處に越したのが五月三十日ですが、家を借りてしまつたのは十九日ですからその間十日ばかりあつた譯です。越す五日ばかり前に、――それまではその事は秘密にしておいたのですが、――運送屋に交渉をするのに逗子へ越すと云ふ事にしたのです。處がウマ〳〵と私達の計略に乗つた或る筋では、早速葉山逗子一帶の貸家調べで大さはぎをしたさうです。二三日かゝつても、どうしても分らないので、それでは鎌倉ではあるまいかと氣がついて、此處でも片つぱしから調べたさうです。勿論此の私達の借りたのも調べはしのたでせうが、其處はいゝ加減にやつてあつても、調べる方が頓間なのですから、金輪際分りせしません。

滑稽な事には、その話を聞いた鎌倉の所謂有力者連が、選挙季節の事とて始終顔を合はせてゐるものですから、『あんな奴には家も座敷も一切貸さない事にしよう』と申合はせたと云ふ事です。しかしお生憎な事には、その申合せは、私達が越して來る二日前だと云ふのですから何んの役にも立たなかつた譯です。

しかし、頓間な者は何處までも頓間な事しか考へないもので、私達が此處に落ちついてからは『あんな奴には米味噌醤油を賣らない事にすれば閉口して行つてしまふだらう』と云つてゐるさうです。しかしそれも私共には一向何んの影響もないんです。何故なら、鎌倉では向ふで買つてくれと云つても私達は出來るだけ買ひ度くないのですから。昨日も或る店で買物をしようとしますと其の店の主人が、今自分の處でもそれが入用で漸く他の店から買つて間に合はせたが、自分の店で賣るのよりは三割方も高いと云つて、

『何しろ鎌倉のあきんどさんは高いのを自慢にしてゐるのですからね』

と眞顔になつてゐましたが、それは全くです。私達のような貧乏なものは、とても此處の『別荘値段』のおつき合ひは出來かねます。まあさう云ふ調子ですから、私は出來るだけ『長くゐて此の町の人達に私達がどんなに『善良』な人間であるかを知らせてやりにいものだと思つてゐます。

これて、町の人間達が、此の町にそんな奴は置かないと云ふ申合はせを守つて排斥運動でもすれば、面白いのですが、その點はいゝ加減なもので、別に町から立ち退けと云ふ評判もないし、米味噌醤油を賣らないと云ふ意地を見せる『あきんどさん』もゐません。此の分ならば、自分でいやにならない限りは此處に落ちついてゐる事が出來さうです。

もつとも、警察では例の通り（これは向ふでは頗る内々のつもりで、決して此方に解らせないようにと云ふ旨を含めてですが）盛んに追ひ立て運動をやつたものです。本當に何時の何處の遣り方とも一分一厘も違はない、文字通り型とほりに差配を脅かし、大屋を使嗾して、追ひ出さうと企てたのです。しかしこれも、例によつて例の如く、弱味は向ふにあるものですから頗るまづい交渉で、此方に一言を開けさせれば二の句がつげない有様です。それに向ふにして見れば、『決して警察からのさしがねだなど丶云はないで』と極内で頼まれたのに、此方の方が先きに承知をしてゐて圖星をさすのですから差配さんも困まるんですね。

何時も何時も、何處へ引つこしても、極まつて此の手段をとるのです。困るのは差配や大家です、それでも相手が警察だから、みんな迷惑をしても我慢して、その借家人に對して道理を引つこませて無理を通して警察の便宜を計つてやらうと勸めますけれど、私の方では、無理を通すことは何よりも嫌ひですし、殊に相手が、警察と云ふ看板をあげてる處である以上は、それこそ金輪際此方の道理をひつこませつこはありません。さうなつて來ると困るのは大家や差配だけです。誠に困る事には同情も出來ますが、私達の方から云へば、さう云ふ大家や差配は好きで

困るのですから何んとも仕方がないのです。つまり馬鹿だから困るんです。利口な人間なら、無理を通さなければならぬ場合には『斯々で、何しろ相手が警察ですから、無理とは分つてゐますが其處を一つ』とやれば事は簡單に片づくんです。それを不知らぬ顔で、無理を道理に云ひくるめて誤魔化さうとしたり、如何にもありふれた他のうそつぱちな口實で來たりすると此方もつい癪に障るので一つ困らせて事實を吐かしてやらうと云ふ事になつて喧嘩になるのです、それはあなたも知つてゐますね。

今度も警察でやはりおなし手段をとつたのですけれど、此度は此方で先を越して警察から何か云つて來るに違ひないから、そしたら直ぐ知らせてくれるようにと云つて置きましたので差配の方でも、しらばつくれる譯にもゆきませんし、殊に後で斷らうとした時には、私共に直接に來るのではなく、此の家を借りておいてくれたNさんと云ふMさんの小父さんの處に行つたのです。ですから其處では何も彼も打ち明けた話があるので私の方も便利でした。

それに、大家さんが案外早く諦めてくれたものですから、先づ無事に濟みましたが、それでも警察の連中なんて鹿馬なもので、大家さんが承知した後では、差配を拜み倒してものにしようとしたらしい形跡があります。

大家さんが案外早わかりで承知してくれたと云ふ裏には、極内の話ですが、大家にはどうしても承知をしなければ損をする事情があつたのです。

實は、私達が引越すと直ぐ報知新聞で直ぐ記事にしましたが、それによりますと、持主は大谷嘉兵衛氏だとあるのですが、實際に、差配さんが主人と呼んでゐるのは女だと云ふのです。

『ちやあきつと、大谷嘉兵衛の妾だらう』などゝよくある事ですから云つてゐました。處が、内のMさんの話では、大谷嘉兵衛は横濱では有名な道德家で決してそんな不行跡な事をする人ではない筈だ。現に横濱市の教育課長とかをしてゐる人だ、と云ふのです。でそれは大變失禮な推測をしたものだと思つてゐたのです。處がそのない筈の事があつたのです。が此の話はもう少し後まはしにしませう。

何しろ、警察では前々から騷いでゐたと云ふのですから、私達は其の晩のうちにでも何か云つて來るかと待つてゐましたが、翌日になつても音沙汰なしなので少々不思議に思つてゐました。するとその夜Nさんが見えて、實は差配から斷つて來たと云ふのです。新聞にも出るし、警察からも來たので、主人に呼びつけられて叱られたと云ふ前置きで、『Nさんのお話で貸したのだから、Nさんがおはいりになるのならいゝが、他の人がはいるのでは貸せぬ。殊に社會主義者などゝ云ふ者にはどうしても貸す譯にゆかぬ』と云ふ主人の言葉を取り次ぎに來たのださうです しかし、これは誠におかしい話で、Nさんがはいるのでない事は最初から分つてゐるのだから、そんな云ひかかりはつかない筈なのです。要する

に『社會主義者には貸せぬ』が、向ふの本音です、しかし、約束をして前から丁寧に扱つて上げるといゝと申しましたから早速歸りました」

金を取り、十日もしてから返して來てそんな云ひがゝりをされてはたまらないと云ふ挨拶をして行つたと云ふのです。で、直接談判には及ばずに別に角立たずにおさまつた譯です。

りません。Nさんは、差配を仲にいくら話しても駄目だから、直接談判にしようと云つて來たと笑つてゐました。

『これは面白い』

私はその話をきいてひとりで腹の中でおもしろがつてゐました。Mさんも

『それやいゝや、相手が大谷なら不足はない。面白いぢやないか』

と矢張りおもしろがつてゐました。

今まで隨分此の問題にはブツかりましたけれど、斯んなに正面から堂堂と『社會主義者だから貸せぬ』とハツキリした理由を云つて拒絶し得た大家さんは一人もないんです。地位名望がある程、アイマイに斷らうとするのです。處が、流石に大谷と云ふ大家さんは有名な道德家だけに、他人とはちがつてそんなにも勇敢に挑戰して來たのですから、私達の方でも存分に立ち向ふ事が出來ようと云ふものです。喧嘩の爲榮えがあるぢやありませんか。Oが歸つて來て話をしたらどんな顏をするだらうなどゝおもつてゐました。が、それはほんの一時の、『ぬかおもしろがり』で、直ぐおつかけて來たNさんの息子さんの報告によりますと、Nさんが家を出かけた後に差配が再び來て、

『主人に歸つて話しましたところ、Nさんと云ふ方が長く鎌倉に住んでゐる信用のある方なら、別にさしつかいはあるまいからお貸してもいい

四五日たつてからOは面白さうな笑顏をしながら。

『面白い話を聞いて來たよ』云ふのです。

『どんな面白い話です？』

『それや面白い話だ。やつぱり大家さんと云ふのは大谷の妾ださうだよ。何んでも大谷は道德家で、獨身主義者なんださうだ。そして又實際歲五十までは非常に道心堅固だつたつて。——』

それが五十を越してはじめて女中に手をつけて子供が出來たんださうです。處がその女中が二人の子供を殘して死んだので家庭敎師を傭いたのですね。その家庭敎師が即ち、此度の私達の大家さんなんです。

しかし、此の事は大谷嘉兵衛の大秘密で、鎌倉にそんな家のある事も内密なら、その妾の生活費のもとでとして建てた貸家を持つてゐる事もいゝい、ないしよだらうぢやありませんか。それだのに、報知なんかに麗々と、大谷氏所有家屋云々と出たものだからお爺さん、びつくりして駈けつけて、差配をウンと怒りつけたのださうです。『何んだつてそんな奴に貸したのだ』などゝ。

一體こんな事で差配を怒るのは隨分不埒だと私は思ひますよ。何故つて、差配は決して私達と知つて約束する譯ぢやないんですからねえ。私

達の方では何時でも警察の干渉がウルサイから表向き私達の名前で家を借りた事などは一度もありません。少し位大家や差配で調べたつて勿論分らないようにしてゐるのですから。それを後になつて怒つたつて仕方がありませんよ。怒られのは寧ろ私達の方でなくてはならない譯なのですのに。

殊に、大谷嘉兵衛氏ともあらう紳士が、自分が、世間に知れては悪いやうな不埒な行爲をして居るのは棚にあげて、それがバレさうになつたからと云つて、何んの罪もない差配を怒りつけるとは何んと云ふ事でせう、

どんな紳士であれ、名望家であれ、私共はその人が妾を囲はうが、色女をつくらうが、それを不道徳とも不思議とも思ひはしませんが、たゞ、それを秘しがくしにかくして、口を拭つて素知らぬ顔をして善人づら、道徳家づらをする時に、はじめて其の行爲を惡みます。

私は本當に、氣の毒な差配の爲めに、大いに大谷嘉兵衛氏をとつちめてやりたいやうに思ひます。

『僕等は家賃を拂つてその妾の生活費を貢ぐんだな。そして大谷嘉兵衛の行跡を助長さすんだな。そんな不道徳な家賃は拂はない事にするかな。大谷嘉兵衛の爲めに――』

なんてOは笑つてゐました。しかし、氣の毒な差配の爲めに、私は大谷嘉兵衛氏の不行跡助長の費用を出來るだけキチンと拂つてやらなけばならないと思つてゐます。本當に考へれば考へる程、今の世の中と云ふものは變なものですね。こんな不合理な事をキチンとやつてのけなければ、人間並みに扱はないと云ふのですからね。

斯うして落ちつきはしましたが、さてこの住居が何時まで續きますか知ら。

そちらは。まだいゝ家が見つからないのですか。やはりあなたの方も一事件持ち上る事を覺悟してゐなければいけませんよ。そして出來るだけうまく切りぬけて下さい。彼方此方で、もう二度と再び紋切型の引越妨害をさせないようにしたいものですね。



（創作と社會講談）

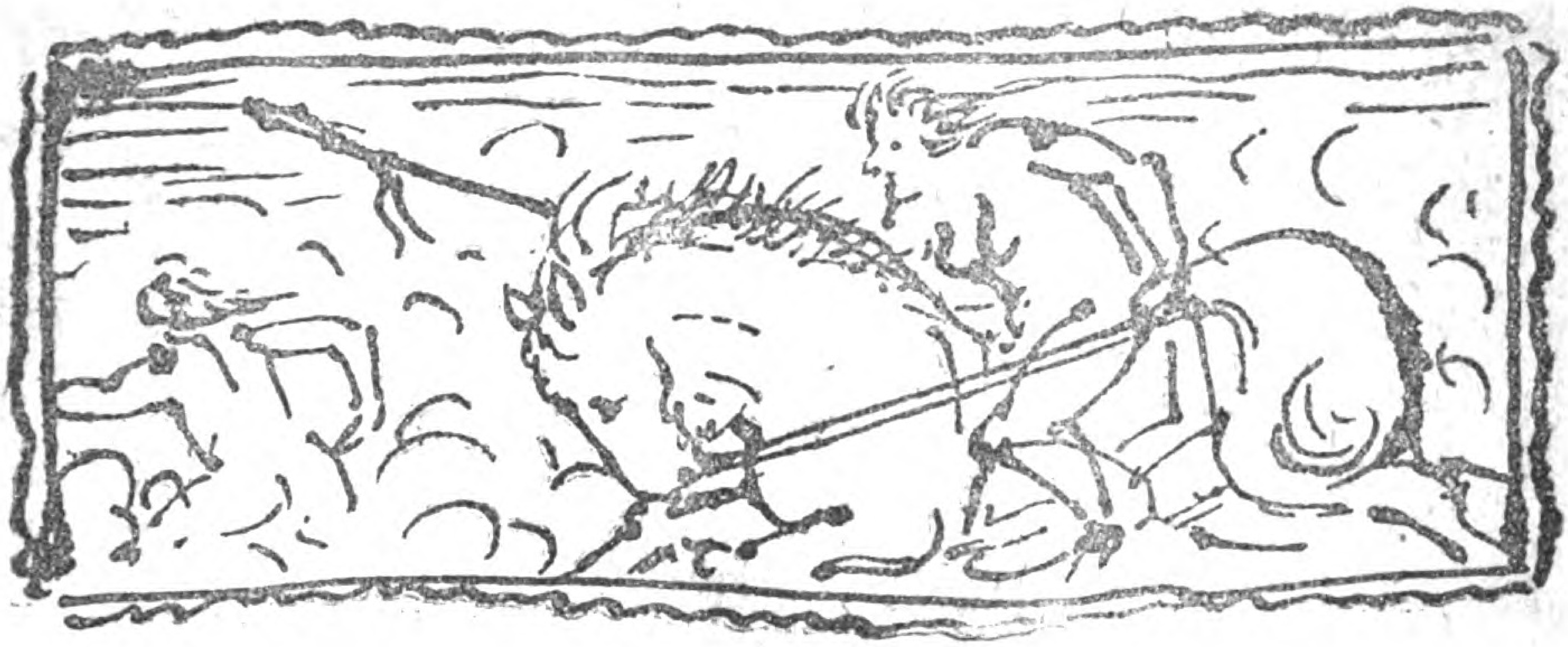
□影　芥川龍之介

□罪　水守龜之助

□汚染　近松秋江

□石川五右衛門　上司小劍

□鼠小僧と蜆賣　荒畑寒村



影

芥川龍之介

横濱。

日華洋行の主人陳彩は、机に背廣の兩肘を凭せて、火の消えた葉卷を啣へた儘、今日も堆い商用書類に、繁忙な眼を曝してゐた。

更紗の窓掛けを垂れた部屋の内には、相不變殘暑の寂寞が、息苦しい位支配してゐた。その寂寞を破るものは、ニスの匂のする戸の向うから、時々此處へ聞えて來る、かすかなタイプライタアの音だけであつた。

書類が一山片づいた後、陳はふと何か思ひ出したやうに、卓上電話の受話器を耳へ當てた。

「私の家へかけてくれ給へ。」

陳の唇を洩れる言葉は、妙に底力のある日本語であつた。

「誰？——婆や？——奧さんにちよいと出て貰つてくれ。——房子かい？——私は今夜東京へ行くからね、——ああ、向うへ泊つて來る。——歸れないか？——とても汽車に間に合うまい。——ぢや頼むよ。——何？。醫者に來て貰つた？——それは神經衰弱に違ひないさ。——よろしい。さやうなら。」

陳は受話器を元の位置に戻すと、何故か額を曇らせながら、肥つた指に燐寸を擦つて、啣へてゐた葉卷を吸ひ始めた。

……煙草の匣、草花の匂、ナイフやフオクの皿に觸れる音、部屋の隅から湧き上る調子外れのカルメンの音樂、——陳はさう云ふ騷ぎの中に、一杯の麥酒を前にしながら、たつた一人茫然と、卓子に肘をついてゐる。彼の周圍にあるものは、客も、給仕も、煽風機も、何一つ目まぐるしく動いてゐないものはない。が、唯、彼の視線だけは、帳場机の後の女の顏へ、さつきからぢつと注がれてゐる。

女はまだ見た所、二十を越えてもゐないらしい。それが壁へ貼つた鏡を後に、絶えず鉛筆を動かしながら、忙しさうにビルを書いてゐる。額の捲き毛、かすかな頰紅、それから地味な靑磁色の半襟。

陳は麥酒を飲み干すと、徐に大きな體を起して、帳場机の前へ步み寄つた。

「陳さん。何時私に指環を買つて下すつて？」女はかう云ふ間にも、依然として鉛筆を動かしてゐる。

「その指環がなくなつたら。」

陳は小錢を探りながら、女の指へ顋を向けた。其處には既に二年前から、延べの金の兩端を抱かせた、約婚の指環が嵌つてゐる。

「ぢや今夜買つて頂戴。」

女は咄嗟に指環を拔くと、ビルと一しよに彼の前へ投げた。

「これは護身用の指環なのよ。」

カツフエの外のアスフアルトには、涼しい夏の夜風が流れてゐる。陳は人通りに交りながら、何度も町の空の星を仰いで見た。その星も皆今夜だけは、…………

誰かの戸を叩く音が、一年後の現實へ陳彩の心を喚び返した。

「おはひり」

その聲がまだ消えない内に、ニスの匂のする戸がそつと明くと、顔色の蒼白い書記の今西が、無氣味な程靜にはひつて來た。

「手紙が參りました。」

默つて頷いた陳の顔には、その上今西に一言も、口を開かせない不機嫌さがあつた。今西は冷かに目禮すると、一通の封書を殘した儘、又前のやうに音もなく、戸の向うの部屋へ歸つて行つた。

戸が今西の後にしまつた後、陳は灰皿に葉卷を捨てて、机の上の封書を取上げた。それは白い西洋封筒に、タイプライタアで宛名を打つた、格別普通の商用書簡と、變る所のない手紙であつた。しかしその手紙を手にすると同時に、陳の顔には云ひやうのない嫌惡の情が浮んで來た。

「又か。」

陳は太い眉を顰めながら、忌々しさうに舌打ちをした。が、それにも關らず、靴の踵を机の緣へ當てると、殆輪轉椅子の上に仰向けになつて、紙切小刀も使はずに封を切つた。

「拜啓、貴下の夫人が貞操を守られざるは、再三御注告………貴下が今日に至るまで、何等斷乎たる處置に出でられざるは………されば夫人は舊日の情夫と共に、日夜………日本人にして且珈琲店の給仕女たりし房子夫人が、……………支那人たる貴下の爲に、萬斛の同情無き能はず候。………今後もし夫人を離婚せられずんは、………貴下は萬人の嗤笑する所となるも………微衷不悪御推察………敬白。貴下の忠實なる友より。」

手紙は力なく陳の手から落ちた。

………陳は卓子に倚りかかりながら、レエスの窓掛けを洩れる夕明りに、女持ちの金時計を眺めてゐる。が、蓋の裏に彫つた文字は、房子のイニシアルではないらしい。

「これは？」

新婚後まだ何日も經たない房子は、西洋箪笥の前に佇んだ儘、卓子越しに夫へ笑顔を送つた。

「田中さんが下すつたの。御存知じやなくつて？　倉庫會社の――」

卓子の上にはその次に、指環の箱が二つ出て來た。白天鵞絨の蓋を明けると、一つには眞珠の、他の一つには土耳古玉の指環がはひつてゐる。

「久米さんに野村さん。」

今度は珊瑚珠の根懸けが出た。

「古風だわね。久保田さんに頂いたのよ。」

その後から――何が出て來ても知らないやうに、陳は唯ぢつと妻の顔を見ながら、考深さうにこんな事を云つた。

「これは皆お前の戰利品だね。大事にしなくつちや濟まないよ。」

すると房子は夕明りの中に、もう一度あでやかに笑つて見せた。

「ですからあなたの戰利品もね。」

「その時は彼も嬉しかつた。しかし今は……………陳は身ぶるひを一つすると、机にかけてゐた兩足を下した。それは卓上電話のベルが、突然彼の耳を驚かしたからであつた。

「私。――よろしい。――繋いでくれ給へ。」

彼は電話に向ひながら、苛立たしさうに額の汗を拭つた。

「誰？――里見探偵事務所はわかつてゐる。事務所の誰？――吉井君？――よろしい。報告は？――何が來てゐた？――醫者？――それから？――さうかも知れない。――ぢや停車場へ來てゐてくれ給へ。――いや、終列車にはきつと歸るから。――間違はないやうに。さやうなら。」

受話器を置いた陳彩は、まるで放心したやうに、少時は默然と坐つてゐた。が、やがて置き時計の針を見ると、半ば

機械的にベルの鈕を押した。

　書記の今西はその響に應じて、心もち明けた戸の後から、痩せた半身をさし延ばした。

「今西君。鄭君にさう云つてくれ給へ。今夜はどうか私の代りに、東京へ御出でを願ひますと。」

　陳の瞳は何時の間にか、力のある調子を失つてゐた。今西はしかし例の通り、冷然と目禮を送つた儘、すぐに戸の向うへ隱れてしまつた。

　その内に更紗の窓掛けへ、おひおひ當つて來た薄曇りの西日が、この部屋の中の光線に、どんよりした赤味を加へ始めた。と同時に大きな蠅が一匹、何處から此處へ紛れこんだか、鈍い羽音を立てながら、ぼんやり頬杖をついた陳のまはりに、不規則な圓を描き始めた。……………

　鎌倉。

　陳彩の家の客間にも、レエスの窓掛けを垂れた窓の内には、晩夏の日の暮が近づいて來た。しかし日の光は消えたものの、窓掛けの向うに煙つてゐる、まだ花盛りの夾竹桃は、この涼しさうな部屋の空氣に、快い明るさを漂してゐた。

　壁際の籐椅子に倚つた房子は、膝の三毛猫をさすりながら、その窓の外の夾竹桃へ、物憂さうな視線を遊ばせてゐた。

「旦那樣は今晩も御歸りにならないのでございますか？」

　これはその側の卓子の上に、紅茶の道具を片づけてゐる召使ひの老女の言葉であつた。

「ああ、今夜も寂しいわね。」

「せめて奥樣が御病氣でないと、心丈夫でございますけれども――」

「それでも私の病氣はね、唯神經が疲れてゐるのだつて、今日にも山内先生がさう仰有つたわ。二三日よく眠りさへすれば、――あら。」

老女は驚いた眼を主人へ擧げた。すると小供らしい房子の顔には、何故か今までにない恐怖の色が、ありありと眸に漲つてゐた。

「どう遊ばしました？　奥様。」

「いいえ、何でもないのよ。何でもないのだけれど、——」

房子は無理に微笑しようとした。

「誰か今あすこの窓から、そつとこの部屋の中を、——」

しかし老女が一瞬の後に、その窓から外を覗いた時には、唯微風に戰いでゐる夾竹桃の植込みが、人氣のない庭の芝原を透かして見せただけであつた。

「まあ、氣味の惡い。きつと又御隣の別莊の坊ちやんが、惡戲をなすつたのでございますよ。」

「いいえ、御隣の坊ちやんなんぞぢやなくつてよ。何だか見た事があるやうな——さうさう、何時か婆やと長谷へ行つた時に、私たちの後をついて來た、あの鳥打帽をかぶつてゐる、若い人のやうな氣がするわ。それとも——私の氣のせいだつたかしら。」

房子は何か考へるやうに、ゆつくり最後の言葉を云つた。

「もしあの男でしたら、どう致しませう。旦那樣は御歸りになりませんし、——何なら爺やでも警察へ、さう申しにやつて見ませうか。」

「まあ、婆やは臆病ね。あの人なんぞ何人來たつて、私はちつとも怖くはないわ。けれどももし——もし私の氣のせいだつたら——」

老女は不審さうに瞬きをした。

「もし私の氣のせいだつたら、私はこの儘氣違になるかも知れないわね。」

「奥様はまあ、御冗談ばつかり。」

老女は安心したやうに微笑しながら、又紅茶の道具を始末し始めた。

「いいえ、婆やは知らないからだわ。私はこの頃一人でゐるとね、きつと誰かが私の後に立つてゐるやうな氣がするのよ。立つて、さうして私の方をぢつと見つめてゐるやうな――」

房子はかう云ひかけた儘、彼女自身の言葉に引き入れられたのか、急に憂鬱な眼つきになつた。

……電燈を消した二階の寢室には、かすかな香水の匂のする薄暗がりが擴かつてゐる。唯窓掛けを引かない窓だけが、ぼんやり明るんで見えるのは、月が出てゐるからに違ひない。現にその光を浴びた房子は、獨り窓の側に佇みながら、眼の下の松林を眺めてゐる。

夫は今夜も歸つて來ない。召使ひたちは既に寢靜まつた。窓の外に見える庭の月夜も、ひつそりと風を落してゐる。その中に鈍い物音が、間遠に低く聞えるのは、今でも海が鳴つてゐるらしい。

房子は少時立ち續けてゐた。すると次第に不思議な感覺が、彼女の心に目ざめて來た。それは誰かが後にゐて、ぢつとその視線を彼女の上に集注してゐるやうな心もちである。

が、寢室の中には彼女の外に、誰も人のゐる理由はない。もしゐるとすれば、――いや、戸には寢る前に、ちやんと錠が下してある。ではこんな氣がするのは、――さうだ。きつと神經が疲れてゐるからに相違ない。彼女は薄明い松林を見下しながら、何度もかう考へ直さうとした。しかし誰かが見守つてゐると云ふ感じは、いくら一生懸命に打ち消して見ても、だんだん強くなるばかりである。

房子はとうとう思ひ切つて、怖は怖は後を振り返つて見た。が、果して寢室の中には、飼ひ馴れた三毛猫の姿さへ見えない。やはり人がゐるやうな氣がしたのは、病的な神經の仕業であつた。――と思つたのはしかし言葉通り、ほんの一瞬の間だけである。房子はすぐに又前の通り、何か眼に見えない物が、この部屋を滿たした薄暗がりの何處かに、潛

んでゐるやうな心もちがした。しかも以前より更に堪へられない事には、今度はその何物かの眼が、窓を後にした房子の顔へ、まともに視線を燒きつけてゐる。

房子は全身の戰慄と鬪ひながら、手近の壁へ手をのばすと、咄嗟に電燈のスヰッチを捻つた。と同時に見慣れた寢室は、月明りに交つた薄暗がりを拂つて、頼もしい現實へ飛び移つた。寢臺、西洋蚊帳、洗面臺、——今はすべてが晝のやうな光の中に、嬉しい程はつきり浮き上つてゐる。その上それが何一つ、彼女が陳と結婚した一年以前と變つてゐない。かう云ふ幸福な周圍を見れば、どんなに氣味の惡い幻も、——いや、しかし怪しい何物かは、眩しい電燈の光にも恐れず、寸刻もたゆまない凝視の眼を房子の顔に注いでゐる。彼女は兩手に顔を隱すが早いか、無我無中に叫ばうとした。が、何故か聲が立たない。その時彼女の心の上には、あらゆる經驗を超越した恐怖が、……………

房子は一週間以前の記憶から、吐息と一しよに解放された。その拍子に膝の三毛猫は、彼女の膝を飛び下りると、毛並のみ美しい背を高めて、快ささうに欠伸をした。

「そんな氣は誰でも致すものでございますよ。爺やなどは何時ぞや御庭の松へ、鋏をかけて居りましたら、まつ晝間空に大勢の小供の笑ひ聲が致したとか、さう申して居りました。それでもあの通り氣が違ふ所か、御用の暇には私へ小言ばかり申して居るぢやございませんか。」

老女は紅茶の盆を擡げながら、小供を慰るやうにかう云つた。それを聞くと房子の頬には、始めて微笑らしい影がさした。

「それこそ御隣の坊ちやんが、おいたをなすつたのに違ひないわ。そんな事にびつくりするやうぢや、爺やもやつぱり臆病なのね。——あら、おしやべりをしてゐる内に、とうとう日が暮れてしまつた。今夜は檀那様が御歸りにならないから、好いやうなものだけれど、——御湯は？　婆や。」

「もうよろしうございますとも。何ならちよいと私が御加減を見て參りませうか。」

「好いわ。すぐにはいるから。」

房子は漸く氣輕さうに、壁側の籐椅子から身を起した。

「又今夜も御隣の坊ちやんたちは、花火を御揚げなさるかしら。」

老女が房子の後から、靜に出て行つてしまつた跡には、もう杏竹桃も見えなくなつた、薄暗い空虛の客間が殘つた。すると二人に忘れられた、あの小さな三毛猫は、急に何か見つけたやうに、一飛びに戸口へ飛んで行つた。さうしてまるで誰かの足に、體を擦りつけるやうな身ぶりをした。が、部屋に擴がつた暮色の中には、その三毛猫の二つの眼が、無氣味な燐光を放つ外に、何もゐるやうなけはひは見えなかつた。………

横濱。

日華洋行の宿直室には、長椅子に寢ころんだ書記の今西が、余り明くない電燈の下に、新刊の雜誌を擴げてゐた。が、やがて手近の卓子の上へ、その雜誌をばたりと抛ると、大事さうに上衣の隱しから、一枚の寫眞をとり出した。さうしてそれを眺めながら、蒼白い頰に何時までも、幸福らしい微笑を浮べてゐた。

寫眞は陳彩の妻の房子が、桃割れに結つた半身であつた。

鎌倉。

下り終列車の笛が、星月夜の空に上つた時、改札口を出た陳彩は、たつた一人跡に殘つて、二つ折の鞄を抱へた儘、寂しい構内を眺めまはした。すると電燈の薄暗い壁側のベンチに坐つてゐた、背の高い背廣の男が一人、太い籐の杖を引きずりながら、のそのそ陳の側へ歩み寄つた。さうして濶達に鳥打帽を脫ぐと、聲だけは低く挨拶をした。

「陳さんですか？　私は吉井です。」

陳は殆無表情に、じろりと相手の顏を眺めた。
「今日は御苦勞でした。」
「先程電話をかけましたが、——」
「その後何もなかつたですか？」
陳の語氣には相手の言葉を彈き除けるやうな力があつた。
「何もありません。奥さんは醫者が歸つてしまふと、日暮までは婆やを相手に、何か訊して御出でした。それから御湯や御食事をすませて、十時頃までは蓄音機を御聞きになつてゐたやうです。」
「客は一人も來なかつたですか？」
「ええ、一人も。」
「君が監視をやめたのは？」
「十一時二十分です。」
吉井の返答もてきぱきしてゐる。
「その後終列車まで汽車はないですね。」
「ありません。上りも、下りも。」
「いや、難有う。歸つたら里見君に、よろしく云つてくれ給へ。」
陳は麥藁帽の庇へ手をやると、吉井が鳥打帽を脫ぐのには眼もかけず、砂利を敷いた構外へ大股に步み出した。その容子が余り無遠慮すぎたせいか、吉井は陳の後姿を見送つたなり、ちよいと兩肩を聳やかせた。が、すぐ又氣にも止めないやうに、輕快な口笛を鳴らしながら、停車場前の宿屋の方へ、太い籐の杖を引きずつて行つた。……………
一時間の後陳彩は、彼等夫婦の寢室の戶へ、盜賊のやうに耳を當てながら、ぢつと容子を窺つてゐる彼自身を發見し

た。寢室の外の廊下には、息のつまるやうな暗闇が、一面にあたりを封じてゐた。その中に唯一點、かすかな明りが見えるのは、戸の向うの電燈の光が、鍵穴を洩れるそれであつた。

陳は殆ど破裂しさうな心臟の皷動を抑へながら、ぴつたり戸へ當てた耳に、全身の注意を集めてゐた。が、寢室の中からは、何の話し聲も聞えなかつた。その沈默が又陳にとつては、一層堪へ難い呵責であつた。彼は目の前の暗闇の底に、停車場から此處へ來る途中の、思ひがけない出來事が、もう一度はつきり見えるやうな氣がした。

……………枝を交した松の下には、しつとり砂に露の下りた、細い路が續いてゐる。大空に澄んだ無數の星も、その松の枝の重なつた此處へは、滅多に光を落して來ない。が、海の近い事は、疎な芒に流れて來る汐風が明かに語つてゐる。陳はさつきからたつた一人、夜と共に強くなつた松脂の匂を嗅ぎながら、かう云ふ寂しい闇の中に、注意深い歩みを運んでゐた。

その内に彼はふと足を止めると、不審さうに行く手を透かして見た。それは彼の家の煉瓦塀が、何歩か先に黑々と、現れて來たからばかりではない。その常春藤(きつた)に蔽はれた、古風な塀の見えるあたりに、忍びやかな靴の音が、突然聞え出したからである。

が、いくら透して見ても、松や芒の闇が深いせいか、肝腎の姿は見る事が出來ない。唯、咄嗟に感づいたのは、その足音がこちらへ來ずに、向うへ行くらしいと云ふ事である。

「莫迦な、この路を歩く資格は、おればかりにある譯ぢやあるまいし。」

陳はかう心の中に、早くも疑惑を抱き出した彼自身を叱らうとした。が、この路は彼の家の裏門の前へ出る外には、何處へも通じてゐない筈である。して見れば、――と思ふ刹那に陳の耳には、その裏門の戸の開く音が、折から流れて來た汐風と一しよに、かすかながらも傳はつて來た。

「可笑しいぞ。あの裏門には今朝見た時も、錠がかかつてゐた筈だが。」

さう思ふと共に陳彩は、獲物を見つけた獵犬のやうに、油斷なくあたりへ氣を配りながら、そつとその裏門の前へ歩み寄つた。が、裏門の戸はしまつてゐる。力一ぱい押して見ても、動きさうな氣色も見えないのは、何時の間にか元の通り、錠が下りてしまつたらしい。陳はその戸に倚りかゝりながら、膝を埋めた芒の中に、少時は茫然と佇んでゐた。

「門が明くやうな音がしたのは、おれの耳の迷だつたかしら。」

が、さつきの足音は、もう何處からも聞えて來ない。常春藤の蔟つた塀の上には、火の光もささない彼の家が、ひつそりと星空に聳えてゐる。すると陳の心には、急に悲しさがこみ上げて來た。何がそんなに悲しかつたか、それは彼自身にもはつきりしない。唯其處に佇んだ儘、乏しい虫の音に聞き入つてゐると、自然と涙が彼の頬へ、冷やかに流れ始めたのである。

「房子。」

陳は殆呻くやうに、なつかしい妻の名前を呼んだ。

するとその途端である。高い二階の室の一つには、意外にも眩しい電燈がともつた。

「あの窓は、――あれは、――」

陳は際どい息を呑んで、手近の松の幹を捉へながら、延び上るやうに二階の窓を見上げた。窓は、――二階の寢室の窓は、硝子戸をすつかり明け放つた向うに、明るい室内を覗かせてゐる。さうして其處から流れる光が、塀の内に茂つた松の梢を、ぼんやり暗い空に漂はせてゐる。

しかし不思議はそればかりではない。やがてその二階の窓際には、こちらへ向いたらしい人影が一つ、朧げな輪廓を浮き上らせた。生憎電燈の光が後にあるから、顏かたちは誰だか判然しない。が、兎も角もその姿が、女でない事だけは確である。陳は思はず塀の常春藤を掴んで、倒れかかる體を支へながら、苦しさうに切れ切れな聲を洩らした。

「あの手紙は、――おれは、――房子だけは――」

一瞬間の後陳彩は、安々塀を乘り越えると、庭の松の間をくゞりくゞり、首尾よく二階の眞下にある、客間の窓際へ忍び寄つた。其處には花も葉も露に濡れた、水々しい杏竹桃の一むらが、……

陳はまつ暗な外の廊下に、乾いた唇を嚙みながら、一層嫉妬深い聞き耳を立てた。それはこの時戸の向うに、さつき彼が聞いたやうな、用心深い靴の音が、二三度床に響いたからであつた。

足音はすぐに消えてしまつた。が、興奮した陳の神經には、程なく窓をしめる音が、鼓膜を刺すやうに聞えて來た。その後には、——又長い沈默があつた。

その沈默は忽ち絞め木のやうに、色を失つた陳の額へ、冷たい脂汗を絞り出した。彼はわなわな震へる手に、戸のノツプを探り當てた。が、戸に錠の下りてゐる事は、すぐにそのノツプが敎へてくれた。

すると今度は櫛かピンかが、突然ぱたりと落ちる音が聞えた。しかしそれを拾ひ上げる音は、いくら耳を澄ましてゐても、何故か陳には聞えなかつた。

かう云ふ物音は一つ一つ、文字通り陳の心臟を打つた。陳はその度に身を震はせながら、それでも耳だけは剛情にも、ぢつと寢室の戸へ押しつけてゐた。しかし彼の興奮が極度に達してゐる事は、時々彼があたりへ投げる、氣違ひじみた視線にも明かであつた。

苦しい何秒かが過ぎた後、戸の向うからはかすかながら、ため息をつく聲が聞えて來た。と思ふとすぐに寢臺の上へも、誰かが靜に上つたやうであつた。

もしこんな狀態が、もう一分續いたなら、陳は戸の前に立ちすくんだ儘、失心してしまつたかも知れなかつた。が、この時戸から洩れる、蜘蛛の糸程の朧げな光が、天啓のやうに彼の眼を捉へた。陳は咄嗟に床へ這ふと、ノツプの下にある鍵穴から、食ひ入るやうな視線を室内へ送つた。

その刹那に陳の眼の前には、人間の見る可らざる光景が開けた。…………

横濱。

書記の今西は内隱しへ、房子の寫眞を還してしまふと、靜に長椅子から立ち上つた。さうして例の通り音もなくまつ暗な次の間へはひつて行つた。

スウヰッチを捻る音と共に、次の間はすぐに明くなつた。その部屋の卓上電燈の光は、何時の間に其處へ坐つたか、タイプライタアに向つてゐる今西の姿を照し出した。

今西の指は忽ちの内に、目まぐるしい運動を續け出した。と同時にタイプライタアは、休みない響を刻みながら、何行かの文字が斷續した一枚の紙を吐き始めた。

「拜啓、貴下の夫人が貞操を守られざるは、この上猶も申上ぐべき必要無き事と存じ候。されど貴下は溺愛の餘り…………………」

今西の顏はこの瞬間、憎惡そのもののマスクであつた。

鎌倉。

陳の寢室の戸は破れてゐた。が、その外は寢臺も、西洋箪笥も、洗面臺も、それから明るい電燈の光も、悉一瞬間以前と同じであつた。

陳彩は部屋の隅に佇んだ儘、寢臺の前に伏し重なつた、二人の姿を眺めてゐた。その一人は房子であつた。――と云ふよりも寧ろさつきまでは、房子だつた「物」であつた。この顏中紫に腫れ上つた「物」は、半ば舌を吐いた儘、薄眼に天井を見つめてゐた。もう一人は陳彩であつた。部屋の隅にゐる陳彩と、寸分も變らない陳彩であつた。これは房子だつた「物」に重なりながら、爪も見えない程相手の喉に、兩手の指を埋めてゐた。さうしてその露な乳房の上に、生

死もわからない頭を凭せてゐた。

何分かの沈默が過ぎた後、床の上の陳彩は、まだ苦しさうに喘ぎながら、徐に肥つた體を起したと思ふと、すぐ又側にある椅子の上へ、倒れるやうに腰を下してしまつた。

その時部屋の隅にゐる陳彩は、靜に壁際を離れながら、房子だつた「物」の側に歩み寄つた。さうしてその紫に腫上つた顏へ、限なく悲しさうな眼を落した。

椅子の上の陳彩は、彼以外の存在に氣がつくが早いか、氣違ひのやうに椅子から立ち上つた。彼の顏には、――血走つた眼の中には、凄まじい殺意が閃いてゐた。が、相手の姿を一目見ると、その殺意は見る見る内に、云ひやうのない恐怖に變つて行つた。

「誰だ、お前は？」

彼は椅子の前に立ちすくんだ儘、息つまりさうな聲を出した。

「さつき松林の中を歩いてゐたのも、――裏門からそつと忍びこんだのも、――この窓際に立つて外を見てゐたのも、」
――おれの妻を、――房子を――」

彼の言葉は一度途絶えてから、又荒荒しい嗄れ聲になつた。

「お前だらう。誰だ、お前は？」

もう一人の陳彩は、しかし何とも答へなかつた。その代りに眼を擧げて、悲しさうに相手の陳彩を眺めた。すると椅子の前の陳彩は、この視線に射すくまされたやうに、無氣味な程大きな眼をしながら、だんだん壁際の方へすさり始めた。が、その間も彼の唇は、「誰だ、お前は？」を繰返すやうに、時々聲もなく動いてゐた。

「その内にもう一人の陳彩は、房子だつた「物」の側に跪くと、そつとその細い頸へ手を廻した。それから頸に殘つてゐる、無殘な指の痕に唇を當てた。

明い電燈の光に滿ちた、墓窖よりも靜な寢室の中には、やがてかすかな泣き聲が、途切れ途切れに聞え出した。見ると此處にゐる二人の陳彩は、壁際に立つた陳彩も、床に跪い陳彩のやうに、兩手に顏を埋めながら…………

東京。

突然「影」の映畫が消えた時、私は一人女と一しよに、或活動寫眞館のボックスの椅子に坐つてゐた。

「今の寫眞はもうすんだのかしら。」

女は憂鬱な眼を私に向けた。それが私には「影」の中の房子の眼を思ひ出させた。

「どの寫眞？」

「今のさ。「影」と云ふのだらう。」

女は無言の儘、膝の上のプログラムを私に渡してくれた。が、それには何處を探しても、「影」と云ふ標題を見當らなかつた。

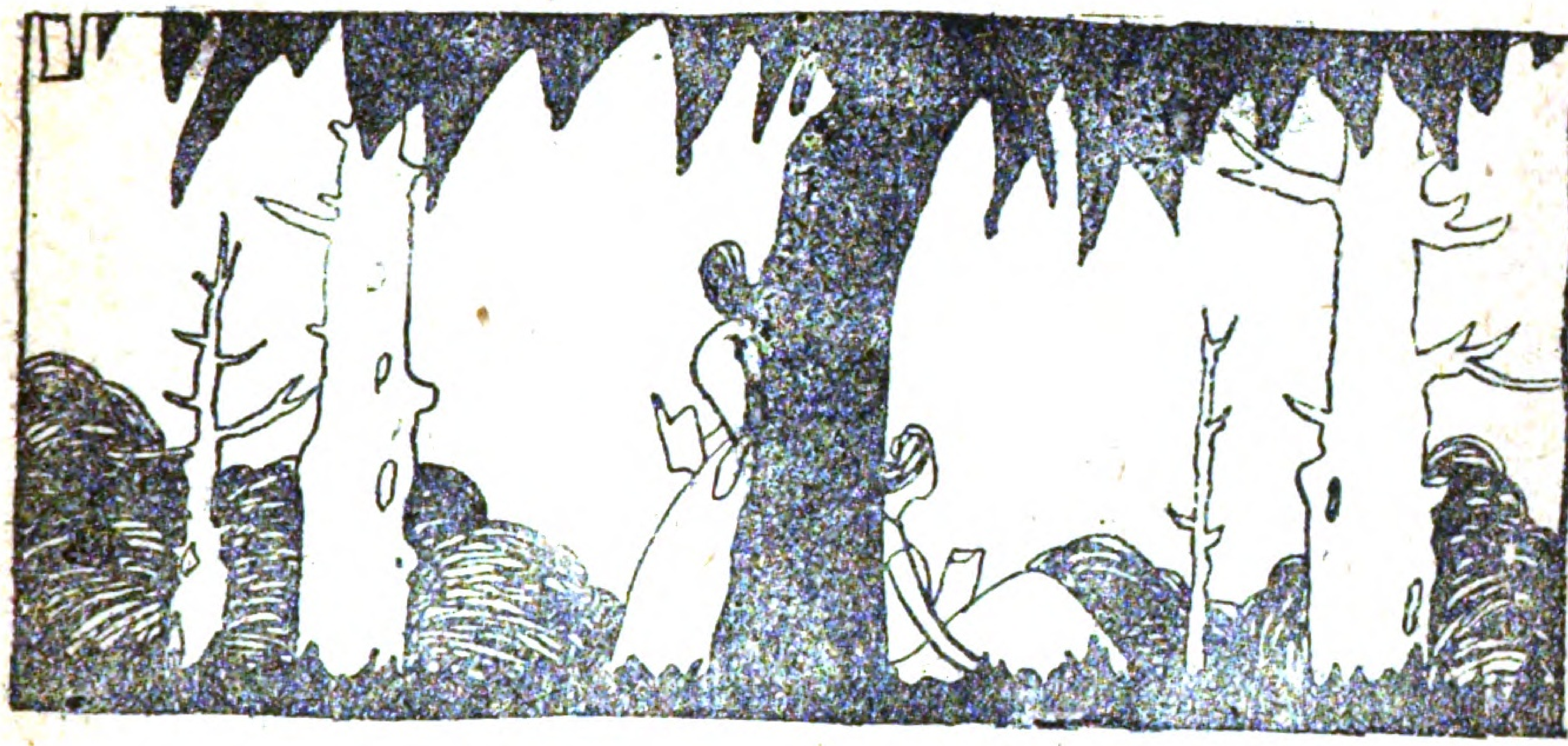
「するとおれは夢を見てゐたのかな。それにしても眠つた覺えのないのは妙ぢやないか。おまけにその「影」と云ふのが妙な寫眞でね。——」

私は手短かに「影」の梗概を話した。

「その寫眞なら私も見た事があるわ。」

私が話し終つた時、女は寂しい眼の底に微笑の色を動かしながら、殆聞えないやうにかう返事をした。

「お互に「影」なんぞは、氣にしないやうにしませうね。」（九・七・十四）



罪

水守龜之助

お常は母親と一緒に板の間で膝を突き合はすやうに座つて飯を食つてゐた。その間にも幾度となく消魂しくベルが鳴り響いて、煙草だとか、お茶などを運ばせられるのだつた。

お客達が大抵すんで了つてからでなければ自分の番に廻つて來ないので、お常達は三時過ぎにならなければ、いつでも晝飯の箸を持つ事は出來なかつた。それも、板の間に座つたり、臺所の隅に起つたまゝで、慌しく食べて了はねばならなかつた。そのちよつとの間も落付いてゐられない忙しさを見ると、母親は眼を圓くして驚いた。

「下宿屋奉公も並大抵の事ぢやないね。」と、母親は思はず呟くやうに云つた。

お常は汗ばんだ顔を無雜作に袂で撫で廻して、「そりや、お母さんのやうに一時間も二時間も茶を飲んでゐるやうな田舍の人から見りやビツクリするのも無理はないね。だけど、私なんかもう慣れつこになつてるから……」と、事もなげに云つて、お櫃や茶碗などを片付け出した。

「まあ、同じ奉公と云つても、親類のやうなものだで、辛抱も出來るのだけれど……」

と、何だか母親はまだブックサ云ひながら幾度も滴をきるやうにして番茶の出殼を注では飮んでゐた。

お常は何事もテキパキとやらなければ氣の濟まぬ性分から、女としては少しゾンザイだと思はれる程だが、片付け仕事なども早かつた。で、母親がつぎからつぎへととりめもない事を話しかけるのを少しは小ウルサイと思ひながら起つたり、蹲んだりして忙しさうに働き出した。が、表面から見る程ブッキラ棒な女でもないので、心の中では自分の事をいろいろと氣遣つてゐるらしい母親の親らしい慈悲深い心を有難く思はないわけには行かなかつた。

母親はつい二三日前ヒョッコリと土産のつもりで重い里芋などを背負つて田舍から出て來たのだつた。丁度秋口になつて、止宿してゐた學生連がドヤドヤと歸つて來ても女中がなくお常一人でテンテコ舞ひをしてゐる際なので、これ幸ひと主婦からも賴み、自分もひきとめて、暫らくお手傳ひをして貰ふ事になつたのだつた。併し、老人ではあり、勝手が分らぬので、お常にとつては却つて足手纏ひになる事が多い位のものだつた。それでも、去年のお盆に一晩泊りで歸つて會つた時から見ると、メッキリ衰へも見へて來たし、まだひとり身でゐる自分の事が氣になるらしいのが哀れに思はれた。で、一日でも長く引きとめて主人の家ではあるが、臺所の片隅でゞも時々親子二人の水入らずの團欒を造つて慰めたいとお常は思ふのだつた。が、今度はどうでも一年越しになつてゐる緣談を承諾させる下心で出て來たらしい事を考へると、流石にウンザリした。財産があるなしや、男が好い惡いの問題でなく、どうして、あんな愚圖と夫婦になれるものかとお常は心で罵るのだつた。同じ郷里の出身なので、それに主人の方は今でも子供などを連れて一年に一度位は親戚を指して歸省する事もあつて、皆なよくその相手になるべき男の事を知つてゐた。兵隊に行つても二等卒で歸つて來たりした癖に、田舍の女は垢拔がしないから嫌だ。水道の水で磨いたのぢやなけりやなどと、大きな口を利いてゐると云ふ事だけきいても、お常はおぞ毛を振ふ程いやなのだつた。都會の生活をして、水道の水で磨いた資格のある女として自分が選ばれたのを、母親などは何だか嬉しいやうに思ひ、それにこゝの主人夫婦迄が『そりや良緣だ、婿さんの方は少し溫和しいが、お常はシャンとしてゐるから、丁度それでうまく合ふのだ。』などゝ云つて、あの薄鈍の賢太郎

などのところへ嫁くのを賛成した事などを思ひ出すと、お常は無性に腹立たしくなるのだつた。どうして皆なはかうも物事が分らないのだらう。男と女は誰だつて構はずおつ付けさへすればうまく納つてゆくものと思つてゐるが、人を馬鹿にした話だ。自分が十八の時から五年の間下宿屋奉公をしてコキ使はれ、散々苦勞した酬ひが、あの賢太郎を亭主にする事であつたら、餘んまり自分と云ふ者が可哀想だ、慘目だ。もうそんな話には一切耳を閉いでゐる事にしよう。幾ら親を安神させる事になると云つても、それだけは御免だ〳〵と實際手をあげて振つて見せたくなるのだつた。

こんな事を考へ〳〵仕事をしてゐたお常はふつと氣が付いて、母親の方を見やつた。すると今度はお茶にも飽きたのか、小さな煙管を出して、粗い煙草を板の間にこぼしながら、スパリ〳〵とさもうまさうにユックリと喫んでゐるのだつた

そのボンヤリと何にか考へ事をしてゐるらしげな風付を見ると、自然と涙が眼の底からにぢんで來るやうな氣がしたが、それより早く笑ひが逆つた。が、水道の水をジャー〳〵と高い音をさせて出してゐたので、母親には聞へないらしかつた。

お常はちよつと腰を屈めて、次ぎの茶の間の障子の硝子を透して帳場の方を見ると、肥つた主人がこれも唯ひとりボンヤリと煙草を喫してゐる姿が見へた。

「お母さん！　何考へてゐるの？　帳場へ行つて休ませてお貰ひなさいよ。そんなとこへ吸殼をこぼしちや駄目ですよ。」と、水道をとめながら云つた。

ふいに聲を懸けられたので、母親はキョトンとした顔を見せたが、

「ヘイ〳〵……　吸殼なんかこぼしはせんが……」と、娘から叱言を云はれたのさへ嬉しいと云つた風に云つて膝を拂いてゐたが別に立ち起らうともしなかつた。

お常は矢張り心では一生懸命に自分の事などを考へてゐるのではないかと思つた。

「十三番さんがお呼びだよ！」と、帳場から聲が懸つたので、お常はオヤ五十嵐さんが何の用事で呼んだのだらうと思ひながら、トン／＼と階子段を駈けあがつて、廊下の突き當りのその室へ行つた。
「お常さん、お呼びしてすみません。ちよつと手傳つて下さいな。」
入口の襖をあけるとその室の女客が突如から聲をかけた。見ると、スッカリ化粧をして、派出なセルの單衣に着かへて、今、糸錦の帶を締めやうとしてゐるところなのだつた。
「五十嵐さん、どうなすつたの？　そんなにおめかしをして、今からどこへ行らつしやるの？　もう直ぐ夕御飯ぢやありませんか。」と、お常は驚いた表情をして云つた。
「ちよいと從妹の家へ行つて來るの。今日約束してゐたのを私スッカリ忘れちやつて、大マゴツキのところなのよ。」と、女客は頻りに身體をヒヨイ／＼と屈伸させるやうな格好をして、纖細な手に力が入らぬのを稖しさうに帶を結んでゐるのだつた。
「あら、さうですか。たか子さんも相變らず呑氣ですね。」と、お常はひやかしながらも、太い手に力を籠めて、蜂のやうに細い腹に喰ひ入つて苦しがる程強く帶を締めてやつた。
「ようございますか。」と云つてポンと帶を叩いた。
「有難う。よく締りましたわ。」と、女客は笑ひながら禮を云つて、置床に立てかけた鏡に向つて跼んで後姿を映して見たりした。
そこらには化粧道具や、普段着が散かつてゐた。雜誌や、新聞なども交つてゐた。あまりだらしないのでお常はちよいと片付けてやらうかと思つたが、今丁度忙しくもあり、それに自分で歸つてから始末をするだらうと思つたので出しかけた手をひつこめた。お常はこの女客を五十嵐さんと云つたり、たか子さんと呼んだりした。同じ鄕里の舊家の娘で小學校時代には一緒に通學した同じ友達仲間だつた。身分が違ふのと、一方が女學校に入り、一方が奉公をするやうに

なつたので、いつの間にか疎遠になつて了つた。が、たか子が一年ばかり前に肋膜を病んで、その後がどうもよくないので、それに田舍醫者などには診斷のつかぬ點もあるとかで出京して大學病院へ通ふ事になつた。東京には親戚もあるのだつたが、丁度、この下宿が病院の近くである上に同鄕の人で素性もよく分り信用が置けるところから、今年の春から二度目の出京をして七月末からズツと滯在してゐるのだつた。母親などは未だに五十嵐のお孃樣〳〵と云つて崇め奉つてゐるが、お常にとつては曾つて見れば矢張り氣の置けない昔の幼馴染だつた。下宿の主人夫婦にしても、ずうつと田舍に居れば、母親と同じやうな、遜つた態度をとらなければならぬのだらうが、兎に角もう長く土地を離れて、獨立して立派に下宿屋を經營し、それに今度は監督などを賴まれてゐるので、たか子に對してはさう崇め奉るやうな態度には出でなかつた。で、たか子の方でも家人よりも自然とお常の方へ親しんで來るのは無理もなかつた。仕事と云つては隔日に病院へ行く位のもので、それに内臟の弱いせいか、たか子は氣分だけは快活だつたが、いつも懶さうにゴロ〳〵して小說や雜誌などに讀み耽つて時間を消してゐる事が多かつた。で、ちよつとでも手が透いてゐると、たか子はお常を呼びたがつた。お常の方でも用事にかこつけて長く話し込むやうになつた。夏場の暇な時分は結構用は足りたが、近頃のやうに忙しくなつて來ると、お常がたか子の室へ行くのを主婦は餘り好まなかつた。でも、それは餘儀ない事なので、お常は別に不平にも思はなかつた。時とすると忙しさにとり紛れてたか子の事を忘れてゐる事さへあるやうになつた。が、さうなると、たか子の方は終日狹苦しい下宿の一室に閉ぢ籠つてゐる退屈さに堪へきれなくなつて、この室は西日が射すとか、買物があるとか、用事があるとか云つては、度々外出するやうになつた。

　たか子が、スツカリ支度をして、もう一度鏡に向つて、白粉の刷毛を使つてゐるのを見ながら、お常はそんな事も考へるのだつた。たか子が化粧のやり直しをしてからも、まだいろんな格好をして、媚態をするのを見ると、姿だけは好いがそのソバカスのあるシャクレ顏でも化粧をして、好い衣裳をつければ、かうも美しく變るものかと、女ながらもお常は眼を睜るのだつた。氣質の好い、サツパリした好きなたか子が美しく見へるのは何となく嬉しかつた。

「きれいになつたわ。まるで見違へるやうですよ。」と、お常は西日の射す窓の障子をあけて、その閾に腰をかけながらつく〴〵と見恍れるやうに云つた。

「あら、いやだわ。」と、たか子はちよつと打つ眞似をしたが、内心はイソ〳〵として嬉しさうだつた。

「きれいにおめかしをしてどこへでも出懸けられるなんて羨ましいお身分ですわね。」と、お常は戯談でもなささうな語調で云つた。

「また、お常さんは私をひやかしてるわ。」と、たか子はちよつと氣取つた形で室の眞中に突立つて見せて笑ひながら云つた。

それから二人は窓際に凭りかゝつて、大學病院の構内の一部分になる芝生を見下しながら、矢張り、戯談口を利き合つてゐた。そこの青々とした芝生の上を時折看護婦が白衣の裾を翻しながら颯々と歩いて通つた。黒々と茂つた建物の傍の樹の葉は戰いでゐた。夕方の涼しい風がさうしたすべてのものを吹きなびかしては、やがてたか子や、お常の面にも吹きつけ、後れ毛を嬲つた。そして、暫らくハイカラな束髪の白いたか子の顔と、崩れかゝつた銀杏返の淺黒いお常の顔とが二つ並んでゐて、樂しげに語り合つてゐたが、お常が階下から呼ばれてアタフタと行つたのを機にたか子も後を追ふやうにして出かけたのだつた。たか子がいつの間に出たのか、臺所にゐたお常には氣付かなかつた。

その夜の十一時過ぎだつた。晝間の疲れでグッタリしたお常は臺所で大きなお櫃にもたれかゝつた儘コクリ〳〵と居睡りをしてゐた。母親は早くから女中部屋へ退いて寢床へ入つてゐた。

「お常！　お常！」と、主婦が呼ぶので、ビックリしてアタフタと帳場へ行つた。

「何番さんですか。」と、お常はお客の用事だとのみ思ひ込んでゐるので、直ぐ様から訊ねた。

「いゝえ、さうぢやないよ。」と、主婦は眠つてゐる末の兒を抱きながら、長火鉢を間に差向ひに主人と座つてゐた。肥つた無口の主人は相變らずムッツリして玄關の方を見たりしてゐた。

「何御用ですか。」と、お常は不審氣な顏をしながら、そこへ膝を突いた。

「五十嵐さんはどこへ行ったのか、お前知らないかい。」と、主婦はこれも肥つた胸を披けて窮屈さうな膝を崩しながら云つた。

「オヤ、まだですか。十一時半ぢやありませんか。」と、お常は時計を見上げながら頓狂な調子で云つた。

「これ、大きな聲を出さないでおくれよ。この子が眼を覺すぢやないか。」と、窘めてから、「一體どうしたのだらう。本所の親戚へでも行つて泊るのならさう云つて行きさうなものだが‥‥若い女がひとりで夜遲く迄ウソ〳〵遊び歩くなんて、何と云ふダラシのない人だらうね。自分はそれで好いとしても、此方ぢや大切な娘さんを預つてるのだから氣が氣ぢやないよ。若しかの事があつて御覽、此方の落度になるぢやないか。」と、主婦はひどく不機嫌な顏をして、責めるやうな調子で云つた。

お常もたか子がまだ歸つてゐない事にはちよつと驚かされたが、考へて見れば、親戚や知合も多い人ではあり、東京の地理にも詳しい。それに子供とは違つて、如何に女でも二十一や二にもなつて居るのだから、格別心配する程のものはなからうと思はれるのだつた。

「大丈夫だらう。親戚かどつかで遲くなつてひきとめられたのだらう。」と、主人は案外平氣で空嘯きながら呑氣さうに構へてゐるのだつた。

「それなら、それで電報でゞも今晩は歸らぬからと云つて知らせるのがあたりまいぢやありませんか。殊に親戚にゐるのなら、家の人がそれだけの責任を果すのが道ぢやありませんか。」と、主婦は怖い顏をして、主人の方を睨めつけながら、六ケしい言葉を使つたりした。

「そんな事云つたつて俺の責任ぢやないよ。」と、主人は責任と云ふ言葉を強く云つてニヤ〳〵笑つた。

夫婦の樣子を見て、お常は思はず噴き出し度くなつた。旦那も旦那だが、主婦がそんなに興奮して、悍り立つのは少

し滑稽なやうに思はれたからだつた。
「主婦さん大丈夫ですよ。たか子さんは、あんなどつちかと云ふと呑氣な方ですから、御當人は平氣なんでせうよ。」と
お常は笑ひたいのを、主婦の唯ならぬ權幕の手前、少々恐れをなしてゐるので、我慢をして嚙み殺しながら云つた。
「それぢや、もう表を締めるかね。私はどうも親戚へ行つてるんぢやないと思ふがね。あの娘も近頃は少しおかしいと私は睨んでゐるのだが……」と、主婦は眞劍に何かを思ひつめるやうな表情をしてゐた。
「お前も餘計な取越苦勞をする奴だな。お常もう戸締りをしてくれよ。」と、主人は笑ひながら云つた。
「主婦さん、どうしませう？」と、お常は主婦の氣をかねて、起ち上りもせずにモジ〳〵しながら云つた。
「あゝ……」と、主婦は氣のない返事をしたが、苛立たしい感情の波動が、その暗い顔に痙攣してゐるやうに見へた。

翌日の晝飯前の忙しい時だつた。臺所は主婦とお常と母親とが、膳などの並んだ足の踏み入れ場もないやうなところで働いてゐた。時々菓子などをねだりに外から歸つて來る二人の男の子を主婦は『もう直ぐお正午だから遊んでお出で……』と慳貪に怒りつけたりした。

するうち、ちらと玄關の方を見やつた主婦は「オヤ！　歸つて來たよ。」と、短かく鋭く叫んだかと思ふと、慌てゝ出て行つた。

お常も仕事の手を置いて、その方を見るとたか子が歸つて來たのだつた。可哀想に主婦からクド〳〵と意見されるのだらう。だけどこんな忙しい時に主婦が手を拔いてくれちややりきれないとお常は内心は不平に思つた。

主婦は「ちよつとこちらへいらつしやい。」と云ひながら臺所から直ぐ隣つた茶の間へたか子をひつぱるやうに連れて來た。たか子の顔は呆氣にとられたやうな表情になつたが、柔順に主婦の言葉に從つてゐるらしかつた。そして、何か菓子の包みのやうなものを出して、「これを良ちやん達にあげて下さいな。」などゝ云つてゐた。

主婦がピッシャリと間の障子を閉めて了つたので、二人の顔は見へなくなつたが、言葉だけはハッキリと聞へた。

「……一體、今頃歸つて來るなんてどうしたんです。餘りだらしがなさ過ぎるぢやありませんか。そりや、あなたがどんな事をなさらうと勝手だけれど、私達が御兩親に對して申譯がないぢやありませんか。」

「すみませんでしたわ。勘辨して下さいな。つい、遲くなつて了つて引きとめられたものですから……」

「いゝえ、それでは事はすみません。ちやんと白狀なさい。あなたは私達を瞞さうと思つてらしやるのに違ひないんだから。」

「白狀だなんてひどいわ。何にも白狀する事はないぢやありませんか。」と云つたたか子の聲は流石に怒氣を含んでゐた。

「あなたが白狀なさらないなら、私の方で調べて、お家の方へ知らせますよ。それでもようござんすか。」と、主婦は遠慮會釋なくつき込んで行つた。

「だつて、私は從妹のところで泊つたと云ふより外に何も云ふ事がないぢやありませんか。」と、たか子も負けてはゐなかつた。

そんな諍ひを障子越しにきいてゐると、お常はわけもなく腹立たしかつた。とび出して行つてたか子の味方になつて辯護してやりたかつた。無斷で泊つて來たのはよくない事には違ひない。が、そんなに迄云つて詰る必要はあるまい。殊に素行の點に疑ひを挾むなんて事は人を馬鹿にした話だ。自分なら怒鳴りつけてやるのだが、たか子はあんな性格だから溫和しく出てゐる。それをまた好い事にして主婦はどこ迄も追窮して嫌味タラ／＼な事を云つてゐる。――お常は自分の事のやうに腹を立てゝ膨れつ面をしてゐた。時々、主婦のヒステリカルな聲が高くなるので、母親もそつと覗いて見などした。

「お常や、お孃樣はどうなすつたのだい？」と、母親は耳をそばだてゝお常の方へ向けるやうな格好をした。

「默つてらつしやい。默つてらつしやい。」と、お常は手を振つて口を噤ませた母親は唯々諾々と云つた風でまたヨチ

ぐとそこらを立ち廻つてコマ〳〵と働いてゐた。

お常は餘計な事にかまつてゐて、仕事の手を拔いてゐる主婦に對して相變らず憤慨しながら、ひとりで階子段を登り降りしては食膳を運んだ。そして、茶の間がいつの間にかヒツソリしたと思つて見ると、たか子は默り込んで手帕で眼顏を拭いてゐるのだつた。その樣子を見ていぢらしく思つたお常は、ふと主婦迄が眼に淚をためてゐるらしい樣子に氣付くとおかしくなつた。淚迄溜めて他人に意見するなんて、主婦としては柄にない事のやうに思はれた。お常は主婦に關する、恐らくは自分ひとりしか知らないであらうある秘密を思ひ浮べて、皮肉な微笑が浮べられるのだつた。「フン、チヤンチヤラおかしいや。」と、口の中で云つて見たが、急に嫌アな思ひで胸が一ぱいになつて來るのを覺へた。

　主婦が何とか云ふと、たか子は悄々として茶の間を出て二階へあがつて行つた。すると、主婦は直ぐ臺所へ現はれたが怖いやうな顏をしてゐるのを見ると、お常は一層嫌に感じた。

「どうしたんです、主婦さん！」と、お常は何氣なく平氣で話しかけた。

「どうもかうもありやしないよ。まるでお話にならないんだもの。親が心配なさるのも無理はないさ。打捨つて置くとどんな事を仕出來すか分るものぢやないからね。」と、主婦は吐き出すやうな調子で、さも意味ありげに云つた。その言葉を裏付けるものは好意ある憂慮と云ふよりは寧ろ嫌惡の感情であるやうに聞えた。

「主婦さん、五十嵐さんはそんな人ぢやありませんよ。間違ひなんかありはしませんよ。」と、お常も默りかねて、戲談らしく辯護した。すると、「お前にそれがどうして分る？保證が出來ないだらう。」と、主婦は睨めつけるやうに云つた。

　何も反抗する事はないと思つたので、お常は默つて了つたが、それは餘んまりだと云ふ思ひが、ムラ〳〵と渦卷きながら胸に湧きあがつて來た。

「どうかしたのかね。」と、傍から母親はシヨボ〳〵した眼を瞬つて、何事が起つたかと云つたやうな顏をしながら訊ねた。

「いゝえね。たか子さんが昨夜默つて外で泊つて來たんですよ。私の方ちや大事な他人の娘さんを預つてゐるんですから、默つてゐるわけにはゆかないでせう。」と、主婦は額に蒼筋たてゝ母親に話しかけた。

「五十嵐のお孃さんが外で泊つて來た。それが一體どうした事になるのかね。」と云つたやうに怪訝さうな顔をして、母親は妙に氣まづくなつて突立てゐる二人を代る〲見ながら、「さうですかね。」と、暫らく間を置いてから間の拔けたやうな聲で云つた。

その場合、さぞ主婦は張合拔けがした事だらうと思つて、お常は痛快がるやうな心持になつた。母親が問題にしない心持とは幾分違つてゐるかも知れぬが、自分にしたところで毛頭たか子を疑つたり、蔑んだり、がみ〲云つたりしようと云ふ心持は起らない氣がした。お常自身が一體男や女などの話に淡いせいかも知れないが、併し心の底に動かされない根柢となつて宿つてゐるものは、「五十嵐さんに限つて決して間違ひはあるものぢやない。」と云ふ信賴であつた。が若しかして、これが事實たか子に男でも出來てゐるものとしたら？と云ふ點に迄想像を推めて見ると、矢張りお常はそれを責めるやうな氣持が起らないで、寧ろ、笑ひ出したいやうな思ひがした。

主婦は相變らず不機嫌な顔をしてゐた。

遲くなつてから主婦に注意せられて、ウツカリしてまだたか子のところへ晝御飯の膳を運ばなかつた事に氣付いたお常はそこ〱に膳拵へをして持つて行つた。

見ると、たか子はまだ着換えもしないで、つくねんと座つてゐた。ふいとあげた顔にはまだ涙の痕がハツキリと見られた。

「五十嵐さん！　戲談ぢやない！　一體何をクヨ〱してゐるんです。あなたらしくもない。さあ〱御飯でも召食れよ」と、お常は持前のサク〱とした調子で勇氣付けるやうに云つた。

「御飯なんか食べる氣になれやしないわ。私生れて初めてだわ、こんなに癪に觸つた事は。今迄主婦さんはあんな人だとは夢にも思はなかつたわ。」と、たか子は蒼い顏をして、ヒステリーらしく、疊の織目に爪をたてゝガリ〳〵と音をさせるやうな事をした。
「一體、主婦さんは何んと云ふんです。」
「つまりかうなのよ昨夜私が從妹のところに泊つた事をどうしても信用してくれないの。そして乾度男でもこしらへて戲らをしてゐるのに違ひないとひとりぎめにきめてゐるんだから困るぢやありませんか。私、殘念で殘念でたまらないわ。」と、たか子は口惜しさうに齒がみをした。
「ホヽヽ　あなたが男と……ホヽヽヽ」と、お常は笑つたが、「そりや自分に後ろ暗い事があるから、人だつて矢張りさうだらうと思つて、疑ぐるんでせうよ。」と、お常はウッカリ口を辷らした。
「後ろ暗い事つて何アに？」と、急にたか子は元氣付いた表情になつて、「ね、お常さん、云つて頂戴よ。」と、鬼の首でもとつたやうに嬉しがつた。
「主婦さんだつて威張れた義理ぢやないんですよ。あの年をして、あの顏でおかしいぢやありませんか。」と、お常は面白さうに笑つた。
「あら、さうなの。」と、云つたたか子はまだ話をきかないうちから、復讐的な感情の捌け口が出來た爲めか、ユトりのある氣分になつたらしかつた。
　どこか男性に近いやうな氣風のあるお常は元からエロチックな話に大した興味も好奇心も持たない方だつた。それに人の陰口などを利くのが嫌ひな性質なので、これ迄噯にも口に出した事のない話だつた。寧ろそんな事は忘れてゐる時の方が多かつた。それを特にたか子に話さうとする氣持になつたのは、自分の好きな、ヒイキ目に見てゐるたか子が冤罪を被せられてクヨ〳〵してゐるのを見かねたからだつた。それで、主婦の缺點でも探し出して話せば、幾分の腹癒せ

が出來るだらうと思つたのだつた。

お常が奉公に來るよりも以前からしかつたが、毎年春と秋位に定宿にして田舍の町から出て來る織物商人の坂田と云ふ男があつた。もう四十五六の背丈の高い男で少し薄くなつた頭髮を叮嚀に分けて、いつも顏をテラ〳〵させてゐた。口がうまいので、誰にでも話しかけて直ぐ懇意になつて了ふと云つた風の男だつた。主人夫婦とはもう親戚か友達のやうに心安くして、家にゐる時は、始終帳場に座り込んで御飯も一緒に食べたりする程だつた。主婦などは才子で話の上手な人として、蔭でも褒めてゐる位だつたが、お常は何となく好かなかつた。どこと云つて指す事は出來ないのだが、時々イヤラシイ感じを抱かせられた。しつこく女の話をするのも氣持が惡るかつたが、廊下などで擦れ違つたりするといつも「よう別嬪さん！」などと云つて長い手をのばして抱き寄せるやうな戲れをされるのが、一番嫌だつた。それは下宿屋の女中などをして居るのだから、隨分亂暴な學生などもあつて、時には嫌な辛い思ひをする事はあつたが、坂田から受けとる感じは特別に嫌だつた。

その坂田は去年に限つて夏も八月の中頃になつてフラリとやつて來た。折惡しく主人は二人の子供を連れて田舍の親戚へ避暑がてら歸省してゐた。で、自然と帳場へ來ても話相手になるのは主婦ひとりきりだつた。嬶天下の家であるから好人物でムツヽリの主人はゐてもゐなくても同じ事だつたが、それでもゐないとなると一層主婦の氣持が呑氣になるらしかつた。時とすると若い娘のやうに燥ぐ事もあつてお常などは驚かされる事が度々あつた。

或る夜、もうスツカリ戶締りをして了つて、お常は蒸暑い女中部屋へ引きとりいぎたない風をして寢床に身體を橫へると直ぐ他愛もなくウト〳〵とし初めるのだつた。すると間もなく茶の間の方から、末の乳呑兒が火のついたやうに泣きたてる聲が聞へた。初めのうちはお常も夢現のやうに思つてゐたが、その泣聲が次第に劇しくなつて來るのでたうとうスツカリ覺まされて了つた。添乳をしてゐる筈の主婦はあんなに叫ばれては幾ら熟睡してゐてもまさか覺めない事はあるまい。一體どうしたんだらうと思つて、暫らく寢床の上に起きあがつて耳をすましてゐたが、いつまで經つても、

主婦の宥めたり、賺したりする聲は聞えなかつた。お常は子供が可哀想になつたので寢衣の儘で茶の間へ行つて見た。すると子供はひとり疊の上へ轉げ出して手足をバタ〳〵させながら泣き叫んでゐるのだつた。お常は寢惚けたやうな眼を擦りながら、何氣なく、ほんとにその時は何の思慮もなく、主婦は若しや、二階のあの人の室でいつまでも話し込んで氣付かずにゐるのではないか知らと思つた。で「主婦さんも呑氣だなア。」と呟きながら、ドン〳〵と二階へ上つて行つたのだつた……。

翌朝になつてからも、お常は惡い事をしたと云ふ思ひで胸が一ぱいだつた。が、考へて見れば、坂田と云ふ男が一番惡い奴で、何にも知らない主人が可哀想だと思つた。勿論、主婦はどんな氣であんな事をしたのかと云ふ氣はしたが、何となくあり得べからざる事のやうに思はれた。眞實主婦の心から出た事でなくて、何か魔でもさしたのだらうと思つて自分ながら信じられないやうな氣がした。

で、その朝は案外平氣で主婦とも顏を合はせたのだつたが、意外な事には、それからお常に對する主婦の態度が全く一變したのだつた。俄かに優しくなり、慇懃になつた。そして、これ迄はお客の室へ行つてちよつとでも長く話し込んでゐると、それが無駄口を利いてゐるのでなくて、用事を話してゐる時でも癇高い聲で呼び立てるのだつた。それが、非常に寛大になつて、少々位は長つ尻をしてゐても決してよびたてたり、嫌な顏をするやうな事がなくなつた。さうした主婦のあまりに急劇な變り方をハツキリさうと意識した時には、お常の心にもある疑問が可なり確かな事實として形造られてゐたのだつた。

「たか子さんは氣がつきませんかね。一番下の八重ちやんは旦那にも主婦さんにも少しも似てゐないぢやありませんかあなたさうは思はない？」と、お常は口早に荒筋を話してからかう云つた。

「さう思へば、なんだかさうのやうにも思はれるわ。」と、たか子は云つたが、「全く驚いて了ふわね。あの人がそんな事をしたかと思ふと……」と、思はず溜息を吐いた。

「でも、これは内密ですよ。」と、お常は氣さくに云つたが、「ですから何と云はれたつて平氣でいらつしやいよ。」主婦さんは乾度ヤキモチなんでせうよ。」と、もう先刻の話は忘れて了つたやうにケロリとした顔をしてゐた。

併し、たか子の心はそれではすまなかつた。どう思つても堪へられない、あの侮辱を思ひ浮べると、またしても新らしい憤怒の情がこみ上げて來るのだつた。そして、この儘オメオメと泣寝入にする事は出來ないらしかつた。

「私だつて覺悟がありますわ。」と、低いけれど思ひつめたやうな、力の籠つた語調で云つた。

「何に主婦さんの方はヤキモチなんですよ。」と、お常は同じ事を繰返した。

翌日病院へ行つた儘、夜になつてもたか子は歸つて來なかつた。遲くなつてから電報が着いた。それには本所へ行く委細手紙でとあつて、途中神田郵便局から出したものらしかつた。

「矢張りさうだつた。本所なんかへ行くものか。大方神田邊にでも男がゐるんだらうよ。」と、主婦は自分の推察が當つたのを誇るかの如き口吻を洩らした。

「どうだか分るものか、若し、さうでなかつたら、お前は謝らなけりやならなくなるかも知れないよ。」と、主人は苦笑しながら、揶揄ふやうな調子で云つた。

「どうだか、まア見てゝ御覽なさいよ。」と、主婦は自分の考へを信じ切つてゐるらしかつた。

お常は矢張りたか子は怒つて行つて了つたのかと思ふと、急に友達を失つたやうな氣がして、明日からの生活が何となく味氣なく寂しく思はれた。主婦が餘計な事を云つたばかりで、こんな事になつて了つたのだと、自分の事のやうに腹が立つた。それにあの時の事を思ひ出すと、スツカリ忘れて了つたやうな顔をして、あの當座示した打つて變つた叮嚀な態度もいつの間にかなくなつて、今では人を裁くやうな事を平氣でするのが面憎くかつた。自分が默つてゐたお蔭で、今日迄主婦も安穩で威張つてゐられたのぢやないか。若しも自分が主人に密告でもしたらどんな恐ろしい成行にな

つたか知れたものぢやないと思ふと一層主婦の仕打が身の程を知らない、罪の深いもの丶やうな氣がされるのだつた。

その晩、母親と一緒に寐床へ入つてからもお常は矢張りそんな事を考へ續けるのだつた。そして、これ迄曾て思つた事もないやうな行末の事などが、妙に執念く心に纏はつて離れないのだつた。

「お母さん、私五年も奉公したのだから、もう好い加減嫁になつ了つた。」と、お常はつまらなさ丶うに話しかけた。

「さうだらうな。だから婚禮をすると好いんだが……。」と、母親は言下に待つてゐたと云はんばかりに云つた。

「また賢太郎ですか。いやな事だ……」と、お常は云つた。

「いつまでもひとりでも居れまいが……早く嫁いて安心させておくれでないと、私が安神して往生出來んでな。」と、母親はさびしさうに云つた。

母親のその一言には涙含ませられた。親としては尤もな事だ。自分だつて、一生ひとり身で過すつもりはない。それに、五年間一生懸命で働いて、儉約したお蔭で、木綿の着物は十枚以上になり、銘仙も二三枚はある。本物ではないが今年の春には新お召のコートもつくつた。前掛や、肩掛や、洋傘や、下駄や、空氣草履や、頭髮のものや――から並べて來ると、今直ぐにでも嫁に行けない事はない。お丶、それに忘れてゐたが、行李の底深く藏つて虎の子のやうに大事にしてゐる三十四圓幾十錢かの郵便貯金がある。『もう奉公をやめて、賢太郎のところへでも行かうか知ら。』とも考へられたが、直ぐいや〱と心の中で頭を掉つた。

するうちふつと、郷里の者で、幾らか緣續きになる人が十年も前から大連に行つて旅館を營んでゐる事が思ひ出された。いつか自分に女中頭として來てくれないかと云つて寄越した事もあつた。貰ひなどもナカ〱あるとの事だつた。その時はこの家で主人夫婦に愛せられても居たし、また大連などと云ふ遠いところへ出掛けて行く勇氣もなかつたので直ぐ斷つて了つたのだつた。が今なら平氣で行けさうに思はれた。年老つた母親を殘して行くだけが氣懸りではあるが百姓をして相當に暮してゐる兄もある事だし孫の守でもして呑氣に餘生を送られる事だから、何も自分が心配する事は

あるまい。だから自分は今のうちに三四年働いて、ウンと金でも貯め込んで來ようか知ら？などとお常は考へるのだつた。さう思ふとある希望が生じて、心の中が急に明るくなつて行くやうな氣がした。

「お母さん！　お母さん！」と、お常は甘へるやうな浮はずつた聲で呼びかけた。が、母親は何とも答へなかつた。耳を澄すと、微かに微かに靜かな呼吸が聞へた。もうグッスリと寢込んでゐるのだつた。

　ところが、翌朝大變な騷ぎが起つた。と云ふのはたか子から主婦に宛てゝ寄越した手紙を、何の氣もなく主人が開封したのだつた。唯、それだけの事なら何でもなかつたが、その文面にはひどく立腹した事と、あなたは姦通をして、姦夫の子供迄生んでゐる人ではないか。そんな不義をしてゐる身でありながら、根も葉もない邪推をして人を責める資格がどこにあるかと云つたやうな調子で、ひどく主婦を攻擊して來たのだつた。流石好人物の主人も顏を眞赤にして、主婦の眼の前にそれをつきつけて詰つた。

「だつて、どこに證據があるんです。好い加減な事を云つて、腹癒せをしようとしてゐるのですよ。いや、これは屹度お饒舌のお常が云つた事に違ひない。」と、主婦は險しい顏をして、唇をブル／＼顫はせながら、お常を呼びつけたのだつた。

　お常は困つた。どう云つて好いか。唯、胸が躍るばかりで、直ぐに言葉が出なかつた。

「さあ、早くお云ひよ。お前が幾ら噓をついても私は警察へでもどこへでも出て糺明するのだから……。」と、主婦は疊みかけた。

「私は何も云やしません。え〻屹度云つた覺へはありませんよ。」と、お常はムッとして聲を荒らげて云つた。

が、自分がたか子に云つたのは事實だ。また、主婦にさうした暗い罪科があるのも事實だ。併し、今それ等の一切を云つて了つて、自分の立場を明らかにする事が出來ない。また云つて了つたならどんな大事になるかも知れない。自分はつまらない事を饒舌つたものだ。が、たか子も云はでもの事を云つてくれたものだ——お常は無事にすめば好いがと

云ふ願ひで胸が一ぱいになつた。

「ほんとにお前が云つた覺えがないと云ふなら、私はたか子さんのところへ出かけて來る。どこ迄も糺明して明りをたてなけりや私の氣がすまないから……。」と、主婦は云つて、お常の方を脅すやうな眼で見た。

お常はその眼の光に射縮められたやうな氣がした。が、主婦も秘密があるから、さう云はなければ亭主の手前氣がすまないのだらう。その苦しい心の中を察すれば氣の毒でもある。併し、萬一、たか子のところへ押かけて行つて、自分が饒舌つたと云ふ事をきいて來たらどうなるだらうと思ふと、お常は氣が氣でなかつた。何だか自分一人が罪人でゞもあるかのやうな氣がするのだつた。が、まさか主婦だつてそんな好んで藪蛇のやうな事はしないだらう。このまゝ事件は濟んで了ふのだと思つて安神しようとするのだつた。

その場はそのまゝ濟んだが、正午から主婦は外出の支度を初めたので、お常は急にまた不安になつた。たか子のところへ行くのか、どうかを確めやうとして、いろ／＼骨を折つたが、それは下町へ買物に行くのだと分つてやつと安神した。併し、若しや、明日にでも行くやうな事があつては困ると思つたので辿々しい鉛筆の走り書きで、主婦が行くかも分らぬが、必らず自分の口から出たのでないと云ふ事を云つてほしいとたか子に懇願した手紙を出した。それで漸くホツとした。

それから夫婦の間は多少氣まづくなつてゐるらしかつたが、大した事はなかつた。が、主婦のお常に對する態度はまるで一變して了つた。何かにつけてガミ／＼と當り散らし、意地惡く苦しめようとするのだつた。あらましの事はお常から聞いて知つてゐる母親はその間に挾つて一番困つてゐるらしかつた。母親になつて見れば娘の肩を持つわけにも行かなかつた。當惑しきつた果ては田舍へ歸ると云ひ出した。主婦にしてもかうなれば母親やお常をもさつさとお歸んなさいと云つて了ひたいのがやま／＼だつたが、この忙しい場合に出られては稼業の方が立ち行かない事は分りきつてゐ

た。で、何とか口實を設けては引きとめようとした。

が、主婦は一方の事件が矢張り未解決のまゝでゐるのが嫌だつた。それにお常が饒舌つたのに相違ない事は火を睹るより明かな事だつた。お常より外には誰も知つてゐない事は主婦の胸にも十分あつた。で、どうかすると、主婦はムシヤクシヤ紛れにそれを云ひ出してはお常を責め詰つた。お常は矢張り頑強に自分に覺へのない事を主張するより外はなかつた。

たうとう我慢がしきれなくなつたと見へて、主婦は二三日經つてから主人にもお常達にも、公然その事を云つて、本所の從妹の家にゐるたか子を訪ねて行つた。口どめをして置いたとは云ふものゝお常は結果がどうなるかを氣遣はずにゐられなかつた。

夕方近くなつて歸つて來た主婦の顏には勝利者のやうな勝ち誇つた色が見えた。

「たか子さんもだらしがないね。私が交番の巡査を連れて來てゞも白狀させると云つたらスツカリおびへて了つて、つい腹がたつて好いかげんな事を云つたのだから、勘忍して下さいつて頭をさげて謝るんだからね。」と、主婦は主人を前にして、誰に云ふともなく云つた。何となく毒々しい感じが、その顏に現はれてゐた。

「フヽンゑらい權幕だつたのだね。」と、主人は嬉しさうにニヤ〳〵しながら云つた。

「私はこれでまだ勘忍しやしないんですよ。誰かゞ餘計な告口をしたのに違ひないんだから、そいつを懲らしめなけりや承知出來やしない。たか子さんは庇かくしてゐるのに違ひないのだから……。」と、主婦はまだ執念深く云ひ募つて行くのだつた。

「馬鹿！　すんで了へばもう何も云ふ事はないぢやないか。」と、主人は窘めた。

「私はすまないんですもの。」と、主婦は貪るやうに乳を呑む子供の頭を撫でながら、キツパリと云つた。

さうした當てつけがましい事を云はれると、お常は腹が立つて仕樣がなかつた。そりや、自分が饒舌つたのは惡いと

して、自體元を云へば主婦が後ろ暗い事をしたからぢやないか。それを思へば、無事にすんだのを歡ばねばならぬ筈である。併し、自分はそんなに主婦が怒る程罪を犯した事になるのか知ら？と、云ふ疑惑を重ねて行くのだつた。

主婦は次ぎにお常の方へ露骨に毒舌を向けて來た。「お常や、お前も覺悟をしてお出でよ。お前が勝つか、私が負けるか分らないけれど、私はお前の口から出たとちやんと睨んでるんだから。こつちで幾ら爭つたつて、お前が白狀しなけりやキリがないんだから、もう警察の御厄介になるより仕方がないよ。どうなるにしてもお怨みでないよ。」と、云ふのだつた。

警察と聞いてお常はギクリとした。「主婦さん！どうしても私が惡い者にされるのですかね。私はもうどうあつても構ひませんわ。」と、ヤケ半分に云つた。

「誰が惡いか一つそれをお上に裁いて貰はうぢやないかね。」と、主婦は冷やかに嘲笑するやうな表情をして云つた。

「お常や、何もお前がツベコベ云ふ事はあるまい。唯一言勘忍して下さいと謝れば主婦さんも許して下さるのだがね。」と、默つてきいてゐた母親は氣が氣でないやうに、頻りに娘の袂をひつ張つて口說きたてるのだつた。

お常は默り込んで了つて、石のやうに堅くなつた。『何と云ふ事だ。折角、主人大事に五年の間働いて來たのが、こんな酬ひとなつたのか。それが果して當然なのか。』と云ふ思ひが强くお常の心を支配してゐた。そして、人間の住む世界と云ふものが何となく果敢い氣がするのだつた。

「戯談を云ふのは好い加減にお止しよ。」などと云つたが、主人は納つたものだつた。お常はそれにも不滿だつた。

その後、お常は暇を偸んで窃つと法律を勉強してゐる學生の室へ行つて、事情を打ちあけて警察へ告げられるとどうなるものかと訊いて見た。

「さあ？」と、その學生は考へてゐたが、「ひよつとすると君の方が不利かも知れんよ。證據のない事を云ひ觸らした事になるからな。」と、云つた。

「えゝ！ 私が惡いんですか。」と、お常は驚いた。急に劇しく動悸が打ち出した。が、それはどう考へても腑に落ちない事だつた。惡い事をした主婦が何でもなくて、それを云つた自分が惡いとは何と云ふ理の通らない事だらうと、腹が立つと同時に泣き出し度くなつた。

「併し、さう心配する事はないよ。どこ迄も知らん〳〵で押通すのだね。正直にいろんな事を饒舌ると却つて不利だからね。嘘でも何でも好いから、自分の德になるやうにしなけりや駄目だよ。」と、學生は笑ひながら云つた。

「さう云ふものですかね。」と、お常は惘れた表情をした。正直な者が損をして、不正直なものが德をするなどと云ふ事は、どうしても合點の行かない事だつた。それではこれ迄、正直に正直にとやつて來た自分は、損ばかりした事になるのだとも思はれた。「馬鹿々々しい事だわね。」と、お常は呟いた。

寢しなに母親と話す時も、お常はその馬鹿馬鹿しい事を繰返し語つた。

「こんなところにゐるのは怖いから歸らうよ。私は聞くだけでも壽命が縮まるやうな氣がするでな。」と、母親は愁嘆するやうに云つた。

「ほんとにさうだわ。だけど、私まだこれから、働くつもりよ。大連へでもどこへでも行つてさ。他人がさうなら、こつちもその氣になりや好い。」と、お常は馬鹿に強氣になつて反抗的に云つた。

「お常これを御覽よ。」

かう云ひながら、主婦は一枚の葉書を持つて、朝の竈に火を燃しつけてゐるお常のところへやつて來た。

「どこからですか。」と、何氣なく受取つたお常の顏は瞬く間に眞蒼になつた。それは明らかに△△警察署の文字が讀まれたからだつた。矢張り主婦は警察へ屆けたのだつた。

「今更、驚かないでも好いぢやないか。私も行かなけりやならんから、お前も御苦勞だけれど後で支度をしておくれ

な。」と、主婦はいやに落付拂つた語調で、口元には冷やかな侮蔑の笑ひ迄浮べてゐるのだつた。

お常は濤として了つた。もう萬事終つたと云ふやうな氣がした。直ぐに自分が罪人となつて牢獄にぶち込まれる時の光景さへ眼の前に浮んで來るのだつた。用事だけ云つて了ふと、さつさと主婦は行つて了つたが、お常は追つかけて行つて、後ろから一つグワンと打ちのめしてやりたい位癪に觸つた。かうなればもう破れかぶれだ。警察へでも、監獄へでも行つてやる。神樣だけが正直な自分の心を守つてゐて下さるからと思つた。こんなに怒りながらもお常は飯を炊いたり、器物を洗つたりしてマメ／＼しく立ち働くのだつた。

警察からの召喚は十時だつた。殘つた用事はコマ／＼と母親に云ひつけて置いて支度をした。どうやら主婦の方でも主人に用事を云ひ置いて支度を初めたらしかつた。臺所へノコ／＼と出て行つた主人は、何を考へてゐるのか分らぬやうな無表情の顔をして、平氣で母親に話しかけたりしてゐた。それを見たり聞いたりすると、如何に好人物とは云へ、何と云ふ間の抜けた、ノロクサした男だらうと、お常は怒鳴りつけてやりたい程、氣が苛立つて來るのだつた。

何れ時間が同じだらうから主婦と一緒に出かける事になるのかと思つてゐた。ところが、

「私が一足先へ行くから、お前は直ぐ後からお出で。お前のやうな敵と一緒に道を歩く事なんか出來ないから。」と、主婦が捨白を殘して出て行くので、お常はまたしても胸をかきむしりたいやうな憤怒に驅られた。

警察署は近かつた。で、殆んどそこへ行きつく迄お常は肥つた背丈の低い主婦が思案深げに俯垂れがちに行く後ろ姿を見失はなかつた。で、お常はたへず憎惡の視線をその身體全體に注ぎながら歩いて行つた。

止宿人の屆などの用事で時々警察署の門をくゞつた事のあるお常は別に怖いやうな心持にはならなかつた。入つて行くと見知つた巡査の顔が眼についたりするので、一層氣が落付いて、胸が顫えるやうな事もなくなつた。唯、ふと先着の主婦と顔見合はせた時は何とも云ひやうのない不快な感じがした。出がけに主婦は自分を敵だと云つたが、恐ろしく緊張したその顔を見ると、この時ばかりはお常の方でも實際敵と相對してゐるやうな氣持になつた。

やがて、二人は別室の訊問所のやうなところへ導かれて入つて行つた。一段高いところにゐる警部は落付いた、が案外優しげな語調で最初に主婦を、次ぎにお常と云つた風に一通りに審問をした。主婦の殊勝らしげな、嘘八百の申立を聞いてゐるうちは、いつそ、みんな打ちまけてやらうかと思つた程、お常は興奮したが、ふと何事も不正直にと敎へてくれたあの法律をやつてゐる學生の言葉を思ひ出したので、何事も云つた覺へがないの一點張で押通した。時々、主婦がそれに對して抗議のやうな事を云ひかけたが、警部に窘められて默らせられた。そんな時お常は小氣味よく感じた。そして、自分ながら不思議に云はうとする事がスラ／＼と饒舌れるのが愉快だつた。

「主婦！　お前もよくないぢやないか。たとへこのお常がそんな事を戯談に云つたにしたところで、一々それをとりあげて、事をむづかしくするのはいけないよ。改めて呼び出すかも知れんが、今日はこのまゝ歸るが好い。亭主の意向も聞いて見なけりやならんが、兎に角、大袈裟にしないがよからう。」と、警部は主婦を叱りつけた。

お常は餘りの意外さに呆氣にとられて了つた。何アんの事だと云ふ氣がした。これぢやまるで、主婦の方は叱られる爲に出て來たやうなものぢやないかと思ふと、少々主婦が氣の毒にも思はれ出した。で、悄然として外に出た主婦に向つて、何とか一言慰めてやりたいとは思つたが、場合が場合なので、どうしても適當な、ちよつと輕いやうな言葉が浮んで來なかつた。止むを得ずお常は自分の方でもわざと悄然とした風を裝つて歸つて來たのだつた。

「どうだつたい？」と、直ぐ母親が不安さうに訊いた。

「何でもなかつたのよ。つまらなかつたわ。」と、お常は小聲に囁いた。

主婦は主人に向つて何か話してゐるやうだつたが、暫らくすると矢張りお常と顏を合はせない譯には行かなかつた。それに不機嫌に怖い顏をしてゐても口を利かない譯には行かなかつた。敵同志ではあつても、同じ家に住んで、一緒に仕事をしなければならぬ以上、早や晝飯や、夕飯のお菜の事や、たへず鳴るベルによつて客の取次ぎなどで話をしなければ用は足りないのだつた。

「十五番さんが宿料をもう二三日待つてくれと云つてゐますよ。」と、お常は二階から降りて來て云つた。

「畜生！　勝手にするが好いや。」と主婦はお客に怒るのか、お常に云つてゐるのか分らないやうな事を云つた。

「ほんとにあん畜生！」と、お常も頓狂に云つて笑つた。

「靜かにおしでないか！」と、主婦は詰つた。

主婦の方でも女中がない爲に憎い〳〵お常を追ん出す事が出來なかつた。お常の方でも如何に腹が立つても女中がないのをみす〳〵知りながらこちらから追ん出るわけにも行かなかつた。で、かうした狀態のまゝで、互ひに面白くもない日を送らねばならないのだつた。とんだところへ舞ひ込んで來てマゴ〳〵してゐるやうな母親は「早く歸らせて貰ひたいね。」と、愚痴を溢しながらも、娘の事が氣にかゝるのか、強つて歸らうともせずグズリ〳〵して、併しコマ〳〵と働いてゐた。警察からは幾日經つても召喚の知らせは來なかつた。

それから一ケ月餘り過ぎた十月の中頃であつた。お常が內密で問ひ合はせた大連の人からは首尾よく話が纏つた返事が來た。尙旅費と少々の支度費位は送るからと云ひ添へてあつた。それに好都合にも二人の新らしい女中も來たので、お常は初めて五年間務めた家ではあるが、不愉快なところから拔け出られるのがうれしかつた。

お常はいよ〳〵荷物を纏めて田舍へ歸る事になつた。別れ際に主婦が涙を浮べて「身體を大事にしてね。」と云つたのが、何となく忘れ難い印象となつて殘つてゐるやうな氣がされた。何しろ、久々で歸つたので、お常は親類廻りをしたり、友達に着物や、流行の洋傘を見せたり、また、やがて行くべき大連がどんなところだらうかと空想したりして樂しい、面白い朝夕を迎へた。殊にたか子の家を訪問した時などは主婦の一件を話し合つて、二人は轉げ廻つて面白がつた程だつた。が、大抵の場合は主婦の事などは忘れてゐる事が多かつた。

下宿屋の主人が丹毒に罹つて、僅かの患ひで死んだと云ふ報知を受とつたのはお常がまだ大連へ立つ前の事だつた。お常は重苦しい感慨にうたれて暫らくは涙も出ない程だつた。（終）



汚染

近松秋江

一昨年の夏は三ケ月を高野山の寺院で銷した。その八月の終の頃であつた。常に一處不住の私のところへ附箋をした黒枠の葉書がとゞいた。私は旅先きにゐて近頃屢々黒枠の葉書を受取ることを悲むのであるが、その時の黒枠の通知に誌された亡き人の名についてはさまざまのことが思ひ起されたのであつた。

私が、今から二十六七年前はじめて上京した時にまづ訪ねて行つたのは同じ郷里から出てゐるB氏といふ洋畫家であつた。Bは私のすぐ上の兄と一つ違ひの竹馬の友で、その時からもう五六年前に出京してゐたのであつた。私もその時の上京が無斷で家を出たのでなかつたならば或は最初から他の方法を選んだかも知れなかつたが、家に默つて出て來たので、懷しい郷里の先輩であるB氏の家へ頼るほかはなかつたのである。

Bはまだ十二三才の時分から生れながらの繪畫の天才で、珍しい少年として夙に郷人の間に評判になつてゐた。私が訪ねて行つた時分には神田の今川小路のある露地裏に住んでゐた。私は九月の初郷里を立つて途中京都と靜岡とに二泊して東京に着いた時にはもう日が暮れて暗くなつてゐた。何でも横濱あたりから暗くなつたと

思ふ。それゆゑ品川の海が汽車の右の窓から見えて、汀に沿ふた長いカーブの鐵道線路に點る東京の入口らしい燈火の數を眺めつゝ胸を躍らして、あの古い建物のもとの新橋の驛に入つてゆく頃には、とんと方角も分らなくなつて、たゞ何とも辨へない不安や昂奮の中にも意志だけは比較的堅固であつたから、長いプラツトフオームを歩いてステーションの構内を立ち出ると、かねて郷里の市で東京を知つてゐる友達に訊いてゐた通りに新橋まで歩いて其處から眼鏡橋の方に行く鐵道馬車に乘つた。尾張町の四角、京橋の袂などで、一種の、新時代をその音聲に表はしたやうな調子で新聞の賣子が人を人とも思はぬ擦れ枯しの嗄れ聲で馬車の窓近く新聞を賣つてゐる呼び聲が何よりも先づ私に東京らしい最初の印象を與へたことを記憶してゐる。私のその頃の理想は偉い新聞記者になり次いで代議士になりたいといふのであつたから一層その感じが强かつたのかも知れぬ。馬車はやがて眼鏡橋に來て停まつた。そこから今川小路は左の方にとつて行けばよい、とにかく九段を目指してゆけば間違ひないと聞いてゐたから馬車を降りると、そつちの方に歩いてゆきかけたが、丁度そこにゐる車屋が乘車をすゝめたので、可なりまけぬ氣であつた私は、もう東京には長く住んでゐるものゝやうに今川小路までの値段を掛合つた上で俥に乘つた。

今川小路の露地裏のB氏の家はすぐ分つた。車賃を拂つて小い門を入つて入口に立つて訪ふと、B氏の妻君らしい二十四五の銀杏返しの婦人が出て來た。私は××縣のTと申す者ですといつて取次ぎを乞ふと一旦奥へ入つてまた出て來て、どうぞお上り下さいと云ふ。それで座敷へ通されて待つてゐると、B氏が襖の彼方の茶の間の方から出て來たが、私を見ると突如驚いて笑ひながら、

「あツ、T君ですか。私はたゞ××縣のTと申す者だと云はれたといふからO市のTさんかとばかり思つてゐた。それはよくゐらしツた。」と云つて、それから二人は更めて挨拶を交はしたり、郷里の話をしたりした。B氏の家と私の家とは隣家とも云つてよいくらゐの同じ村の中に居つた。

それから私は此度家に無斷で上京したことを打明け、東京にゐて學校へ行きたい希望を述べ、B氏からその事を手紙

で郷里の父に云つてやつてくれた。私はさうして郷里の方の返事が來るのを待つたり後から蒲團や行李などの來るのを待つたりする間一と月ばかりB氏の家にそのまゝ寄食してゐたと記憶する。B氏は初めて上京した私に暇々に方々案内して見せてくれた。そして時によると本郷や谷中の方にゆく時に私を連れて交際のある靑年畫家の處へ寄つたりなどしてゐた。その畫家の中には故人の菱田春草のところへも一度行つたことがあつたと思ふ。畫家の處へゆくと、

「あなたも畫の方ですか。」

とよく訊かれた。私は默つて微笑してゐると、B氏は、さうぢやないんですと云つて、私の代りに云つてくれたが、B氏にも私の心持は十分に解つてゐなかつた。私自身にもまだよく分つてゐなかつたのかも知れぬ。

黑枠のぬしといふのは、そのB氏の妻君のことである。私は高野山にゐる時突然の通知に接して「あゝあの人が死んだか」と思つて吃驚した。遠くに離れてゐて出しぬけに東京の知人の訃に接する時いつもさう思ふのであるが、殊にB氏とは長い間餘り頻繁に接近してゐなかつたので一層その感が深かつたのである。

私が今川小路のB氏の家に一ケ月ばかり寄寓してゐたのは隨分古いことでもあるし、又私も二十歳以前で世間の事情にも疎かつたから委しいことはよく分らなかつたけれど、その頃B氏の親友でやつぱり同縣出身の畫家で常にB氏と往來してゐたA氏、それからこれも同じ郷里の人間でその頃近衛騎兵で東京に來てゐた某氏などが時々私に話して聞かすところによると、B氏の妻君は以前ある小官吏の妻君であつたのをB氏と關係して遂に同棲するやうになつたのであるといふことであつた。彼等はそれについて、いつもB氏の爲めにそれを氣づかつてゐる樣な調子で私に語つて聞かせた。

「君はそんなにB君の家と懇意にしてゐるのならば、何とかB君の家へさう云つてやつて上げたらどうだね。」

「僕にはそんなことは云へないです。」

「君から直接に云へなければ、君から君のお父さんにでもいつて、君のお父さんからB君のお父さんに話すやうにした

ら可いぢやないか。」

A氏はそんなことも云つたことがあつた。A氏のいふところによると、B氏の妻君は、その先の夫であつた土木か收税吏かのある官吏が地方に長く出張してゐる間に、その妻君の母親がB氏が友達と自炊生活をしてゐる處へ雇はれて來てゐた縁故から時々遊びに來てゐて關係したのがそも〳〵で遂にその妻君はB氏の物になつてしまつたのである。それが爲めに、初のうちは先夫は知る筈もなかつたが久し振りに東京に歸つてみると女房が居處を晦ましてゐるので驚き、終にそのわけが分つてひどく憤つてゐる、彼奴等を見附け次第殺してしまはなければ承知しないと云つてゐるさうだ。それでB君も恐れて、あゝして隱れてゐるんだ。といふやうなことをA氏は私に向つて話した。

「さうですか。それでは今の家は隱れてゐる處ですか。」

「まあさうさねえ。そんなことがない前はよく人の處へも遊びに行つたし、交際家だつたんだが、それから人とあまり交はらないやうにして、あゝしてゐるんだ。自分達だつて何時その男に襲はれるかも知れないから、始終不安でゐるんだらう。」

今日の私から判斷すれば、B氏等の心持にも、その男の心持にも掌を指すごとき同感を感ずることが出來るのであるが、今から二十六七年前のその時の私にはさういふ入譯がたゞ筋の外廓のみは解つてゐても肉と血とを以つて共鳴することは出來なかつた。そしてA氏のいふ、何時その男が、B氏の隱れ家に襲つて來るかも知れないといふのが私には何よりも恐ろしく思はれた。さういふことで傍杖を食ふことは屢々ありがちのことである。

「ぢやあの家はその爲めに隱れてゐる家ですか。」

「全然さういふわけでもないが、まあさうだ、いへないこともないねえ。君だつてあそこへ一緒にゐてどんな迷惑を被らないとも云へないぞ。」

A氏は眞面目な調子でいふ。それが私を脅かしてゐるやうに響く。

「だから君から何とか國の方に言つてやりたまへ。」

「貴下は何とかお言ひになつたのでせう。」

「うむ、先の内には僕も仲に入つて色々云つたこともあるんだが、あんまりいふとB君など餘り好く思はないからねえ。妻君には僕はひどく怨まれてゐるさ。……それに妻君の方ではB君その者よりもB君の國の家に財産があるのに見込みを付けてゐるのだよ。あの妻君には兄だの姉だの隨分兄弟が多いんだよ。そして兄には不可（いけ）ないのがあるらしい。君、B君の家は金滿家なんだらう。」A氏はかねて金滿家と聞いてゐるらしくいふ。

「いや、そんなに金滿家ぢやありません。」

私は、虚飾と誇張との癖のあるB氏が大分言を誇大にして郷里のことを知人や妻君の周圍に話してゐるなどといふことを、常時十九の青年ながらすぐ勘付いて、少し皮肉に感じた。

「金滿家といふほどでなくつても、多少田地など持つてゐるんだらう。」

「それはあります。」

こんな話を、一度A氏と一緒に歩きながらしたことがあつた。私はまだ自分で、さういふ問題に對する明確なる倫理的及び社會的批判の標準を抱懷してゐなかつたから、A氏の批評を殆どそのまゝ受入れて、さうかと思つてゐた。そして　達に對する考へが從來よりも大分違つて來た。尤もB氏は私より五六才年長の郷里の先輩であり、そしてそこに寄　して　る間も決して私を不深切には待遇しなかつた。それは同じ郷里の村の者の中にも財産その他生活程度の相異色々あつたが、B氏と私の家とはほゞ同じ程度の生活狀態であつた上に前にいつたとほりすぐ上の兄とB氏とは最も仲の好い竹馬の友、また兩方の長兄同志が最も仲の好い友達、そのまた上にある姉がこれ又稚い時からの馴染友達であつたりする關係上B氏は私を決して疎（おろそ）かにはしなかつたけれど、本來B氏の性質には、面白い剽輕（へうきん）な點があるとゝもに隨分險惡な處があつた。それが、その後に同じ郷里から出て來てB氏の家に書生をしてゐた私と同年の人間には最も酷

骨に感じられてゐた。その人間は幾度びか私の處に來てB氏夫妻の惡評をしたか知れなかつた。對人的に既に早熟で、俗才に長じ押出しの利くB氏は、いつまでも一介の書生を以つて居り專心自分の志す道に精進するといふよりも寧ろ世俗的交際に依つて自分を賣り出さうとする、田舍臭い一種の山師風のところがあつたから、早くから穀の書生のやうな者を出入りさせて自分はもう一家を成した者のやうに構てゐた。それでもB氏は流石に私を玄關番として頤使することは遠慮してゐた。九段の寄席や川竹亭などへも妻君と一緒に私を伴れて行つてくれたりした。

妻君は婦人病でゝもあるかといふやうに顏色の青いやうな白い女で濃い頭髮をいつも銀杏返し結ひ、……二十六七年前の記憶であるが……何織といふのか細い瓦斯糸織の地性の好い黑絽の單衣をその頃着てゐた。着る物などもそんなに持つてゐる風はなかつた。調子のいゝ時にはよく話しもするが一體が不愛相な女で自分で厭な時には碌に口も利かないといつたやうな陰氣な面白くない女であつた。そして女義太夫などによくあるやうな妙な嗄れた聲で、男のやうな聲であつた。……女には屢袋で美人と思はせるやうな好い聲の持ぬしがあるものだが……

B氏はそれでも私を玄關の二疊の間にも長火鉢を置いてある茶の間にも寢させず、自分達と同じ八疊の座敷に寢さした。私は、B氏夫妻の寢る床とやゝ離れて同じやうに枕を並べて寢てゐた。どうかするとB氏が外出して夜遲くまで歸らない時など妻君は一人床に横はりながら都新聞の續き物など見てゐた。私もその頃は、情欲に眼ざめてゐないこともなかつたが、異性に對して極めて臆病で從つて愼ましくもあつたし、勿論のこととして自分よりも遙かの姉さんのやうに思はれてゐるB氏の妻君に對してはさういふ意識をだも呼び起さなかつた。一つはその女が私には何となく好かない女であつたかも知れなかつた。その頃はまだ世間知らずの、本當に氣の利かない私であつたから、格別のことゝも思はなかつたが、後になつて考へてみるに、私を客人扱ひにして、三間しかない家で夜も自分達と同じ部屋に起臥さしたといふのは私を決して粗畧にしなかつた好い證據である。

一度私は甚だ氣の毒な思ひをしたことがある。床に入つてから少し微睡（とろ）としたと思つてゐると、ふとB氏の方で何か

話聲がしたのでぱちつと眼を開ひて其方を見るとB氏は仰向きになつたまゝ顔だけ此方を向けて私の方を凝視してゐる。妻君はその向側から胸から上だけB氏の胸の上に載せかけようとしながら、その眼も私の方を見てゐた。私は、はつと思つてすぐ目を瞑つてしてしまつた。すると妻君は舌打ちをするやうに云つてゐたやうであつたが、私はそのまゝいつか前後も知らずに眠つてしまつた。その後は心に留めて私はどんなことがあつても、何時も寢入つた風をしてゐた。又その頃は、今日常に不眠に惱まされがちの私でもさすがに青年の健康を持つてゐたから大抵は床に横はるとすぐ眠つてしまつた。

そのうちB氏にあてゝ國の父から返事が來た。本人がその氣であるものなら仕方がない。東京にゐて學校に行くのもよいが、併し學資は澤山送ることは出來ぬ。毎月拾圓づゝ送ることにするから、凡て本人の心任せにするがよからう。餘は萬事貴下にお頼みするといふ意味のことを書いてあつた。一ケ月拾圓の學資、それから間もなく芝の田町の方の下宿に移つていつたが、その時分の下宿料は一ケ月炭だけを別にして五圓五拾錢ぐらゐのものであつた。いよ〳〵慶應義塾と決定する前に私はいろ〳〵に送つてみた。中學校を完全に卒業して高等學校を経て大學に行くのが一番善いと思ひながらそれを實行するだけに意思を缺いてゐた。併しそれも一つは自分の體力を考慮した結果でもあつた。そして早稻田の方へも散歩かた〴〵行つてみたりした。その頃の早稻田は閑靜なもので、學校の附近から鶴卷町の邊は茗荷畑ばかりであつた。

芝の方に移つて行く前に國に向けて出した手紙に、私はかねてA氏から聞いてゐたこと、それに自分の觀察を加へてB氏の妻君のことを可なりひどく書いてやつた。私自身に對してはそんに感情を害するやうなことは仕向けなかつたがたゞ好かない女であつた。

それから芝の方へ行つて間もなくB氏の處から、荷物が屆いたといふ通知があつたので、それを取りに行つた。その

前から借家を探してゐたB氏はその時もう今川小路の家から小石川の初音町だつたか、跡見女學校の前の處に越してゐた。私が荷物を取りに行くと、B氏は顔を改めながら「ちよつと貴下に話すことがあります。」と云つて、何を云ひ出すかと思つてゐると、先日私が父に云つてやつた事がもう直ぐB氏の父兄に通じたと思はれて、B氏の家から嚴重な糺問の書面が來てゐたのであつた。併しB氏の父兄は……父兄としての愛情は誠に好ましいことであるが……B氏及びその妻君の事情を知らうとするよりも、その邊の事情を洩してやつた私を怨むと云つた、やうな態度であることが、B氏の語る言葉裏に察せられた。尤もそれは人情の上から當然の事で、私は、A氏の語るところに少しの誇張や僞はなかつたにしても、B氏夫妻の事が私に何等の損害を與へない限り、A氏の云つたまゝを輕信して國元の方へ云つてやつたりなどしなかつた方が好かつたのである。

それで私は、B氏から面と向つて綾々としてその憤怒を洩らされたので何と云つて返へすべき言葉も知らなかつた。今となつてはその時に云ふべき言葉は幾許もあつた筈なのだが、その場合は何ともいひやうがなかつたので、私はたゞ默つて面を垂れてゐた。

慶應義塾に入つてから三月ぶりに父が病氣といふ電報が來たので歸つてみると、死はもう父んでゐた。それから私は二年ばかり東京に來なかつた。翌々明治二十九年の九月にまた上京した。そしてB氏夫妻にも久しぶりに會つた。その頃B氏は神田の小川町の裏の方にゐた。その時もたしかに後から荷物などの來るのを待つ間三十日近くもB氏の家に寄寓してゐたと思ふ。後になつて考へてみると、B氏はあれでなか〳〵世話好きであつたのだとも云へる。私は、そんなに長く人の家にゐるのを心苦しく思ひながらその頃鐵道輸送の極めて怠慢であるために荷物の屆くのを待ちわびながらそこにゐたのである。その後駿河臺の方の下宿屋に移つていつてからも小川町までは近いのでその頃まだ東京に親しみの薄かつた時分のことであるから始終B氏の處に遊びに行つた。尤も私自身も綺麗は好きでもあつたし、それに、氣分の

険悪な人間ではあつてもB氏とは流石に父祖代々の昔から同じ土地に産まれてそこに育つた深い馴染から偶々故郷のことなど思ひ出して語り合ふ興味もあつた。

その頃、藝術的に傑れた繪畫を製作するといふよりも、むしろ俗才に長じてゐるB氏は、低級な繪畫を描いてもよいから、それによつて金儲けをしようとして焦慮してゐる風があつた。そして色々な計畫をしてゐた。淺草のパノラマのやうなものを京都にこしらえる計畫をしてB氏は一時京都の方へ行きツきりのやうにしてゐたこともあつた。

その頃のことであつた。私は、やつぱり郷里から來てゐるある友達にB氏の妻君の噂を聞いた。その友達もB氏とは知つてゐる間であつたが少し郷里を離れてゐるのでさう親しくB氏を訪ねもしなかつた。その友達が又聞きに聞いたと云つて話す處によると、B氏の妻君は、B氏が京都に行つて不在の間にHといふ男と關係してゐるといふのである。

「そし　B君が餘り金も取つて來ないのでそのHといふ男から金を貰つてゐるさうぢやないか。」

さういつて、私の友達は笑つて話した。

「あゝHといふ男は僕も知つてゐる。Bの處へよく來てゐるよ。」

「それだ〳〵。それなら違ひないよ。だから婦人といふものは心を許せないものだ。」

二つ三つも私より年長のその友達は神田の方の法律學校に行つてゐて私などより遙かに老成な男であつたが、感慨深さうにそんなことを洩してゐた。

併し私はまだ半信半疑で、Bの妻君の爲に辯ずる氣はなかつたが、自分の常識で判斷してどうもそんなことがありさうにも思はれなかつた。それといふのは、そのHといふ男はなるほどBの家で度々自分も行き合つてよく知つてゐる。勿論B氏が家にゐる頃でもよく來て茶の間で懇意に話込んでゐた。千葉か茨城あたりの者で何を商買にしてゐるのか私にはよく分らなかつたが、猿樂町邊で薪炭屋か何かをしてゐたらしい。しかしその方はすつかり女房が取り仕切つてゐて、好人物でガラ〳〵者のHはいつも女房に小言ばかり食つてゐることを、Bの妻君は笑つて話してゐた。その頃三十

六七でもあつたらうか、とにかくBよりも遥かに年上で、色の黒い、顔も體も同じやうに四角ばつた、不格向に大きな體格をして着てゐる物とても、書生の私の眼にさへ汚い田舎爺のやうな身装をしてゐた。顔の大きいわりに窪んだ小い眼がまた劇しい近眼で、それに銀縁の眼鏡を掛けてゐた。B氏がその人間とどういふわけで交際してゐたか知らないが、いつでも小さい鞄を提げてゐるところを見ると日歩でも集めてゐるのか、小金の融通をしてゐる人間でもあつたらうかB氏夫妻ともあまり尊敬して彼を遇してゐなかつた。たゞ人が好人物なので少しも遠慮をする必要がなかつたのである。Hは、B氏が襖の此方の座敷で畫枠に對つてゐる時でも茶の間の長火鉢の向うに坐つて千葉訛り尻上りの太い聲で何か知ら戯談などをいつて陽氣な會話をしてゐた。そして火鉢の傍に坐りながら風邪を引いたと云つて鼻聲で話してゐたが、濡れた鼻紙を擴げて鐵瓶の横で乾かしてゐたのを、私は心持ち惡く見てゐたことがあつた。そんな色氣のない不男の、浅薄な愚人とBの妻君が秘密な交際などをする筈がないと思つた。それで私の思つてゐることを具さに友達に話すと、

「さうかねえ……」と云つてゐたが「しかし僕に話した人間は確かにそれに違ひないと云つてゐたがなあ……君にもBの處で會つたと云つてゐたよ。Cといふ年を取つたお婆さんの女がBの處によく行くだらう。」

「あゝ、C。知つてゐる。」

「そのCが、Bの妻君はHと關係があると云つてゐた。どうも本當らしいよ。」

その頃B氏はまたパノラマを計畫してゐる用件で二ケ月ばかり京都の方に行つて留守であつた。友達からそな噂を聞いて半月ばかり經つてふいと又Bの家に立寄ると、妻君ひとりだけでゐた。妻君はいつも無愛嬌の女に似ず、その時は妙にお世辭を使つて長火鉢の處に蒲團をなほして私を坐らせた。そして何かの話の切れたところで、

「あなたはCさんから何か聞きませんでしたか。」といふ。

それで、Cは先日友達がBの妻君の噂をしてゐたといふその婦人なので、はつと心に思ひ當りながら、何氣ない顔を

して、

「いゝえ。」と云つた。

「さうですか。でも此の間あなたに何處かで會つたとか云つてゐましたよ。」

「いゝえ、私はCといふ人に何處でも會ひはしません、たゞあなたの家で此處で二三度會つた、あれつきりです。」

「へえ、さうですか。でもあなたと、あなたのお友達の處で會つたとか云つてゐました。……あの女何でも嘘ばつかり吐いてゐるんです。そして口が巧いんですから、あのとほりに。……あの人がもし私の事なんか何か云つてゐても本當にしないで下さい。」

妻君は、私の方では何にも言ひ出さないのに、何かの事譯をとり繕らふやうな口振りである。私はそれを聞いて、心の中でこれではCといふ婦人が云つたといふ噂が本當であるかも知れぬと思つた。そして私が辭して歸らうとすると妻君は、いつになく茶箪笥の中に藏つてあつた貰ひものと思はれる大きな饅頭を半紙に包んでくれたりした。一寸見には氣樂な生活のやうでもそれはB氏の氣質で俗世間への外見であつて、內實は却々遣り繰りの暮しをしてゐたらしいからそんな茶菓子のやうな物でも不斷は吝んで決して出したりした例はないのに今日はいつにない平常の氣分と違ふと思つて、私は例の噂の倍々確實であることを感じた。蟲の好かない無愛想な女であるのに、私に對してそんな木に竹を繼いだやうな空々しいお世辭をする顏の中にも何となく弱いところが表はれてゐるのも不思議であつた。

私は平素の、彼女の物惜しみをする氣質を知つてゐるので、一旦は辭退したが、

「ナニ、どうせ內に置いたつて誰れも食べるものはないんですから、いやでなかつたら持つていつてお上んなさい。」

といつて、惜げもなく强いて取らした。

私はその頃また麴町の方の下宿に移つてゐたが、小川町から歸つて來る途々そのことを考へて、その虛飾の多い性質や險惡な氣分などから何となく平素から餘り同情を持つことの出來ないBのことであるが、噂を事實として考へると今

京都の方に行つてゐるBが氣の毒のやうに思はれた。そしてあの不男の田舍漢まる出しの千葉訛りの不格向な大男のHに果してあの妻君が貞操を許してゐるとすれば、それは單に金錢と交換するといふ理由よりほかに理由はないと思ふと、私はBの妻個人の場合を離れて一般に男女の關係そのことがいはうやうのない不快な氣持ちになつて來た。そしてそれは、私がはじめて上京した當時にAなどから聞かされたB夫婦の成立ちからして決してあるまじき事でもないと思はれた。恰もB自身が人の妻を取つたやうに今その報償がめぐつて來てゐるのだな……憐れなるBよと思つた。

その後その事については私は何も聞かなかつた。B夫婦の生活は偶に訪ねてゆく私の眼に映るところによれば無事に幸福に日を經てゐるものと思はれた。そして自分の職業には相應に熱心で、殊に物質的生活を圓滑にすることについては生れながらの俗才を働かして種々な方法を講ずることがあつても藝術に志す者の第一義の事に向つて自分の才能の乏しいことを自覺して悲んだり、努力の足らざることを省みて自己を責めたりするといふやうな高尚な懊惱の缺けてゐるやうなBは、いつまで經つてもたゞ外見の好い、體裁を繕つてばかり活きてゐるやうな、人間としては、精神的に極めて調子の低い生活をしてゐた。Bの少年の頃の天才を記憶してゐる私には、あれほど早熟の才能を持つてゐた者が、どうしていつまでも同じ處に止まつてゐるであらうかと不思議に思はれるくらゐ洋畫家としての技倆は進歩する風は見えなかつた。その點に就ては、しかし私は多少B氏の境遇に對して同情を持つてゐた。私は洋畫界の裏面の消息にも通じてゐないし、又繪畫の鑑賞力に就てもさまで自信はなかつたが、B氏が東京の洋畫界に、もつと名を顯はすべくして表はさないのは彼の畫が舊派の洋畫であるといふ以外に、流派や學閥の如何に妨げられてゐる所もあるのだらうと思つてゐた。それとゝもに高等普通教育の乏しい、學藝その他の高尚なる一般知識に關しても何となく遲い眼の開發されてゐないやうなBの平素の話題の蒙昧なのが、一方は歲月とともに段々進歩してゆくことを意識してゐる私自身の學生生活と彼のさういふ生活とを倍々交渉のないものにして來た。尤もそれまでとても早くからもう既に一家を成した者の如き外見を飾つた生活をしてゐるBは私のやうにいつまでも、寄生のやうな生活をしてゐるものと交際してゆく心などは

初から持つてゐなかつた。さういふわけで私が眞面目に學業の方に段々心を傾倒してゆくにつれて從來のやうにBの處にあまり足を向けなくなつて來た。その間に歳月は流れるやうに過ぎて、私がはじめて上京した時からもう十年も經つた。藝術家としてのBの名は西洋畫家の間にも餘り知られなかつたが、物質的生活の方には追々裕かになつて來たと思はれて、一度郷里から出て來た知人を案内して久し振りにBの處を訪ねて行くと、その頃Bは先の小川町の家と變つてもう何度めかに此度は麹町の富士見町に新築の二階のある家を買つて住んでゐた。妻君は留守でBが一人庭に下りて鍬を手にして花壇を弄つてゐて、

「やあ、どうぞ二階に上つてゐて下さい。今足を洗つて行きます。」といふ。

それで私達は二階に上つて待つてゐると、Bはすぐ上つて來た。家の內を飾つたり、家具を美しく置き並べたりすることに深い興味を持ち、又そんな才能のある彼は二階二間の座敷を奇麗に飾つてゐた。

「ナニ立派な家でもありませんが、借金をして買ひました。……君にも久しく會はなかつたが僕に子供が出來ました。」

「あゝ、さうですか。それは御目出たうございます。どちらです？」

「女の子です。」

「それは珍らしい、よく出來て御結構です。」

「まつたく珍らしい。とても出來ないと思つてゐたら出來ました。」

B夫婦はたしか同年でその時もう三十四五だつたと思ふ。

「今まで一度もそんなことを聞かなかつたやうですが、さうでしたか。」

「えゝ、此度が初めて。」

「そして何時です？」

「まだつい二た月ほど前です。今一寸抱かれて外へ出てゐます。」

暫くそんな話をしてゐたが、以前のとほり何だかBの陰惡な性癖がちらり〳〵と見えてゐるのが厭で私の知人を促して間もなく辭して出た。そして表の通りを二三町歩いて來ると、まだ産後の衰弱のすつかり回復せぬらしい妻君が切り髪にした母親と並んで赤坊を抱いて來るところへ行き合つた。妻君の顏は平常から血色のよくない顏が一層蒼くなつて大きな甘味(うまみ)の乏しい二重瞼の眼がいやにヒステリイに釣り上つてゐた。私は立ちながら一寸挨拶を云つてそのまゝ別れた。そして道を歩きながら數年前に聞いた噂を思ひ起してゐた。否、その時ばかりではない。あの後Bの妻君を見るたびに必ず聯想するのはその噂の事實であつた。これは私がさう思ふのも當然のことで、そんな行爲がBの妻にあつたとすれば、それによつて私の彼女に對する人格上の批判がすつかりその前と變つたものになつて來る筈であるから。それだけ彼女自身が違つた人格者となつたわけである。けれども私はそんな事を誰れにも話したことはなかつた。たゞB氏が自身でそれを知つてゐるかどうかといふことを時々考へてみたのである。

それつきり又長い間Bに會ふこともなくして過ぎた。今から十二三年前のことである。B氏はもう二三年前から小石川の高臺の方に轉宅してゐた。小石川のその邊は私も以前住んでゐたことがあるのでその時分から又時々B氏の處へ話しにゆくやうになつた。長い間見なかつた間にBより妻君がずつと年を取つてお婆さんおばあさんしてゐるのが最も眼に着いた。赤ン坊の時に見たきり見なかつた女の子がもう六つか七つになつてゐた。美しい顏容(かほだち)であつたが阿母さんに似て血色の惡い、そして甘やかしてあるせゐか、ひどい駄々ツ兒で大人でも恐ろしいやうな險のあるヒステリ質の女の子であつた。

その頃B氏は物質生活が裕になつたといふほどでもなかつたらうが、それでも表向の觀察では可なり幸福さうに見えてゐた。其處は文學や繪畫の好きな北海道の金持の所有してゐる家で始終東京に生活してゐるその息子の知合からその家を借りて住んでゐると云つてゐた。庭の廣い、風雅に造つた平家建ての中古の家であつた。何を話しかけても一向興味の引立たないやうな、表情の乏しい妻君の氣質は昔のとほりであつたが、それでもゝう四十の聲を聞いてゐる妻君に

は何となく態度に淋びが出來て今はたゞもう一人の娘の子が成長してゆくのを樂んでゐるといふ風に見えてゐた。

その頃の私自身の精神的冒險は隨分極端なものであつたから從つて物質的生活の狀態など殆ど困乏のどん底に沈んでゐた。しかし泥坊にも五分の道理とやらの譬のとほり、そんなに自己の生活をわれと破壞してゐてもそこには何處か得意といふほでないまでも自分から甘んじてゐるところがないでもなかつた。そんな自負心は持つてゐながらも自分と反對に、精神的にも物質的にも少しも無駄なことをしない、纒つた生活を幸福さうにしてゐる人間を見ては流石にさう云ふ人々の幸福を羨ましいと思はぬこともなかつた。私には自身相當の自負もありまた理想もあつたから、假ひ傍眼にはどんな慘めな破壞的生活をしてゐても藝術家としてのBの現境を決して羨ましいとは思はなかつたが、少くともその幸福さうな家庭生活は認めないわけにはいかなかつた。然らばその幸福と今の自分の精神的不幸とを交換しようかと思つたらば、自分は不幸であつても可いからやつぱり今のまゝの自分に甘んじてゐると自分から答へたであらう。

とにかく、その頃家庭生活を破壞してこまつてゐた私はたゞ獨り靜としてゐるのが堪えられなくなると、すぐ外に出て歩いた。そして外を唯ぶら〳〵歩くのが詰らなくなると何處か知人の處を訪ねた。B氏の家は近い處でもあるし靜かな處であつたので自然その家へ屢話しにいつた。……私も今は妻も友人も必要としない全くの獨りに馴れてゐて自分ながら一種の强者であるといふ意識をさへ持つてるが、その頃は如何なる意味に於ても隨分の弱者であつた。……弱い乏しい心を抱いてゐる者の眼には溫かさうな家庭生活をしてゐる者がどんなに幸福に見えたか知れない。

その秋、私は夏のおはりから二ケ月餘りも淹留してゐた東北の方のある溫泉地から東京に戾つて來ると次第に黃ばんで凋落してゆく自然の色や灰色に降りつゞく秋雨のわびしさに堪えかねて明るい燈火の團欒を戀しく思つた。そしてそんな處は何處にあるかと、あれかこれかと思ひあたる處を探ねてみたが、さういふところは何處にもなかつた。そして多くの間の冷さを思つた。……私が後に人間に對して冷淡になつたのは明かにその時分の事が原因してゐる。……それゆえBの處へゆくのも餘り心は進まなかつたのであるが他に行かうと思ふ處がないまゝに自然近い處にゐるBの家に行

くやうなつた。その頃私は本を讀む興味もすつかり失つてゐたし、勿論筆を執つて何か書きたい物を書いてみるといふやうな心は微塵もなくなつてゐた。たゞ一日幽鬱な心持ちに鎖さゝれながら無興味な日を無益に消してゐるに過ぎなかつた。さういふ時に靜に本などを讀んでゐられるやうな餘裕のあるのは、まだ心の喪失狀態や無興味から來る幽鬱が極端にまで切迫してゐない證據である。

　そしてBの處に行くと、夜など廣い八疊の座敷に明るい電燈を點して家族はそこに寄り集まつて銘々の夜仕事にいそしんでゐた。もう年の暮れも三四十日に押迫つてゐるのでB　肖像畫の依賴仕事を急いでゐた。妻君は女中を對手に夕飯の濟んだあとの茶の間の形附けをしてしまうと、定まつて夏の間に洗濯して置いた不斷着の仕立物や女の子の物などを持つて座敷に入つて來た。

「××さん寒いから火鉢の傍にお寄んなさい、火の御馳走でもします。」

と云つて、妻君は大きな瀬戸物の火鉢に割れるほど、始末よく貯へてある粉炭を繼いだ。そして赫々と端から紅くなつてゆく炭火の脇に鏝を突込んだ。私が火鉢に凭れてBと取留めのない雜談を交へてゐる間にもBの刷毛は絕えず動いて肖像畫は見る〳〵出來上つていつた。それとゝもに妻君の針を持つ手も休みなく運ばれて着物の形は一部々々に出來てゆく。餘處の二階に獨り暮しをしてゐる私には自分の家に戾つて來ても話す對手もないので、胸の奥底までは到底融合するとは出來ないでも、せめて他家の明るい團欒の燈火の許が離れ難くつて、いつまでもそこに尻を据えてゐた。さういふとがある冬から次の冬から春までもつゞいてゐた併し私自身は、私自身の乏しい心を持つてゐながらもB氏のそんな幸福さうな落ち着いた生活を眼の前に見てゐて、B氏の爲めに不幸を感ぜずにはゐられなかつた。それは十幾年の昔に聞いた妻君の秘密の噂を忘れてしまうとが、私にどうしても出來なかつたからである。妻君の過去の秘密を露程も知つてゐないB氏は明るい電燈の下で毎夜同じやうに樂しい氣分で戯談などをいひ乍ら畫を描いてゐた。私は、二人の今の幸福さうな生活を見てゐればゐるほどB氏自身には知らぬ不幸が宛も私自身の事のやうに胸を不快な者にした。私は半ば自

分で求めてゞもゐるかのやうな變態な心理狀態からその頃常にさういつたやうな不快な感情の爲めに常に胸を鎖され生きてゐた。自分の不快なる體驗は、Ｂ氏自身の夢にも知らない秘密の底に埋られてゐる古い不快の事實を殆ど病的にまざ〳〵と自分の胸に刻んでゐた。

私から見たＢ氏夫妻の幸福は、彼等の生活をＢ氏の不幸なる兄弟に比べて一層明るくして見せた。それは、鄕里にゐるＢ氏の實兄が天にも地にも掛替へのない、たつた一人の娘を十九か二十でその頃亡くしたことであつた。その兄さんが如何に感傷的になつてゐるかといふことは、絕えず遣る瀨のない不幸の心持ちを弟の處へ洩して來る手紙の話によつて私はＢの妻君から聞かされて知つてゐた。

「ほんとに國の兄さんも氣の毒ですよ。Ｂの處へいつも言つて來てゐることをみると、一人の子を亡くした親の心持ちはこんなものかと思つて、手紙の來るたびにいつでも貰ひ泣きをしてゐますよ。」

表情の乏しい冷淡な妻君は、めづらしくそんなことを云つて、Ｂ氏の留守の折など行くと時々私にそんなことを話してゐた。

「兄さん思ひのＢのことですから、どうしても一人子供の出來るやうな好い奥さんを世話すると云つて頻りに心配してゐるやうです。」

そんなことも妻君は云つてゐた。Ｂの兄さんには若い時に迎へた、此度死んだ娘の母親である妻君はあつたが、それには、その娘の後が出來なかつたところをみるともう子供は出來るものと思はれなかつた。それにその妻君はＢの兄の氣に入らないのを義理にもらつた妻であるといふ、私などのまだ子供の時分からの噂であつた。さうして見れば新にＢの兄が子供の出來るやうな妻君を迎へるといふことは强ち非道な考でもなかつた。

「誠にお氣の毒ですなあ。どうか適當の人があつてくれるといゝですがなあ。」

私はそんな挨拶をしてゐた。

その後Bの兄さんは近い城下の市から先の妻君を一生の生活を保證した上で離縁して後妻を迎へたといふことを聞いた。そして間もなくめづらしく男の子が出來たといふはなしも聞いてゐた。その頃Bの兄さんはもう五十を三四年前に越してゐた。

「それだから男は幾つになつてもさう案じることもないものだ。」

といふ話がその人を實例として話されてゐたのも聞いてゐる。

それから又七八年ばかり、つい目と鼻との間にゐながら、B氏の家を訪はなかつた。廣い東京の中にまぎれて暮してゐると外に出る場合の多いB氏にすら電車の中で偶然一度か二度會つたばかりである。妻君にはあれツきり會はなかつた。一昨年の正月まだ松のあるうちに、ふとそちらの方に散歩したついでに門の前まで立寄つてゐると、門松の前で美しく着飾つた十七八のすらりとした縹緻の好い娘が十三四の小娘と羽子をついて遊んでゐた。それは十ばかりの時に見たきり見ないB氏の一人娘であつた。

「あなたはBさんのお孃さんですか。」

美しくなる娘であるとは思つてゐたが、あんまり見ちがえるほど別嬪なのでさういつて訊くと、

「えゝ」といふ。

「お父さんおいでゝすか。」

「一昨日伊豆の方にまゐりました。」

「お母さんは。」

「一寸餘處に行つてゐます。」

「あゝさうですか、私は××と申します。どうぞ宜敷く。」

と云つてそのまゝ戻つた。そして心の中であんな好い娘があればB氏達の幸福はます〱光彩があると思ひながら。

それから漸く七八月にしかならぬ今かうしてその妻君の訃音に接しようとは思ひもかけなかつた。私は高野山から誠意をこめた弔詞を書いてB氏に送つた。

近刊豫告

死線を越えて

賀川豊彦著

◇四六版紙數約六百頁全一冊◇

七百枚の長篇小説前半を本誌に連載、其純な飾らざる描寫に就て好評を呼びたるが、著者は以下四百枚全篇を完成したり。火の如き戀人との經緯、止み難き父と子の爭鬪、人夫となりてのどん底生活、運送店經營者として雇人との利益配分問題等。主人公が益々自己の道に邁進し性格的に曲折波瀾に富む運命を開拓し來る、併して最後に或る都市の貧民窟に一戸を構え、貧民等の心の友となるを以て結末とせり。目下全部の印刷を急がせつつあり。十月初旬上梓

東京芝櫻田久保町 改造社 振替東京八四〇二



鼠小僧と蜆賣

荒畑寒村

一

文政から天保にかけて十有餘年、義賊鼠小僧の名は、任俠と勇みを看板にした江戸つ子の間に、ほとんど偶像のやうに崇められてゐた。天明の大飢饉は、富んだ者を益々富まし、貧しい者を愈々貧しくして、江戸八百八街には無宿者、浮浪人の數が溢れるほど增えた。其爲には、寛政の初年、奥州白河の城主松平定信が柳營に入ると、すぐ石川島に人足寄場を設けて、江戸御府内の浮浪人、無宿者を收容し、一定の生業を與ふることにしたが、そんな事で固より、世の勢を食止める譯には往かなかつた。

文政も四年、五年と年代が重なるにつれ、定信が鋭意努力して戒しめた奢侈の風は、田沼時代を凌ぐ程はげしくなり、其の奬勵した勤儉の俗は地を掃つて空しく、寛政の紀綱やうやう廢れて、富豪を憎み時世を呪ふ怨嗟の聲、低く靜かだけれども然しまた強く廣く、だん／＼四方に擴がつて往つた。かう云ふ時世、かう云ふ人情の間に、鼠小僧の名が江戸つ子の口々に喧傳され出した。鼠小僧とは何者だか、誰もその正體を見た者はない。腕利と噂の高い八丁堀の旦那衆、鬼と呼ばるゝ岡つ引

が手を碎いての探索も、風の如く、電の如き鼠小僧を召捕ることが出來なかつた。

鼠小僧が江戸つ子から、神のやうに崇められたのは、網のやうな門奉行の配下の目を潜つて、傍若無人に振舞つてゐる大膽さばかりではなかつた。鼠小僧は世間にザラに有るやうな盜人ではない、彼は義賊であつた。鼠小僧は決して普通の町家に入つたことが無い。その仕事をする先は、いつでも山の手邊の大名屋敷か、さも無くば町内から憎まれてゐる強慾非道な富豪の家ばかりだつた。そうして、其の盜んだ金を、氣もなく弱い、貧しい、哀れな者に惠んでやる心意氣が、バカに江戸つ子に嬉しがられたからであつた。畢竟、當時の江戸人士は、聲も形もなく襲つて來る貧富の懸隔の大浪に捲き込まれて、奢侈逸樂に耽る富豪を憎み、世の中の惡しくなつて行くのを、どうする事も出來ぬ幕府の役人に云ふべき言葉を知らぬ。滿腔の不平怨恨を抱いてゐたので、鼠小僧のやり口に自分達の不平のハケ口を見出したのである。

昨夜はどこの大名屋敷へ鼠小僧が入つた、今夜はこゝの富豪の家が鼠小僧に襲はれたと聞くと、江戸つ子は仇でも討つて貰つたやうに喜こんだ。どこで鼠小僧が捉まりそうになつた、こゝで鼠小僧が手先に追つかけられたと聞くと、江戸つ子はハラ〳〵しながら、無事に逃げ延びて呉れゝばいゝと思つた。鼠小僧の正體が雲か煙のやうに捕へられず、目明しや岡つ引がしよつちう鼻をあかされてゐるのも、一つは此の江戸市民が鼠小僧に同情して、幾度かその召捕の危難を脫する場合に、蔭ながら力を藉してやつたからである。

二

文政五年師走の末、和泉屋の次郎吉は芝白金のさる大名屋敷の大部屋で、三日三晩うち續けた揚句、ふところの三百兩を殘らず取られて了つた。ボンヤリして茅場町の家へ歸らうと、朝の四ツ(十時)頃、ブラリと白金を出て、芝口二丁目まで掛かつて來ると、降り拔きたがつて居た灰色の空は、筑波颪に誘はれて絲のやうな粉雪をチラ〳〵落し始めた。

次郎吉は海運橋まで船で往かうと思つて、芝口一丁目から横に切れて汐留に入り、河岸に軒を並べた船宿の中でも一番大きな、伊豆屋といふ馴染の家へやつて來た。

　次郎吉は船頭が船へ火箱を入れたり、蒲團を掛けたりして、仕度をして居る間、伊豆屋の店先で欅の如輪杢の長火鉢の前に陣取つて、女將を相手に白金の屋敷の大部屋で、すつかり取られた話などをして居た。其うちに近所の料理屋から、誂へた料理が二品三品入つ來る。舟の仕度をして上つた來た船頭の竹にアイをさせて、雪を見ながら、一と口飲み始めた。

『ヘーエ、三日でタツタ三百兩。タツタがあの三百兩……。ある所にやあるもんだねエ、おかみさん。然し、親分にも俺ちにも、この月ヤア餘つ程悪い月だと見へる。ナニね、俺ちも昨夜は大敗北サ。追目々々と張つてゐるうちに、到頭きれいに懐中をハタいちめえやした。』

『フーン、餘つ程やられたか。』

『餘つ程にも何にも、お手つ拂ひサ。どうして年を越さうかと思つてる位えだ。』

『大きなことを云やアがつて、一體いくとやられたんだ。』

『それが大枚の金なんデ。』

『だからヨ、大枚いくらだつてンだ。』

『大枚……二朱と四百。』

『ナーンだ、二朱と四百が大枚か、アツハ……。手前の云ふことは、いつも罪が無くつていゝ。』

　竹の相變らず剽輕な話に釣込まれて、次郎吉も負け腹のムシヤクシヤが大分直つた。外は、粉のやうだつた雪が、綿をチギつたやうに大きくなつて、雪曇りに暗くなつた空を、烏が一羽低く舞つてゐる。九つ（十二時）近くにもなつたので次郎吉がもう酒もツモリにして、ソロ〳〵立たうかと思つてゐると、『オーイ、蜆ヨーイ。オーイ、蜆ヨーイ。』佃煮のや

うな色をした手拭で頬被りをし、ツギの當つた淺黄の鯉口に、天秤の前と後に蜆笊を振り分けて、手も足も寒さで、ニンジンのやうに眞赤にした小僧が、左手を口の息で暖ためながら、伊豆屋の店先に立つた。

『蜆はいらねえかネ、伯父さん、蜆買つて與んねえナ。仕舞ひ物だから安く負けとかア。皆なで三十二文ばかりにして置かう。買つといて與んねえナ、伯父さん、伯父さん。』

『うるせえ餓鬼だなア、此奴ア。無暗に伯父さん、伯父さんなんテ、厭に人をもちやげやアがつて。手前のやうな薄汚ねえ餓鬼を、甥なんかに持つた覺えはねえや、俺ア蜆は嫌えだ、お客樣の居る所を見圖らつて、厭に哀れつぽくもち掛けやがらア。』

『これ竹、何だつてそうゾンキに言ふんだ。買つてやれ、買つてやれ。嫌えだつたら食はなくともいゝ、多寡が三十二文じやねえか、皆買つて何ダ、前の汐留の川へ流してやれ。』

竹は不性無性に、女將から受取つた錢を、小僧に渡してやつて、二た笊の蜆を殘らず前の川へ放させた。次郎吉は小僧の寒さにいぢけた風體を見ると、持ち前の同情心がムラ〳〵と湧き上つて、啣んだ猪口の酒も苦がくなつたやうに感じた。

『女將、見ねえ可哀そうに。十三か四だらうが、年端も往かねえ子供を、この雪に蜆を賣らせるなんテ、本當に忌々しい世の中だつちやアねえ。こんな日にやア、藝妓をあげて、酒を飲みながら、雪見をしてやがる罰當りもあらうになア。』

『本當にマア、まだ遊びたい盛りでせうねえ。小僧さん、お前の家は何處。』

『俺らの家は本芝の裏三丁目だ。』

『そんなら格別遠くもねえが、ナニか、手前のやうな子供の稼ぎを、家で口を開いて待つてる者でもあるのか。』

『ア、、目の見へねえ阿母と、病氣の姉やを、俺らが蜆を賣つて養つて居るんだ。』

『フーン、其奴ア可哀そうに。姉さんは幾つになる。』

『今年、二十三だ。』

『二十三て云へば女盛りじやねえか、どんな亭主をもつたつて、阿母と弟の二人ぐれえ、糊口をさせられねえ事はあるめえになア。』

『それアネ、姉やだつて三四年前までは、金春の板新道で紀伊國屋小春つて云へば、隨分賣つた藝妓だつたんだ、だけど、飛んだ災難の爲に、今じやブラ〳〵病で寢たり起きたりなんだ。』

『エツ、紀伊國屋小春が、手前の姉だと。』

『ア、そうだよ、伯父さん、家の姉やを知つてるかい。』

『いゝやナニ、知つてる譯じやねえが。小春と云ふ名前だけは聞いて居たからヨ。』

『へーエ、まあお前さん、小春さんの弟かい、親分、小春さんなら一時、金春でも鳴らしたもんですよ、マア、分らないもんだねえ、お前さん、名は何て云ふの。』

『俺ら、與吉つて云ふんだ。』

『與吉か……。して今、手前、姉さんが飛んだ災難にかゝつたとか云つたナ、それア一體どういふ譯だ、遠慮はいらねえサ、話して聞かして見ろ。』

三

親實の與吉が、涙ながらに次郎吉に話した物語はこうであつた。

與吉の父親が世を去ると、娘のお春は母親と弟を養ふ爲に、金春から紀伊國屋小春と名乘つて藝妓に出た、その中に深間になつたのが、三田の大町人で松本といふ家の庄之助といふ若旦那だつた。所が餘り道樂が嵩じたので、庄之助は實家を勘當され、小春の所に來て立て過されて居たが、其爲に小春の人氣は落ちる、借金は嵩む。トヾの詰りが、小春

は田舍廻りの旅藝妓、庄之助は初段近い碁を打つところから碁打になり、二人は住み馴れた江戸を後に、東海道を流れ流れてとう／＼箱根の湯治場へ、一と先づ落ちつく事になつた。

文政三年の夏、二人は木賀の龜屋といふ溫泉宿に座敷を借りて、湯治客相手に稼いで居たが、初段位ゐ打つたのでは碁打としては食つて往けず、小春がいかに江手前の藝妓でも、男があると知れて居ては小田原邊りから上つて來る山猫藝妓ほどにも流行らない。其うちに、湯の煙が白々と山の樹立にまつはり、湯の香の高い濡れ手拭を下げて、宿屋の前をブラつく浴衣がけの客の群も、だん／＼寂びれ出す山の秋が來た。庄之助と小春とは、身の廻りの物を引き剝ぐやうに賣り食ひしながら、毎日長火鉢を圍んで、太い溜息を吐いてゐた。

と、同じ龜屋に逗留してゐた金田龍齋といふ碁打、頭を圓めて黃八丈の着物に黑八の道行か何かで納まつてゐる五十四五の大坊主。これが或る日、庄之助の座敷に遊びに來て、退屈凌ぎに打ち始めた。互先で恰どいゝ手合せなので、思はず碁に身が入つた頃、龍齋から云ひ出して金を賭け出した。すると庄之助がバタ／＼負ける、初めが百匹、次が二百匹、一兩、二兩二分、五兩とだん／＼賭が大きくなつたが、庄之助に勝ち目がない。傍で見てゐた小春が氣を揉んで座敷へ出るのに殘して置いた珊瑚の九分珠脚の簪、緞子の丸帶、着替などを一と纏めにして、帳場から借りて來た二十五兩。それも瞬く間にきれいに負けて了つた。

龍齋は氣の毒そうに、此の儘では如何にも心もちが惡い、之れを貸すからもう一と勝負と、親切に百兩貸して與れたがそれも殘らず取られて了つた。そうして翌日になると、龍齋は急に熱海へ立つことになつたから、昨日貸した百兩の金、五十兩に負けるからすぐ返して呉れと云ひ出した。夫婦が言葉を盡して云ひ譯したがどうしても肯きいれず、果は筋彫のある片肌を脫いで、凄味な文句を並べ出した。そこへ亦、龍齋の友達だといふ眞鶴の萬藏と名乘る風體のよくない男が、小春をカタに金を用立てるから、それで龍齋の方の借を濟したら宜からうと、お爲ゴカシに持ちかける。初めて二人が、詐欺碁打(いかさま)と山女衒(やまぜげん)に一杯食はされたと氣がついたがもう遲い。蛇に魅込まれた蛙同樣、百兩の借入證文をカ

せにされて、アハヤ小春が二人の男に引立てられやうとした時、折よく歸つて來たのは庄之助夫婦の隣屋敷に逗留してゐる、江戸の或る鐵火打ちであつた。

この親分が、年こそまだ若けれ、氣つ前のいゝ生粋の江戸つ子で、事情を聞いて氣の毒に思ひ、五十兩を龍齋に辨濟してやつた上、うまく龍齋と萬藏とを乘せてチヨボ一を始め、瞬くひまに龍齋と萬藏の懐中を、根こそげハタいてしまつた。そうして二人を、腹散々コキ降して抓み出したが、相手が惡だから後でまたどんな讐をするかも知れないと、翌日の朝四つ過、宿の拂ひから賃受までしてやり、元箱根まで一緒に來て、三十兩の金を與へ、其人は江戸へ、夫婦は東海道を尙も西へと袂を分つた。

所が、夫婦が駿府の御城下へ泊つて、惠まれた金で宿の勘定を拂つた。所が木賀で難儀を救つてくれた親分といふのが、實は盗賊であつたと見へて、その小判が卜の字の刻印の打つてある不淨金だつたので、二人は直に町奉行の手で召捕になつた。そうして金の出所を白狀しろと、日々酷しい詮議を受けたが、惠まれた人は難儀を救つて呉れた命の恩人夫婦は骨が舍利になつても云ふまいと、只だ拾ひましたとばかり、弗つりとも惠んだ人の名を齒から外へは泄らさなかつた。然し拾つた金を屆けずに使つたとあつては云ひ譯は立たない、夫婦はそれから江戸へ差送られて、南町奉行筒井伊賀守の手に渡り、庄之助は今日で三年越し傳馬町の牢屋住ひ、小春は家主預けになつて家に歸つたが、庄之助の身を案じ過してブラ〳〵病。それをまた苦にして、もと〳〵惡かつた母親の眼がドツと惡くなり、今では狹い家の中を這ひ廻つてゐるといふ、慘めな有樣に陷ゐつてしまつた。

四

與吉の話に、次郎吉も泣いた、伊豆屋の女將も泣いた。剽輕者の竹までが、拳固で顔中をひつ擦つて聞いてゐた。中にも次郎吉は、人こそ知らね燒き金を呑まされるやうな、苦しい、切ない思ひに、骨も身も碎かれるやうな感じがした。

『ナーゝ、餘まり話が可哀そうなので、思はず貰ひ涙をさせられちやつた。女將見ねえ、親が死んだつて泣きそうもねえ竹の奴まで、拳固で面ぢうヒツ搔き廻してやがらア、ハツハ……。小僧々々、泣くんじやねえ、ヨウ。いかに濡れ手で粟の摑み取りたア云ひながら、命を元手の盗人稼業、その命を的に取つた金を惠むりやア、餘つ程情心が無くつちや出來るこつちやねえ。其の盗人だつて、決して僞惡かれと思つて、三十兩といふ金を惠んだんじや無からう、なア。手前の姉やなり若旦那なりが、その金の爲に飛んだ災難を被たといふのは、畢竟、ものゝ間違ひだ。だから決して其の盗人を怨むぢやねえヨ、いゝか。ナーニ、手前の孝心は天道さまがお見通しだ。屹と、その盗人にも通じねえで居るものか。また其の盗人だつて、それ程人情のあつい人間だもの、自分のやつた金がモトで情が却つて仇となり、善人が三年越も牢屋の苦しみをしてゐると聞いて、どうして默つて居られるものか。僅かの事を恩に着て、呉れた人間の名を明さねえといふ嬉しい意氣を聞いたら、泣いて喜こんでるに違えねえ。ナ、家へ歸つたら阿母や姉やに、その盗人が自分から名乘つて出て、二人が寃の罪を云ひ釋くに違えねえから、體を大切にして時節を待てと、ようく云つて聞かしねえ。なア女將、そうじやねえか、ハツハ……。』

『本當に與吉さん、いま和泉屋の親分さんが、御親切に仰有つて下さつた通りだヨ。決してキナ／＼思はずに、心を大きく持つてお在でと、お母さんや小春姉さんにそう云つとくれ。』

『ア、、有難う。いま伯父さんの云つたことを、阿母や姉やに聞かしたら、どんなに心丈夫に思ふか知れやしねえ。俺アけふが日まで、その泥棒を姉やや若旦那の仇だとばかり思つて居たが、いまの伯父さんの話ですかり解つちやつた。』

その泥棒だつて、姉やや若旦那を寃の罪に陷しいれやうと思つて、金を惠んで呉れたんじやねえだらうから、本當の災難なんだネ。俺アもう決して、その泥棒を怨みやしねえや。……だけどなア、其の泥棒が一日も早く名乘つて出て呉れねえと、姉やも若旦那も、もう生きちや會えねえかも知れねえもの。』

『ナーニ、そんな事があつたら、世の中は闇だ。さあ小僧、少ねえが此金をやる。俺もすつかり取られちやつて、これつ

限しきや無えが、志は松の葉だ。これを持つて歸つて、何かの足にするがい。」

次郎吉は紺天の紙入から、使ひ殘りの錢を、三分取出して與吉に與へた。さうして膳の料理を肴に、與吉に飯を食はしてやつた上、前に折詰にした料理を取寄せて、與吉の母や姉に土産に持たせて歸した。知らぬ間に時が移つて、もう彼れこれ八つ(二時)近く、空はます／＼暗くなり、雪はもの凄い程降り増して來た。女將の世辭を聞き流して舟に乘り移ると、竹は水馴棹を櫓に代へて、雪風に細かい波を立てゝゐる汐留の川を漕いで往く。

次郎吉は兩手を組んで、獨り思案に暮れ拔いた。思ひ出せば文化八年、てふど十六の歲の暮、しばらく息を拔かうと江戶を竄つて上方へ往き、大阪に足を止めて十年越し、二百六十餘大名の藏屋敷を、賭博を打つて遊んで居たが、文政三年の秋の初め、もう餘炎も冷めた頃と、飲み分けの兄弟分に暇を告げ、駿府二丁町の小松屋で圖らず馴染んだ松山太夫。その假親の三五郎と、女房の千人塚のお熊とが、清水港の廻船問屋、神崎屋助右衛門の家へ火札を張つて、八月二十三日の夜、草薙山明神の奥の院、御神木の洞穴へ三百兩納めさせる密談を洩れ聞き、うまく謀ごとの裏を掻いて、そつくり其金を捲き上げて了つた。

それから箱根の湯治場へ廻つて、木賀の龜屋に逗留中、庄之助夫婦の災難に出つくはし、懷中の三百兩を餌に上下の詐欺賽を使つて、アベコベに龍齋と萬藏の金を捲き上げ、翌日、庄之助夫婦に三十兩の金を與へ、元箱根で西と東に袂を分つた。それから間道を駿府へ引つ返し、松山を落籍して十年ぶりに江戶へ戾り、茅場町の植木店へ世帶をもち、表向は和泉屋といふ魚屋だが、毎日諸方の大名屋敷や、旗本屋敷の賭場入り。その暇々には大名の奥向や、非道な富豪へ忍び込んで、奪つた金は賭博の資本にしたり、貧しい者や憐れな家に、人知れず惠んでやる。かうして夢のやうに日を送つて來たが、今日はじめて聞いた與吉の身上話。三年前の箱根の一件、情が却つて仇となつて、惠んでやつた金の爲に、庄之助夫婦が身の災難。然も一日の恩に感じて飽まで自分の名を蔽し、婆婆と牢屋に夫婦が生別れの憂き目を見てゐると聞いては、とても安閑と暮してゐる譯には往かぬ。

自訴！　次郎吉の脳裡を掠めて、電光のやうに閃めいたのは、此の自訴の二字であつた。そうだ、名乗つて出やう。人間、いつまで生きられるものじやアねえ。翌日にも御用と食ひ込みやア、どうせ打首獄門だ。其時になつて、此の一件が知れ渡りやア、盗みはしても非道はしねえ、貧乏人を救つたとか、哀れな者を助けたとか、義賊だとか何だとか云はれた鼠小僧も、ウヌの畀れた不浄金の爲に、善人が冤の罪で苦しんでゐるのを、命惜しさに名乗つても出ねえ、義侠は榮耀の食ひ餘り、矢つ張り夕ゞの盗人だつたと、後指さゝれるのが辛え。俺の定命の半ばを二つ三つ越してゐる。今まで不義の財で贅澤三昧に暮して來たからにやア、いつ何時御用便になつても、些とも殘り惜いこたア無え。盗人にも惜いのは名だ、鼠小僧が後の世まで、義賊と唄はれるのも、夕ゞの盗人になつ了ふのも、今こゝで名乗つて出るか出ねえかの二つ一つで分れるんだ。

『此奴ア年貢の、いゝ納め時かも知れねえ。』

次郎吉が思はずこう呟やいた時、船はやつと橋の袂に着いた。

『へエ、親分、當りましたぜ。』

五

植木店の家に歸つた次郎吉は、欅の如輪杢の長火鉢の前にドッカリ胡坐をかくと、煙管をもつた儘、煙草のたつのも忘れたやうに、深い思案に暮れてゐた。

お松は次郎吉が塞ぎ込んでゐるのを見て、心配さうに傍へ寄つた。

『お前さん、大さう顔色が悪いし、それに甚く沈み込んでゐるやうだが、出先で何が間違ひでもあつたんじやありませんか。』

『へ……、ナーニ心配する事アありやアしねえ。何しろ三日三晩ブチ續けて、三百兩すつかり叩いちまつたもんだから

それで少々騷ぎの蟲ョ。時に、何か飯の仕度は出來てゐるのか。』
『ヘア、生憎何も無いんだけれど、お粂に何か見せにやりませうかねえ。』
『イヽヤ、態々支度するりやア當らねえ。いくらか小降になつたらう、チト億劫だが、久しぶりに一つ、鰻でも食ひに出かけやうか。』
『まあ嬉しいのねえ。じやあ済みませんが、ちよいと待つて下さいナ、大急ぎで一つ風呂浴びて來ますから。』
『アヽいゝとも、悠くり往つて來るがいゝヤ。ナーニ、俺ア伊豆屋で一杯やつて、底は這入つてゐるんだから、些とも急ぐこたアねえんだ。それから何だ、留守は俺がしてゐるから、お粂も一緒に連れて往くがいゝぜ。』

　次郎吉は女房のお松に、女中のお粂をつけて湯に出してやると、再びもの思ひに沈み込んだ。火鉢の火は大方立ち盡して、まつ白いジャウが頽れるやうに倒れた跡には、螢のやうな炭火が二つ三つ、僅かに殘つてゐるのも氣がつかず、チッと腕を組んで只だ默想に耽つてゐた。駿府の二丁目で鳴らした花魁の松山が、今は打つて變つた世話女房、稼業柄とは云ひながら、三日三晩も家をあけて居たのに、厭な顔一つ見せず、イソ／＼として機嫌を取るやうすを見たり、一緒に飯を食ひに往くと聞いて、喜こび勇んで居る心根を思ふと、可憐しさに切角の決心も鈍るやうな氣がした。……あゝ、義理の爲に名乗つて出やうか、恩惠の爲に默つて過さうか。次郎吉が舟の中での堅い覺悟も、家に歸ると恩愛の絆にほだされて動き出した。義理か恩愛か、この二た岐の迷路に立つて、次郎吉の心は千々に碎くる思ひに惱んだ。

　お松と夫婦になつたのも、思へば深い因縁づくだつた。駿府傳馬町の萬屋で、圖らず懇意になつた三人旅の江戸つ子と、二丁町へ遊びに往き、敵娼にしたのが小松屋の暖簾名を張るお職の松山。その身の上話を聞いて見れば、自分が江戸を賣つて上方へ逃げる折、雪に閉された甲州街道の小佛峠で、三人の胡麻の蠅が巡禮の爺ぢを殺し、娘を谷底に蹴込んで三十兩の金を奪つたと、聞いて通せぬ地獄耳。横山宿の河彦で三人の惡漢を欺むき、胴巻ぐるみ三十兩を捲き上げて、巡禮親子の仇を討つてやつたと喜こんだ。其折運よく助かつた娘が、いま松山と名乘つてこの廓に勤奉公。不思議

に廻り會つたもの、よくせき深い前からの約束かも知れなかつた。

初會の夜から二人の間は、赤縁の絲で堅く結ばれて了つた。それから松山を苦しめる、假親の三五郎夫婦とは、金を與れて縁を切らせ、とう／＼落籍をしてオツケ晴れて夫婦となつたが、いま自分が名乗つて出て、淺ましい獄門首を曝したなら、如何に亭主の兇状を覺悟の上とは云ひながら、後に殘つてどんなに嘆き悲しむ事だらう。……それに、それに亦、よく考へて見れア、廿七や八で死ぬのは、餘まり年貢の納め時が早過ぎると云ふものだ。

これが、當時江戸八百八街に名の高い鼠小僧は、この和泉屋次郎吉だと云ふことが露見して、身の置處が無いと云ふのでもあれば知らぬこと、廣い世間に誰れ一人、俺を鼠小僧と感づいてゐる奴はありやアしねえ。それを僅かの義理にほだされて、老先長い命を無殘々々捨てるのは、冥利を知らねえと云ふものだ。いま俺が南のお町へオ、それ乍らと名乗つて出た所で、助かる命はタツた二人だ。けれ共、俺がかうして素性を隱してゐる限りは、世の中の何百人、何千人といふ、其日暮しの貧しい人間を救つてやる事ができるのだ。

それア、成る程俺は盗人だ。だが、俺が盗みをするなア、何も世間の盗人のやうに、自分一人の榮耀榮華がしてえ爲じやアねえ。世の中にやア、盗人よりもつと惡い奴が、いくら居るか知れねえのだ。大名だの、旗本だの富豪だのと大きな面アして居る奴等は、生爪を剥がすやうな酷い眞似や、首縊りの足を引張るやうな非道な事をして、貧乏人の血や汗、貧澤三昧の仕放題、ノサバリ返つてゐる獄卒共だ。大阪へ往きやア藏元、掛け屋、江戸へ歸れア札差、銀座者、其奴等が儲ける金もつかふ金も、つまれア貧乏人の汗や涙の固まりだ。持つて生れた偏屈から、餓鬼の時分でもそんな奴等が無體と癪にさはり、金や力で威張つてゐる奴等に楯を突いて、世間の貧乏人を救つてやりてえ、助けてやりてえと、横に車を押したのが盗人の手始め。今日まで押入つた家の數は何百軒、盗んだ金も何千兩といふ額だが、盗みはしても非道はせず、領分の小前の者を水牢で苦しめて、娘を賣らせた年貢の金を、使ひきれねえ程貯めて居やがる大名屋敷の奥向や、利子や他代の取立ては、病人の布團まで引つ剥ぎ、觸れたら血のつきそうな貧乏人の金で、家藏立てゝ居やが

る富豪より外は、曾て押込んだことがねえ。

固より今までに奪つた金は、博奕にも費やア遊びにも使つた。然しまた、寄る邊の無い哀れな身の上の者や、武士、富豪の非道に泣いてゐる弱い者を、助けた事の幾十度か。……まだ、まだ、年貢を納めるにやア早すぎる。もう三年と五年は生き延びて、たとへ、こんな世の中を轉覆かへす程の大賭博は打てねえ迄も、俺も鼠小僧と異名を取つた盜人だ如何に強慾非道でも、金や力がありやア御前旦那と崇められ、善人でも貧乏に生れて來た者は、責め苛まれてゐる箆棒な世間に、一番死ぬまでブツつかつて呉れやう。定命わづか五十年、泣いても一生、笑つても一生、細腕をつゝ張つて強い奴等に楯つくのも、面白え生涯の送りやうだ。

次郎吉はかう考へると、俄かに氣負つて來た。さうして煙管をポンと火鉢の緣で叩くと、新しく煙草を詰めて一ぷく吸ひつけやうとした。が、もう其時は、火種は殆んど消えて無くなつてゐた。と同時に、今まで感じなかつた寒さが、急に身に泌みて來た。炭を繼がうとして、火箸で灰をひつ搔き廻すと、絕え絕えに殘つてゐた火種は、却つてその爲に消へて了つた。

『ウヽ寒、こんな晩は傳馬町の大牢なんか、嘸ぞ感じるこつたらう。』さう何の氣なしに思ふと、次郎吉はまた、庄之助と小春との身の上が、氣にかゝつて堪へられなくなつた。晝間、汐留の伊豆屋で見た與吉の哀れな姿、その涙ながらに話した二人の飛んだ災難が、また新しく想ひ出された。……ア、、矢つ張りいけねえ。どうでも今度ア、俺の命の捨て時だ。よしや千萬人を救つたところが、辜も報ひもねえ人間を、一人ならず二人まで見殺しにしたとあつちやア、此の次郎吉が末代までの名の汚ればかりじやねえ、切角の義俠心が閻魔の廳へ往きや帳消しだ。あの蜆賣の小僧の話に貰ひ泣きをして、すぐ舟の中で定めた覺悟、あの時の決心の力が本ものなのだ。かうして今家へ歸つて來て、アレヤコレヤと思ひ廻してから、いろ／＼に捏ち上げた小理屈は、謂はゞ吾が身可愛さからの卑怯な遁辭だ。それなら自訴か、と云つて、もう四五年は娑婆が入用だし……。俺さへ默つて居れア知れねえ譯だが、それぢやアどうも二人に濟まねえ。況

して向ふは俺への義理に、歯から外へは名を出さねえ位だのに、知らねえうちは兎も角も、知つて捨て置いちやア義理が立たねえ……。

とつ措いつ思案に暮れて居るうちに、次郎吉の考へはだん〳〵自訴から遠ざかつて往つた。いま直ぐ庄之助と小春を救ふ一番手つ取早い方法は、勿論自訴して出るに在るが、まだ〳〵娑婆は捨てられぬ。と云つて庄之助小春の二人を、此儘ムザ〳〵見殺しにしやうなどゝは、固より考へて居ないのである。只だどうかして、自分の身も安全であり、さうして寃の罪に泣いでゐる二人の體を明るくしてやる、双方に都合のいい方便は無いものかしらんと、今はそれにのみ屈托して、家の中がすつかり暗くなつたのさへ覺へなかつた。

『ア、困つたなア、一體どうすりやいゝのか、此奴ア途方に暮れさせやがる……。』

次郎吉は曇つた額をふり上げると、思はず口に出してから呟やいた。

六

其時だつた！　入口の二間腰高障子をガラッと開けて、飛び込むが早いか後をピッシャリ立て切り、土間へ踞まつた眞黒なものがあつた。流石の次郎吉も不意を食つたので、飛び上る程に吃驚しながら、

『エ、イッ、何だ、何だ手前は。本當に人を吃驚させやアがつて……。』

『へイ。』

『へイじやねえ、何だつて無斷で人の家へ飛び込みやがつたんだ。誰だ、手前は。』

『へイ、どうも相濟みやせん。親分、私ちでごせえます。へエ、須走の熊で……。』

『何だ、須走か。一體まあ、如何したつてえんだ。』

『實ア親分、いま新場の河岸で役人に追かけられ、切端詰つて河へ飛び込み、海邊の袂から上つて參りやした。へエ、親

分をお見かけ申して、お手當を戴きに上つたやうな次第でごぜえやす。』

『さうか、よし俺が引受けたから安心しろ。』

次郎吉は土間へ降り立つて、格子を開けて外を窺つたが、闇の中に音なく降る雪のキラ〱光るばかり。犬の子一匹通らず、後を尾けられたやうすも無いので、直ぐガラ〱戸締りをして了つた、それから銅子の温湯を金盥に取つて、熊藏に汚れた體を洗はせ、自分の褞袍を出して着せてやつて、二階へ連れて來た。

『如何したんだ、須走。』

『へエ、實は親分、何をお隱し申しやせう。私やア遊び人は表向、面目ねえが稼ぎ人でごぜえます。』

『エツ、何だ、盗人だツ。』

『へエ、私ちはもと王子在の、十條てえ所の百姓の息れに生れましたが、餓鬼のうちから鍬を握る事が大嫌えで、畠皿ばかり弄つてゐたものですから、到頭親から勘當され、彼方此方の賭場を飛び廻つてゐる間に、惡い仲間に引つ込まれて、夜盗屋尻切カツ浚え、勾配の早えところから須走と綽名されやしたが、だん〱體が危くなつたので、此の御府内へ逃げて參りやした。それから方々の賭場の使え早間、マメに働らいたお蔭で親分衆にも可愛がられ、どうやら今日まで無事に居りやした。所がてふど四日前、八丁堀の神田源太夫さまの御手で御用便になり、本材木町の三四の番屋で拷問かれ、どうでもう年貢の納め時と、殘らず泥を吐いて了えやした。それで今日、この雪の中を八丁堀の大番屋へ送りになる途中、新場橋へかゝつたのを幸ひに、コツソリ繩拔をして河へ飛び込み、親分を見込んでお手當を戴きに上つた譯でごぜえます。』

『フーン、さうか。然し須走、もう天命と諦らめて、年貢を納めやうとした手前が、繩拔をして亡けるたア、チトと辻褄が合はねえじやねえか。何か、手前、急に娑婆が戀しくでもなつたのか。』

『イエ親分、私ちも須走の熊藏、決してそんな未練は出しやしやせん。だが、私ちの兩親が、今もお話ししました八王

子在の十倏に、年をとつてまだ百姓をして暮して居りやす。今度いよ〳〵御用便になつて、アヽ俺もこれが娑婆の見納めかと思つた時、思ひ出したのは在所の兩親、餓鬼の時分から腹散々苦勞をかけた末、親の死水も取らねえ間に、獄門首を曝したと聞いたら、嘸ぞ不孝な奴と嘆くだらうと、考へちやア五臟六腑もチギれるばかり。どうか此世の暇乞に、一と目兩親の顏を見て、今までの不孝の詫がしてえと、昨夜一と晩マンヂリともせずに、工夫の末がけふの繩拔、親分決して卑怯未練といふ譯じやごぜえやせん。故鄕へ歸つてタツた一と目、親に暇乞さへすませれア、直ぐに戻つて名乘つて出る覺悟、どうかお手當をなすつて下せえまし。』

須走の熊藏が、身を顫はせて男泣き、語る一伍一什を聞き終つた次郎吉は、獨り何やら點頭いた。さうして、もう其次の瞬間には、次郎吉の態度はいつも方々の賭場で見られるやうな、太つ腹な大親分になつて居た。

『ウム、よく打ちあけて吳れた。俺が手當をしてやるから、親船に乘つた氣で安心しろ。』

次郎吉がさう云ひ捨て立ち上つた時、入口の戸をコト〳〵と叩く音が聞へた。二人は思はずギョッとして、無言で顏を見合せたが、然しお松の『親分、親分、お寢て了つたんですか。』と云ふ聲が聞へたので、やつと安堵の吐息を泄らした。次郎吉は何氣なく下へ降りて往つて、お松とお粂とを一と足先に靈岸橋の大黑屋へ往つて、荒いとこを燒いて置けと云ひつけて出してやつた。

七

次郎吉は二人を出してやると、日頃用意の旅裝束を取出して、二階へもつて上つて來た。風呂敷を解いてみると、中には黑み初つた結城紬の小袖重ね、胴卷の中に金が廿五兩、井上眞海の脇差一口、熊藏は喜こんで、

『親分、こんな結構な仕度をして戴いちやア、分に過ぎて勿體ねえ位えでごぜえます。』

『ナンノ、そんな遠慮がいるものか。手前も兇狀のあるいゝ惡黨だ。日本一の無宿牢、傳馬町の大牢のお戸前口へ入つ

た時、土産がなくちやア幅がきかねえや。』

『ヘイ、何から何までのお心盡し、實に涙の流れる程、お有難うござえやす。親分エ、この御恩は決して生涯忘れることつちやござえません。』

『さうか、イヤ手前がそう云つて呉れゝば、實は俺に頼みがある。どうだ、聞いて呉れるか。』

『エヽ、聞く所じやござえやせん。私ちの身に出來る事なら命にかけて屹と仕思せやす。』

『じやア云ふが、須走、實は俺も手前のお仲間だ。イヤサ、俺ア盗人ヨ。』

『ナ、何ですつテ、親分。ジヨ、冗談……。』

『箆棒めエ、嘘や冗談でこんな事を云ふ奴があるものか、實際の話だ。實はノ、先刻手前が、面目ねえが稼ぎ人だと云つたのを聞いた時にやア。流石の俺もゾツとした。しかし俺アタヾの盗人とチーツと盗人が違ふと云ふなア、盗みはしても非道はしねえ、忍び込むのは大名屋敷の奥向や、強欲非道の富豪の家ばかり。奪つた金は何もウヌが榮耀榮華に使はうと云ふじやアねえ其日暮しの貧乏人や夜邊のねえ哀れな者に、恵んでやるのが俺の心願。この頃山の手邊の大名や旗本の屋敷を荒し廻る、鼠小僧と名の高え盗人は、實はこの和泉屋の次郎吉だ。』

『ヘーツ、親分がアノ鼠小僧……、其奴は夢にも想はなかつたねえ……。』

『フン、そうだらう。……そこで、頼みと云ふなア外でも無え。一つ引背負つて往つて貰えてえものがあるんだが、ウンと云つちやア呉れめえか。』

『ようがす共、どうせ重荷に小づけだ。現世で親分に恩返しが出來れア、それこそ私ちの本望だ。どんな事でも云ひつけてお呉んなせえ。』

『ウム、よく云つて呉れた。實ア須走、こう云ふ譯だ。』

次郎吉はそれから、草薙山明神奥の院の一條から、庄之助と小春を助けたイキサツを詳しく物語つて末、故郷から歸

つて自訴して出た折、自分に代つて三年前秋の箱根の湯治場で、庄之助夫婦に三十兩の不淨金を、恵んだ咎を引つ脊負つて、二人を明るみへ出して貰ひてえ……。

『……と云つた譯で、自分の罪を他人に塗りつけて涼しい面をしてゐるてえのは、如何にも蟲が宜すぎるやうに聞へやうし、また僅かの事を恩に着せて手前の體を義理づくで縛るやうにも思はれるやう。だが俺も、決して長え正月をしやうと云ふんぢやねえ、只だもう些と娑婆がいるので、手前にかうやつて頼むんだ。もう二年と三年經つたら、俺もお恐れながらと名乘つて出る積りだが、どうだ須走、俺にもう二三年、この娑婆を借しといちやア呉れめえか。』

『……ヘイ。』

『それとも聞かれねえか。』

『ヘエ親分、ようく解りやした。ナーニ聞かれねえ所じやねえ、却つて有難え位えでごぜえやす。永え間の惡事の數々どう間違つたつて、笠の臺の飛ぶ體に、嘘にも人の命を助けたと云やア、閻魔の廳へ出て威張れまさア。親分なんぞの心意氣と違つて、こちとらア盗んだ金で小博奕、道樂、ついぞ一度でも慈悲善根を施したこたア無え。私ちの言葉タッた一つで、その庄之助さん御夫婦の命が助かれア、體に立派な箔が付くと云ふもの。ナニ親分、却つて願つたり叶つたりでさア。』

『イヤ、流石は手前も肩書のある惡黨だ、よく潔く引受けて呉れた。これで俺もヤッと肩の重荷を卸したやうに安心した。有難え、改めて此の和泉屋が禮を云ふぜ。だが須走、手前がお恐れながらと名乘つて出れば、南のお町は今大岡と名の高え筒井伊賀守さまだ。きつと庄之助小春と突合せ吟味になるだらうが、相手が何にも知らなかつたら、飛んだドヂを踏みやアしねえだらうか。』

『御安心なせえ、そんな事に拔りやアありませんヤ。親分なんか御牢内が暗えから、さう思ふのも無理はねえが、先づ名乘つて出ると吟味與力の下調べがある、それから口書爪印を取つて、傳馬町の假牢に下げられやす。其時牢番に金を握

らせりやア、その庄之助さんと相牢をさせて貰へますから、實は之々云々と吹込みやす。大丈夫、萬に一つも失敗るやうな事はありやせん。』
『それを聞いて安心した。じやア須走、急き立てるやうだが手前も早え騰だ、これから直ぐに仕度をして、雪を幸ひ夜道をかけて延びられるだけ延びろ。』
『へエ、合點でごせえやす。……今夜の御恩は死んでも忘れやアいたしません、一と足お先へ參りますが、落つく先はどうせ地獄。親分、草葉の蔭から御繁昌を祈つて居りやすぜ。』
『ウム、俺も追つけ後から往かア。待て、待て、いま戸外を見てやるから。』
二階から降りて來て、戸締りをあけて戸外を覗ふと、深く積つた雪道は夜目にも白く綴いて居る。
『大丈夫だ、人つ子ひとり通らねえ。』
『いろ〳〵お世話になりやした。もう現世じやア、二度とお目にかゝれやせんが、どうか御機嫌よくお暮しなすつて下せえやし。』
『ウム……、手前も達者で往つて來い。』
菅笠に顔を隱した須走の熊藏は跡をも見ずに小股走り、雪を蹴立てゝ走り去つた。次郎吉はその後姿の街角を曲るまで見送つて居たが、やがて上り端へ頽れるやうに腰を降した。……今の先まで苦しみ拔いてゐた心の重荷は、須走の熊藏といふ肩代りが出たので、やつと自分の肩が輕くなつた。これで庄之助夫婦を晴天白日の身とする事も出來れば、鼠小僧の肩書に疵もつけずにすむ。まだ〳〵三年や五年は、安心して娑婆の正月が迭れる。……次郎吉はさう考へると、」初めて腹の底から込み上げて來るやうな安堵の嘆息をホッと吐いた。



石川五右衛門

上司小劍

生立の記

九

『誰れぢや。……奈良枝か。』

暗黒の室の欄間のあたりから、手習ひの折りの小言で、耳の底深く滲み込んでゐる和尚さんの聲が、いやにそは〲した調子で聞えた。

これや、しまうたわい、と思つて、文吾は暗黒の室内を、瞳が二つあると言はれる眼で透かして見た。自分が今五寸ばかり雨戸を開けて、少ひさい身體を斜めに忍び込んだところから射す星明りに、茶簞笥や火桶や鏇子が晝間の通り正しく位置してゐるのを知つただけで、人間の姿は何處にも見えなかつた。

文吾は不思議でならなかつた。和尚さんの今の聲は、一體何處から響いたのであらうか。さう思つて、つひ鼻の先きにある羊羹に手をかけることも出來ないで、隅の方に小ひさく蜘蛛のやうになつて、壁へ身體を摺り寄せつゝ、ヂッと様子を窺つた。

壹間は遠くから眺めてゐるばかりで、足の親指の先だけでも敷居の内へ入れることを許されない和尚さんの居間の疊を蹈んだのは、たいしたことをしたものだといふ誇りが、文吾の胸に湧いて來た。怖ろしいことをしたとか、年に似合はぬ惡いことを企てたとかいふことは、少しも考へなかつた。見付けられたらまゝよ、和尚さんの鶴のやうな首へ食ひ付いてやれといふ大膽さが、腹いッぱいに漲つた。

本堂の片隅から遠く眺めたゞけでも、文吾の隼のやうな眼は、この室の模様を手に取るが如く突きとめてゐた。しかし今からやつて、深夜に此處へ忍び込んでゐると、茶簞笥や火桶や鑵子が、一つ〳〵皆息が通つて生きてゐるのではないかと思はれた。殊に鑵子なんぞは、今にも足が生え、尻尾が出來て、むく〳〵と歩き出しさうな風に見えた。

生きてゐるのは人間ばかりぢやないのか。――そんなことを文吾は考へた。鑵子に足が出來て、羊羹に羽根が生えて歩いたり飛んだりしたらどうであらう。………深夜といふ怪しい魔の力は、幾ら利巧でも、矢張り幼い文吾に、こんなことが今にも眼の前に起るやうに思はせた。さうして文吾はまた母が曾て平井明神の拜殿で、白衣の怪しい男に手をとられたのも、かういふ夜であつたかなぞといふことを思ひ浮べた。

『奈良枝、……奈良枝。』

和尚さんの聲は、また同じ高いところから聞えた。文吾は頭を擡げて、欄間を見上げたが、暗くて何も分らなかつた。

『誰れぢや……………奈良枝か。』

今度は和尚さんの聲が低いところで聞えたと思ふと、文吾の寄り添うてゐた壁が、大地震でもあるやうに、ぐら〳〵と動いた。文吾は吃驚してしまつて、これは大變なことになつた、自分より和尚さんの方が矢ツ張えらいなあと感心した。しかし、このまゝむざ〳〵と取り抑へられるのも業腹だから、忍び足の法で、隱れられるだけは隱れてこまさうと不思議に動く壁を離れて、目指す羊羹の入つた茶簞笥の傍に潜んだ。暗いから隱れるのには都合がいゝやうなものゝ、壹間だけの修業では、夜の仕事にさつぱり役立たぬのを、文吾は泣きたいほど殘念だと思つた。第一和尚さんの眼を晦

ます極を、何も見付けることが出來ない。鼠なり猫なり、居合はせた何ものかを餌に使つて、相手の氣を其の方へ奪はせ、眼をもそれへ向けさせるといふ工夫が、から晦くてはどうにもならぬ。これは駄目だ、夜の修業をしなければならぬと、文吾は一つの大きな決心をした。

『奈良枝、……なにしてる。』

和尚さんの聲は、また高いところで聞えた。文吾はいよ〳〵不思議でたまらなかつた。聲ばかり聞かされて、姿の見えぬ時鳥のやうな和尚さんは、何處に居るのか、さう思つて、キヨロ〳〵と、暗い中を見廻はしたが、茶簞笥、火桶、鐺子、それ等のものよりほかに何もなかつた。

其の時、自分の入つて來た雨戸が五寸ばかり開いたまゝになつてゐるのを、一尺ほどに開け擴げたものがある。文吾はぎよつとして、そつちを見た。鐺子に足が生えて動き出すより前に、雨戸が獨りで敷居の溝を滑つたのかと、驚きの眼を瞠つてゐると、流れ星の光りが深い軒を掠めて飛んだのとゝもに、白い布を頭から被つて、其の端を口に銜へた一つの人影が、すうつと椽側へ上つて來た。

『奈良枝、……奈良枝。』と、また先刻からの版木で捺したやうな聲が聞えるとゝもに、正面の壁が三尺四方ばかり、眞四角にパタリと開いて、大きな怪物の口かなんぞのやうに、其處だけが殊に黑く見えた。

『奈良枝、……………てんごしいなや。』といふ和尚さんの聲が、其の黑い穴の中に聞えたと思ふと、カチ〳〵と燧石の音が聞えて、先刻の流れ星のやうな薄い光がひか〳〵したが、やがて手燭の火とともに、和尚さんのつる〳〵した頭は吐き出されるが如く、其の四角い穴から現はれた。

『なんにもしえしまへんがな。今來たばかりだす。』と言つたのは、たしかに女で、それがあの路傍の煮賣屋の肥えた娘であることも、文吾の暗を探る眼にはよく分つた。

『嘘言てなや、いかいこと待たしといて、それからあんなてんごしても、吃驚しえへんで。……』と、和尚さんの身體

は、其のつる〳〵した頭から、ぼつ〳〵溶けかゝりさうであつた。

『まア、何んでもえゝわい。こつちへおいで、……』と、和尚さんの枯木のやうな手は、煮賣屋の娘の脂ぎつた太い手をとつて、怪物の四角な口の中へ、食はれて行くやうにして入つてしまつた。和尚さんの手にある手燭の光りは、白い單衣に鼠色の丸ぐけを締めた鶴の如き姿をくつきりと映し出したとともに、丸く肥えて足の短い鵝のやうな娘の容を描き出した。

二人の影が四角い穴の中に消えた時、其處にもちやんと疊を敷いた室のあることを、文吾の眼はチラと見た。其の途端、四角い穴は元の壁なりに塞がつて、接ぎ目も分らぬ暗黑になつて了つた。

文吾は何んだか夢のやうな氣がした。あの娘の名はたしか礒栄で、奈良枝ではなかつたがなア、とも思つた。して自分もうつら〳〵と眠くなつたが、ぐらつく頭を茶簞笥の角に打ち付けて、ハツと眼が覺めるとともに、眞夜中……男……女……といふ疑ひの雲が、其の頭の中に徂徠した。けれど、幾ら智恵が走つてゐても、まだ幼い文吾には、それがとつくりと解るまでには至らなかつた。けれども變な氣持ちは、彼れの頭を押し付けるやうで、肝心の羊羹を盜むことを忘れたまゝ、ぼんやりと家へ歸つて來た。

東の空には白い星が大きく輝いて、村の畔の弘法大師の姿は見えなかつた。文吾はぞつと身慄ひをして、母の寢息の籠つた紙帳の中へ潜り込んだ。寺で蚊に食はれた痕が急に痒くなつて來た。

十

翌る日、寺へ行つて和尚さんの顏を見るのが樂みであつた。其の途中で籠に入れた茄で萊を抱へた煮賣屋の娘に行き逢つた。『お早やう。』と頷いて行く彼女の頰は、はち切れさうに膨れて、針のさきで輕く突いても。紅い血がパツと迸りさうであつた。この勢ひのよい女と、あの枯木のやうな和尚さんと、それが眞夜中に何の用があつたのかと、文吾は

つく／＼と考へた。

寺では珍らしく文吾が眞ッ先きに來たので腰衣で本堂の掃除をしてゐた小僧が、先づ驚きの眼を瞠つた。和尚さんは庫裡から本堂への通り路に、美しく敷き詰めた礫の兩側へ、縁をとるやうにして植ゑてある石竹の花の麗はしく咲いたのを見やりつゝ、石像の如くに蹲つてゐたが、

『善海子ッ。』と、いつもとは違ふ滑らかな聲で小僧を呼びかけて、『今日は雨が降るぞ。』と、朝晴れの蒼空を見上げた。ほんたうに雨が降るのかと思つて、ほんの一瞬間だが、蒼空を仰いだのは、利巧な文吾にも似合はぬおぞましさであつた。文吾はてれかくしに、つと和尚さんの側へ寄つて、

『和尚さん、綺麗だんな。』と言つて、和尚さんの視線を辿りつゝ、同じ石竹の花を見ようとした。

『庭の石竹根が引き抜きにくい。庭の石竹根が引き抜きにくい。庭の石竹根が引き抜きにくい。……さア、文吾、かうやつて三遍續けて言うてみい。』と、和尚さんは澄まし切つて、村の聖顔をしたが、どうしたことか、今朝の和尚さんはいつもよりズッと聲も様子も若々しかつた。

『なんぞ褒美おくなはるか。』と、文吾は石竹の莖を持つて、一本引き抜かうとしたが、なか／＼堅くて、成るほど引き抜きにくかつた。

『慾の深いヤッちやなア、こいつ。褒美は望み次第ぢや。』と、和尚さんは齒の拗い口を尖らした。

『そんなら、あの羊羹一きれおくなはれ。そいたらうまいこと言ひまッせ。』

『よし、やらう。言うてみい。』

『庭の石竹根が引き抜きにくい。庭の石竹根が引き抜きにくい。庭の石竹……………』

『もうよい。……えらいヤッちや。』と、和尚さんの褒め言葉の終らぬうちに、文吾の小ひさい掌は、お重ねをして、和尚さんの鼻ッ先きに出てゐた。和尚さんは、『あはゝゝゝ。』と大きく笑つて、居間の方へ行つたが、稍手間取れると思ふ

頃白紙に包んだ二きればかりの羊羹を、大事さうに持つて來て、

『さア、歸つてから喰べるんぢやぞ。此處で喰べると、ほかの寺子にわるいよつて。』と、嚴かに言つた。

『京の三十三間堂の佛の數は三萬三千三百三十三體あるといなさうかいなほんかいな。……さア文吾、これを七遍息をせずに續けて言ふてみい。そしたらあるだけの羊羹をみんなやる。』と、和尚さんはまたこんなことを言ひ出した。

文吾は口の裡で、『京の三十三間……』のと繰り返して言つてみたが、四五度まではどうやら言へるけれど、あとの二度がどうしても續かなかつた。一生懸命にやればやるほど息が切れて來た。其のうちに、手に持つてゐた筈の羊羹の紙包みがなくなつて了つた。

『和尚さん、返しとくなれ。』

『何を。』

『羊羹を。』

『お前の袂に入つたる。』と、にこりともしないで和尚さんの言つた途端、文吾の右の袂が急に重くなつて、文吾は外から羊羹の紙包みの四角なのを、柔かく探ぐることが出來た。

まだ〳〵和尚さんには兎ても敵はぬ。この和尚さんに教はるのは、手習ひよりもほかにある。と文吾は考へた。

其の夕方、家へ歸つて、黑々と墨の附いた手で先づ袂の四角い紙包みを取り出し、いそ〳〵として披いて見ると、現はれ出たのは、紅を刷いたやうな駿河屋の羊羹ではなくて、羊羹を切つた形に捏ね上げた寺の粟飯であつた。文吾はあつと呆れた。

十一

こんなことがあつてから、文吾は寺の和尚さんが大好きになつた。今までは好きでも嫌ひでもなかつたのが、好きで

たまらなくなつた。手習ひは相變らず厭やだし、『山高きが故に貴からず、木あるをもつて貴しとなす。……』と義理一遍に讀むのも、面白いことではないが、文吾は成るだけ早く寺へ行つて、少しでも多く和尙さんの側に居たかつた。

どうしても、和尙さんの居間の茶簞笥にある羊羹が喰べられない。それを喰べ得られるまでに、修業をしなければならぬと、文吾は考へた。

まさか丑三つの深夜に、大膽な文吾が寺へ忍び込んだとは、流石の和尙さんも思つてゐないやうである。文吾の方からは、もとより何も言ひ出さなかつた。煮賣屋の娘が夜中に寺へ忍び込んだことゝ、和尙さんの居間の壁には仕掛けがあつて、其處から內證の一室へ行かれることゝは、たゞ面白い話として、人に言ひたいのは山々だが、それを言ふと、自分が深夜に和尙さんの居間へ忍び込んだことが知れる。一體煮賣屋の娘は、何んの用があつて、夜中にわざ〱寺へ來たのであらうか。それをハッキリとは知らない文吾であるけれど、またまるツきり解らないのでもない。男……女……夜といふことが、文吾の幼い頭にも少しづゝ判じがつきかゝつて來た。和尙さんは老人でも男である。煮賣屋の娘は若い娘である。若い娘でも、文吾の眼には一人前の大人(おとな)である。母と同じやうな大人だと思つてゐる。母が亡父の寢酒を求め步いた果てに、平井明神の神酒を盜まうとした時、神の名を騙つて母の手を捉へた白衣の男と母との關係は、丁度寺の和尙さんと煮賣屋の娘のそれと、同じことではあるまいか。平井明神は宵の口、光明寺は夜中、たゞそれだけの違ひである——と此處まで考へて來た時、文吾の心は怪しく震へた。さうして自分も、もう一人前の大人になりかけたといふ氣がした。男と女……人間といふものが、どうしてこの二つに別けられてあるのか。自分は今まで少しもそれに就いて考へなかつた。これからはもう羊羹どころぢやないぞと思つた。

家へ歸つてから、それとなく光明寺の怪しい室のことや、煮賣屋の娘が和尙さんに手を引かれて其の室へ入つたことを、晝間の話になほして、母に告げると、母は紡いでゐた糸車の手を止めて、

『滅相な、文吾はん。……あんたまア何んでそんなことを言てなはる。嘘は盜人(ぬすと)の始めといふが、……』と言ひさして

さめ〲と泣き出した。何んでまたこんなことで母が泣くのか、それが文吾には解らなかつた。

『嘘やない、わいが見たんやもん。』と、文吾は力を籠めて言つた。母を面白がらせようと思つたことが、母を泣かして了つたので、文吾は躍起とならずにはゐられなかつた。

『あの活佛の光明寺さんに、そんなことがあつたら、天地がひつくりかへつてしまひますぞよ。』と、母は短い兩袖で涙を拭きながら言つた。

『それやけど、わい見たんやもん。』と、文吾は自分よりも寺の和尚さんの方が母に信用されてゐるのが。殘念でたまらなかつた。

『それはあの娘が、何んぞ用でもあつて、お寺へ行かつたんやろ。それから其の壁のひツくりかへるところは梵妻部屋というてな、何處のお寺にもあるんやが、光明寺さんは其の部屋を使ふやうなお方やない。査間やもんなア、あんたがそれを見たのは。……そんなことない、あつてたまるもんか。』と、母も少し氣にかゝり出したやうであつたが、强ひて椨卷きの首を振つてゐた。文吾は夜の話を霞になほしたばかりに。自分の言ふことが弱くなつたのを、またしみ〲と殘念に思つた。さうして、其の『夜』といふものに就いて、いろ〲と考へた末、自分もこれからは、其の夜といふものを、自由に使はなければならぬと考へた。

十二

夏から秋になるのは早やかつた。寺へ通ふ路の傍に大きな御所柿が、今年は不作だといふことで、ちらほらと枝の間に紅い實が見えるくらゐであつたが、其の代りに去年よりも一昨年よりも、ズツと大きく見事なものであつた。しかし文吾はもうそんなものにあまり心を惹かれなかつた。もう少しよいものをと、文吾の鋭い頭腦の眼は、他の方を睨んでゐた。

秋と冬との間に、青地の村では、若い衆たちの伊勢參りの道中がある。それは五年目〳〵に行はれる村の行事で、伊賀から伊勢へさう遠くもないところを、ぐるッと廻はり道して往復七日がゝりで、木遣り音頭を謡ひながら、白裝束に脚袢、甲掛け、菅笠に金剛杖といふ山登りの姿をして、ゆる〳〵と出かけるのである。鹿島立ちから參宮までは、戯談一つ言はずに、精進潔齋して行くが、下向の第一夜を古市の姫買ひに明かすのが、參宮よりもズッと大事な彼等の唯一の希望で、それからは次々の宿場に、飯盛りと戯れぬ夜とてもない。往きはよい〳〵復りはこはい疾を獲て、鼻のない顏を生涯村に晒らしつゝ、有り難い記念を留むるものもあるけれど、そんなことは頓着なしに、若い衆たちは指折り數へて、五年目の『ヤアとこせ、よういやな』を待つのである。

文吾も夏から其の伊勢參りの同行に加はりたくてならなかつた。それを母に言つても、『あれは子供の行くとこやない。』と、頭から顧みられないし、若い衆の頭に頼んでも、『ふゝゝ』と鼻の先きで笑はれて了つた。

『行きたいなア、行きたいなア。』と、秋になつてから、文吾はそればかり考へて、もう御所柿でも半爽でもなかつた。

いよ〳〵鹿島立ちも十日の後に迫つた或る夕、文吾は昨夜見た伊勢參りの夢を想ひ出して、獨りぶら〳〵と杉の葉を吊した煮賣屋の前を歩いてゐると、向ふの方の路傍に立ち話をしてゐた五六人の若い衆が、手に〳〵文吾を招いた。伊勢參りの話ではないかと思つて、文吾は胸を躍らせながら、若い衆の群に近寄ると、其のうちに頭だつた一人が、一層近く文吾の顏を、自身の胸にまで引き付けて、

『文吾はん、杉の屋の風呂の栓拔いて來て呉れんかい。俺等が行くと目立つさかい、お前なら丁度よい、早う〳〵と促し立てるやうに言つた。杉の屋とはあの煮賣屋のことで、今日は杉の枯葉が、青々とした新らしいのに取りかへられてあつた。この家の風呂場は裏の方にあつて、栓が長く背戸の小溝の上に出てゐるのも、文吾はよく知つてゐた。

『厭やぢやい、そんなわるいこと。』と、文吾は大きな聲で言つて首を振つた。

『しツ、しツ。……。』と、手を振りつゝ若い衆は文吾の高聲を制して、『やいや、わるいこツちやない、ちいとわけがあ

つて、あそこの風呂の栓を拔いたらんならん、今娘が入つてよるさかい、早ういて拔いて呉れ。頼む〳〵。』と、若い衆は神佛を拜むやうに、文吾の前に手を合はした。
『伊勢參りに連れていて呉れるんなら、あの栓拔いて來る。』と、文吾は若い衆の足元を見て言つた。若い衆は顏を見合はせて困つた樣子をしたが、『よし〳〵、連れていたるさかい、早う拔いて來い。』と言ふと、皆々それに同じて、『早う、早う。』と急き立てた。
『騙すんなら厭やちや。』と、文吾はまだ動かなかつた。
『騙しやせん。……早うして呉れ。お娘があがると何んにもならん。』と、若い衆は焦慮つた。
文吾は漸く駈け出して行つたが、覺え込んだ忍び足の法で、煮賣屋の人々の眼を晦ましつゝ、背戸へ廻つて、繁つた藪のそろ〳〵枯れかけてゐる上へぬうツと出てゐる竹の筒の栓を拔くと、後の世には自分が大人になつてからの名で呼ばるゝ五右衛門風呂の湯が、ちやアと噴き出した。
『あゝツ。……』と叫んで、娘が風呂から飛び出したところへ、若い衆の一人は急用でもある風をして、表から飛び込んで來た。あわてふためいて、何をする間もない娘のまる裸體が、稲妻のやうな若い衆の眼光に映つた。
『これちや、これちや、疑ひなしちや。』と、煮賣屋から出て來た若い衆は、右の手で腹の膨れた形をして見せながら言つた。
『さア、これから相手の詮議ちや。』と、年嵩の若い衆は言つた。
『伊勢參りに連れていて呉れるなア。』と、文吾も其處へ顏を出した。(未完)

新刊紹介

■象牙の塔を出て（厨川白村博士著）最近一二年間に新聞雜誌に載せた文と又た講演の記錄とを聚め一册としたものである集中「象牙の塔を出て」は曾て朝日新聞紙上に連載世人の耳目を惹いた物で其平易簡明な解釋が一般人の頭に入り易かつたのであらう主として無雜作に自分を押出せと述べたもので現代の一傾向を代表するものである「觀照享樂の生活」に於ては享樂主義なる名前が世人から如何の眼で見られてゐるが事實は嚴肅な人生生活の一の道である事を力說してゐる「藝術より社會改造へ（詩人ウイリヤムモリスの研究）」は英の現代作家ウイリヤムモリスに就ての博士の思索でモリスが曾つては所謂象牙の塔に立籠つた人であつたが今は社會改造直接問題に關する作家となつてゐると說き博士の此頃の思想傾向を示してゐる其他本誌で紹介した「勞働文學を描ける文學」も本書中に採錄さる近時等必讀の文字がある。（四六判二九〇頁二羽重裝價金貳圓八拾錢京橋福永書店發兌）

■ギルド社會主義（室伏高信著）ギルド社會主義の研究者としての氏は、我邦唯一人者である本書は其研究の結晶として著はれた第一分册でギルド社會主義の創生及建設に就て論述したものである。先づオーウェン達にモスリスの思想を記し、集産主義と社會主義とを研究したる後ギルドの建設より、ギルド社會主義思想の發達及び各派の思想系統を網敍し、ギルド社會主義の運動を以て結んで居る。（定價一圓九十錢京橋元數寄屋町三ノ一批評社）

■日米未來記　平和か血？、之日米兩國間の將來をトする語ではないか、今や米國に於ける排日の熱火は益々熾烈を極め在米同胞の窮狀は正に極點に達しつゝある、帝國の外交は事毎に彼の掣肘容喙に苦しみ、正義の名に依る彼の暴威は神をも怒らしむ、況んや我國民の肉は躍り血は涌かざるを得ないのである、日米戰ふべきか、？之世界人類の何人もが知らむとする所である、本書は此刻々として目前に迫り來れる大問題に對し、意味深き暗示を與へ我國民に訴へたるもの七千萬國民の必讀すべき書である（定價一圓五十錢小石川白山前町大明堂發行）

■徹底人道主義（生田長江著）現時評論界の權威たる著者の最近に於ける評論集にして『階級鬪爭の倫理的批判』『人道主義改造論者の不徹底』以下拾數篇の論文をさむ、其論ずる所何れも氏の徹底人道主義の立場よりせるもの蓋し混沌せる思想界の現狀に於て必讀すべき著書たるを失はぬ。（定價金三圓牛込[illegible]寺町聚英閣發行）

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	七十錢	二錢
半ヶ年	四圓二十錢	不要
壹ヶ年	八圓四十錢	不要

註文の注意

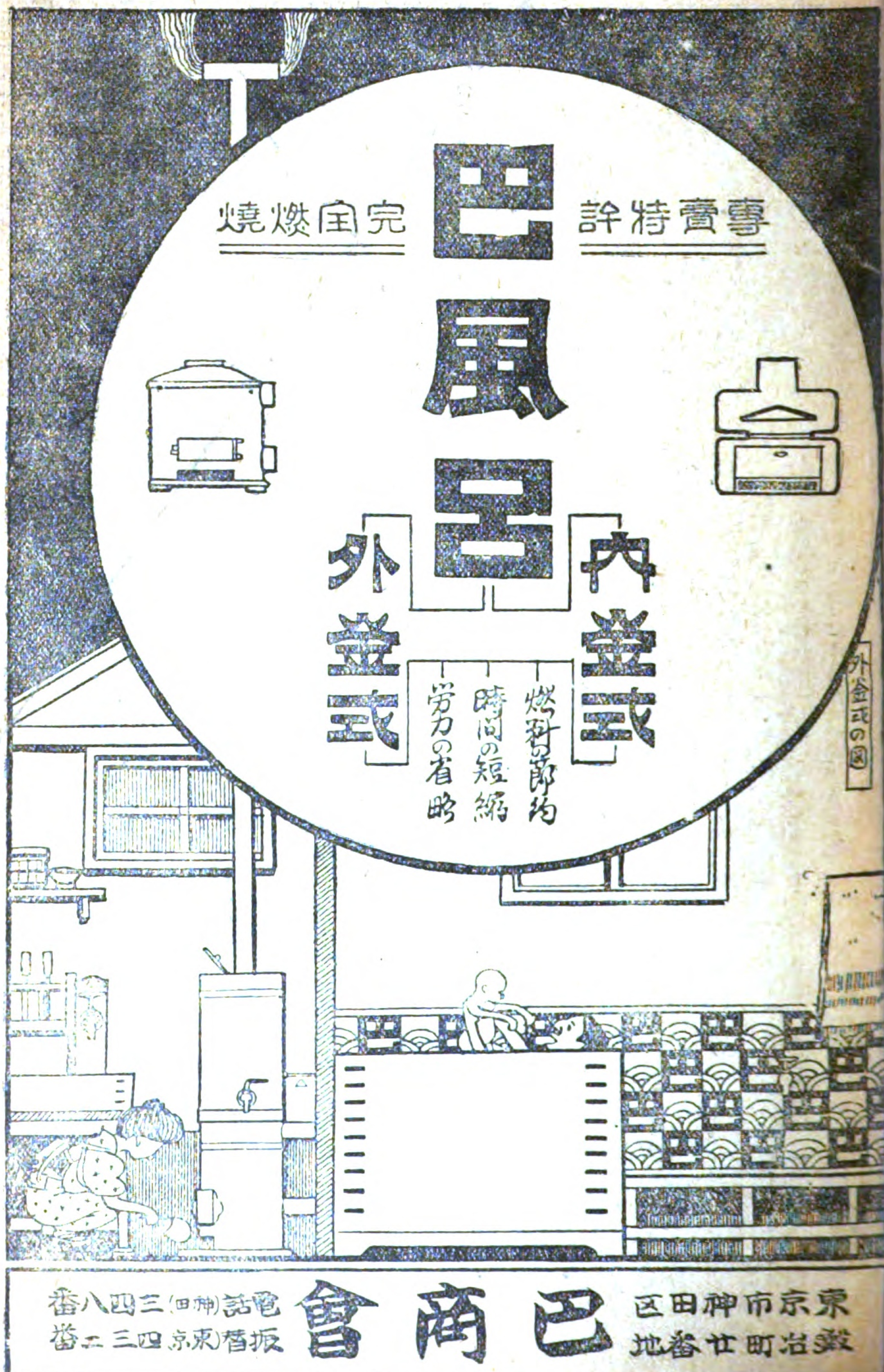
▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正九年八月二十七日印刷納本
大正九年九月一日發行

編輯兼發行人　東京府下中目黑七七〇　横關利藤太
印刷所　東京市京橋區南鍋町二丁目十七番地　秀英舍

本號定價　金七十錢

發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二


專賣特許
完全燃燒
巴風呂
内釜式
外釜式
燃料の節約
時間の短縮
労力の省略
外釜式の図
東京市神田区
鍛冶町廿番地
巴商會
電話(神田)三四八番
振替(東京)四三二番